純情恋模様

karinko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
純情恋模様

【Ｎコード】
Ｎ３４７９Ｊ

【作者名】
ｋａｒｉｎｋｏ

【あらすじ】
おとなしくて怖い人が大の苦手、だけど困っている人はほっておけない詩織。無口で目つきがかなり悪く、素直じゃない響。そんな２人が出会って……

☆1話　入学式☆詩織ｓｉｄｅ

私、望月詩織。

今日から念願の高校生活が始まります。

目の前にそびえるのはこのへんじゃ一番の名門校！

がんばって勉強したかいがあり、無事に入学することができました！

これで安心した高校生活が送れます。

なぜ、私がこんなに頭のいい学校を選んだかといいますとね…

私、不良の方、ギャル（というのでしょうか…？）の方＝怖い人が苦手なんですよね…

そしてどうやったらそんな人達と同じ学校に行かなくてすむかと考えていたところ…

怖い人＝頭悪い

良い人＝頭良い

という結論にたどりついたんです！

なので、きっとこの学校で怖い人はいないんでしょうね！

…いませんよね？？

「詩織、はやくいきなさい！入学式遅れるでしょ！」

「は、はい！」

私はお母さんに背中を押されて校舎の中に入った。

そこには私以外にもたくさんの新入生がいて…

見たところ、とりあえず怖い人はいなさそうだった。

良かったぁ…

安堵のため息をついて先生の指示どおりの場所に移動する。

大きな体育館に入り名前の順番に席に着く。

どうやら私のクラスは１－Ｄ。

私は周りの人達をきょろきょろと見回した。

この人達がこれから生活していく中での仲間なんですね？

…うん。

みなさんスカートのたけも短すぎず、髪の毛も染めていませんね。

怖い人はいないようです。

みなさんと仲良くできるといいなぁ…

「それでは新入生代表からの挨拶です」

教頭先生の声がふいに耳に入った。

いつのまにか式は新入生代表のあいさつまで進行していたらしい。

新入生代表ですか…

代表ってことは、受験で1位だった方ってことですよね?

あんな難しいテストで1位をとれるなんて…

いったいどんな方なんでしょう??

「新入生代表、滝沢響くん」

私はわくわくしながら壇上を見た。

そして思わず固まってしまった。

そこに立っていたのはきれいな顔をした男の子。

耳にはピアス。

眉間にしわ。

目つき、かなり悪い。

…怖い人が、いました。

「…よろしく」

新入生代表サンはそう一言言うと壇上をおりてしまった。

体育館中がザワザワと騒ぎ出す。

「静かに！…えっと、し、新入生代表からのあいさつでした」

教頭先生はなんとか式を続行させる。

さすがかしこいだけあってひそひそ話は聞こえるものの、生徒達の大きな話声はなくなった。

…あの人は、なんなんですか??

あのスピーチ（？）はおいときまして…

あんな恐ろしい方はなぜ、新入生代表なんですか??

あの方がなぜ一番成績が良かったんですか??

…そのまえに、なぜあんな恐ろしい人がこの高校に入学できたんですか??

ガクッ。

私はうなだれた。

あ、あんな方が学校にいるなんて…

…い、いや！

でも、きっとクラスは違うに決まっています！

クラスが違うかぎり教室からでなければあの人と会うことはありません！

どうかあの人と同じクラスになりませんように…

私はそう祈った。

……神様は、私を見離されました。

どうして、どうして、どうして…

私は右隣を横目で見た。

そこにはなぜかむすっとした顔で腕をくんで座っている新入生代表サン。

なぜ、あなたがここにいるんですか…??

なぜ、あなたと私は同じクラスなんですか…??

たしか、あなたは滝沢サンですよね??

なぜ、出席番号順で望月と滝沢が隣なんですか…??

神様は何か、私に恨みでもあるのでしょうか…

神様を恨みながら滝沢サンを見ていると、滝沢サンはじろっとこっちを睨んだ。

「…何??」

低くて恐ろしい声。

じわっと涙があふれた。

こ、怖いです…

「い、いえ。…な、なんでもありません」

泣きだしそうになるのをこらえて言った。

「…そう」

滝沢サンはぶっきらぼうに言うとまた視線を前に戻した。

ほっと息をついて涙をぬぐう。

やっぱりこの人の隣は嫌です…

恐ろしすぎて…死んでしまいます。

あぁ、私の高校生活…

どうやら恐怖の高校生活になりそうです…

☆1話　入学式☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

やっぱり純情物を書きたかったので新しい小説作りました！
敬語の主人公って難しいです（汗
また『大好きです☆』と同じように詩織ｓｉｄｅと響ｓｉｄｅに分けるつもりなので、どちらか一つを読んでいただくか、時間があるかたは両方を読んでいただけたらうれしいです☆

★1話　入学式★響ｓｉｄｅ

オレは滝沢響。

今日からこの学校に入学することになった。

ここはこのへんじゃぁ一番有名な高校らしいんだが…

オレはこの学校でなんとトップ合格だったようだ。

…いや、自慢じゃないけど。

まぁそういうことでなぜかオレが新入生代表で挨拶することになったんだが…

…正直、気がのらない。

オレはあまりしゃべるのが好きな方ではないし、大勢の前で話すなんてできるわけがない。

だが、何度断ってもオレが話さなければいけないらしい。

なんでもトップ合格者が代表となるのがこの学校の伝統だからだそうだ。

というわけでオレはなんとも気がのらないまま入学式の会場である体育館に足を運んだ。

オレのクラスは１－Ｄらしい。

ざっとまわりの人間を見回してみる。

…まぁ普通のやつらばかりだな。

ここで変に不良っぽいやつがいても困る。

なぜかオレはそういうやつに絡まれることが多いのだ。

別にオレは気にさわることやってるつもりはないが…

「それでは新入生代表からの挨拶です」

ぼーっとしている間に、いつの間にか式は進行していた。

もうオレの出番かよ!?

どうするか…

なーんも言うこと考えてねぇぞ…

「新入生代表、滝沢響くん」

教頭がオレの名前を呼ぶ。

オレは慌てて立ち上がり壇上に上がった。

体育館中の視線がオレに集まる。

…やべぇ。

何言ったらいいんだ??

…とりあえず、

「…よろしく」

オレは一言そう言った。

空気がこおる。

……

…ダメだ。

もうこれ以上言うこともみつからねぇし、これ以上ここにいたくない。

さっさとこの場から逃げよう。

オレはすばやく壇上を降りて自分の席に戻った。

隣のやつがひそひそと話ながらオレを見る。

…オレだって言いたくて言ったわけじゃねぇんだ。

文句あんならお前らが言えよな…??

「静かに!…えっと、し、新入生代表からのあいさつでした」

教頭がなんとか式を続行させる。

新入生達も少し静けさを取り戻す。

…なんだよ?これ。

なんかオレが悪いみたいになってるじゃねぇか…

…まぁ悪いのはオレじゃねぇけどな。

悪いのはあれだ。

オレに無理やり言わせた校長だ。

だからオレは関係ないんだ…

……

オレは大きなため息をついた。

式が終わり、教室へと入る。

緊張しているせいか教室の中は静まりかえっていてオレもぼんやりと黒板を見ていた。

…何か、視線を感じる。

誰かがさっきのオレのうわさでもしているのだろうか。

こっちだって頑張ったのだからそんなに掘り返さないで欲しい。

別に挨拶なんてどうだっていいじゃないか。

…すっげぇ視線感じるぞ?

どんだけ見てんだよ…??

なんか隣から感じる気がすんだけど…

オレは隣を見た。

隣は髪を耳の上で二つに縛ってる女子だ。

やっぱりじーっとオレを見ている。

「…何??」

そいつはびくっと体を震わせ、急に目に涙をためた。

は?なんだよこいつ。

なんで急に涙目になってんの??

「い、いえ。…な、なんでもありません」

そいつは涙声で一言そう言った。

「…そう」

なら見んなよな。

それにしてもオレ見て涙目になられても…

なんか罪悪感感じる…

オレはそいつから視線をはずし、また前を見た。

オレ、そんなに泣きたくなるほど怖い顔してるか??

まぁなぜか普通のやつはあんまりよってこないけど…

でもオレ見て涙目になられるとちょっと傷つくじゃねぇか…

はぁ…と軽いため息をつく。

まぁ、中学んときもずっと1人だったんだ。

高校でもどーせ同じだよな。

多分オレの高校生活はまた、ずっと1人なんだろうな。

そう思って、またため息をついた。

★1話　入学式★響ｓｉｄｅ（後書き）

この人、自分目つき悪いって気づいてません。
どうでもいいことですが、詩織ｓｉｄｅより響ｓｉｄｅの方が書きやすいです（；一＿一）

☆2話　友達☆詩織ｓｉｄｅ

入学してから一ヶ月がたちました。

私には新しいお友達もできて、ある一点をのぞけばすごく楽しい高校生活です。

…ある一点をのぞけば。

私は気づかれないようにちらりと隣を見た。

あいかわらずムスッとした表情で眉間にしわをよせていらっしゃる滝沢サン。

…どうしてあなたはいつもそんなに不機嫌そうな顔をしているのですか…??

……っっっっ!!!!!

やっぱり私は必要以上にこの席に座っていたくありません!

私はすばやく席を立って新しくできたお友達の鳥山優香ちゃんのところへ移動した。

「優香ちゃーん!」

「詩織??また逃げてきたの??」

優香ちゃんはあきれたと言わんばかりの表情をする。

「だって…滝沢サンがものすごく怖いですから…」

「えーっ？でも結構かっこいいよ？」

もう一人のお友達の楓ちゃんが話に入ってきた。

「え…」

ま、まぁみなさんから見たらそうなのかもしれませんが…

もう一度滝沢サンの方を見てみる。

わ、私には怖いだけにしか見えません…

「まぁ顔はいいと思うけど…」

優香ちゃんは値ぶみするように滝沢サンを見た。

「なんか…近寄りがたい雰囲気するよね…」

…近寄りがたい、ですか。

たしかにいつも滝沢サンのまわりには誰もいない気がします。

もう入学してから一ヶ月が立ったというのに…

滝沢サンはお友達をつくることもなく、ずっと1人。

…かわいそう、なんでしょうか。

休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴る。

「あらら、詩織。もう席戻らないとだよ」

「頑張ってねー♪」

頑張ってと言われましても…

私は沈んだ気持ちのまま席に着いた。

その授業中。（ちなみに国語です！）

私はまったく集中することができなかった。

滝沢サン…

ずっと1人でいるなんて、さびしくないんでしょうか??

そんな暗い高校生活でいいんでしょうか??

せめて私だけでもお友達に…

はっ！

いやいやっ！

私がお友達になれるわけないじゃないですかっ!!

私は滝沢さんと話すだけでも泣いてしまいそうになるというのに…

…でも、

滝沢サンが動かないかぎり、お友達なんてできませんよね…??

お友達にはならないけど、お友達をつくるのに協力するというのは…??

…いや、それもダメです。

まず十分に話すことさえできないのに協力なんて絶対無理です！

滝沢サンがお友達を作ろうとしないのが悪いんですからここはほっといたらいいんじゃないですか??

そうです！

ほっときましょう！！

……

ダメです…

やっぱり私、困ってる（？）方をほっておくなんてこと、できません…

ここは私が頑張らないと…

ということで、授業が終わったあと私はさっそく行動にでた。

「た、た、た、た、た、た、た…滝沢サンっ！」

思い切って滝沢サンに声をかけてみる。

滝沢サンはやっぱり不機嫌な顔でこっちを見た。（睨んだ）

「…何？？」

低いなぜか怒ってるような声。

ひっ……

も、もうすでに泣きそうです…（涙

い、いや！

ここは私が頑張らないと！

「あ、あの…私とお友達になってくださいっ！」

「…はっ？？」

滝沢サンの肩眉がぴくりとあがる。

「なんで？？」

な、なんでって言われましても…

滝沢サンが1人でさびしそうだからとか言えるわけないじゃないですか…

「と、とにかく私とお友達になってくださいっ！」

私は勢いよく頭を下げた。

「…別にいいけど」

滝沢サンはぼそっと言った。

えっ？

いいって…

いいって言ってくださったんですか？？

「あ、ありがとうございます！」

私はまたぺこりと深くお辞儀した。

「それではよろしくお願いします！」

私はそう言うと逃げるように優香ちゃんと楓ちゃんのもとに言った。

優香ちゃんと楓ちゃんはさっきの一部始終を見ていたようで私を見てぽかんと口をあけていた。

「詩織…？？何やってんの？？」

「…滝沢サンとお友達になってきました」

「「なんで??」」

2人が声をそろえて言った。

なんでと言われましても…

「滝沢サンお友達いなさそうでしたから…せめて私だけでもお友達になってあげようかと…」

「でも詩織ちゃん、さっきまで怖い怖い、恐ろしいって言ってたでしょ??あれはどうなったの?」

楓ちゃんがまだ驚きを隠せない様子で言う。

「そりゃぁ…怖いですよ?でもほっとけなくて…」

というか、今さらなんですけど…

お友達ってことはお話しなければいけないということですよね??

私、あの方のお友達としてちゃんとやっていけるのでしょうか…??

☆2話　友達☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

１話の響ｓｉｄｅの話の中に詩織ｓｉｄｅの話が混じっていました…
読んでておかしいな、と思った方、申し訳ありません＞ｍ（＿＿）
ｍ＜
一応修正しましたので（；一＿一）

★2話　友達★響ｓｉｄｅ

入学式から一ヶ月がたった。

まぁ一ヶ月がたったといっても、オレにはなんの変化もない。

いつものように一人でぼーっとしているだけだ。

それにしても…

…やっぱり隣から視線を感じる。

入学してからずっとだ。

どうやら隣のやつはオレのことを怖がっているらしい。

オレが少しでも見るとびくっと体を震わせて涙目になって逃げてくし…

ったく、わけわかんねぇやつだな…

…また視線を感じる。

今度は隣じゃなくて結構遠くだ。

ちらりと悟られないように見てみると隣のやつ…望月だったっけな

…と、あと2人がじーっとオレの方を見ている。

…なんだよ?

そんなにオレって変な顔してるのか…??

まぁ別にどう思われたって結構だけど。

どうせこれから先、あいつらとかかわることなんてないんだから。

考え事をしているうちにいつの間にかチャイムが鳴った。

…次は国語か。

高校でならうことなんて多分簡単だろ。

適当に聞き流しとけばいい。

その時間、オレはずっとうたたねをしていた。

そしていつの間にか、授業が終わるチャイムが鳴る。

もう終わりか…

以外と短いもんだな…

そう思ってまたぼーっとしようとしていると…

「た、た、た、た、た、た、た…滝沢サンっ！」

望月がなぜか声をかけてきた。

「た」どんだけ言うんだよ…

「…何??」

望月はまたなぜか涙目になる。

あー、もう!

なんだよ?こいつ。

そんなにオレと話すのがいやなのになんで話かけんだよ!?

「あ、あの…私とお友達になってくださいっ!」

「…はっ??」

…何言ってんだ?

こいつ、やっぱわけわかんねぇ…

「なんで?」

おまえがオレと友達になってどーすんだよ?

おまえ、オレと全然しゃべれねぇだろ??

「と、とにかく私とお友達になってくださいっ!」

望月はそう言って勢いよく頭を下げた。

…なんで頭下げんの??

「…別にいいけど」

なんか嫌って言うのも悪いし…

どーせしゃべんねぇだろ。

大体オレ、あんまりしゃべるの嫌いだし。

「あ、ありがとうございます！」

望月は驚いたような顔をして、頭を下げた。

「それではよろしくお願いします！」

そう言い残すと望月は逃げるようにさっきの2人のところへ戻っていった。

オレははぁ…と軽いため息をつく。

あいつ…

わけわかんねぇ…

また、高校も中学の時みたいに1人でずっとぼーっとできると思ってたっていうのに…

なんか、めんどくさくなりそうだ…

オレは大きなため息をついた。

★2話　友達★響ｓｉｄｅ（後書き）

この人、視線にかなり敏感ですよね…
それにしても寂しい人だ…
書いててなんだか切なくなってきます（汗

☆3話　本音☆詩織ｓｉｄｅ

朝の通勤ラッシュ時。

私は電車の中で1人ため息をついていた。

『あ、あの…私とお友達になってくださいっ！』

昨日、私はそう言って滝沢サンとお友達になることに無事成功しました。

だけど…

どうすればいいんですか??

普通お友達になったら何をすればいいんでしたっけ…??

いろいろと考えてみる。

えっと…

まずは休み時間に話すことでしょ?

あとはお昼休みにご飯を一緒に食べるとか…

…滝沢サン相手に私がそんなことできるでしょうか??

……いやいや！

できますよ！やってみますとも！

私はやればできる子なんですから……！

…とりあえず滝沢サンに新しいお友達ができるまで、頑張ります！

そう思いガッツポーズをしようとすると、

ドンッ！

鞄が前の人に当たってしまった。

「あっ、すいません！」

ぺこりと頭を下げる。

「ああ、大丈夫で…」

前の人の声が突然止まる。

…あれ？

どこかで聞いたような声ですね…？？

私は顔をあげて、そして思わず固まってしまった。

「た、滝沢サンっ！！」

目の前に驚いて顔をゆがめている滝沢サンがいた。

滝沢サンは一歩後ずさりするが、電車の中は満杯状態で動けない。

「「……」」

えーっと…

どうしましょう…

そう思ったときはたと気がついた。

そうだ！

今は良いチャンスじゃないですかっ！

とりあえず何かお話して仲良くならなければ…！！

「…えっと、滝沢サンも同じ電車にのっていたのですねー…！」

「……」

何も答えない滝沢サン。

…こころなしか、また不機嫌そうな顔になったような…

…こころなしか、私を睨んでいるようにも見えますが…

…やっぱり怖いです。

それ以上何もしゃべれないまま、いつの間にか駅についていた。

「「……」」

当然行くところは同じなのでなぜか私が滝沢サンの後ろをついていく形になる。

…すごく、気まずいです。

と、とにかく！

何か話さなければ！！

「た、滝沢さん！」

勇気をだしてそう言った時、

「…あれ？？」

滝沢さんはすでに１００メートルほど先にいた。

歩くのはやすぎです…

私は大きなため息をついた。

「…というわけで！お友達になったら普通何をすればいいんですか？？」

私は優香ちゃんと楓ちゃんに相談してみた。

「普通って…そりゃ今みたいに話したり、お昼一緒に食べたり、休みの日に遊びに行ったりじゃないの？」

優香ちゃんが頭をひねりながら言う。

なるほど。

大体私が思っていたことと同じですね。

まぁ、休みの日に遊びに行ったりなんてことはとてもできませんが…

「というか、詩織ちゃん。ホントにあの滝沢クンと仲良くするつもりなの？？」

私は大きくうなずいた。

「やっぱりずっと1人ってさびしいじゃないですか…ここは隣になってしまった者としてせめてお友達をつくるのだけでも協力してあげたいと思うんです！」

「ふーん…そうなんだ。でもさ、そんな友達でいいの？？」

「へっ？？」

優香ちゃんの言っていることの意味がわからなかった。

そんな友達って…？？

「だって詩織が滝沢クンと仲良くしよって思ってるのってさ。かわいそうだからって理由でしょ？そんな気持ちで友達になんかなれる

のかな？って思って…」

「…そうだよね。友達って無理やりなるものじゃないと思うし…」

楓ちゃんもうんうんとうなずく。

「で、でも…」

それでも私が友達にならないと…

滝沢サンは1人なんですもの…

「まっ、詩織がいいならいいと思うけどさっ！ほら、頑張ってしゃべりに行きなよ！」

優香ちゃんがにこっと笑って私の背中をおした。

「えっ？は、はい！頑張ります！」

その日から私は私なりにいっぱい滝沢サンに話しかけるように頑張ったと思う。

休み時間も毎時間話しかけに行ったし、お昼ご飯も無理やり一緒に食べたりした。

滝沢サンと話すのだってまえほど怖いと思わなくなった…と思う。

そんなある日。

「滝沢サン！」

ぎろっと睨まれる。

やっぱり一瞬びくっとしてしまうが泣きそうになったりはしない。

「あ、あの…」

はぁ…

急に滝沢サンが大きなため息をついた。

「…なぁ、おまえってさ」

滝沢サンがじーっと私を見る。

その目つきが怖くて思わず一歩後ずさりすると滝沢サンはまた大きなため息をついた。

「…オレのこと、怖いんだろ??」

ドキッ

何も言い返せなかった。

だって本当のことだから。

「なのになんでそんなにオレにかまうの?」

「それは…」

言ってはいけない。

言ったら滝沢サンが傷つく。

分かってるのに…

やっぱり私は滝沢サンが怖くて…

「滝沢サンがいつも1人だから…」

小さな声で、そう言ってしまった。

滝沢サンの目が大きく見開かれる。

バンッ！

滝沢サンは机を思いっきり叩いて立ちあがった。

クラス中の視線が集まる。

「もうオレにかまうなっ！！」

滝沢サンはそう怒鳴ると教室を出ていってしまった。

「詩織、大丈夫！？」

優香ちゃんと楓ちゃんが私にかけよってくる。

「は、はい…」

気がついたら涙が流れてた。

「ホントなんなんだろうね…せっかく詩織が頑張ってたのに…」

すごく…怖かった。

だから私は泣いてるんですか??

…でも、ならどうして…

私は胸を押さえつけた。

どうして、こんなに胸が痛いんでしょうか…??

「…私のせいなんです」

そう、この痛みはきっと…

私のせいで、滝沢サンが傷ついてしまったから…

次の時間、滝沢サンは授業にでていなかった。

そのあとはきていたけれど、私の方を見ようとはしなかった。

…やっぱり私は滝沢サンに嫌われてしまったのでしょうか…??

そして下校時間。

滝沢サンは用意をすませるとさっさと教室をでてしまった。
私は慌ててそのあとを追いかける。
「滝沢サン！待ってくださいっ！」
そう叫んでも滝沢サンは振り返ろうともしない。
「滝沢サンっ！待って…きゃっ！！」
ガッ！
えっ？？
ぐらっと視界が傾く。
地面がだんだんとせまってくる。
ドンッ！
大きな音を立てて私は地面に激突した。
ペトッ。
頬に何か冷たいものがおちる。
な、なんですか…？？
触ってみるとそれは白くて固まってて…

って、鳥の…糞ですか??

「ぷっ…」

誰かが噴き出した。

「お、おまえ、なんだよそれ…!!」

「へっ??」

見上げると滝沢サンが私を見て笑いをこらえていた。

カァァァ…

顔が熱くなる。

私は慌てて立ち上がってハンカチで頬をぬぐった。

「い、いえ!こ、これは、そこに大きな石が!!」

どうしましょう…!

せっかく謝ろうとしてたときに…

自分のバカさ加減が恥ずかしすぎます…

「あ、あの…」

今このタイミングでいってもいいものでしょうか??

けど滝沢サンがせっかく止まってくれているんだから…

「さっきはひどいこと言ってすいませんでしたっ！」

私は大きく頭を下げた。

「……」

「私、本当に、滝沢サンの力になりたかっただけなんです…」

滝沢サンはしばらくの間をおいてぽつりと言った。

「…別に、そんなのおせっかいなんだよ」

…おせっかい。

まぁ、そうですよね…

滝沢サンにとったら、私が無理やり話しかけたりしてたのってただの迷惑だったんですよね…

「…でも、」

滝沢サンは一息間をおいてから言った。

「ちょっとは…うれしかった」

えっ…??

驚いて顔をあげる。

「ほんと…ですか…??」

滝沢サンの顔が赤くなった。

それを隠すように横を向く。

「ほんのちょっとだよ!大体オレ1人の方が好きだし!」

そう言って私に背をむけ、逃げるように走っていった。

「まっ、待って…」

私は追いかけようとして、ピタリと止まった。

そして私にだせる一番大きな声で言う。

「明日もまた、お話してください!!」

滝沢サンは少しだけ足をとめて、ほんの小さくうなずいた。

また走り出すその後ろ姿を見送りながら、さっきの滝沢サンの言葉を思い返す。

『ちょっとは…うれしかった』

良かった…

私のしていたことは迷惑なんかじゃなかったんですね…??

自然と笑顔になれる。

もっともっと滝沢サンと仲良くなってみたい。

そう思った。

☆3話　本音☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

結構長くなってしまいました…
展開早すぎますかね？
まぁそこはおいといてください（；一＿一）
それにしても詩織はかなりドジですねｗｗ

★3話　本音★響ｓｉｄｅ

オレの家は学校から結構離れている。

なのでいつも電車を使っている。

そういうわけで今日もオレは人でこみあった電車の中にいた。

ったく…

なんで毎日毎日こんなしんどい目にあわなきゃいけねぇんだ…

こんな思いまでして学校行きたいわけでもねぇんだけど…

そう思いため息をついたとき、

ドンッ！

誰かの（多分）鞄が背中にあたった。

「あっ、すいません！」

「ああ、大丈夫で…」

振り返りながら言ったオレの言葉は途中でとまった。

目の前の見なれた姿。

こ、こいつは…

「た、滝沢サンっ！！」

望月は驚いたように目を見開いて言った。

オレは一刻もはやくここから立ち去ろうと一歩後ずさった。

けど、あふれかえっている電車で動くのは困難だった。

仕方なくその場にとどまる。

「「……」」

望月が気まずそうな顔でオレを見た。

オレだって気まずいよ…

もし電車がすいてたらすぐにはなれてやるのに…

「…えっと、滝沢サンも同じ電車にのっていたのですねー…！」

望月が無理やりに話をふってきた。

「……」

答えるのも面倒なので何も言わない。

大体こいつの『怖くても話さなくては』みたいな感じ、嫌いなんだよな…

話たくないなら話さなくていいじゃねぇか。

なのになんでこいつは無理やりに話そうとするんだ…??

沈黙のまま、いつのまにか駅についた。

「「……」」

駅をでてすぐに学校へと足を進めるが、目的地は同じなので自然と望月がオレの後をついてくる形になる。

冗談じゃない。

これ以上こいつと一緒にいるのは嫌だ。

そう思ってオレは歩く速さを速めた。

そろそろ大丈夫か…??

後ろを振り返ってみるとすでに望月の姿はなかった。

よし、うまくまけた!

ほっと息をつき、オレは歩く速さを元に戻した。

その日、オレは1人でぼんやりとすることができなかった。

なぜなら望月が休み時間のたびにわざわざオレに話しかけにきたか

らだ。

面倒くさいのでオレの方は何も答えないがそれでも望月は1人でしゃべりだす。

そしてなぜか昼飯まで無理やりに一緒に食べにきた。

…こいつ、本当にわかんねぇ。

どう考えても絶対オレのこと怖がってんのに…

なんでこんなにオレにかまってくるんだ??

怖いなら普通話かけにきたりしねぇだろ…??

一体こいつ、何が目的なんだ…??

それから毎日望月は休み時間のたびにオレに話しかけてきた。

そしてある日。

「滝沢サン！」

いつものように望月が話かけてきた。

いい加減うんざりしていたオレは望月を睨んでみる。

「あ、あの…」

望月はビクッと体を震わせたが少し震える声で続けた。

なんでそんなに怖がってんのにまだしゃべろうとしてんの…??

オレは大きなため息をついた。

「…なぁ、おまえってさ」

じっと望月を見てみる。

望月はおびえたような表情で一歩後ずさりした。

…やっぱり、すっげぇ怖がってるし…

オレはまたため息をつく。

「…オレのこと、怖いんだろ??」

望月は目を見開き、小さな子供が何か隠しごとがばれたときに見せるような表情を見せた。

…まぁ、気づいてたけどな。

「なのになんでそんなにオレにかまうの?」

「それは…」

またじっと望月を見る。

望月はまたおびえたような表情を見せて、ぽつりと言った。

「滝沢サンがいつも1人だから…」

……！！

ズキッ

胸に刺すような痛みが走る。

…なんだよ、その理由…！

オレは怒りにまかせて思いきり机を叩いて立ちあがった。

クラス中の視線がオレに向けられる。

だが、そんなことは気にしなかった。

「もうオレにかまうなっ！！」

望月に向かって思い切り怒鳴ると、オレは逃げるように教室をでた。

なんだよ…！

あいつはただオレのことをかわいそうなやつだとか思って無理やりオレにかまってたのかよ…！！

どうせあいつは自分の気持ちを曲げてまでオレと話してる自分がえらいとでも思ってたんだ…

そんな慰めみたいなのなんていらねぇんだよ…！！

いつの間にかオレは屋上にきていた。

フェンスにもたれかかり、そのまま地面に座り込む。

春の暖かくて心地よい風が頬をなでた。

…なんでオレ、こんなに怒ってるんだ…??

別にそんなに怒ることでもないだろ…??

多分中学の頃のオレじゃ、ここまで怒ってなかっただろ…

風を浴びながらぼんやりと考えていると答えに思い当たった。

けど、それは気づきたくなかった答えだった。

……本当は、望月が必至にオレと話そうとしてくれてたのがうれしかっただなんて…

オレらしくない。

そう思った。

下校時間。

オレは用意をすませると、望月を見ないように教室をでた。

そして外にでたとき、

「滝沢サン！待ってくださいっ！」

後ろから望月の声がした。

けどオレは振り返らずにそのまま足を進める。

「滝沢サンっ！待って…きゃっ！！」

どうしたんだろうと後ろを振り返ってみる。

ドンッ！

大きな音がして望月が派手に地面に突っ伏した。

こけ方があまりにおもしろくて思わず笑いそうになったが、なんとかこらえた。

そして鳩が望月の上を飛び去ってポトリと糞をおとしていった。

ちょうどそれが望月の頬の上におちる。

「ぷっ…」

こらえきれなくて思わず噴き出した。

「お、おまえ、なんだよそれ…！！」

どうやったらそんな漫画みたいなことになるんだよ…！

「へっ??」

望月はマヌケな顔をしてオレを見上げる。

そのドジっぷりに思いきり笑いそうになるが本人に悪いのでなんとかこらえた。

望月の顔が沸騰したように赤くなる。

望月は立ち上がるとハンカチで頬をぬぐった。

「い、いえ!こ、これは、そこに大きな石が!!」

望月の足元には他の石よりほんの少し大きな石があった。

…普通、あれにつまずくか…??

「あ、あの…」

望月は小さな声で言った。

そして少し間をあけて、

「さっきはひどいこと言ってすいませんでしたっ!」

そう言って大きく頭をさげた。

「……」

「私、本当に、滝沢サンの力になりたかっただけなんです…」

力になるって…

だからそんな慰めみたいなことはいらねぇし…

「…別に、そんなのおせっかいなんだよ」

望月があからさまに落ち込んでうつむく。

…そんな落ち込まれても…

やっぱこいつ苦手だ…

「…でも、」

言うつもりはなかった。

なのに落ち込む望月を見ていたら自然と口に出た。

「ちょっとは…うれしかった」

望月が驚いたように顔をあげる。

「ほんと…ですか…??」

顔が熱くなった。

何言ってんだ…!?オレ…

オレは望月を見ないように横をむいた。

「ほんのちょっとだよ！大体オレ1人の方が好きだし！」

そ、そう！

さっきのは望月を気遣っただけだし！

別に本音言ったわけじゃないんだからなっ！！

でもなんか恥ずかしくてオレは望月に背を向け、逃げるように走った。

「明日もまた、お話してください！！」

背後から望月の声が聞こえた。

オレは一瞬足を止めて小さくうなずいた。

オレ、ホント何してんだ…？？

わけわかんねぇこと言って…

でもオレは、

『ちょっとは…うれしかった』

そう言ったことに、なぜか後悔はしていなかったんだ。

★3話　本音★響ｓｉｄｅ（後書き）

この人すっごい純情ですね…
そしてなぜか響ｓｉｄｅが詩織ｓｉｄｅより短くなるのはなぜでしょう…？？

☆4話　勉強☆詩織ｓｉｄｅ

それから滝沢サンは私の話すことに少しは返事を返したりしてくれるようになった。

私もまだ少し怖いけど…

でも、すぐにおびえてしまうなんてことはなくなった。

でも…

そんな私にさらなる難関が待っていたのです…

「あー…寝不足ー…」

優香ちゃんがそう言って机につっぷした。

「あらら…昨日寝るのが遅かったんですか??」

「うん。来週テストだからさ…徹夜しちゃった」

…えっ??

「えっと…あの、優香ちゃん今、なんていいましたか…??」

「??…だから徹夜しちゃったって…」

「その前です！」

「ああ、来週テストってとこ？」

「ら、来週ですか…？？」

「うん！中間テストだよー！」

楓ちゃんがにっこりと笑っていった。

ぜ、全然知りませんでした。

当然ですけど勉強もその日の復習しかやってません…

「あ、あの…優香ちゃんか楓ちゃん。私に勉強を教えていただけませんか…？？」

いまからじゃ、1人で勉強してたらとても間に合いません…

優香ちゃんと楓ちゃんは顔を見合わせてにっと笑った。

「だめだよー！私自分のことで精いっぱいだし！」

「私も徹夜するほど大変なんだから…詩織は滝沢クンに教えてもらったらいいじゃない！」

「滝沢サン…？？」

そういえば滝沢サンって入学式で新入生代表をするくらいですから…

頭は相当良いんでしょうね…？？

「…そうですね！それじゃぁ頼んできます！」

私はさっそく滝沢サンのところにいった。

「滝沢サンっ！あの、お願いがあるんですけど！」

「…何？？」

いつもの低い声で言う。

前は怖いなって思ってましたけど…

もうこの声にもなれましたよ…！！

「私に勉強を教えていただけませんか？？」

「…なんで？？」

「なんでって…来週テストだからですよ！私全然勉強していなくて…1人じゃ間に合いませんよ…」

「嫌」

そっけなくそう言われた。

「そ、そんなこと言わずに！私を見捨てないでください！！」

必至にお願いしてみる。

滝沢サンは私を見てため息をついた。

「はー…分かったよ…」

「ほんとですか！？」

「で、どこですんの？？」

「えーっと…それじゃぁ放課後に教室でしますか？？」

教室なら静かで勉強しやすいと思いますし！！

「ダメだ」

「えっ？どうしてですか？？」

教室ならどう考えても勉強がはかどると思うんですけど…

「なんでも」

…どうしてでしょうか？？

なんだか少し気になります。

それからいろいろと話しあった結果、駅の近くのフレンドリーですることになった。

…よし！

頑張って勉強しますよ！！

えいえいオー！です！

そして下校時間。

滝沢さんはどこかよるところがあるらしく、私が先に行って勉強しておくことになった。

よーし！

私は早歩きでフレンドリーに向かって席をとった。

とりあえず、滝沢サンがくるまでに少しでも進めておきます！

そう思い教科書とノートを広げて見る。

…全然わかりません。

授業中とか家で復習するときには覚えているんですけど…

すぐに忘れちゃうんですよね…

ほんと私って…

小さなため息をついたとき、滝沢サンが店に入ってきた。

「あっ！滝沢サン、こっちです！」

滝沢サンは私に気がつくと手に何かの袋を持ってこっちにきた。

「何してたんですか??」

「ちょっといろいろ買ってたんだ」

そう言って滝沢サンは袋の中から数冊の問題集をとりだした。

えっ…?

私のために、こんなの買ってきてくれてたんですか…!?

「あの…お金、払います」

私は教えていただく身なのに…

こんなにしていただいたら、なんだか申し訳ないです…

「ああ、いいよ。オレ結構金持ってるし」

「で、でも!」

「それじゃぁ、ドリンクバーおごって」

「は、はい!」

…って、

ドリンクバーだけじゃ全然問題集分に相応しませんよね…??

でも私はそれ以上言おうとはしなかった。

せっかく滝沢サンが勉強を教えてくださるんですから…！

少しでも時間を有効に使わないと！

他にも何か頼んでいただいたらいいだけの話ですし！！

「とりあえずここやってみて」

滝沢サンはそう言って数?の問題集の一番はじめのページを開けて私に差し出した。

「は、はい！」

私はシャーペンをとって問題を凝視した。

えっと…

まずこれは…

…あれ??

これの公式ってなんでしたっけ…??

あっ、これもわからないです…

そんな感じで問題とにらめっこすること約２０分。

「そろそろできたか?」

「はい…少しは…」

「見せろ」

滝沢サンに言われて私は問題集を滝沢サンに差し出した。

滝沢サンはそれを見て眉をぴくりとあげる。

「おまえ…全然できてねぇじゃん…」

「す、すいません…！私、勉強したその日は覚えられるんですけど、少し日がたつとすぐに忘れてしまって！！」

「とりあえず答え合わせするから…」

そう言って滝沢サンは筆箱から赤ペンをとりだした。

そして私ができてなかったところをチェックし、私に見せてくれた。

「…こころなしか、丸が少なすぎる気がするんですけど…」

「それがおまえの実力だ」

そこにはほとんど丸の印はなかった。

かわりにたくさんのチェックがちりばめられている。

「まぁ、間違えてるところ解説してやるから…これでも飲んで落ち着け」

滝沢サンはそう言って私にココアが入ったカップを差し出した。

「えっ？いつの間に…」

「お前が問題といてるとき」

ああ、そういえば滝沢サン少しの間いませんでしたね。

その間にドリンクバーにいってたんですか…

しかも私の分までいれてくださって…

私はカップに口をつけた。

甘い味が口の中に広がる。

「…おいしいです」

「そう」

滝沢サンが小さな笑顔をうかべた。

ドキッ

心臓が少し強く鳴る。

た、滝沢サンも笑うことあるんですね。

…まぁ人間ですから当然ですけど。

なんだか怖いってイメージが大きかったので少し驚きました。

「それじゃぁこの問題だけど…」

滝沢サンは私が間違えたところをさして丁寧に説明しだした。

私はそんな滝沢サンをじっと見る。

初めて見たときも思いましたけど…

…やっぱり、滝沢サンってきれいな顔してますね。

はじめは怖いって印象の方が強かったから怖い怖いしか思っていませんでしたけど、

よく見てみるとほんときれいです。

まつ毛なんかすっごい長いですし…

今、2人でいると思うとなんか緊張してしまいます。

「…何見てんの??」

いつの間にか滝沢サンが怪訝な顔でこっちを見ていた。

「い、いえ!なんでもありません!」

「…そう。おまえ、全然できてねぇんだから集中して聞けよ??」

「は、はい!」

そ、そうでした！

今は勉強に集中しないと！

私は丁寧な滝沢サンの説明を熱心に聞いた。

そして解説が終わり、他の問題も少し解いて教えてもらっているうちに、

時刻はいつの間にか6時半を回っていた。

「あー…もうこんな時間か」

「私、そろそろ帰らないと…」

今から帰っても1時間くらいはかかりますし…

…今日はお母さんに怒られますね。

「それじゃ、これ家でやってて」

そう言って滝沢サンは問題集すべてに付箋をはさみ、私に差し出した。

「明日までの宿題だから」

「へっ？宿題…ですか？？」

「ああ。おまえ、かなりやばいから。テストまで毎日やるぞ」

ま、毎日ですか??

それじゃ滝沢サンに迷惑が…

「そうしたらドリンクバー、問題集代においつくんじゃねぇの?」

…はっ!

そ、そうでした!

結局滝沢サンはドリンクバーしか頼んでいませんし!

「…はい!よろしくお願いします!」

私はぺこりと頭を下げた。

そしてそれから私はテストの日まで猛勉強した。

滝沢サンの教え方がいいせいか、みるみるうちに覚えることが頭に入っていった。

そしてついにテストの日…

「とりあえず、平均はとれると思うから」

そう言った滝沢サンの言葉を信じてテストにのぞんだ。

とりあえず問題用紙をすべて埋めることはできましたけど…

それが合っているかどうか…

テストが終わった後、滝沢サンに声をかけられた。

「どうだった??」

「あ、はい！おかげ様でとりあえず全部埋めることができました！ありがとうございます！」

私はそう言って頭を下げた。

「ふーん。まぁ…頑張ったな」

滝沢サンはそう言ってまた少し笑顔を見せてくれた。

ドキッ

なぜかまた、心臓の鼓動が強くなる。

??

このまえも思いましたが…

これは、なんなんでしょうか??

少し考えてから、私ははたと気がついた。

そう言えば、私もう滝沢サンと普通に話せてますよね?

滝沢サンも私に普通に話してくれていますし…

私はにこっと滝沢サンに笑いかけた。

「何？」

滝沢サンは少し怪訝な顔をする。

「なんでもありませんよ！」

少し滝沢サンと仲良くなれた。

小さなことですけど、私にはそれがとてもうれしかったんです。

☆4話　勉強☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

いきなり仲良くなっちゃいましたね。
それにしても高校の勉強なんてわからないので…
少し書くのが辛かったです（汗

★4話　勉強★響ｓｉｄｅ

それからも毎日のように望月はオレに話しかけてきた。
そしてオレは無視せずにそれに少し答えるようになっていた。
そんなある日。
「滝沢サンっ！あの、お願いがあるんですけど！」
望月がそうとう深刻な顔をして言った。
「…何？？」
「私に勉強を教えていただけませんか？？」
「…なんで？？」
なんでおまえに勉強教えるなんてめんどくせーことしなきゃいけねぇんだよ…
「なんでって…来週テストだからですよ！私全然勉強していなくて…1人じゃ間に合いませんよ…」
「嫌」
オレは間髪を入れずに言った。
望月はあからさまにショックな顔をした。

…こいつ、おもしろいな。

「そ、そんなこと言わずに！私を見捨てないでください！！」

涙目でそう言ってくる。

かなり必至だ。

…なんでいちいち涙目になるんだよ。

そんなになられたらこっちも断るに断れねぇだろ…

オレはため息をついた。

「はー…分かったよ…」

「ほんとですか！？」

望月の顔がぱぁぁっと明るくなった。

こいつ感情が思いっきり顔にでるタイプだな。

「で、どこですんの？？」

まさか放課後教室で、とか言うんじゃねぇだろな。

「えーっと…それじゃぁ放課後に教室でしますか？？」

そのままのこと言ったし…

こいつ、どんだけ予想内の人間なんだ…

「ダメだ」

「えっ?どうしてですか??」

「なんでも」

…教室だったら誰かに見られたら変に思われるかもしれねぇだろ…

けどそれはあえて言わなかった。

そしていろいろと話した結果、駅の近くのフレンドリーですることになった。

…ったく、なんでオレが勉強なんか教えなきゃいけねぇんだよ。

面倒くさい…

オレは大きなため息をついた。

そして下校時間。

オレは望月によるところがあるといって先に行っているように言った。

…やっぱり教えるからにはしっかり教えないとな。

とりあえず本屋で問題集でも買っていくか。

オレは学校の近くで適当な問題集を買っていくとフレンドリーに向かった。

「あっ！滝沢サン、こっちです！」

店に入るとすぐに望月によばれた。

望月はすでに教科書やノートを開いていたが、何かをしていた様子はない。

「何してたんですか？？」

「ちょっといろいろ買ってたんだ」

オレはそう言って袋の中から問題集をとりだした。

望月はそれを見て目を見開く。

「あの…お金、払います」

そしてそう申し訳なさそうに言った。

「ああ、いいよ。オレ結構金持ってるし」

オレ、あんまり使うことないからな。

「で、でも！」

それでも望月は引こうとしない。

「それじゃぁ、ドリンクバーおごって」

「は、はい！」

とりあえずどうでもいいことをおさえたオレはまず数?の問題集をぱらぱらと見た。

うーん…

とりあえず実力がどれだけあるか確認するか。

そう思い、はじめのページの中学の復習のページを開いて望月に渡した。

「とりあえずここやってみて」

「は、はい！」

望月は大きくうなずいて筆箱からシャーペンをとりだした。

そして真剣な顔で問題を睨みだす。

…まっ、これくらいならすぐできるだろ。

そう思いながら、オレは望月が問題を解くのに集中している間にドリンクバーをとりにいった。

そして約２０分後。

まだできたと言ってこない望月にしびれをきらして、オレから聞いてみた。

「そろそろできたか？」

「はい…少しは…」

「見せろ」

オレは望月に渡された問題集をざっと見てみた。

驚くことに…

ほとんどが間違っている。

というか空欄が驚くほど多い。

「おまえ…全然できてねぇじゃん…」

これ、中学の復習だぞ…？？

こいつ、本当にこれでこの高校に受かったのか…？？

「す、すいません…！私、勉強したその日は覚えられるんですけど、少し日がたつとすぐに忘れてしまって！！」

「とりあえず答え合わせするから…」

望月の言い訳を無視して、オレは赤ペンをとりだした。
そして答えを見ながら丸をつけていく。
…思ったよりもチェックの数が多いな。
これは以外と教えるのが大変そうだ…
オレはそれを望月に見せた。
望月はそれを見て目を見開く。
「…こころなしか、丸が少なすぎる気がするんですけど…」
「それがおまえの実力だ」
望月はかなりショックな顔をしている。
…大丈夫なのか??
「まぁ、間違えてるところ解説してやるから…これでも飲んで落ち着け」
オレはそう言ってさっきついでに入れてきたココアを望月に渡した。
「えっ?いつの間に…」
望月が驚いた顔をする。
「お前が問題といてるとき」

望月は納得したような顔をしてカップに口をつけた。

「…おいしいです」

そして小さな声でそう言う。

「そう」

別にオレがつくったわけでもないし、ついでにいれてきただけだが、望月の感想が素直で、それが『ありがとう』と言っているように聞こえて、

なんとなくオレは笑顔になった。

「それじゃぁこの問題だけど…」

オレは望月が間違えた問題を指してできるだけわかりやすいように説明した。

基本から説明しないとこいつ理解しなさそうだからな…

そう思い気を使いながら説明していると、なぜか視線を感じた。

なんだ?と思い、顔をあげると、望月がじっとオレの方を見ている。

…全然聞いてねぇし。

「…何見てんの??」

オレがそう言うと望月ははっとして、慌てて言った。

「い、いえ！なんでもありません！」

「…そう。おまえ、全然できてねぇんだから集中して聞けよ??」

せっかく人が頑張って教えてやってんだから…

「は、はい！」

望月はうなずくと今度は熱心に聞き始めた。

オレはまた望月がぼーっとしないように様子を見ながら説明することにした。

そして解説を終え、他にも問題をやらせて説明したりしているうちに、いつの間にか6時半を回っていた。

「あー…もうこんな時間か」

「私、そろそろ帰らないと…」

あ…

そうだよな。

一応望月は女なんだし遅くなると怒られたりするか。

でもこのままじゃとても間に合わないしな…

オレは問題集をぱらぱらと見て、望月が1人でできそうなところに付箋をはさんだ。

「それじゃ、これ家でやってて」

望月に渡すときょとんとした顔でオレを見てきた。

「明日までの宿題だから」

「へっ?宿題…ですか??」

「ああ。おまえ、かなりやばいから。テストまで毎日やるぞ」

途中で投げ出すのもあれだからな。

こうなったらオレが絶対にせめて平均点はとらせてやる。

オレは勉強しなくても大体大丈夫だし。

でも望月は少し迷うような表情を見せた。

…多分オレに迷惑がかかるとか考えてんだろな。

「そうしたらドリンクバー、問題集代においつくんじゃねぇの?」

そう言うと望月ははっとした顔をした。

「…はい!よろしくお願いします!」

そう言ってオレにぺこりと頭を下げる。

それからオレは毎日望月に勉強を教えた。

望月はだんだんと頭に入ってきたようで、最後には大体の問題は解けるようになっていた。

そしてテストの日。

「とりあえず、平均はとれると思うから」

始まるまえにとりあえずそう言っておいた。

さて、どんな問題がでるか…

テストが配られて、オレはざっと問題を見た。

…結構応用が多いな。

まぁ、ぎりぎり平均点とれるんじゃねぇの??

そう思いながらオレは楽々と問題を解いていった。

テストが終わったあと、燃え尽きたような様子の望月に声をかけた。

「どうだった??」

「あ、はい!おかげ様でとりあえず全部埋めることができました!ありがとうございます!」

全部埋められたのか。

こいつにしてはすごいじゃないか。

「ふーん。まぁ…頑張ったな」

オレは軽く笑って言った。

望月はなぜか驚いたようにオレを見る。

そしてにこっとオレに笑いかけた。

「何？」

いきなり…

なんか怖いぞ…？？

「なんでもありませんよ！」

望月はそう言ってまた笑った。

ドキッ

心臓が少し強く脈打った。

…？？

なんだ？？

理由を考えようとして止めた。

…まぁ、どうでもいいか。

とにかくなんかオレまで疲れた…

最近は望月を教えてばっかであまり休めなかったからな。

今日は家でゆっくりとしよう…

☆5話　気持ち☆詩織ｓｉｄｅ

「それじゃぁ中間の答案返すぞー！」

担任の澤田先生がそう言って出席番号順に答案を返し始める。

…そうです。

今日はついに中間テストの結果がかえってくるんです！

やっぱり、少し緊張してしまいますね…

平均ぐらいはとれているでしょうか…？？

私はドキドキしながら名前を呼ばれるのを待った。

「望月詩織」

「は、はい！」

やっと私の名前が呼ばれて私はそそくさと前にでる。

渡された答案には大きく『６４点』と書かれていた。

６４点ですか…

良いのかわかりませんが…

でも！

一週間で勉強したと言えば、いい方ですよね！

「おい、望月」

席につくとすぐに滝沢サンに声をかけられた。

「どうだった??」

「はい…よくわかりませんが…」

私は滝沢サンに答案を渡した。

滝沢サンは私の点数をじーっと見つめる。

「んー…まぁ、いいんじゃねぇの?」

「そうですか??ありがとうございます！これも滝沢サンのおかげです！」

私はぺこりと頭を下げた。

「あっ、そういえば、滝沢サンはどうだったんですか??」

きっとすっごくいい点数なんでしょうね！

「知りたい?」

私は強くうなずいた。

滝沢サンが私に点数をみせてくれる。

そこにはほぼ丸印がつけられていて、大きく『１００点』と書かれていた。

「ひゃ、ひゃ、百点…ですか！？」

「まぁ、この学校のテストって結構簡単だし…」

簡単って…

一応ここ、名門高ですよ…？？

ほんと、滝沢サンてすごく頭がいいんですね…

そのあともテスト返しは続いて、最終的に私の平均は『６９点』だった。

そして学年の平均が『６７点』。

な、なんと…！！

平均よりも、２点も点数が高かったのです！！

これもすべて教えてくださった滝沢サンのおかげですね！

私１人ならきっと赤点をとるところでしたよ…

そしてその滝沢サンはというと…

全教科オール１００。

文句ナシの学年一位です。

私はあらためて滝沢サンの頭のよさを実感しました。

これはもう、お礼とお祝いの意味をかねて何かをしてさしあげる必要がありますね…！！

そう思って私が滝沢サンに声をかけようとすると…

「おまえオール１００かよ!?すげぇな!!」

「滝沢クンって以外と頭いいんだね♪」

数人の男女が滝沢サンをかこんで話だした。

「いや、別に…」

滝沢サンは困ったような顔をしているが、少しうれしそうにも見える。

ズキッ…

胸がしめつけられるように痛くなった。

え…

どうしてでしょうか…??

胸が…

痛い…??

い、いや！

そんなことよりも！

みなさんが滝沢サンにしゃべりかけてくれてるんです！

私が滝沢サンと話すようになったから、みなさんも滝沢サンが近寄りがたい人なんかじゃないって気がついてくれたんでしょうか！？

それなら今までの私の努力は無駄にならなかったというわけで！

これで滝沢サンにお友達ができたら、滝沢サンの高校生活も楽しくなるはず…！！

……

…だから、

これって…

うれしいことのはずですよね…??

それなのに…

どうしてこんなに悲しいんでしょうか…??

…滝沢サンは私以外と話さないで欲しい…

なぜか、そう思ってしまう私は、

おかしいですか…??

「ねぇ、詩織！テストどうだった??」

優香ちゃんと楓ちゃんが私のところにきてくれた。

「えっ…あっ、はい！私にしては頑張れた方だと思います！」

私は無理やり顔に笑顔をはりつけて言った。

「…詩織ちゃん、どうしたの??」

そんな私を見て、楓ちゃんが心配そうに言った。

「いえ、何も…」

2人に心配かけたくない。

それに…

2人にこんな嫌な感情を知られたくない。

そう思った。

「ウソ。なんかあるんでしょ?分かるよ」

「うん。私達、友達なんだから…教えて??」

だけど、2人は優しくそう言ってくれた。

…優香ちゃんと楓ちゃんは優しいです。

でも、私が思っていることはほんの小さなことなんですよ…??

だけど、私は2人に話すことにした。

「…私、今おかしいんです」

「おかしい?」

「…はい。滝沢サンが他の人と話しているのをみたら…」

私はいつの間にか女の子にかこまれている滝沢サンの方を見た。

また、胸がしめつけられる。

「胸が…苦しくなって…滝沢サンは私以外の人と話して欲しくない、そう思ってしまうんです」

私は最初、そうなることを望んでいたのに…

滝沢サンがいろんな人と話して、1人でいるなんてさびしいことなんてなくなって欲しいと思ってたのに…

私って本当に…

嫌な子です…

優香ちゃんと楓ちゃんは顔を見合わせた。

そしてにっこりと笑う。

「…それってさ、詩織が滝沢クンのこと、好きってことじゃないの??」

「す…き…??」

私が…

滝沢サンのことを…??

「どうしてですか…??私、まだ滝沢サンのことが少し怖いんですよ…??」

「でも、滝沢クンが他の人と話してたら嫌なんでしょ?それって好きってことじゃない！」

そうですけど…

…そうなんですか??

私は滝沢サンのことが…

好きなんですか…??

そう思うと、顔が熱くなる。

で、でも、多分、私の『好き』はきっと、お友達として『好き』ってことだと思います。

だって私には…

恋愛として、男の人を『好き』になるってことが、わかりませんから…

「でもさ、最近詩織ちゃんと滝沢クン仲いいから他の女の子たちも目をつけ始めてるよ？」

えっ？？

「あー。滝沢クンってちょっと怖いけどかっこいいもんね。みんな最初は近寄り辛かったみたいだけど、こんなにおとなしい詩織でも話せるんだから私もって思ってるんだろね…」

優香ちゃんはそういってぽんっと私の背中を叩いた。

「よしっ！詩織！他の子にとられないように、今のうち言ってきなよ！他の子としゃべらないでって！」

「えっ！？そ、そんな…！」

「いいから！」

楓ちゃんにも背中を押されて私はしぶしぶと滝沢サンのところにいった。

滝沢サンのまわりにはまだ女の子がいて、少し話かけ辛かったけど
私は頑張って声をかけた。

「た、滝沢サン！！」

女の子たちは私の声なんか無視して話続ける。

けど…

「…何??」

滝沢サンはたしかに私を見て言った。

ドキッ

鼓動が強くなる。

「ちょっとお話したいことがあるんですけど…」

女の子達が迷惑そうに私を見ている。

私、邪魔になっているんでしょうか…??

…それでも、

「少し、きてくれませんか??」

私は勇気をだしてはっきりと言った。

「ちょっと、今滝沢クンは私達としゃべってるんだけど」

女の子の一人がそう言った。

あきらかに敵意の目をむけられている。

こ、怖いです…

やっぱり私は余計なことをしているのでは…

だけど、私はふるふると首を横にふる。

そして滝沢サンの手をつかんだ。

「望月??」

私はそのまま滝沢サンをひっぱる。

滝沢サンは立ち上がって私に手を引かれるままについてきた。

「どこ行くんだよ??」

私は答えずに足を進める。

自分でも何をしているのかわからなくて、恥ずかしかった。

顔が火がでるほど熱くなってそれを隠すように私は足を早める。

そのうちにいつの間にか屋上についていた。

そこで私は滝沢サンの手をはなす。

「おい、望月…」

滝沢サンが私の名前を呼ぶ。

でも私は振り返ることができなかった。

だって…

私は目を押さえた。

なぜか、私の目から、涙がでてたから。

「もちづ…」

滝沢サンが私の肩をつかんだ。

そして私の名前を呼び掛けて止まる。

「おまえ…」

あ…

多分、ばれちゃいました…

私が泣いてること…

なら、もういいです…

私は振り返った。

「滝沢サン…お願いがあるんです…」

私は涙をぬぐう。

震える声で、でも滝沢サンに伝わるようにできるかぎりはっきりと言った。

「…私以外の人と、お話しないでください…」

滝沢サンの目が大きく見開かれる。

「は…？？なんだよ、それ…」

滝沢サンの低い声が胸に突き刺さる。

そうですよね…

すごく、勝手なこと言ってるって分かってるんです。

だってこれは、滝沢サンにずっと1人でいろって言っているようなものなんですもの。

「おまえ、オレがいつも1人だからって気つかってたんじゃねぇの？？それなのに他の奴としゃべるなって…矛盾してるだろ…」

「分かってます！でも！」

こんなこと、滝沢サンに言って困らせてしまわないでしょうか？

…だけど、これが私の気持ちなんです…

「私、滝沢サンが他の人と話してるのを見るのは嫌なんです！滝沢サンは私だけのお友達でいて欲しいんです！！」

滝沢サンが唖然として私を見ている。

絶対変な子だと思われていますよね…？？

こんなやつとかかわらきゃ良かったとか、そう思われてるかもしれません。

でも、どうだっていいです。

だって私は…

「滝沢サンは…私の大好きなお友達ですから…」

滝沢サンは驚いたような表情をうかべた。

「なんだよ、その理由…」

そしてぽつりとそう言う。

やっぱり…

私、変な子ですよね…

きっと、滝沢サンはもう、私のお友達なんて止めてしまわれるんでしょう…

仕方ない、ですよね。

だけど、滝沢サンはしばらくの間をおいて小さな声で言った。

「オレも…好きだよ」

ドキッ

心臓が高鳴る。

えっ…??

「い、いや！友達として、だ！」

「えっ、あ、はい。わかってますよ…」

滝沢サンは眉間のしわを深めると私の顔を見ずに言った。

「まぁ…はっきり言っておまえ以外のやつとしゃべるなとか言われても、それは嫌だ」

…それはそうですよね。

「でも……」

最後の言葉はほんの小さな声だった。

思わず、目を見開く。

「…もー、いいだろ！」

滝沢サンはそう言うと屋上の扉をあけてでていってしまった。

誰もいない屋上で一人たたずむ。

「一番はおまえだから…」

私はさっきの滝沢サンの言葉をくりかえした。

一番って…

どういうことですか…??

……滝沢サン。

私さっき『滝沢サンは…私の大好きなお友達ですから…』って言いましたよね??

実はあれ、私の本当の気持ちがばれないように、言葉をつけたしたんです。

…私は、滝沢さんのことを『お友達として好き』なんじゃないんですよ?

さっき、なぜか涙がでてしまったときに気づいたんです。

私は滝沢サンが…

「好き、なんですよ…??」

私はさっきまで滝沢サンが立っていたところに向かってぽつりとつぶやいた。

☆5話　気持ち☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

かなり急展開です…
しかも最後の場面が少し適当に…
…すいません＞ｍ（＿＿）ｍ＜

★5話　気持ち★響ｓｉｄｅ

「それじゃぁ中間の答案返すぞー！」

担任の澤田がそう言い、出席番号の順に答案用紙がかえされていく。

そう、今日このまえの中間の結果がすべてかえってくるのだ。

自分の点数はまぁ安心だ。

だが、望月の点数が気になる。

せっかくあれだけの時間と労力を使って教えたんだ。

せめて平均以上はとって欲しい。

「滝沢響」

名前を呼ばれてとりあえず自分の答案をとりにいく。

点数はもちろん満点。

まぁここのテストは簡単だから当然だがな。

…いや、自慢じゃなくて。

そして望月の番がやってきた。

「望月詩織」

「は、はい！」

名前を呼ばれた望月はなぜか大きな声で返事をして答案をとりにいった。

…あいつ、小学生みたいだな。

「おい、望月」

オレは望月が席につくなり声をかけた。

「どうだった？？」

オレの問いに望月は首をかしげて答えた。

「はい…よくわかりませんが…」

オレは望月に渡された答案用紙を見た。

点数は『６４点』。

オレにとっては人生の終わりみたいな点数だが…

こいつにしては上出来な方だろ。

「んー…まぁ、いいんじゃねぇの？」

そう言うと望月は顔輝かせた。

「そうですか??ありがとうございます！これも滝沢サンのおかげです！」

そう言ってぺこりとオレに頭を下げる。

あれ?なんかこいつオレに頭下げてばっかりじゃね??

…まぁいいけど。

「あっ、そういえば、滝沢サンはどうだったんですか??」

「知りたい?」

望月は強くうなずいた。

見せるのってなんか自慢になりそうで嫌なんだが…

まぁ、いいか。

オレは望月に答案を見せた。

望月の目が大きく見開かれる。

「ひゃ、ひゃ、百点…ですか！?」

「まぁ、この学校のテストって結構簡単だし…」

家で軽く教科書とノートを読み直したら大体分かるだろ…

そのあとのテスト返しでもオレはすべて満点をキープ。

まぁ、当然だな。

…いや、本当に自慢じゃないぞ??

オレが答案用紙を片づけようとしていると、

「おまえオール１００かよ!?すげぇな!!」

「滝沢クンって以外と頭いいんだね♪」

数人の男女がオレのまわりに集まってきた。

どうやらオレの答案をのぞきみたらしい。

「いや、別に…」

…オレ、こういうの苦手なんだけど…

ふと横を見ると望月が何かを話したそうな目でオレを見ていた。

あっ、そういえば望月に平均どうなったか聞いてなかったな…

そう思い、望月に話しかけようとするが、まわりのやつらがどんどんオレに話しかけてくる。

「やっぱり新入生代表ってのはだてじゃないんだな!」

「かっこよくて頭良いって最高だよね!」

い、いや…

オレ、望月と話したいんだけど…

そう思ってはっとする。

オレ…

なんで望月と話したいとか考えてるんだ??

望月に話しかけられるの…

嫌じゃなかったのかよ…??

望月はじっとオレの方を見ている。

その顔がなぜか悲しげに見えた。

「あの…オレ、あいつと…」

オレがそう言うとまわりに集まっていたやつらの一人がオレの耳元でこそっと言った。

「えっ?何?おまえって望月のこと好きなの??」

好き?

いや、そんなんじゃなくて…!!

「まぁたしかにな、あいつ結構可愛いもんな」

かわ、いい??

あいつが…??

オレは無意識に望月の方を見た。

望月はいつも一緒にいる女子2人と話している。

可愛いって…

別に…

ただ目がぱっちりしてて、まつ毛が他の女子よりも普通に長くて、真っ黒なきれいな髪で…

って…

普通に…可愛いってことじゃねぇか…

「えー??そう?あんな子、滝沢クンに合ってないよ!」

そばにいた女子がそう言った。

なぜかその言葉に怒りを覚える。

「…おまえよりは可愛いと思うけど」

オレははっきりと思ったことを言った。

言ったやつの顔が赤くなる。

「はっ!?何それ!せっかくかまってあげたのに、最悪!!いこっ!」

そいつはそう言うとオレのまわりにいたやつを連れてオレから離れていった。

…なんでオレ、さっき望月のことけなされてムカついたんだ…??

考えて見ても答えが見つからない。

ようやく見つかった答えも、否定する。

…いや、それは違う。

絶対に違う。

…あー!オレ、わけわかんねぇ…!!

頭をかかえたとき、今度は女子ばかりの軍団が集まってきた。

「滝沢クン!」

名前を呼ばれる。

望月に呼ばれる時は、またかよ…と思いながらも少しうれしかったりする。

でも、他の奴に呼ばれると答える気にもならない。

オレが返事をかえさないでいると、まわりのやつらは勝手に話し始めた。

あー…

うるさい…

どっかいってくんねぇかな…

そんな風に話を聞き流していたとき、

「た、滝沢サン！！」

たくさんの声が混じり合う中で、たしかに望月の声が聞こえた気がした。

望月？？

まわりを探してみると、集まっている女子軍団の後ろに、たしかに望月がいた。

「…何？？」

オレは望月の方を見て言う。

望月は驚いたような顔をして、そして続けた。

「ちょっとお話したいことがあるんですけど…」

望月はとまどいながら言った。

「少し、きてくれませんか??」

その声は望月にしてははっきりとした声だった。

「ちょっと、今滝沢クンは私達としゃべってるんだけど」

群がっている女子の一人が望月にそう言う。

いや…

オレ、しゃべってねぇし。

望月は少しびくっと震えた。

このまま引き下がるだろな…

そう思った。

だが望月はふるふると首をふった。

そしてオレの手をつかむ。

「望月??」

望月はオレの手をぐいぐいとひっぱる。

いつもおとなしくしてる望月がこんな行動をとるとは思わなかった。

オレは驚きながらも立ち上がり、望月に手をひかれるままついていく。

「どこ行くんだよ??」

そう問いかけても望月は何も答えない。

ただ、オレの手をひっぱるばかりだった。

オレはあきらめて、ただ望月についていく。

そして望月は屋上で足をとめた。

望月はオレの手をはなし、背を向ける。

「おい、望月…」

名前を呼んでみても何も答えない。

どうしたんだよ…??

オレは望月の肩をつかんで名前を呼んだ。

「もちづ…」

しかし、思わず途中で止まる。

「おまえ…」

泣いてる…のか…??

望月は振り返った。

ドキッ

心臓の鼓動が強くなる。

だって…

涙に濡れた望月の顔があまりにも頼りなげで、可愛らしく見えたから。

「滝沢サン…お願いがあるんです…」

望月はふるえる声でそう言い、涙をぬぐった。

おね…がい…??

「…私以外の人と、お話しないでください…」

オレは望月の言葉に驚いて思わず目を見開く。

「は…?? なんだよ、それ…」

何言ってんだ?こいつ。

「おまえ、オレがいつも1人だからって気つかってたんじゃねぇの??それなのに他の奴としゃべるなって…矛盾してるだろ…」

オレがいつも1人だったから…

おまえはオレのこと、怖いと思ってんのに無理して話しかけてたんだろ…??

それなのに…

わけわかんねぇ…

「分かってます！でも！」

望月がまっすぐにオレの目を見てくる。

なぜか、オレの鼓動ははやくなっていた。

「私、滝沢サンが他の人と話してるのを見るのは嫌なんです！滝沢サンは私だけのお友達でいて欲しいんです！！」

え…??

それって…

思わず都合のいいことを考えてしまう。

だけどすぐに打ち消した。

「滝沢サンは…私の大好きなお友達ですから…」

望月はしばらく間をあけてから、ためらうように言った。

「なんだよ、その理由…」

大好き…

その言葉が頭の中で鳴り響く。

望月がオレのことを…??

また都合のいい解釈をしそうになる。

いや、でもそれは友達としてだろ??

望月から見て、オレはただの友達なんだから…

…いや、オレにとっても望月はただの友達だろ…??

だけど、なぜか胸が誰かに鷲掴みされたように痛くなる。

なんでだよ…

…いや、分かってる。

なんでオレがこんな気持ちになるかなんて。

オレは…

「オレも…好きだよ」

素直な気持ちをぽつりとつぶやいた。

そしてすぐに自分の失言に気が付き慌てて言い訳をする。

「い、いや！友達として、だ！」

「えっ、あ、はい。わかってますよ…」

そう言われて、やっぱりオレは友達としか思われてないんだな、と思う。

悲しい気持ちをごまかすようにオレは望月を見ずに言った。

「まぁ…はっきり言っておまえ以外のやつとしゃべるなとか言われても、それは嫌だ」

そんなことない。

オレはほかの奴と話さなくても、おまえと話せればそれでいいんだ。

望月が悲しそうな表情をうかべる。

だから、オレは言葉を付け加えた。

「でも……」

ほんの小さな声だったが、自分で言ったことに驚いてしまった。

「…もー、いいだろ！」

オレは逃げるように屋上をでる。

ドアをしめて、その場に座り込んだ。

「オレ、何言ってんだよ…？」

顔が燃えるように熱くなる。

『でも、オレの一番はおまえだから』

自分で言ったことを思い返すと恥ずかしすぎて死にそうになる。

あー…

オレ、バカだ…

あの言い方じゃ、別の意味に聞こえるじゃねぇかっ！！

ほんとオレバカみたいだ…

しかも気づきたくないことに気づいちまうし…

オレは大きなため息をついた。

そして1人、小さな声でつぶやく。

「オレ、望月のことが好きだ…」

★5話　気持ち★響ｓｉｄｅ（後書き）

あらすじに『素直じゃない』って書いてるわりに響って意外と素直ですよね…

…実はあまり響の性格って決まってないんです。

とりあえず心の中ではよくつっこみいれてる人ってことで（；一_一）

☆6話　雨の中☆詩織ｓｉｄｅ

中間テストが終わって3週間ほどがたちました。
すっかり梅雨の季節です。
「毎日毎日雨って憂鬱だよねー…」
優香ちゃんが頬づえをつきながら言った。
そう、ここ最近は雨ばかり。
なんだか気分がすかっとしません。
「こんな日はもう何もしたくないよー！」
楓ちゃんがそう言いながら優香ちゃんの机をぽんぽんと叩いた。
「で、でも雨だって風情があるじゃないですか！それに梅雨の季節は一年に一度しかないんですからもっと楽しみましょうよ！」
「楽しむってどうやって??」
…えっと、
そう聞かれると言葉に詰まってしまいます…
そうしている間にチャイムが鳴って、学活の時間。

「今日は今度の合宿の班を決めようか」

澤田先生が教室に入ってくるなりそう言った。

合宿というのはさ来週にせまった学年合宿のこと。

一年生は愛知県の名古屋市に行くんだそうです。

「それじゃとりあえず5、6人の班を組んでみろ」

その一言で教室はガヤガヤと騒がしくなる。

「詩織ー！一緒に組もー！」

「あ、はい！」

私は優香ちゃんと楓ちゃんに声をかけられて一緒に組ませていただくことになりました。

「あと、誰誘うんですか??」

「うーん…やっぱり女子は3人集まったから次は男子だよねー…」

優香ちゃんは首をひねる。

「とりあえず詩織は滝沢クン誘ってきなよ」

「は、はい…」

優香ちゃんに指示されて私は滝沢サンに声をかけた。

「滝沢サン、一緒に組みませんか??」

「ん、いいけど…」

滝沢サンは短くそう返事する。

滝沢サンを連れて優香ちゃんと楓ちゃんのところに戻るとすでにあと2人のメンバーがそろっていた。

「連れてきましたよ!」

「こっちもそろったよー!」

そう言って優香ちゃんと楓ちゃんがにこっと笑う。

「よっ、望月!よろしくー!」

そう言った短髪の男の子はたしか…

えっと、中島サンだったと思います。

「あんましゃべったことねぇけどよろしくなー!」

このちょっと茶色が入った髪の人は…

多分、橋本サンです。

「えっと…よろしくおねがいします」

私はぺこりと頭を下げた。

優香ちゃんと楓ちゃんがそれぞれ誘ってきたそうですが…

2人とも全然かかわりのない人なので少し緊張してしまいます…

「それにしても滝沢と同じ班になるとは少しびっくりだよな！」

「滝沢クンは詩織ちゃんと仲いいんだよー！」

楓ちゃんがにこにこしながら橋本サンに言う。

いや…

仲良いとか言われちゃったら少し照れちゃいますね。

私はふと前に屋上で滝沢サンに言われた言葉を思い出した。

思わず笑顔になる。

まぁ、私は滝沢サンの一番のお友達ですからね！

（意図はわかりませんでしたが、私はとりあえずそう片づけておきました）

滝沢サンはどんな顔しているんでしょう？？

そう思って滝沢サンの顔を見てみると…

……

私は何もみなかったふりをして前を見た。

と、とても言葉にできない…

恐ろしい表情でした…

そ、そんなに嫌なんですか…??

とりあえずそんな感じで班決めは終了しました。

そしていつの間にかその日1日は終わり…

帰宅しようとすると…

「滝沢サン??」

生徒玄関の前で滝沢サンが雨を見ながらぼんやりと立ちつくしていた。

「どうしたんですか??」

声をかけてみると滝沢サンは私の方に振り返った。

「ああ、望月か。…なんか傘なくしちまって…濡れて帰ろうか迷ってたんだ」

そう言うとまた雨を見つめる。

私もつられて雨を見た。

雨はザーザーと音を立てて激しく降り続いている。

「…これくらいなら大丈夫だよな??」

滝沢サンがぽつりと言った。

い、いやいや!

全然大丈夫じゃないですよ!!!

「ダメですよっ!濡れて帰ったら風邪ひいちゃいます!!」

「…でも傘ないんだから仕方ないだろ?」

そ、そうですけど…

風邪ひいちゃったらダメです…

うーん。

どうすればいいんでしょう…??

少し考えてみると、ふと名案がうかんだ。

「あっ、そうだ!滝沢サン、私の傘使います??」

私はそう言って傘を差し出した。

「いや、おまえが濡れるだろ??」

「私はいいんです!ほら、バカは風邪ひかないって言うじゃないですか!」

だから私は大丈夫ですけど、滝沢サンはすごくかしこいのできっとすぐに風邪をひいてしまいます…

滝沢サンは少し悩むような素振りを見せたあと、小さな声で言った。

「…んじゃ、おまえ、はいれよ」

そして外にでて傘を開く。

え…??

「いいん…ですか??」

「もともとこの傘、おまえのだろ!?」

滝沢サンは怒ったようにそう言う。

そ、そうですけど…

「で、でも…」

「いいから!」

滝沢サンにそう言われて私はおずおずと傘の下に入った。

ザーザー…

地面を打つ雨の音が響く。

私達は無言で歩いていた。

心臓がドキドキと鼓動を打つ。

肩が滝沢サンに触れる。

心臓がはねあがる。

慌てて離れると頭に雨の雫がおちた。

「ひゃっ！」

いきなりのひんやりとした感触に驚いてしまう。

「…大丈夫か？」

「は、はい…平気です」

傘が少し私の方による。

滝沢サンが私が濡れないようにしてくれた。

小さな優しさがとてつもなくうれしかった。

でもそれじゃ滝沢サンが濡れてしまうので私は少し滝沢サンの方に

よった。

滝沢サンに触れた部分が熱くなる。

それから駅まで、やっぱり私は何も話せなかった。

だけどとっても幸せな時間（トキ）だった。

このままずっとこの時間（トキ）が続けばいいのに、と思った。

駅についた私達は方向が同じなので自然と同じ電車に乗り込んだ。

…たしか、前にも滝沢サンと同じ電車にのってたことがありましたよね。

そのときは滝沢サンは私から逃げようとしていましたけど…

今は、電車がガラガラにすいているのに私の隣にいてくれている。

それだけのことがうれしくって、私は笑顔になった。

「傘、ありがとな」

ふいに滝沢サンが言った。

「い、いえ…私もありがとうございます」

何に対してありがとうと言っているのかわからなかった。

けど、何を言っていいのか分からなかったのでとりあえずそう言っていた。

そういえば…

ふと、今日気になっていたことを思い出した。

「あの…滝沢サン…」

「何??」

「合宿の班…嫌、でしたか??」

滝沢サンの目がほんの少し見開かれた。

「別に…なんで??」

「だって…滝沢サン、すごく嫌そうな顔をしていましたから…」

もう眉間のしわがすごく深くなっていて…

顔全体で嫌という気持ちを表しているような顔をしていました…

「別にそんな顔してたつもりはなかったけど…」

「で、でも…」

もしかしたら滝沢サンに気を使わせているかもしれないと思うと…

「嫌なら嫌とはっきりいってくださってもいいんですよ…??」

「だから嫌なんかじゃねぇよ…！」

滝沢サンはそう言ってくださいましたが…

やっぱり私は滝沢サンが気を使っているような気がして仕方がなかった。

話しているうちにいつの間にか私が降りる駅についていた。

「あ、それではまた明日…」

私はそう言って電車をおりる。

滝沢サンは何も言わずに目だけで私を追った。

こころなしか何かを言いたそうに見えた。

プシューと音を立ててドアがしまりかけたとき、

「お、オレはおまえに誘われてうれしかった！」

慌てたようにそう言った滝沢サンの声が耳に入った。

ドキッ

心臓が強く鼓動を打つ。

…本当、ですか??

うれしくて、私は滝沢サンに笑顔を向けた。

滝沢サンを乗せた電車が私の目の前を過ぎていく。

明日また会えると分かっているのに、なんだか名残惜しい気がした。

電車を見送ったあと、駅をでた私は家路につきながらさっきまでの出来事を思い返していた。

それだけで、顔が熱くなる。

もしかして滝沢サンも私のことを好きなんじゃないでしょうか…??

一瞬そう思ってすぐに首をふる。

…そんなわけないですよね。

そんな都合のいいことがあるわけありませんから…

…友達。

それでいいんです。

私は滝沢サンの一番の友達でいられれば…

それだけで、いいんです。

☆6話　雨の中☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

おひさしぶりです；
水、木、金は塾で更新できませんでした（；一_一）
これからもそうだと思うのでよろしくお願いします。
あと今小説の中では6月くらいです。
実は私も少しわからなくなっていたのであらためて考えてみました。
ちなみに私、高校の行事やテストの時期などは全くわからないのでそこだけ中学設定です。
おかしくても見逃してください＞ｍ（_　）ｍ＜

★6話　雨の中★響ｓｉｄｅ

中間テストが終わってから三週間程がたった。

最近じゃ毎日雨が続き、憂鬱な毎日だ。

そんなある日。

「今日は今度の合宿の班を決めようか」

学活の時間に担任の澤田がそう言った。

合宿…??

そういえばそんなのあったな…

「ねぇ滝沢クン！ウチらの班きてよ！」

ぼーっと考えていると突然3人の女子チームに誘われた。

みたところ名前もよく分からない連中だ。

しらねぇ奴と同じ班になってもな…

「オレ、他の奴と組むから」

オレはきっぱりと断った。

「えー！なんでー！?組もうよー！」

それでも1人の女子がしつこくそう言ってくる。

「嫌」

「いいじゃーん！」

あまりにもしつこかったのでオレはそいつを思いきり睨んだ。

そいつはびくっと震えるとふんっと首をふった。

「…もーいいよ、こんなやつ誘わなくても！他の奴誘おう！」

そう言ってあとの2人を連れていって他の男子の所に行った。

ふん。

こっちだっておまえらみたいなやつはさらさらお断りなんだよ。

オレはちゃんと組みたい奴が…

そう思ったとき、ちょうどその組みたい奴がきた。

「滝沢サン、一緒に組みませんか??」

さっきの奴らと違い遠慮がちに言う望月。

その姿に思わず可愛いと思ってしまう。

「ん、いいけど…」

オレはその気持ちを隠すようにそっけなく言った。

望月の顔がぱぁぁぁっと輝く。

本当に感情が顔にでやすいタイプだよな。

オレはそう思って小さく笑った。

望月に連れられて鳥山の席に行くとそこには他のメンバーらしき奴らがそろっていた。

「連れてきましたよ！」

「こっちもそろったよー！」

望月が元気よく言うと、中川がにこっりと笑って言った。

「よっ、望月！よろしくー！」

そばにいた（多分オレ達と同じ班になるらしい）男が望月に笑いかける。

えっと…

たしかこいつは中島智也だ。

「あんましゃべったことねぇけどよろしくなー！」

そう言ったのは橋本一真だ。

こいつは成績がオレの次らしくて入学してからなぜかライバル視されている気がするので知っている。

「えっと…よろしくおねがいします」

望月はぺこりと頭を下げる。

そしてどう接していいのか分からないようで困ったように中島と橋本を見る。

それを見てオレはなぜかいらっとした。

いや、『なぜか』というか…

理由はただ単純なんだ。

ただ望月が他の男にかまってるのが嫌なだけ。

でもそんなことばかり言ってもいられないのでオレは何も思っていないような素振りをする。

「それにしても滝沢と同じ班になるとは少しびっくりだよな！」

橋本はオレを見てそう言った。

「滝沢クンは詩織ちゃんと仲いいんだよー！」

中川がにこにこしながらそう答える。

橋本は何気ない様子であいづちをうつ。

だが、その目はしっかりオレを見ていた。

そしてにやりと小さく笑う。

何か、嫌な予感がした。

そしてその日が終わり、オレはさっさと家に帰ろうと教室をでた。

生徒玄関にでるとやっぱり外には激しい雨が降り続いている。

はー…

やっぱ雨は嫌なモンだな…

そう思いながら鞄にいれていた折り畳み傘を取り出そうとした。

が、

「はっ…？ない？？」

いくら鞄の中を探しても傘が見つからない。

オレ、たしかに鞄の中にいれたよな！？

もしかして家に忘れてきたのか？？

いや、けど朝はちゃんとあったし…

…教室に忘れてきたのか??

そう思い教室に戻ってすみずみまで探してみたがやっぱりなかった。

…おかしいな。

誰かが間違えて持っていったのか??

わざわざオレの鞄さぐってか??

……まぁ、どれだけ考えても傘がないことには変わりないんだ。

さて、どうするか。

「どうしたんですか??」

ふと後ろから声がした。

振り返ると望月がきょとんとオレを見ている。

「ああ、望月か。…なんか傘なくしちまって…濡れて帰ろうか迷ってたんだ」

そう言ってオレはまた雨に視線を戻す。

雨は変わりなく激しく降り続いている。

んー…

駅まで走ったら１０分ほど…

それくらいなら濡れても結構大丈夫か…??

「…これくらいなら大丈夫だよな??」

「ダメですよっ！濡れて帰ったら風邪ひいちゃいます！！」

オレがぽつりと言うと望月が慌てていった。

「…でも傘ないんだから仕方ないだろ?」

ハンカチでも頭にのせていけば少しはマシになるか??

…いや、まずハンカチ持ってねぇし…

そのとき望月がぽんっと手を叩いた。

「あっ、そうだ!滝沢サン、私の傘使います??」

そう言って紺色のチェックの傘をオレに差し出してくる。

「いや、おまえが濡れるだろ??」

なんで傘持ってる望月が濡れて帰って、多分なくしたオレが人の傘さして帰るんだよ…

けど望月は引こうとはしなかった。

「私はいいんです！ほら、バカは風邪ひかないって言うじゃないですか！」

いや…

そういう問題じゃねぇし…

まずそれは迷信だ。

…だけどこいつ、絶対引こうとしないだろうな。

いい争っているのも無駄な気がする。

一応まわりを軽く見まわした。

他の奴らはすでに早々と帰っている。

あとは部活をしている奴だけだが、雨なので大体は体育館か廊下でしているクラブばかりだ。

…誰もいないんなら…

「…んじゃ、おまえ、はいれよ」

オレは小さな声でそう言った。

そして外にでて望月の傘をさす。

望月が目を見開いた。

「いいん…ですか??」

「もともとこの傘、おまえのだろ!?」

オレは照れ隠しに言った。

「で、でも…」

「いいから!」

オレがそう言うと望月はおずおずと傘の下に入ってきた。

ザーザー…

激しい雨が音を立てて地面を打つ。

オレは何も話せなかった。

なぜか、自分でも驚くほど緊張していたのだ。

…絶対にこれ、顔赤くなってる。

望月に見られてねぇ、よな…??

ちらっと望月の方を見ると望月はうつむいていた。

安心してまた前を見る。

望月の肩がオレの腕に触れた。

望月はびくっとして慌てて離れる。

「ひゃっ！」

そして突然声をあげた。

「…大丈夫か？」

多分傘にたまった雨が頭におちてきたんだろうな。

勝手な想像をしながら聞く。

「は、はい…平気です」

望月はそう答えてまた黙ってしまった。

…またこいつ、オレから少し離れて歩こうとするだろうな。

こいつの傘なのに、変に気使わせて濡らすのもなんか悪いし…

オレは傘を少しだけ望月の方によせた。

頭の上に雫がおちてくる。

つめたっ…

たしか、最近の雨って酸性雨だよな…？？

…はげたらどうしよう。

そんなどうでもいいことを考えていると望月が少しオレの方によってきた。

どうやらオレに気を使ってくれたらしい。

望月の肩がまた、オレに触れる。

心臓が強く鳴る。

オレは傘をよせてちょうど2人とも濡れない位置に調節した。

それでも、望月が濡れないように少し望月よりに。

オレ達はそれから駅まで何も話さなかった。

それでもオレは望月がこんな近くにいるというだけで、

なぜか、どうしようもなくうれしかった。

駅についたオレ達は自然と同じ電車に乗り込む。

電車はガラガラにすいていたが、オレ達はドアのまえに立った。

たしか…

前もこんな風に望月と同じ電車にのってたことあったよな。

そのときはとてつもなく望月から離れたい気持ちでいっぱいだった。

だけど、今は違う。

むしろ望月のそばにいたい。

…オレも変わったもんだな。

つっても一ヶ月ほどしかたってねぇけど。

そういえばあの時も無言で気まずかったな。

そう思うと急に今の状態も気まずくなってきた。

オレは少しでも話そうと、ぽつりと言う。

「傘、ありがとな」

望月は突然話しかけられて驚いた顔をしながらも返事を返してくれた。

「い、いえ…私もありがとうございます」

…なんで望月がお礼言うんだ??

オレが貸してもらった側なんだから別にお礼を言われるほうじゃ…

「あの…滝沢サン…」

ふいに望月が声をかけてきた。

「何??」

「合宿の班…嫌、でしたか??」

望月はためらいがちにそう聞く。

嫌??

そんなわけないだろ…??

むしろお前と同じ班になれてすげぇうれしい…なんて、そんなこと死んでもいえねぇけど。

「別に…なんで??」

「だって…滝沢サン、すごく嫌そうな顔をしていましたから…」

嫌そうな顔…??

「別にそんな顔してたつもりはなかったけど…」

いってからふと気がついた

もしかして橋本がオレを見て笑ったときの顔か??

たしかにあのとき嫌な予感がして変な顔したかもしれねぇけど…

「で、でも…」

望月はなぜか少しうるんだ瞳でオレを見た。

ドキッ

心臓の鼓動がひときわ強くなった。

「嫌なら嫌とはっきりいってくださってもいいんですよ…？？」

「だから嫌なんかじゃねぇよ…！」

なんでお前と同じ班になれて嫌だと思うんだよ…

誰が好きなやつと同じ班になれて嫌だと思うんだよ…

電車が止まった。

どうやら望月はここで降りるらしい。

「あ、それではまた明日…」

そう言うと電車を降りた。

望月はとても悲しそうな顔をしている。

…オレが望月と同じ班になったのが嫌だと思ってると思ってるんだ。

そんなわけねぇだろ！

プシュー

音がして、ドアが閉まりかける。

オレは慌てて言った。

「お、オレはおまえに誘われてうれしかった！」

ドアが閉まる。

…ちゃんと、聞こえたか？？

窓の外にいる望月が目を見開いた。

そしてうれしそうにオレに笑いかける。

ほっとしたようなその笑顔がオレの言葉で引き出されたかと思うとうれしかった。

オレはその笑顔から目が離せなくて、見えなくなるまでずっとその笑顔を見つめていた。

望月が見えなくなって平静に戻ってからふと思う。

…やべぇ。

オレ、かなりおかしくなってる。

こんなに人に関心もったのって初めてだ。

しかも…女に。

今、少し前まで一緒にいたおまえと、今すぐに会いたいと思ってる。

…オレ、本当におかしいよな？

オレがこんな風になっちまったのは…

おまえのせいだ。

望月。

★6話　雨の中★響ｓｉｄｅ（後書き）

響がすごく素直になってます。
…あらすじ、書きなおした方がいいんでしょうか??
あと、楓の名字は中川です。

☆7話　笑顔☆詩織ｓｉｄｅ

「そういえば、滝沢クンって全然笑わないよね」

合宿の係や予定を決めた後の休み時間、楓ちゃんがふとそう言った。

「えっ、そうですか…？？」

最近、ほんのたまになら笑ってくださいますけど…

「そうだよね。いつも仏頂面でさ、せっかくすごいかっこいいのにもったいないよ」

「せっかく合宿で同じ班になったんだから、せめて合宿のときくらいは機嫌よくしてて欲しいよね」

「はぁ…」

…そんなに、滝沢サンっていつも仏頂面してますか…？？

私はそうは思いませんけど…

私がうつむいていると優香ちゃんと楓ちゃんは慌てたように顔を見合わせた。

「い、いや、別に滝沢クンと一緒の班が嫌って言ってるんじゃないよ！？私らもあんなかっこいい人と同じ班になれるなんてむしろうれしいし！」

「そ、そうだよ！あ、別に狙ってるとかそういうわけでもないから！」

…お2人とも、何を慌てていられるのやら…

よくわかりませんが。

「分かってますよ。それに大丈夫です。滝沢サンはそんな人の楽しみを壊してしまうような人ではありませんから」

私は笑ってそう言った。

そして次の時間。

国語のノートをとりながらぼんやりと考える。

でも…

本当に滝沢サンって、ほんのたまにしか笑ってくださいませんよね…？

笑ったらあんなにきれいですのに…

私はほんのたまに見せてくれる滝沢サンの笑顔を頭にうかべてみた。

少し、顔が熱くなる。

…なんだか、また見たくなってきました…

私はちらりと隣の滝沢サンを盗み見た。

滝沢サンはあいかわらずの仏頂面。

…うーん。

優香ちゃんと楓ちゃんが言うことも、少しわかる気がします。

そういえば、滝沢サンってどんな時に笑ってくださるんでしたっけ…??

急に気になって、私はその時間中ずっとそのことを考えてきた。

「あの…滝沢サンってどんなときに笑うんですか??」

「はぁ??」

滝沢サンは思いきり怪訝な顔をした。

「なんだよ。急に」

「いや…ちょっと気になりましてですね…」

そのせいでさっきの授業はまったく集中できませんでしたよ…

「…そりゃぁ、笑うって言ったらおもしろいことがあったときだろ」

滝沢サンは以外と真剣に答えてくれた。

なるほど…

おもしろいことですか…

「…それじゃ私、今からおもしろいこと言います！」

私はコホンと軽く咳ばらいをした。

やっぱりおもしろいことの定番と言えばギャグですよね？

ギャグと言えばやっぱり…

「ふとんが…ふっとんだ！！」

さぁ、どうですか！

この私のスーパーギャグで笑ってください！！

だけど滝沢サンはまったく反応ナシ。

…あれ？

おかしいですねー…？？

「…えっと、今のは冗談です」

私はまたコホンと咳ばらいをした。

えっと…

それでは…

これならどうですか！？

「猫が、寝ころんだ！」

……

あれれ？

また、反応ナシです…

滝沢サンにはギャグが通じないんでしょうか？？

「…あの、滝沢サンはギャグが分からないのですか？？」

「少なくともおまえのは分からない」

えっ、私が言ったことの意味が分からなかったんですか？

「えっと、今のは『ねこ』と『ねこ』ろんだをかけてですね…」

「いや、そういう問題じゃなくて…」

そう言う問題じゃないってどういう問題ですか…？？

…まぁ、いいです。

とりあえずギャグ作戦はあきらめます…

「…それじゃぁ、滝沢サンにとって私が今までしたことで何が一番おもしろかったですか??」

滝沢サンは少し考えるように黙り、ふと言った。

「…あの、おまえが一回派手にこけたときの。あれ、かなりおもしろかったぞ」

派手にこけた??

そんなことありましたっけ…??

記憶をたどってみる。

すると、たしかに思い当たることがあったような気がした。

…あっ、そ、そういえばそんなことありましたね…

あれはかなり恥ずかしかったです…

「そ、それが滝沢サンにとって一番おもしろかったんですか??」

「んー…まぁ、なぁ…」

そ、そうですか…

滝沢サンがそう言うなら…

仕方がありません。

「滝沢サン！見ていてください！」

今から、あのときのこけ方を表現して見せます！！

よーし！

行きますよー！！

私はその場であのこけ方を精一杯表現してみた。

さ、さぁ！

今度こそは笑ってくださいますよね！？

私は期待たっぷりに滝沢サンを見た。

そして息をのむ。

…本当に滝沢サンが笑ってくれている。

「おまえ…それ、わざとらしすぎだろ…」

私は返事もせず、ただ滝沢サンの笑顔に見とれていた。

本当に…

本当に、きれいな笑顔…

私はふとまわりを見てみた。

教室にいた女の子達、

いや、男の子まで、みんなが滝沢サンの笑顔を見ている気がした。

そして、それがたまらなく嫌だった。

「滝沢サン！ちょっときてください！」

「はっ？」

私は滝沢サンをひっぱって廊下に連れ出した。

「なんだよ？」

滝沢サンは怪訝な顔をする。

「ダメです…！」

「何が？？」

…他の人は滝沢サンの笑顔を見ちゃいけないんです…！！

そう、言いたかった。

だけど、言えるわけ…ないです。

私は滝沢サンの、ただのお友達なんですから…

ただのお友達がこんなこと言ったらおかしいですから…

「…いえ、なんでもありません」

私はなんとか笑顔を作ってそう言った。

「ただ、教室って熱がこもってて暑いなぁーと思いまして…」

適当な理由をつくる。

「ああ…たしかにな」

滝沢サンは納得してくれたようなのでほっとした。

私の気持ち…

ばれてないですよね…??

私は滝沢サンの顔をうかがってみた。

いつもと同じ表情。

私に向けてくれる、ほんの少し優しい表情。

この表情も…

きれいな笑顔も…

誰にも見せたくない。

滝沢サンを私1人だけのものにしてしまいたい。

そう思ってしまう私はすごく悪い人間ですよね…？？

それでも…

そんな思いがあふれだして止まらない…

こんな汚い私、

絶対に滝沢サンに知られたくありません…

☆7話　笑顔☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

おもしろ&ほのぼのに見せかけて実はシリアスに…！！
…すいません。
詩織がかなり独占欲が強い人になってしまいました…
しかもおとなしい性格のはずが結構積極的ですよね…

★7話　笑顔★響ｓｉｄｅ

「あの…滝沢サンってどんなときに笑うんですか??」

「はぁ??」

望月がいきなりわけわかんねぇことを聞いてきた。

「なんだよ。急に」

「いや…ちょっと気になりましてですね…」

なんでそんなこと気になるんだ…??

本当にこいつは少し変な奴かもしれない。

だが、

「…そりゃぁ、笑うって言ったらおもしろいことがあったときだろ」

と、なぜか真剣に答えてしまうオレも変なのか…??

望月は首をひねった。

「…それじゃ私、今からおもしろいこと言います!」

そして突然目を輝かせてそう言う。

おいおい…

その振り方は結構難意度高いぞ…??

望月はコホンと軽い咳ばらいをする。

オレは少し期待して耳を傾けた。

「ふとんが…ふっとんだ!!」

……??

望月は自身満々の顔でオレを見ている。

…いや、これで笑うやつ、まずいねぇから…

「…えっと、今のは冗談です」

望月はそう言ってコホンと咳をした。

…そ、そうだよな!

こんななんのひねりもないギャグがおもしろいとおもってるわけないよな!

次こそはまぁまぁおもしろいのを……

「猫が、寝ころんだ!」

またもや望月が自信満々の顔で言った。

…いや、それもさっきとあんまかわんねぇから…

望月は何の反応もしないオレを不思議そうに見た。

「…あの、滝沢サンはギャグが分からないのですか??」

「少なくともおまえのは分からない」

オレにはとてもおまえの定番ギャグがおもしろいとはおもえないよ…

「えっと、今のは『ねこ』と『ねこ』ろんだをかけてですね…」

「いや、そういう問題じゃなくて…」

こいつ…

全然分かってない!

おまえの言っていることは根本的な所からギャグとはかけ離れているんだ!

(…いや、ギャグはギャグなんだけどな…)

「…それじゃぁ、滝沢サンにとって私が今までしたことで何が一番おもしろかったですか??」

望月はおずおずと聞いてきた。

望月がしたことでおもしろかったこと…??

そんなの別に…

ないと思いかけたところで、ふと思い出した。

そういえば…

一ヶ月くらいまえに望月がオレを追ってきて派手なこけ方したことあったよなぁ…

しかもそこまででかくない石につまづいて、こけたあとにほっぺに鳥の糞おとされてたっけ…

…あれは、かなりおもしろかった。

「…あの、おまえが一回派手にこけたときの。あれ、かなりおもしろかったぞ」

望月はしばらく考えるような素振りを見せたあと、はっとした顔をして頬を少し染めた。

「そ、それが滝沢サンにとって一番おもしろかったんですか??」

「んー…まぁ、なぁ…」

あとは別に…

あれ以上におもしろかったことはなかった気がする…

「滝沢サン！見ていてください！」

急に望月がそう言って手をあげた。

??

何するんだ??

もしかして…

変な考えが頭によぎる。

…ここで思いっきりこけるとかいうんじゃねぇだろな??

予感は的中だった。

望月はすぅっと息を吸うとじっと床を見据えた。

お、おまえ!

ケガするぞ!!

そう言いかけたところで、

すぐオレは安心した。

そして同時にため息がでる。

望月はあまりにもわざとらしくゆっくりとこけるマネをしたのだ。

しっかりと床に倒れる前は手をついている。

…それ、わざとらしすぎるだろ…

けど望月はやっぱりキラキラとした目でオレを見てきた。

今度こそはやった、とばかりの顔をしている。

いやいや…

全然ダメだから…

けど、

オレはなぜかわからないが、オレを笑わせるために必至になってる望月を見てると笑顔になっていた。

「おまえ…それ、わざとらしすぎだろ…」

望月は返事をせず、じっとオレの方を見てくる。

…??

なんだよ?

オレの顔に何かついてるのか??

望月は急にキョロキョロとまわりを見回すとオレの腕をつかんだ。

「滝沢サン!ちょっときてください!」

「はっ?」

有無を言わせず、オレは望月に廊下へ連れだされた。

「なんだよ?」

またいきなり変なことして…

「ダメです…!」

望月はなぜかえらく真剣な顔でそう言った。

その目がなぜかうるんでいるように見える。

思わずドキッとする。

「何が??」

望月ははっとしたような顔をした。

「…いえ、なんでもありません」

そして無理やりだと分かる笑顔でそう言った。

「ただ、教室って熱がこもってて暑いなぁーと思いまして…」

嘘だろうな…

「ああ…たしかにな」

だが、オレは納得したようにそう言った。

なぜかはわからないが理由は聞いてはいけない気がした。

望月はなぜか悲しそうな顔をしている。

そんな姿が頼りなげで可愛いと思った。

抱きしめてみたい。

そう思ってしまう。

だけど、そんなことしたら望月に嫌われかねない。

第一オレにそんなことする勇気はない。

オレは、望月が悲しそうな表情をしているのに、ただ見てるだけだ。

そんな自分が情けない。

そう思い、軽いため息をついた。

★7話　笑顔★響ｓｉｄｅ（後書き）

響ｓｉｄｅはいつも短くなってしまいます（；一＿一）
しかも最後がわけわからん…

☆8話　合宿☆詩織ｓｉｄｅ

みなさん、今日がなんの日か知っているでしょうか？

……いえいえ、知らないのはムリもありませんよ？

まぁ、仕方がありませんから私が教えてあげます！

今日はなんと、待ちに待った合宿の日なんです！！

私がどれだけこの日を楽しみにしてたことか…

「詩織ー！ぼーっとしてないではやくバスのりなよー！」

優香ちゃんが私を見てあきれたように言った。

「あ、は、はい！！」

私は急いでバスにのりこんだ。

バスの座席はしっかり決めていたので迷わずにのりこめました。

ちなみに私の席は滝沢サンの隣です。

優香ちゃんと楓ちゃんが気を使ってくれたんですよねー…

そんなことしていただかなくてもいいですのに。

でも、素直に喜んでもいいですよね…！！

「滝沢サン！今日から2日間、よろしくお願いしますね！」

そう、合宿は今日から2日間！

ちょっと短い気もしますが…

それでも滝沢サンと一緒ならすごく楽しい2日間になると思います！

「…ああ」

滝沢サンはそっけなく返事を返した。

あれ…？？

滝沢サン、なぜか元気ないですね…？？

「滝沢サン、大丈夫ですか？？元気ないですよ？？」

私は楽しみすぎてこんなに元気だというのに…

「…眠たいんだよ。寝かせてくれ…」

滝沢サンはだるそうな声でそう言った。

たしかに…

すごく眠たそうな顔をしています…！！

「そ、それは失礼しました！ど、どうぞごゆっくりお眠りください

！」

「そうさせてもらうよ」

そう言って滝沢サンは体をねじって私に背をむけた。

そんな後ろ姿をじっと見る。

…せっかく滝沢サンとたくさんお話できると思ったのに…

少し、残念です…

しばらくじっと見ていると滝沢サンが急に振り返った。

そしてまっすぐに座り直す。

「どうしたんですか??」

「眠たくなくなった」

そう言う滝沢サンの目はまだトロンとしている。

…私のために気を使ってくださったんですね。

私は思わず笑顔になった。

「…何笑ってんだよ」

滝沢サンが私を見て怪訝そうに言う。

「いえ、滝沢サンって優しいなぁと思って」

「なんでそうなるんだよ…」

滝沢サンは顔をしかめて言った。

多分前の私なら、この顔がすごく怖いと思ったに違いありません。

だけど今は全然怖くないです。

だってこの顔は滝沢サンの照れ隠しだって分かってますから…

それから目的地につくまで滝沢サンはずっと私の話につきあってくれた。

そしてついに目的地に！

まず最初の場所は有名な『名古屋城』です！

あっ、ちなみに今回の合宿の予定はですね…

一日目はいろんな名所・旧跡を回り、歴史のことを学びます。

そして2日目は自由という、もはや修学旅行なんじゃないかと思うくらい自由な合宿なんです！

やっぱり私…

頑張って勉強してこの学校に入ってよかったです…！！

というわけで私達はバスを降り、ガイドさんに連れられて中に入らせていただき説明を聞きながら中を回りました。

そして『名古屋城』以外にもいろんなところに連れられて…

「みなさん、お疲れ様でした！」

やっと今日泊らせていただくホテルについたときにはもうくたくたになっていました。

先生から指示があったあと、各々の部屋に入る。

部屋は男女、各班ごとに別々になっていて私は優香ちゃんと楓ちゃんと同じ部屋だった。

今からの予定は３０分程してから宴会場で夕食を食べて、そのあとに大浴場でお風呂です。

「はぁ…結構疲れましたね…」

私は体操服に着替えてふぅっと息をついた。

「本当に！もう足が棒みたいよ！」

優香ちゃんが足をさすりながら言う。

たしかに今日は歩きっぱなしでしたからね…

私の足ももう棒みたいです…

「それよりもさ、今日の晩御飯なんだろね！？」

楓ちゃんが目を輝かせて言った。

「…はぁ、本当に楓は食べることばっかりなんだから…」

優香ちゃんがはぁとため息をつく。

「だってお腹すいたんだもーん」

そう言って楓ちゃんは頬をふくらませた。

そんな仕草がとても可愛いと思う。

笑い合いながら話をしているといつの間にか夕食の時間になった。

宴会場に行くとたくさんの料理がところせましと並べられている。

「こ、これは…」

「す、すごいです…」

私と楓ちゃんは声をそろえていった。

天むすにきしめん、手羽先、ひつまぶしなどなど…

名古屋名物がたくさんっ！

私…

生まれてきてよかったです…

さっそくみんなそろったところで『いただきます』をして料理に手をつける。

本当に…

本当においしいです～！！

「望月ちゃんってすごい幸せそうにご飯食べるよなー！」

急に橋本サンにそう言われて私は食べる手を止めた。

「そ、そうですか？？」

「うん。なんか見ておもしろい」

お、おもしろいんですか！？

そ、そんな変な食べ方をしていたなんて…

気をつけないと…

それにしても…

食べることに夢中になっていた私はふとまわりの様子を見ていた。

優香ちゃんと中島サン仲良いですねー…

なんだか優香ちゃん楽しそうです。

楓ちゃんは…

…本当に無心になって食べてますねー…

滝沢サンは…

怒ったような顔をしながら天むすを食べていた。

…ムスッとしながら天むすですか…

…いやいやいや！

そんなどうでもいいこと考えなくていいんです！

滝沢サン、何かあったんでしょうか…？？

夕食を食べ終え、お風呂も終えた私達は部屋に戻り寝る準備をした。

「それにしても…ホテルっていうのはすごいですね。お風呂入っている間にいつの間にか布団が敷いてあります」

「ホント、すごいねー！！」

楓ちゃんが髪をとかしながら言った。

優香ちゃんは髪の毛を乾かし終えてぱんと手を叩いた。

「…さぁ、優香、楓！寝る準備はもうオッケーよね！？」

「は、はい…」

「終わったけど…どうしたのー？？」

「どうしたのじゃないでしょ！女同士の夜と言ったらおしゃべりタイムでしょ！？」

そ、そうなんですか…

それは知りませんでした…

私達はとりあえず布団にもぐりこんだ。

タイミングよく消灯の時間になり、電気が消える。

「で、何の話するんですか？？」

「明日の自由行動の話よ」

自由…行動の話ですか…？？

「なんで急にそんな話なの？？」

楓ちゃんが私の聞きたかったことをちょうど聞いてくれた。

優香ちゃんはふふんと笑う。

「あのね？合宿っていうのはいつもと違う所にきて少し気分が高まってるときなの。そういうときこそ行動をおこすべきでしょ？」

「行動って、なんですか？」

「ああ、そうか！」

楓ちゃんがはっとしたような声で言う。

え？

何なんですか？？

私、わからないんですけど…

優香ちゃんがはぁと小さなため息をつく。

「だから…明日、詩織が滝沢クンに告白するの！」

「……へっ？」

告白って…

……私が……滝沢サンに……？？

顔が燃えるように熱くなる。

「な、なんでですか！？そんなのしないですよ！」

「でも、こんな機会でもないと詩織ちゃんは滝沢クンに告白したりなんかしないでしょ？」

そ、それはそうですけど…

「で、ですけど…もし告白してですよ？ふられてしまったら…」

もう今までのように接することはできなくなるかもしれません…

それなら私は…

せめて、お友達のままで滝沢サンのそばにいたい…

「何言ってるのよ！ふられるわけないでしょ？」

「えっ？？」

どうして…ですか？

「滝沢クンも詩織ちゃんのことが好きだからだよ」

「滝沢…サン、が？？」

優香ちゃんと楓ちゃんが同時にうなずく。

「だって詩織といるとき、滝沢クンすごく楽しそうだもの！絶対あれは詩織のことが好きだからだよ！」

滝沢サンが…

滝沢サンが、私のことを好きかもしれない…??

そう、なんですか??

で、でも…

「た、たしかに滝沢サンは私のことを好きと言ってくださいましたけど…！」

あのとき、

私が屋上で滝沢サンに無理なお願いをしたとき…

『オレも…好きだよ』

そう言ってくれた。

「友達として、って言われましたし…」

優香ちゃんと楓ちゃんは何も言わなかった。

そしてしばらくしてから優香ちゃんがぽつりと言った。

「詩織、あんた滝沢クンにそんなこと言われてたんだ…」

「…それって、ほとんど告白されたも同然だよね…」

「えっ?どうしてですか??」

だって私は友達として好きって言われただけで…

別に告白とかではないですけど…

「…まぁ、望みはかなりあるんだから！一度告白してみなよ！」

「うん！私達が自由行動の時間、滝沢クンと詩織が2人になるようにしてあげるから！」

「は…はい…」

こく…はく…ですか…

そうですよね…

ただ、気持ちを伝えるだけですもんね…

それに…

少しでも望みがあるというのなら…

伝えてしまっても…

悪くは、ないですよね？

☆8話　合宿☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

この子、鈍感すぎます。
さて、詩織はちゃんと告白することができるのか…？？

★8話　合宿★響ｓｉｄｅ

今日から2日間の合宿が始まる。

正直あまり気がのらない。

だいたい2日間も朝から晩まで団体行動だなんて体力がもたない…

しかも今日の朝だって集合すっげぇ早いし…

6時学校集合ってなんだよ!?

もうちょっと寝かせてくれよ!!

まったく…

学校ってやつは気がきかないもんだな…

集合するとすぐに校長の長い話や諸注意やなんとかをいろいろと聞かされる。

しかもその間、ずっと立ちっぱなし。

…拷問だ、これは。

やっとそれがおわってバスにのりこむ。

…よし、こうなったらバスの中でずっと寝ててやる…

そう決心したとき、オレは肝心なことを忘れてたんだ。

荷物を置いて席に座り窓にもたれて、さぁ寝よう、という態勢をとったとき…

「滝沢サン！今日から2日間、よろしくお願いしますね！」

横から望月の元気いっぱいな声が聞こえてきた。

…そういえば、望月と席隣だったんだ…

「…ああ」

短くそう返事する。

なんでおまえはこんなに早く起きてそんなに元気なんだ??

オレはもう瞼が鉛のように重いって言うのに…

「滝沢サン、大丈夫ですか??元気ないですよ??」

望月は心配そうにそう言ってきた。

「…眠たいんだよ。寝かせてくれ…」

本当に…

もう瞼をあけているのが限界に近いんだよ…

「そ、それは失礼しました！ど、どうぞごゆっくりお眠りください

！」

望月はオレの様子に気がついたのか慌てたようにそう言った。

「そうさせてもらうよ」

そう言ってオレは望月に背をむけた。

寝顔を見られるのはなんか嫌だしな。

…よし、それじゃぁさっそくゆっくりと寝よう…

そう思い瞼を閉じた。

だが…

……寝れない。

いや、眠たくなくなったからじゃなくて、妙に後ろから視線を感じて眠れない。

オレは意を決して振り返ってみた。

思ったとおり、望月が悲しそうな顔でじーっとオレを見ている。

…こんなんで眠れるかっ！！

オレは寝るのをあきらめてまっすぐに座りなおした。

もういい。

今日は絶対に消灯と共に寝てやる…

「どうしたんですか??」

「眠たくなくなった」

オレは嘘をついた。

本当はものすごく眠たい。

本当の本当に目をあけているのがやっとだ。

望月が急にオレに笑いかけた。

普通ならオレがこんなに頑張ってるのに自分だけ笑うなよと思うところだが…

逆にオレは望月の笑顔で少しだけ目が覚めたような気がした。

「…何笑ってんだよ」

「いえ、滝沢サンって優しいなぁと思って」

…なんでそんなことさらっと言えるんだ??

「なんでそうなるんだよ…」

オレは顔をしかめた。

それに…

好きな女に優しくねぇ男なんてどこにいるんだよ…??

まぁ…

そんなこと、死んでもいえねぇけど…

それから目的地につくまで、オレはなんとか目をこじあけて楽しそうに話す望月の相手をしていた。

そして結局一睡もできずに目的地に。

…でも、だんだん目が覚めてきたような気がする。

まず最初の観光場所は『名古屋城』。

バスをおりてガイドについて城の中を見て回る。

…あ、オレ、名古屋城のことならもう知ってるのでバスで待っています。

よっぽどそう言いたかったが楽しそうにしている望月を見逃すのは惜しいのでしぶしぶと付いて回る。

それからバスを乗ったり降りたりしながらいろんなところを回り、

やっとホテルについたときにはもう体力に限界がきていた。

学年主任の伊崎がこれからの指示をだし、やっと各々の部屋に向かう。

男女、班別らしく、オレは中島と橋本と同室だ。

これといって話すこともないので荷物をおいて、さぁ今度こそ寝ようぅ…と思った時、

「なぁ、滝沢！」

橋本に声をかけられた。

…なんでみんなオレを寝かせてくれないんだ。

まぁこいつはどうでもいい奴だし無視してやろうかとも思ったが、明日気まずくなるのもと思いしぶしぶ返事をした。

「…何だよ??」

「おまえってさ、望月ちゃんとキスしたことあるの?」

驚きで完全に目が覚めた。

「はぁ!?」

こいつはいきなり何を言いだすんだ!?

「そんなんするわけねぇだろ!?つき合ってもねぇのに…」

「えっ、つき合ってねぇの!?」

中島が驚いたようにそう言った。

…おまえはいきなり話に入ってくるな…

「へー、おまえ、望月ちゃんと付き合ってねぇの」

橋本がにやりと笑った。

どうもこいつの笑い方はあやしい気がする…

「オレはもういくとこまでいってると思ってたのに…」

そしておまえは何も言うな、中島。

「でもおまえ、望月ちゃんのこと好きなんだろ?」

「…好きじゃねぇよ」

そう言うと、橋本はにやりと笑った。

「んじゃ、オレ何してもいいよな?」

「…どういう意味だよ」

「別に。ただ、望月ちゃんのことといいなって思ってるだけだよ」

こいつ…

望月に手だす気か…！？

橋本はオレの表情を見てにっと笑う。

「なぁ、もうすぐ夕飯だぞ？」

中島の言葉で時計を見るとすでに夕飯の時間がきていた。

「ああ、んじゃはやくいかなくちゃな」

橋本はそう言って立ち上がり、オレの横を通るとき小さく耳打ちした。

「いっとくけどオレは好きなやつにキスもできない臆病者じゃないから」

「……！！」

こいつ…！！

絶対明日望月に手だすつもりだ…！！

いや、明日ともかぎらない。

もしかしたら今日…

そう思うと気が気でなくなる。

オレはそんな気持ちのまま宴会場へ行った。

宴会場にはすでに望月達がきていた。

オレ達はその向い側の席に座る。

橋本が何気なく望月の前に座った。

それだけでオレの心配は大きくなる。

これはずっと見はっとかねぇと…！！

全員がそろったところであいさつをし、食事に手をつける。

オレは一応食事に手をつけるが夢中になる場合ではない。

橋本の行動だけに注意を向け集中する。

「望月ちゃんってすごい幸せそうにご飯食べるよなー！」

橋本が望月に話しかけた。

望月は食べる手を止めた。

「そ、そうですか？？」

「うん。なんか見ててておもしろい」

そう言って橋本はくっくっと笑う。

別におもしろくなんかねーよ！

そんなどうでもいいことで望月に話しかけるな！！

オレはいらいらと天むすに手をつけた。

怒りの気持ちの方が大きくて全然味を感じなかった。

夕飯を食べ終わり、風呂に入った後、オレは橋本と口を聞くことなく布団にもぐりこんだ。

…まさか夜な夜な望月のところに行くとかは…

いや、それはないよな。

それにしてもあいつ…

明日、望月に何するつもりだ…？？

オレは今日、絶対に早く寝ると思っていたつもりが、

望月のことが気になってなかなか眠れなかった。

★8話　合宿★響ｓｉｄｅ（後書き）

中島くん…
話に入れない…
かわいそう…

☆9話　告白☆詩織ｓｉｄｅ

合宿、２日目が始まりました。

２日目は朝食をとったあと、午前９時から午後３時まで自由行動です。

本当に修学旅行みたいでわくわくします。

「詩織！今日はがんばりなよ！」

朝食を食べ終えたあと、優香ちゃんにポンッと背中を叩かれた。

「は、はい…」

そ、そうでした…

今日、私は…

滝沢サンに、告白するんです…

でも、そんなの本当にできるんでしょうか??

私にそんな勇気があるんでしょうか…??

…いいえ、考えているばかりじゃ何も始まりませんよね。

私は軽いため息をついた。

そのとき、

「おい、望月」

後ろから低い声で名前を呼ばれた。

振り返るとすぐそばに滝沢サンの顔。

「た、滝沢サン！？」

今の今まで滝沢サンのことを考えていたので私は驚いて思わず変な声がでてしまった。

「ど、どうしたんですか…？？」

滝沢サンはまわりをキョロキョロと見回し、誰もいないことを確認してから耳元で囁いた。

「今日、オレと2人で行動しよう」

「えっ…！？」

もともと優香ちゃん達に協力してもらって2人になるつもりだったんですが…

まさか滝沢サンから誘われるとは思わなかったのですごくびっくりしてしまいました…

顔がすごく熱くなって、胸がドキドキしてくる。

「い、いいですけど…」

私は滝沢サンに赤くなっている顔がばれないようにうつむいた。

滝沢サン…

どういうつもりでしょうか…??

どうして私も一緒に…

ふと、ある考えが頭に浮かんだ。

もしかして…

滝沢サンも私を…

い、いえ!

そんなわけないです!

絶対にないです!

ただ私と2人の方が気が楽だと思っただけですよね!

私達は…

お友達ですから…

…でも、今日その関係が壊れてしまうかもしれない。

私は、本当に滝沢サンに思いを伝えてもいいんでしょうか…??

そして待ちに待った（?）自由時間。

先生からの話があったあと、私達はとりあえず班で集まりました。

「それじゃ、どうする??」

中島サンがそう言うと優香ちゃんが待ってましたとばかりに手をあげた。

「はいはいはい!私提案なんだけど!」

「何??」

「6人で行動するっていうのも大変だし2人ずつペアを組んで回るってどう??」

優香ちゃん、ナイスですっ!

「いいねー、それ!そうしよう!」

楓ちゃんもにこにこと笑いながら言う。

「わ、私もそれがいいと思います!」

「んー…じゃ、そうしようか」

橋本サンはそう言うと私に笑いかけた。

…??

なんでしょうか…??

「それじゃ、望月ちゃん。オレと組もう!」

「へっ?私…ですか??」

で、でも私は滝沢サンと…

そう思い私は滝沢サンの方を見た。

けど滝沢サンは上の空で目をトロンとさせている。

そしてふらふらとしながら頭を押さえていた。

え…??

どうしたんでしょうか…??

様子が…

おかしい…??

「滝沢サン?大丈夫ですか…??」

滝沢サンは私の声に気がついてくれたようで私の方を見た。

何か言おうとしているのか口を開く。

そしてぐらりと体を傾けるとその場に倒れた。

ドサッと大きな音がする。

「滝沢サンっ!?」

私は滝沢サンにかけよった。

他のみんなも私に続いて滝沢サンにかけよる。

「滝沢サン、滝沢サン!!」

揺さぶってみても滝沢サンは目をあけようとしない。

じわっと涙がにじんできた。

どうしよう…

このまま、滝沢サンが目を覚まさなかったら…

そう思って私は必至で滝沢サンの名前を呼んだ。

「寝てるだけじゃないかな??」

そばで橋本サンがぽつっと言った。

「え…??」

「だって昨日の夜、滝沢全然眠れてなかったみたいだから」

あぁ、そういえば…

昨日もたしか、バスの中で眠たいと言っていましたね…

それなのに…

私が無理やり起こしてしまって…

「寝かせてやっといた方がいいんじゃない??」

「…そうです、ね」

私達はとりあえず滝沢サンを近くの公園に運んでベンチに寝かせた。

「それじゃどうする??このまま滝沢クンをほっておくわけにもいかないし…」

「私、ここで滝沢サンが起きるのを待ってます」

だって私、滝沢サンと一緒に行動するって約束しましたもの。

私、それをずっと楽しみにしてたんですもの。

「だから、みなさんは先に回っててください」

私はそう言ってみんなに笑いかけた。

「…そう、じゃぁ…」

優香ちゃんと楓ちゃんは納得してくれて中島サンと橋本サンを説得してくれた。

「それじゃ後でね！」

そう言ってみんなは私に手をふって公園をでた。

そして、私は滝沢サンと2人きりになる。

私は滝沢サンが眠ってる隣に腰をおろした。

そしてその寝顔を見つめる。

初めのころ、怖くて仕方がなかった鋭い目は閉じられていて長いまつ毛がそれを守っている。

でも眉毛はきりっとしてて、緩んでいない。

口はほんの少し開いていてそこから規則正しい寝息がもれてくる。

何から何まで、完璧だった。

この人は世界で一番きれいな人なんじゃないかな、と思ってしまうくらい。

本当に、きれいな寝顔。

私は滝沢サンの髪に触れてみた。

さらさらしていて、指の間からぱらぱらと落ちていく。

目の端にラベンダーが映った。

顔をあげてみると、まわりにはたくさんの花が咲いている。

…きれいなところですね。

本当に、滝沢サンにぴったりな場所。

「ん…」

滝沢サンの口から声が漏れた。

寝言でしょうか…??

そう思い耳を傾けて、思わず耳を疑った。

「…もち…づき……」

滝沢サンが、寝言で私の名前を呼んだ。

驚いて、その顔を見つめる。

もしかして…

夢の中に、私がいるんですか…??

その私は、滝沢サンに何を言ってるんですか??

どんな表情をしているんですか??

滝沢サンには私って…

どんな風にうつってるんですか…??

そう思って無意識に滝沢サンに顔を近づけたとき、

「望月ちゃん!」

後ろから突然声がした。

「は、はい!?」

ふりむくとそこには橋本サンが立っていた。

「は、橋本サン…??どうしたんですか…??」

「んー…望月ちゃん1人じゃさびしいかな?って思って」

そう言って橋本サンは私に笑いかけた。

「ああ、そうですか…」

私は正直橋本サンに少し腹が立っていた。

もし橋本サンがこなければもう少し滝沢サンと2人で過ごせましたのに…

…でも、せっかく私を心配してきてくださったんですから、そんな

こと言ってはいけないですよね。

「ねぇ、望月ちゃんって滝沢のこと好きなの？？」

橋本サンが唐突に聞いてきた。

「へっ！？」

私は驚いて思わずうろたえてしまう。

「べ、別にそんな…！！」

「オレにはね、好きな人いるよ」

橋本サンはそう言って私に近づいてきた。

「だ、誰ですか…？？」

橋本サンが私のすぐまえにくる。

そしてしゃがんで私と目線を合わせた。

「望月ちゃん」

そう言ってにこっと笑う。

「えっ…？？」

どういうことですか…？？

「オレは望月ちゃんが好きなんだ」

そう言って橋本サンは私の手をつかんでくる。

「やっ…」

抵抗しても、橋本サンはぎゅっと私の手を握り締めて離さない。

「望月ちゃんは滝沢のことが好きかもしれないけど…」

橋本サンの瞳がじっと私を見据える。

焦げ茶色の瞳が私の瞳をとらえて、私は目をそらせない。

「滝沢は望月ちゃんのこと何とも思ってないって言ってたよ?」

ズキッ

胸が締め付けられたように痛くなった。

滝沢サンは…

私のことを何とも思っていない。

そんなこと分かってたはずなのに…

少し、期待していた分、ショックが大きくなる。

「どうせあいつは君のこと、なんとも思っていないんだよ?そんなのずっと好きでいるよりさ、ちゃんと自分を好いてくれている人を

好きになる方がいいんじゃないかな？」

橋本サンの言葉が胸に突き刺さる。

…そうなん、でしょうか…？？

どうせ滝沢サンは私をなんとも思っていないのなら…

それで、苦しい思いをするのなら…

私のことを好きと言ってくれた橋本サンを好きになる方が、いいのでしょうか…？？

それが、私のためにも、滝沢サンのためにもなるんじゃないでしょうか…？？

それなら…

橋本サンの顔がゆっくりと近づいてくる。

私は…

橋本サンを…

「だ、めだ…もち…づき…」

そんな私の考えを、滝沢サンの声が止めた。

たき、ざわ…サン？？

橋本サンの唇が、ほんの数センチにせまっている。

私はそれを拒んで顔をむけた。

そして滝沢サンを見てみる。

私は滝沢サンが目を覚ましたのかと思っていた。

だけど滝沢サンはすやすやと眠ったまま。

ということは…

さっきのは、寝言ですよね…??

「…ごめんなさい。橋本サン」

「えっ??」

滝沢サンが、寝言でまで私の名前を呼んでくれている。

滝沢サンの夢に私がいるかもしれない。

そう思うと、希望が捨てられないんです。

滝沢サンが、もしかしたら私と同じ気持ちかもしれない。

そんな希望を。

「私、やっぱり滝沢サンが好きです」

誰か、人の前ではっきりと言ったのは初めてだった。

それで、あらためて自分の気持ちを確認する。

「目つきがすごく悪くて、いつも仏頂面だけど…」

初めて滝沢サンを見た日。

こんなに頭がいい学校なのに、どうしてこんな人がいるんだろうと驚いた。

これからの高校生活が恐ろしいものになりそうで、心配になった。

「とても頭がよくて…教えるのがとてもうまくて…」

私が無理やりに中間テストの勉強を教えてと頼んだら、本当に丁寧に教えてくれた。

それできっと自分の勉強ができなかったと思うのに、それでもテストはオール満点で…

「不器用だけど、優しくて…」

すごい雨が降っていた日。

滝沢サンと一緒に帰って…

私が濡れるのを気を使って私の方に傘をよせてくれた。

昨日だって…

すごく眠たかったと思うのに、私のために話し相手になってくれた。

「ほんのたまに見せてくれる笑顔は見とれてしまうくらいきれいで…」

誰にも見せたくない。

独り占めしたくなってしまうような笑顔。

きっと、私だけが知っている仕草、癖。

私だけが知っている表情。

全部全部が愛おしい。

「私は、そんな滝沢サンがどういても好きなんです…！！」

お友達なんかじゃ嫌なんです。

それだけじゃ…

ものたりない…

橋本サンはそんな私を見てふっと笑った。

「それ、本人に言わないと伝わんないよ？」

「え…？」

「あーあ、せっかく滝沢の大切なもの、奪ってやろうと思ってたのにな！こんなに滝沢に惚れてるなら無理だわ」

…？？

「どういう…ことですか？？」

「別に。あ、あと滝沢は多分君のことが好きだと思うよ。だから、頑張って」

橋本サンはそう言い残すと行ってしまった。

……どういうことでしょうか？？

「…望月？？」

後ろから、声がした。

振り返ると、滝沢サンが上半身をおこして私の方を見ている。

「あっ…」

滝沢サンの顔を見て、気持ちがこみあげてくる。

私はすぅっと息を吸った。

そしてじっと滝沢サンを見据える。

「…滝沢サン、私、あなたに伝えたいことがあるんです」

一言一言、ちゃんと伝わるようにはっきりと。

もう…

お友達という関係に戻れなくなってもいい。

ただ、あふれだす気持ちを伝えたい。

「私、滝沢サンのことが…」

最後の言葉がでてこない。

大きく息を吸って気持ちを落ち着かせる。

そしてはっきりと言った。

「滝沢サンのことが、好きです」

滝沢サンの目が大きく見開かれる。

私は返事を言われる前に言った。

「返事はいらないんです。その変わり…」

涙が目の中にたまる。

私はそれを必至にこらえた。

「ずっと、思っていてもいいですか…!?」

それだけでいい。

付き合いたいとか、考えているわけじゃないんです。

私はただ、この気持ちを伝えたかっただけですから…

「…良いに決まってるだろ」

しばらくの沈黙の後、滝沢サンがふいに言った。

「…え??」

滝沢サンは真っ赤に染まった顔で私を見た。

「オレもおまえが好きなんだから」

……??

えっ??

よく聞こえませんでした…

「あの、今なんて??」

滝沢サンは真っ赤な顔のまま怒ったように言った。

「だからオレもおまえのことが好きなんだよ!!」

「す…き…??」

本当、なんですか??

滝沢サンも…

私のことが好き…なんですか??

おさえていた涙があふれだした。

次々と、頬を伝って落ちてくる。

「な、なんで泣いてるんだよ!?」

「だ、だってうれしくって…」

滝沢サンが私のことを好きだなんて…

嘘みたいで…

信じられない…

「これって…夢じゃ、ないですよね??」

念のため滝沢サンに尋ねてみると、滝沢サンはふと笑った。

そしてぽんっと私の頭を軽くたたく。

「夢じゃ…ねぇよ」

滝沢サンの笑顔が公園に咲く花々よりも、

とても輝いて見えた。

☆9話　告白☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

ついにくっつきましたー！！
そして妙に長くなってしまった文章…
多分響ｓｉｄｅは短くなると思います…（ー＿ー；）

★9話　告白★響ｓｉｄｅ

合宿2日目の朝。

寝不足がかなりひどい。

なぜかというと、結局昨日の夜はまったく熟睡できなかったからだ。

夢の中でまで橋本が望月にちょっかいだすもんだから…

…全部あいつのせいだ。

オレは隣で元気いっぱいに朝飯を食べている橋本を恨めし気に見た。

だけど、今日は寝不足だからって気をぬくことはできない。

いつあいつが望月に手をだそうとするかわからないからな。

とりあえず…

今日一日頑張れば、今日の夜は思いきり眠れる…

だけど今日一日もそんなに頑張れるか??

そう考えたとき、睡魔で極限状態に達していた脳がふと名案を導き出した。

そ、そうだ!

今日一日、望月と2人で行動しておけばいいんだ！

そうすれば橋本も望月に近づけないはず…

もし近づいたとしても、オレはすぐ近くにいるんだから変なことはできないはずだ！

さすが…

人間は極限状態に陥った方がかしこくなるというのはこのことか。

オレはさっそく部屋に戻ろうとしている望月を呼びとめた。

「おい、望月」

望月は振り返ってかなり驚いた顔をした。

「た、滝沢サン！？」

変な声でそういう。

…？？

何かオレが話しかけたらおかしかったか…？？

「ど、どうしたんですか…？？」

オレは近くに橋本がいないかすばやく確認した。

そして望月の耳元でいう。

「今日、オレと2人で行動しよう」

「えっ…！？」

望月が目を見開く。

…いきなりそんなこと言われても驚くか？？

だけど、これはおまえを橋本から守るためなんだ。

望月は少し間をおいてからうつむいて言った。

「い、いいですけど…」

…よし。

これでとりあえず一日中気をはってなくていい。

橋本達から離れたところにいればいいだけだ。

…よっぽど安心できそうなら、そこで寝れるかもしれない。

オレ、本当に名案考えたな。

そう自分をほめながらオレは部屋に戻った。

「なぁ、滝沢」

自由時間が始まる前、担任達がいろいろと注意を言っているときにこそっと橋本が話しかけてきた。

「…なんだよ」

「これ、やるよ」

そう言って橋本はオレに小さな飴を手わたしてきた。

「…いらねぇよ」

「いいからもらっとけって！」

橋本はそう言って強引にオレの手の中に飴玉を押しこむ。

そして食べろ食べろという目でオレを見てきた。

どんだけオレにこれ食べさせたいんだよ…

オレは軽いため息をついてその飴玉を口にいれた。

苦い、変な味がする。

オレは思わずそれを吐いた。

「ぺっ！な、なんだよ！？これすっげぇまず……」

急に強い眠気が襲ってきた。

「なんだ…これ…??」

橋本が勝ち誇ったような顔でオレを見てくる。

「軽い睡眠薬だよ。オレが飴玉状に改良したものだけど」

す、睡眠薬…??

どういうつもりだ…??

「おまえもともと眠たそうにしてただろ?ならほんのちょっとなめただけでもすっげぇ聞くと思うぜ?」

橋本の言うことは本当だった。

睡魔が恐ろしくひどくなり、体に力が入らない。

瞼がなまりのように重くのしかかってくる。

「お前…なんでそこまで…」

「別に。なんでもいいからおまえのものを奪ってやりたいだけだよ」

視界がぐらぐらする。

だけどなんとか気力で目をこじあけた。

眠ってしまうわけにはいかない。

それではこいつの思うままだ。

「おまえはたった3ヶ月ちょっとの間でオレからいろんな物を奪っていった。その復讐がしたいだけさ」

は…??

別にオレはおまえのものなんて何も奪った覚えはない…

だけど言葉にならなかった。

目をあけるのに精いっぱいでそこまでに神経がまわらない。

やっと担任達の諸注意が終わり、班で集まった。

いろいろと話している声は聞こえるが何を話しているかまでは聞こえない。

立っていることでさえ辛い。

頭から体中に眠れという信号をだしている。

「滝沢サン?大丈夫ですか…??」

ふいに望月の心配そうな声だけがはっきりと聞こえた。

望月…!

橋本に近づくな…!!

そう伝えようと口を開いた。

だけど言葉がでてこない。

そして同時に気力にも限界がきた。

ぐらっと体が傾く。

そしてオレの意識はそこでとぎれた。

…ここはどこだろう??

≪滝沢サン≫

望月の声がした。

望月…??

目を開けると目の前に笑ってオレを見ている望月がいた。

≪私、橋本サンと付き合うことになったんです≫

急に、望月の隣に橋本の姿が現れた。

はっ!?

なんだよ、それ!!

橋本はにっとオレに向かって嫌な笑顔を向けると、望月の手を押さえた。

≪いっとくけどオレは好きなやつにキスもできない臆病者じゃないから≫

橋本の声が響いてくる。

そう言って望月に顔を近づけていく。

望月はそれに答えるかのように目を閉じた。

ダメだ…

望月…！

やめろ！！！！

突然望月が首を横にふった。

すると橋本の姿が消える。

そしてオレの方を見た。

≪私は滝沢サンのことが…≫

そこで、夢はとぎれた。

眩しい光が目の中に飛び込んでくる。

ここは…??

起き上がってみると、そこはベンチの上だった。

そして目の前に見なれた後ろ姿がある。

「…望月??」

オレが名前を呼ぶと、望月は振り返った。

「あっ…」

そして小さな声を漏らす。

望月はなぜかすぅっと大きく息をすった。

そしてじっとオレを見据える。

ドキッ

心臓が高く鳴る。

「…滝沢サン、私、あなたに伝えたいことがあるんです」

あまりに真剣な望月の声と表情にオレは小さな期待を抱いた。

もしかして…

…いや、それはない。

……けど、本当にもしかすると…

「私、滝沢サンのことが…」

望月はそこで言葉をつまらせる。

オレは全身を耳にして望月の言葉を待った。

小さな小さな期待を抱きながら。

心臓はさっきからドキドキと早鐘のように鳴り響いている。

なんとなく病気の宣告を受ける患者の気分だった。

望月はまた大きく息を吸うと、はっきりといった。

「滝沢サンのことが、好きです」

予感が、的中した。

嘘…だろ…??

オレが口を開くまえに望月は慌てたように言った。

「返事はいらないんです。その変わり…」

望月の瞳に涙が光って見える。

だけど望月はそれをこぼそうとせずに言った。

「ずっと、思っていてもいいですか…！？」

…ずっと、思っていてもいいかって…？？

そんなの…

「…良いに決まってるだろ」

「…え？？」

望月がきょとんとオレを見る。

今から言おうとしている言葉を考えるだけで、顔が燃えるように熱くなる。

やっぱり言わないでおこうか…

…だけどせっかく望月がすっげぇ勇気出して言ってくれたんだ。

オレも、負けてられない。

「オレもおまえが好きなんだから」

望月の目が大きく見開かれる。

しばらくの間を置いて、望月は恐る恐る聞いてきた。

「あの、今なんて？？」

…何回も言わせるなよ…！！

「だからオレもおまえのことが好きなんだよ！！」

やけになって怒鳴るように言った。

「す…き…？？」

望月がオレの言葉を繰り返す。

そして急にぽろぽろと涙をこぼし始めた。

「な、なんで泣いてるんだよ！？」

急に泣かれても調子狂うだろ！？

「だ、だってうれしくって…」

望月は嗚咽しながら言った。

「これって…夢じゃ、ないですよね？？」

望月がふいにそう聞いてきた。

オレは少し笑って、ぽんっと望月の頭を叩く。

「夢じゃ…ねぇよ」

ふと、視界に咲き乱れるラベンダーが映った。

たしか…

ラベンダーの花言葉は…

清潔、優美…

…こいつにぴったりの花だな。

だけど…

絶対こいつの方がきれいだ。

そう思ってオレは小さな笑顔をうかべた。

★9話　告白★響ｓｉｄｅ（後書き）

眠たかったので文が適当に…
そして多分詩織ｓｉｄｅの半分程度しかありません（－＿－；）
あと、響がラベンダーの花言葉知ってたのはただ単純にかしこいだけだからですからねっ！

☆１０話　意味☆詩織ｓｉｄｅ

合宿が終わって、次の朝。

私は教室の扉を開けられずにいた。

…なぜ、ですって??

それはもちろん…

滝沢サンと…

顔を、合わせ辛いからですよ…

だって昨日、私は滝沢サンに告白して…

そして滝沢サンも…

昨日のことを思い出すだけで顔が熱くなる。

こんなので、普通に顔を合わせられるわけありません…

でも、いつまでたっても扉をあけないでいると遅刻になってしまいますよね…

……ええい！

もういいです！

どうせいつかは顔を合わせないといけないんですからっ！

そう思って意を決して扉をあけようとしたとき…

「望月…？？」

後ろで低い声がした。

こ、この声は…

「た、滝沢サン…」

振り返った先にいたのはちょうど、昨日両想いになったばかりの人。

まだ顔を見る準備ができていなかった私は、ふいに視界に入ったその姿に思わず顔が沸騰するほど熱くなる。

「あ…！お、おはようございますッ！！」

私はぺこりと頭を深く下げた。

「…おはよ」

滝沢サンは私の方を見ずに言った。

その顔が少し朱色に染まっている。

あ…

滝沢サンも、私と同じ気持ちなんですね…

そう思うとなんだか安心できた。

「あの…滝沢サン…」

「なんだよ?」

えっと…

こんなこと聞いていいのやら…

で、でも一応聞いておきたいですし…

「あ、あの、私達って…」

やっぱり恥ずかしくて口に出せない。

で、ですけど…

もし、私の勘違いだったら余計に恥ずかしいですし…

私は意を決して、小さな声で言った。

「…お付き合い、していることになるんですよね??」

滝沢サンの顔が真っ赤になる。

そして一息ほど間を置いてボソッと言った。

「…そうじゃねぇの??」

その一言で、昨日のことは夢だったんじゃないかという不安が一気にけし飛ぶ。

私はほっと安堵の息をもらした。

「…そうですよね！」

そしてにこっと滝沢サンに笑いかける。

そして素直な気持ちを言葉にした。

「私、滝沢サンとお付き合いできるなんて、本当に夢みたいです…本当に…すごくうれしいです」

でもこれは…

夢じゃ、ないんですよね…！！

「オレも…」

滝沢サンが何かを言いかけた時、

「詩織ちゃーん！おっはよー！！」

元気な声がして背中をぽんっと叩かれた。

ふりむくと満面の笑顔をうかべている楓ちゃん。

「何朝から教室の前でいちゃついてるのよ！」

その後ろから優香ちゃんがきた。

「楓ちゃん…優香ちゃん…えっと、おはようございます」

私は軽く頭をさげる。

「朝から熱いねー！！」

楓ちゃんがパタパタと手で扇ぐマネをした。

「ほんと、朝っぱらからこんなとこで何してんのよー！」

「い、いえ…別にそんな…」

私は困って滝沢サンの方を見た。

だけど…

「あれ？滝沢サン？？」

さっきまで滝沢サンが立っていた場所にはすでに誰もいなかった。

「滝沢クンなら私達を見た瞬間教室に入ってったよ？？」

楓ちゃんがきょとんとした顔で言う。

な、なんて行動が速いんでしょう……

「それよりも、私達も早く教室入った方がいいんじゃないの？？」

優香ちゃんが時計を指差して言った。

あと1分くらいでホームルームが始まる時間。

「は、早くいってください！！」

私達は急いで教室に飛び込んだ。

「でもですね…具体的にお付き合いするって言っても、何をすればいいんですか??」

2時限目の休み時間。

私は優香ちゃんと楓ちゃんにふと気になったことを尋ねてみた。

「そりゃぁ…一緒に昼ご飯食べたり、一緒に帰ったりすればいいんじゃないの??」

「えっと…そのへんは一通りやったと思いますよ?」

だってたまにお昼ご飯を一緒に食べてたこともありましたし…

何度か一緒に帰らせていただいたこともありますし…

「そもそもお付き合いをするって…意味あるんですか??」

私、まずそこから気になるんですけど…

さっきはただその言葉だけがうれしかったので、何も思いませんでしたが…

よく考えてみると、お付き合いってどういう意味があるんでしょうか??

「それって…根本的なことだよね…」

楓ちゃんが首をかしげる。

「そんなの決まってるじゃない。一緒にいたいから付き合うんでしょ?違うの??」

優香ちゃんがあきれたように言った。

…一緒にいたいから、ですか。

ですが、別にお付き合いしていなくても私はよく滝沢サンと一緒にいたような気がしますけど…

「やっぱり…よく、わからないです…」

お付き合いをするって…

どういうことなのでしょうか??

「滝沢サンは、お付き合いするってどういうことだと思いますか?

？」

お昼の時間。

私は滝沢サンと屋上で昼食をとっていた。

「なんだよ…いきなり…」

そう言って滝沢サンは怪訝な顔をする。

「いえ、ふと気になってしまって…」

私は滝沢サンとお付き合いする意味があるのかって…

そんなこと思うのって、おかしいですか…？？

「…印」

滝沢サンがぽつりと言った。

「えっ？？」

意味が分からなくて聞き返してみる。

「印なんじゃねぇの？？」

し…る…し…？？

「どういう意味ですか？？」

滝沢サンは首を軽く傾げながら言った。

「なんて言ったらいいのかわかんねぇけど…ただ一緒にいるだけだったら他の奴に手だされても何も言えない。だけど『付き合ってる』って言うんなら他の奴は簡単には手だせなくなるだろ?」

…??

いまいち意味がうまく理解できませんが…

「だから…簡単に言ったら『自分のだから触れるな』っていう印なんだよ」

……え??

それってつまり…

…滝沢サンが、私に対してそう思ってくれているってことなんですか??…

「そ、そうなんですか…」

私はうつむきながら答えた。

顔が少し熱くなる。

そんな私を見て、滝沢サンは自分がどんなことを言ったのか気づいたらしい。

顔を真っ赤にして首をふった。

「い、いや！別にオレがそう思ってるわけじゃねぇぞ！？他の奴だとそう思うかなと思っただけだ！」

「は、はい…」

私達はそれから2人とも黙り込んでしまった。

黙々と、お昼ご飯を口に運ぶ。

ドキドキしすぎて、味がわからなかった。

…『自分のだから触れるな』という印、ですか。

もしお付き合いするという意味がそうなら、私にとっては好都合です。

だって…

私は、他の誰にも滝沢サンに触れて欲しくないですから。

ひゅぅっと屋上に優しい風が吹いた。

暖かくて、肌に心地いい。

隣を見ると、滝沢サンの髪が風になびいている。

そのとき、

私はふと思った。

…お付き合いすることに、意味なんてないんじゃないでしょうか??

だって…

ただ、同じ時を共有する。

前までは友達だと思ってしていたこと。

それが、好き合っている人とすることに変わっただけ。

『お付き合い』という言葉は、その変化を表すただの飾りなんじゃないでしょうか??

私は今、

滝沢サンと同じ時を過ごしている。

滝沢サンと同じ風を浴びている。

何も話せない沈黙でさえ…

滝沢サンの私への気持ちを浴びているようで、とても心地いい。

特別なことなんていらない。

私は滝沢サンと一緒にいられるだけで幸せなんです。

そしてこの日々が、

私達の気持ちが変わらないかぎり、ずっと続いていく…

それって、とても幸せなことですよね？

☆１０話　意味☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

話思いつかなかったのでかなり適当です…（－＿－；）
意味分からないですよね…
すいません＞ｍ（＿）ｍ＜
しかもすごく短い（汗

★10話　意味★響side

次の日の朝。

オレはいつもの時間、いつものように学校に登校する。

いつもと変わらないようで、

少し、違う。

オレの頭の中には昨日の望月の言葉が何度も繰り返されていた。

…『滝沢サンのことが、好きです』…

頬が熱を帯びる。

そうだよ…

オレ、昨日望月に告られたんだ。

そしてオレも望月に告白して……

まぁあのときは勢いもあったんだが…

……どんな顔して望月に会えばいいんだ??

いつものようには顔合わせられねぇよな……??

考えているうちに、いつのまにか学校が見えてくる。

…まぁ、話しかけられたら話せばいいだろ。

とりあえずそう片づけてオレは校舎に入った。

そして教室の前まできて、ピタリと足が止まる。

「望月…??」

教室の扉の前に望月が立っていた。

何してんだ?あいつ。

「た、滝沢サン…」

望月は振り返ると、顔を真っ赤にさせた。

「あ…!お、おはようございますッ!!」

慌てたような声でそう言うと深く頭を下げる。

「…おはよ」

オレは望月の方を見ずに返事した。

まだ望月と顔を合わせる用意をしていなかったので、顔が熱くなっている。

あぁ…

だめだ。

こいつと話すと調子狂う…

「あの…滝沢サン…」

「なんだよ?」

「あ、あの、私達って…」

望月はためらいがちにそう言って、口をつぐんだ。

口を開きかけたと思うと、また閉じる。

何が言いたいんだ??

そう思って少しいらいらしかけていたとき、

「…お付き合い、していることになるんですよね??」

望月が小さな声で言った。

予想していなかった言葉に思わず顔が火がついたように熱くなる。

はっ??

ち、違うのか…??

オレ、両想いだったら普通そのまま付き合うことになるって思ってたんだけど…

「…そうじゃねぇの??」

さっきまで不安げだった望月の表情が一気に明るくなる。

望月はほっと息をついて言った。

「…そうですよね！」

そしてオレににこりと笑いかける。

ドキッ

ふいに向けられた笑顔に心臓がひと際強く鳴る。

「私、滝沢サンとお付き合いできるなんて、本当に夢みたいです…本当に…すごくうれしいです」

望月はにっこりと笑いながらそう言った。

こいつは…

なんでこんな恥ずいセリフを普通に言えるんだ…

けど、

それだけ望月がオレのことを想ってくれているんだと思うとうれしかった。

…まぁ、たまにはオレも素直に言ってもいいかもな。

「オレも…」

そうオレが口を開きかけた時…

「詩織ちゃーん！おっはよー！！」

中川がぽんっと望月の背中を叩いた。

「何朝から教室の前でいちゃついてるのよ！」

その後ろから鳥山がにやにやとしながらこっちにくる。

げっ…

オレ、こいつら苦手だ…

それに絶対にひやかされる…

そう思い、オレは望月達に気づかれないようにそっと教室に入った。

「なぁ、おまえと望月ちゃんって結局どうなったの？？」

休み時間。

急に橋本が話しかけてきた。

こいつ…

なんで何もなかったような表情でオレに話しかけられるんだ??

オレは合宿のときにこいつにされた仕打ちを思い返してみた。

たしか…

望月に手だすみたいなこと言ってさんざんオレに神経使わせてくれたよな…

しかも人に如何わしい睡眠薬入りの飴なめさせるし…

思い出すだけで腹が立ってくる。

…無視だ、無視。

オレはそう思い無視を決め込む。

「…なんだよ。せっかく人がちょっと反省してお詫びにおまえらを応援してやろうと思ってるのに…」

おまえなんかに応援してもらわなくても結構だ。

だいたいオレはこいつに復讐されるようなことは何もしてないはずなのに、勝手に恨まれてたし…

こいつとはかかわらない方がいい気がする…

「はぁ…分かったよ。んじゃとりあえずオレからアドバイスをしといてやる」

橋本はため息をついて言った。

「…アドバイス??」

少し気になり、思わず口を開く。

橋本はオレがしゃべったのに満足したようで得意気な顔で言った。

「付き合ってるってことは印みたいなのにもなるんだぜ??」

「は?印??」

印って…

どういう意味だ??

「だから、望月ちゃんはオレのだから気安くしゃべったりすんな!って言う印だよ!」

「そ、そうなのか…??」

な、なるほど。

たしかに普通人の彼女には手ださないよな…??

へぇ…

それって結構便利だな。

「…まぁ、それでも手だすやつは手だすけど」

そう言って橋本はにやりと笑う。

こいつ…

まだ、あきらめてないな…

「おまえには絶対無理だよ」

オレはそっけなく言った。

「は?何が??」

そうやってとぼけて裏ではまた望月をくどこうとするつもりかしらねぇが…

オレが絶対、望月におまえの方が良いなんて思わせないようにするからな。

「いや、別に?」

オレは橋本に向かってにやりと笑った。

昼休み。

オレは屋上で望月と並んで昼飯を食べていた。

「滝沢サンは、お付き合いするってどういうことだと思いますか？？」

急に望月が真剣な顔で変なことを言いだす。

「なんだよ…いきなり…」

こいつ、たまにわけわかんねぇところあるよな。

…まぁ、そんなとこもいいんだけど。

「いえ、ふと気になってしまって…」

望月はなぜか本当に深刻な表情だ。

これはやっぱりオレも真剣に考えた方がいいのか…？？

けど、付き合うってどういうことだと言われてもな…

考えてみたところで、ふとさっきの橋本との話を思い出した。

「…印」

たしか、そんな話だったと思う…

「えっ？？」

望月が聞き返してくる。

「印なんじゃねぇの？？」

自分が所有してるって証…

そう言うことだよな…？？

「どういう意味ですか？？」

どういう意味って聞かれても、なぁ…

「なんて言ったらいいのかわかんねぇけど…ただ一緒にいるだけだったら他の奴に手だされても何も言えない。だけど『付き合ってる』って言うんなら他の奴は簡単には手だせなくなるだろ？」

自分で言って、その言葉にあらためて納得する。

だけど望月はまだ納得できていないような顔だ。

「だから…簡単に言ったら『自分のだから触れるな』っていう印なんだよ」

この言い方なら分かりやすいか？？

望月は少し目を見開いた。

「そ、そうなんですか…」

そして小さな声でそう言ってうつむく。

その顔が少し赤くなっているように見えた。

？？

なんでこいつこんなに照れてるんだ？？

理由を考えてみて、すぐに気がついた。

ま、待てよ…？？

さっきオレが言ったことって、まるでオレが他の奴に望月に触れて欲しくないって言ってるみたいじゃねぇか！！

顔が熱くなってくる。

「い、いや！別にオレがそう思ってるわけじゃねぇぞ！？他の奴だとそう思うかなと思っただけだ！」

オレは慌てて弁解した。

「は、はい…」

望月が頬を染めたまま言う。

あー…

絶対説得力ねぇな…

それからオレ達は何も話さず、沈黙が続いた。

…まぁ、別に思ってないわけではないけど。

そう思い、横目で望月を見た。

まだ少し頬を染めたまま、小さな口に一生懸命飯をつめこんでいる。

その動作一つが愛らしい。

オレ、他の奴が望月に触れるなんて絶対に許せねぇ。

それ以前に、望月が他の男と話すことにさえいらいらとするかもしれない。

そう考えている自分に驚いた。

…オレ、いつの間にこんなに望月のことが好きになってたんだろう??

最初は苦手な奴って思ってたのに…

いつの間に『苦手』が『好き』に変わったんだろう??

…まぁ、いいか。

そんなことはどうだっていいんだ。

今、隣に望月がいる。

それだけでいいじゃないか。

オレはそう思って小さな笑顔をうかべた。

★10話　意味★響ｓｉｄｅ（後書き）

橋本さん、なんかでてきました。
…他に使う人がいなかったので…

☆11話　変化☆詩織ｓｉｄｅ

7月になりました。

もうすぐ夏休みです！！

ですけどその前に…

期末テストがあります…

「私、テスト大丈夫でしょうか…？？」

今回は中間テストのときと違ってテスト間近ってわけでもないんですけど…

どう勉強すればいいのかわかりませんからねー…

「…オレ、教えてやろうか？？」

隣で滝沢サンコンビニのおにぎりの包装をめくりながら言った。

今はお昼休み。

いつの間にか屋上で滝沢サンと昼食を食べることが日常になっている。

「えっ！？いいんですか！？」

「だっておまえ、1人で勉強したら絶対赤点とるだろ？」

そ、それはそうですけど…

そんなにはっきり言わないで欲しいです…

「…そうですけど。私、中学の時は学年でも常に成績上位の方だったんですよ??」

平均も９０を下まわったことはなかったんですから!!

「おまえの中学とこの高校は違うんだよ」

そう言って滝沢サンはふふんと笑った。

む……

なんとなく頭にきますね…

でも、滝沢サンの言うとおり私は教えてもらわないと、とても平均分とれないと思いますし…

「…わかりましたよ。教えてもらってあげます」

少し上から目線で言ってみる。

すると滝沢サンは意地悪く笑いながら言った。

「別に教えて欲しくないなら教えなくてもいいんだけど」

「す、すいません!教えてください!」

私はぺこりと頭を下げる。

「仕方ねぇなー。んじゃ、教えてやるよ」

滝沢サンはそう言って笑った。

ドキッと胸が高く鳴る。

滝沢サンとお付き合いしてから2週間程がたつのに、まだこの笑顔になれることはできない。

「それじゃ今回はどこで勉強するんですか??」

「中間のときのとこでいいだろ」

そういうことで、私達はまた駅前のフレンドリーで勉強することにした。

そしてその日の放課後。

「満…席、ですか」

私達はフレンドリーの前でぼうぜんと立ち尽くしていた。

どうやら何かの団体さんがきているらしい。

もし席が開いたとしてもとても勉強できる状態じゃなかった。

「…どうします??」

今日は止めにしてまた別の日にあらためてした方がいいのでしょうか…??

滝沢サンは少し首をかしげた。

そしてふと思い当ったような顔をする。

「そうだ、オレんち来る??」

「え??」

滝沢サンの…家ですか??

「で、でもご両親の方がいるんじゃ…」

「大丈夫だよ。うちの母親、そういうの全然気にしないから」

滝沢サンのお母様は気にしないかもしれませんが…

私が気にしますよ…

だって…

「でも…やっぱり若い男女が一つの部屋の中で2人きりというのは…」

滝沢サンの顔が赤く染まる。

「な、何もしねぇよ！！だいたい親もいることはいるんだからな！？」

「そ、そうですよね！！それじゃそうしましょう！！」

そうして私達はとりあえず滝沢サンのお家に行くことにした。

滝沢サンのお家は私が降りる駅の一つ向こう側の駅のすぐそばだった。

「んじゃ、一応オレ母親に一言言ってくるから」

「は、はい…」

そう言って滝沢サンは先に入って行ってしまった。

心臓がドキドキしてくる。

私…緊張してます。

だって男の子の家に入るのは初めてですから…

しかもそれが好きな人の家だなんて…

…とりあえず滝沢サンのお母様に気にいってもらえるようにがんばりますっ！

「望月、入っていいぞ」

「は、はい！」

滝沢サンに呼ばれて、私は滝沢サンの家に足を踏み入れた。

「お邪魔…します」

一言そう言って玄関にあがる。

すると奥から誰かがでてきた。

「まぁ！すごく可愛い子じゃない！」

その人は私をまじまじと見ながらそう言う。

滝沢サンの…お母様ですよね…？？

私はじっとその人を見て見た。

すごく…きれい…

垂れ目で優しそうな目。

筋の通った鼻に小さな口。

美人というより可愛らしい、優しそうな人。

「あ、あの…はじめまして。望月詩織といいます」

私はとりあえずぺこりとお辞儀した。

滝沢サンのお母様は私を見てにっこりと笑う。

「あら、しかも礼儀正しいのね！響、いい彼女じゃない！」

「…望月、オレの部屋上だから」

滝沢サンはお母様を無視して階段を指差す。

お母様は怒ったように腕を組んだ。

「もー、本当に愛想がないんだから！詩織ちゃん、こんな子だけどよろしくね？」

「は、はい…」

私は苦笑いしてお母様に小さく頭を下げる。

そして滝沢サンについて二階へあがった。

「入って」

滝沢サンに言われて私は滝沢サンの部屋のドアをくぐる。

私は普通男の子の部屋はすごく汚いのを想像していたんですけど…

滝沢サンの部屋はとてもきれいに片付いていた。

「わぁ…きれいですね」

思わずそうつぶやく。

「そうか？あっ、適当に座っててていいから」

滝沢サンはそう言って自分の机をさぐりだした。

えっと…

そう言われましても…

どこに座ればいいんでしょうか…？？

部屋の中を見回してみると端にベッドがあった。

とりあえずそこに腰をおろす。

それにしても毛布までピシッとのばされていますねー…

滝沢サンはＡ型なんでしょうか？？

私はぼんやりとそんなことを考えていた。

「望月！」

ふいに名前を呼ばれて私は我に帰った。

「は…」

返事をしようとして、思わず息をのむ。

「何ぼーっとしてんだよ」

滝沢サンの顔が目の前にあった。

「た、滝沢サ…！！」

驚いた拍子に体が後ろにのけぞる。

私は思わず滝沢サンの腕を掴んだ。

そしてそのまま背中からベッドに倒れこむ。

痛…

くないですね。

ベッドに座ってて良かったです…

「す、すいません。滝…」

驚きで思わず言葉をのみこむ。

顔が熱くなった。

「へ……？？」

滝沢サンの顔がすぐ鼻の先にある。

滝沢サンの目が見開かれ、黒い瞳に私が映る。

滝沢サンの息がかかる。

心臓がドキドキと早鐘のように鳴り響く。

「な……」

滝沢サンの顔がみるみると赤く染まっていく。

そして慌てて私から離れた。

「……」

「……」

沈黙が私達を包む。

心臓がまだドキドキと鳴っていた。

び…

びっくりしました…

滝沢サンの顔があんなすぐ近くに…

顔の熱がなかなか引かない。

沈黙がやけに気まずかった。

「あ、あの…すいません…」

私が小さな声でそれを破ると、滝沢サンはちらっと私の方を見てすぐに視線をそらした。

「別に…それより、準備できたぞ」

へ…??

準備、ですか…??

一瞬頭を悩ませてはっと気がつく。

そ、そうでした。

勉強するつもりだったんですよね…!!

「は、はい!」

私は慌てて返事をした。

滝沢サンにうながされて滝沢サンの勉強机に座る。

私は鞄からシャーペンとノートと教科書を出した。

「んじゃ、一応テスト範囲確認するけど…」

私のすぐそばに滝沢サンがいる。

さっきのこともあってか、それだけで私の心臓はドキドキと鳴り響いていた。

滝沢サンは教科書を指差していろいろと説明してくれているのに、緊張しすぎて全く頭に入らない。

…全然勉強になりません。

滝沢サンはどうしてそんなに淡々と話せるんでしょうか…??

そう思ってちらりと滝沢サンの方を見てみると滝沢サンの頬も赤く染まっていた。

それを見て、なぜか少し安心する。

滝沢サンの心臓も私と同じようになり響いているんでしょうか??

私のように緊張しているんでしょうか??

…それでも、滝沢サンは私に勉強を教えてくれているんですよね。

それなのに私ったら全然集中できていなくて…

…よし!

私も頑張って勉強に集中します!

勉強のことだけを考えていたらこんなにも緊張しませんよね…??

そう思い、集中して滝沢サンの説明に耳を傾ける。

だけど、滝沢サンの声を聞くだけですぐに集中が途切れてしまう。

結局その日は全く教えられたことが頭に残らず終わってしまった。

うちに帰って、滝沢サンに教えてもらったところを復習してみる。

だけど思い出すのは低い、魅力的な声だけ。

私は勉強するのをあきらめてベッドに倒れこんだ。

…魅力的、ですか。

目を閉じると、ほんのすぐ近くで見た滝沢サンの顔が浮かんだ。

心臓の鼓動が速くなり、顔が熱くなる。

…私にとっては滝沢サンの何もかもが魅力的です。

滝沢サンの短い黒髪も、

滝沢サンのきっとした目も、真っ黒な瞳も、

滝沢サンの低い声も、仕草も、行動も、

癖も、話し方も、私に向けてくれる優しい表情も、すごくきれいな笑顔も、

全部全部、魅力的なんです…

そんな滝沢サンが私なんかを好きと言ってくれて、私のために時間をさいて勉強を教えてくださった。

それなのに…

私は何をしているんでしょうか…??

私はベッドから飛び起きた。

そして机に向かう。

…やっぱり、私は自分の力で勉強します！

滝沢サンに教えてもらってたら迷惑ですし、何より余計に集中できません！

私はそれから滝沢サンの力を借りずに勉強してみた。

滝沢サンには絶対に赤点をとると言われましたけど…

私だってやればできますし、何より滝沢サンに教えてもらってた方が赤点をとってしまいます。

私はもう、受験に望むような感じで勉強しました。

もちろん夜は一日おきで徹夜です！！

そしてその結果は…

「平均…７５です！」

学年平均が６２。

ものすごくいい点数です！

「おまえ…カンニングしたのか…？？」

私が自信満々で点数を言うと、滝沢サンは怪訝な顔でそう言った。

な、なんですか！？

その反応は！？

「そんなことするわけないでしょう！？実力です！実力！！」

私がむきになってそう言うと滝沢サンはくっくっと笑った。

「分かってるって。頑張ったな」

最後の一言で、苛立ちが冷水をあびたかのように静まる。

…滝沢サンはずるいです。

優しいことといったらなんでも許されると思ってたら大間違いですよ？？

だけど、私はふと思った。

滝沢サン…

少し明るくなった気がします。

入学当初は人を寄せ付けないようなオーラをだしてたのに…

今はからかったりもしてくれるし、よく笑ってくれる。

すごい自惚れかもしれませんが…

それが、私の影響だとしたら…

そう思うと、自然に笑顔になった。

☆１１話　変化☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

更新遅くなってすいません＞ｍ（＿＿）ｍ＜
しかもすごく適当な話です；
魅力的って使いたかっただけなんですよねー（－＿－；）

★11話　変化★響side

7月になった。

6月はまだ涼しい風が吹いていた屋上にも今では生暖かい風が吹く。

「私、テスト大丈夫でしょうか…??」

隣にいた望月がぽつりと言った。

あぁ、そういえばもうすぐ期末か…

たしか中間のときはオレが教えたんだよな…

こいつもの覚え悪いから教える方も苦労したもんだ…

…そんなやつが1人で勉強して赤点をまぬがれることができるのか?

オレの頭の中ですぐに絶対できないという結論にたどりついた。

「…オレ、教えてやろうか??」

「えっ!?いいんですか!?」

望月の表情がぱぁぁっと輝く。

「だっておまえ、1人で勉強したら絶対赤点とるだろ?」

オレがちょっとした嫌味を言ってみると望月は少しむっとしたよう

な表情をした。

「…そうですけど。私、中学の時は学年でも常に成績上位の方だったんですよ??」

へぇ…

あんなにものの覚えが悪い望月でも上位だったのか…

それはそれは結構低めな学校なんだろうな。

いや、でもここに合格できたってことは以外とかしこいのか?

まぁ、それでもギリギリ合格だろ。

「おまえの中学とこの高校は違うんだよ」

オレは鼻で笑ってそう言った。

望月がますますむっとした表情になる。

そしてふんっと首を横に振った。

「…わかりましたよ。教えてもらってあげます」

なんで上から目線なんだよ?

別にオレはおまえに勉強を教えたいわけじゃないんだぜ?

そんな風に言われてまで教えたくねーなー?

「別に教えて欲しくないなら教えなくてもいいんだけど」

オレが意地悪く笑ってそう言うと望月の表情が悲しそうな表情に変った。

「す、すいません！教えてください！」

そしてオレにぺこりと頭をさげる。

…本当にこいつだけは表情がころころと変わっておもしれーな。

「仕方ねぇなー。んじゃ、教えてやるよ」

オレはそう言って笑った。

「それじゃ今回はどこで勉強するんですか？？」

「中間のときのとこでいいだろ」

また他のとこでやるってなったら決めるの面倒だしな。

ということでオレ達は今日の放課後から勉強会（？）をすることになった。

「満…席、ですか」

望月が呆然と言う。

今望月が言ったとおり、フレンドリーは満席状態だった。

どうやら何かの団体がきているらしい。

これではとても勉強できる状態じゃない。

「…どうします??」

望月が不安気な顔でオレを見る。

どうしますって言われてもな…

オレは少し首をひねった。

勉強できる静かなとこか…

オレがいつも勉強してる静かなとこといえば…

「そうだ、オレんち来る??」

オレの部屋なら静かに勉強できるから集中できるんじゃねぇか??

「え??」

望月は大きく目を見開いた。

「で、でもご両親の方がいるんじゃ…」

「大丈夫だよ。うちの母親、そういうの全然気にしないから」

そう言ってもまだ望月はとまどったような様子だ。

…？？

なんだよ、まだなんか気に食わないことでもあるか？？

そう思った時、望月がためらいがちに言った。

「でも…やっぱり若い男女が一つの部屋の中で2人きりというのは…」

……？？

少し頭を悩ませてからふと意味にその気がつく。

一気に顔が熱くなる。

こ、こいつ、何考えてんだよ！？

「な、何もしねぇよ！！だいたい親もいることはいるんだからな！？」

「そ、そうですよね！！それじゃそうしましょう！！」

ったく…

だいたいオレにそんな変なことする勇気なんかねぇって…

そう思いオレは軽いため息をついた。

オレ達はとりあえずオレの家にきていた。

「んじゃ、一応オレ母親に一言言ってくるから」

「は、はい…」

オレは望月がうなずくのを確認してから先に玄関に入る。

靴を脱ぐのも面倒なのでオレは玄関から大声で言った。

「おい、母さん！友達来るから静かにしてろよ！」

「はいはーい」

少し間があいて奥の部屋から返事が聞こえてくる。

もし母さんに望月を見られたら何言われるかわかんねぇからな…

まぁ静かにしとけっていったからとりあえずは一安心か。

オレはそう思い安堵の息をついたあと望月を呼んだ。

「望月、入っていいぞ」

「は、はい！」

望月はトコトコとこっちにくると、おずおずとドアをくぐった。

「お邪魔…します」

望月は小さな声でそう言うと玄関にあがる。

その時、

「まぁ！すごく可愛い子じゃない！」

奥から母さんがでてきた。

…げっ。

なんでででてくるんだよ…！？

静かにしてろって言っただろ…？？

「あ、あの…はじめまして。望月詩織といいます」

望月がぺこりと母さんに頭を下げる。

すると母さんは満足そうに笑った。

「あら、しかも礼儀正しいのね！響、いい彼女じゃない！」

なんで何も言ってねぇのにいきなり彼女になるんだよ？？

…まぁ、実際そうだけど。

「…望月、オレの部屋上だから」

オレはとりあえず無視して階段を指差した。

「もー、本当に愛想がないんだから！詩織ちゃん、こんな子だけどよろしくね？」

母さんが腕組みをしてそう言う。

「は、はい…」

望月は苦笑いでそう返事した。

このまま母さんにからまれているのも面倒なのでオレは先に階段をのぼりかけた。

すると望月が慌ててついてくる。

「入って」

そうオレの部屋に望月をうながすと、望月はおずおずと部屋の中に入った。

「わぁ…きれいですね」

望月は部屋に入るなりそう言った。

「そうか？あっ、適当に座っててていいから」

オレはそう言い、机に向かった。

オレの部屋で机ってここしかないからな。

一応勉強しやすい状態にしておこう。

そう思い、参考書などをだして机の端においておく。

望月が快適に勉強できるだろうという状態にしてからオレは望月を呼んだ。

「望月、もういいぞ」

けど返事は返ってこない。

…??

どうしたんだ??

振り返ってみると望月はオレのベッドに座ってぼんやりとしていた。

「おい、望月」

名前を呼んでもまったく反応しない。

ったく、こいつはどれだけぼーっとしてんだよ…??

そう思いオレは望月の目の前までいって名前を呼んでみた。

「望月!」

望月はやっと我に帰ったようではっとしたような表情をする。

「は…」

「何ぼーっとしてんだよ」

望月はなぜか顔を赤くした。

「た、滝沢サ…！！」

そしていきなり体を後ろに傾かせる。

何かにつかまろうとしたのか、望月はオレの手を掴んだ。

オレはそのままひっぱられてまきこまれた。

反射的にベッドに手をつく。

望月はもろに背中を打ったようだ。

けど、もうふあるから大丈夫だろ。

思ったとおりのようで望月はすぐに体をおこした。

「す、すいません。滝…」

その拍子に望月の顔がオレのすぐ鼻先による。

「へ……？？」

望月が大きく目を見開いた。

あまりにも近くてまつ毛があたりそうになる。

黒くて長いおさげがオレの頬に触れた。

「な……」

顔がだんだんと熱くなっていく。

心臓がドクドクと強く、早く脈打つ。

な、なんだよ、これ!?

オレは慌てて望月から離れた。

「……」

「……」

しばらくの沈黙が続く。

び、びっくりした…

なんであんなことになるんだよ…??

望月があんな近くにいて…

すげぇ焦った…

「あ、あの…すいません…」

望月が小さな声で沈黙を破った。

オレは横目で望月を見る。

けど望月を見ると余計に顔の熱があがるような気がして、目をそらす。

「別に…それより、準備できたぞ」

オレはとりあえずこの変な状況を打破しようともともとの用件を言った。

望月は一瞬分からないといったような表情をして、はっとした表情に変わった。

「は、はい！」

そして勉強机に座り、シャーペンや教科書を取り出し始めた。

「んじゃ、一応テスト範囲確認するけど…」

そう言って望月が出した教科書を見ようと望月のそばによった。

それだけで心臓の鼓動が速くなる。

…落ち着け、落ち着けオレ。

今日の目的は望月に勉強を教えることだ。

さっきのアクシデントのことなんか考えるな。

それでもやっぱり顔の熱はひかない。

…まぁ、望月がオレの方を見るなんてことはないだろうから大丈夫だろ。

そう思い、オレはなぜか緊張したままいろいろと説明をした。

そしてそんなうちに今日は終わり…

次の日。

急に望月からもう教えてもらわなくてもいいと言われた。

1人で勉強したら絶対赤点とるぞといっても望月は聞かなかった。

まぁオレはいいけど…

あいつ、点数どうなるんだろな…??

なんとなく不安になる。

しかし望月の点数は以外なものだった。

「平均…75です!」

自身満々にオレに点数を見せつけてくる望月。
ちなみに学年平均は６２。
「おまえ…カンニングしたのか…??」
オレは半分本気で言った。
だってあの望月がこんな点数をとれるなんて…
以外だ…以外すぎる。
「そんなことするわけないでしょう!?実力です!実力!!」
望月は怒った表情で声を荒げていった。
…なんかこいつが怒るとおもしろいな。
そう思い、オレはくっくっと笑う。
まぁ望月がカンニングなんかするわけないか。
多分こいつなりに頑張って勉強したんだろうな。
「分かってるって。頑張ったな」
オレはそう言ってから、少し驚いた。
オレ、今かなり素直に『頑張ったな』って言ったよな…??

前のオレならもうちょっと言葉を濁して言ってのに…

…まぁ、オレも変わったのかもな。

そしてふと望月を見る。

こいつも…

はじめはもっとおとなしくてオレと話すのさえもびくびくしてたのに…

今はオレに向かって声をあらげたりもできるようになっている。

こいつも少し変った気がする。

よくわかんねぇけど…

もしかしてオレのおかげか？

そう思ってオレは小さく笑った。

★11話　変化★響ｓｉｄｅ（後書き）

最後どう締めくくるかかなり考えました。
考えた結果わけがわからなくなった（―＿―；）

☆12話　初デート☆詩織ｓｉｄｅ

「なぁ、望月」

終業式が終わり、駅に向かう途中。

ふと滝沢サンが言った。

「『バイオ・〇ザード』っておもしろそうだよな」

『バイオ・〇ザード』？？

…あぁ、あのゾンビがいっぱいでてくる怖い映画ですか。

「そうですか？？私ああいう気持ち悪そうなのはムリです…」

だって血がいっぱいでてきたりするんでしょ？

それにあのゾンビが夢にでてきそうで…

「そうか？？おもしろそうなんだけどな…」

「なら見にいってはどうですか？？」

そう言うと滝沢サンは小さなため息をついた。

「それが母親も弟も姉ちゃんも誰も一緒にきてくれねぇんだよな…」

そりゃ誰もそんな気持ち悪い映画見たくないですよね…

というか滝沢サンには家族以外に誘う人がいないんですか??

「それなら1人で行けばいいじゃないですか」

「そうだな…」

滝沢サンはなぜか真剣に悩み始めた。

冗談で一人で言ったらどうですかなんて言ってみましたけど…

なにやら本気で行きそうな勢いですね…

そう思って苦笑いしたとき、私ははっと気がついた。

そういえば明日からは夏休みです…!!

夏休みといえば私達くらいの女の子達がたくさん遊んでいます。

そんな中に滝沢サンを一人でほおりだしたら…

私は横目で滝沢サンを見た。

目つきは悪いけど、きれいで普通の人の中にいると絶対に目立つ顔。

…危険です。

「…滝沢サン、やっぱり1人で行くのは止めた方がいいですよ?」

「えっ?さっきおまえが1人でいけっていったんだろ?」

滝沢サンはそう言い怪訝な顔をする。

そ、それはそうですけど…

「でもやっぱり1人じゃ寂しいじゃありませんか」

「別にオレ、そんなの気にしねぇし…」

…ダメです。

これは本当に行くつもりです。

……それなら、仕方がありません。

「それじゃぁ私もその映画、見に行きます」

滝沢サンの目が少し見開いた。

「え？怖いんじゃねぇの？？」

怖いですよ…

普通なら絶対に見に行こうとも思いません。

ですが滝沢サンのため。

私、がんばります！

「…こ、怖くないですよ。ぜんっぜーん怖くないです！！」

本当は逆です。

すごく怖いです。すっごくすっごーく怖いです。

「そうか？んじゃ行くか」

滝沢サンはそう言ってうれしそうに笑った。

初めてみた無邪気な笑顔のせいで、心臓の鼓動が少し早くなる。

そんなに『バイオ・〇ザード』が見たいんですね…

…こんな笑顔見せられてしまったら、もう絶対に断れません。

「それじゃ、さっそく明日行く？」

「あ、明日ですか！？それはちょっと…」

い、いきなりすぎませんか！？

まだそんなのを見る心の準備が…

けど滝沢サンは行く気満々で、表情はいつもと変わらないけど目がとてもキラキラとしている。

うぅ…

こ、これはとても断れません…

「…いや、明日、明日がいいです！明日行きましょう！！」

…と、そんなやりとりの結果。

今、私は滝沢サンと待ち合わせした駅の前にいます。

……あのあと気がついたんですけど…

もしかして、これってデートって言うんですかね？？

だって私は滝沢サンとお付き合いしているんですし…

だとしたら、すっごくうれしいのはうれしいんですけど…

…初めてのデートが、『バイオ・〇ザード』…

それって、どうなんでしょうか…？？

「望月」

不意に後ろから名前を呼ばれた。

「滝沢サン？」

振り返るとそこにはやっぱり滝沢サンの姿があった。

「悪い。待ったか？？」

「いえ、全然待ってませんよ！」

私だってさっききたばっかりですし…

それに、今はまだ待ち合わせの時間の１０分前。

別に謝らなくてもいいですのに…

「んじゃ行くか」

滝沢サンはそう言ってさっさと歩きはじめた。

私は慌ててその後ろに続く。

そして滝沢サンの後ろ姿を見ながらふと思った。

そういえば…

今日の滝沢サンはいつもの制服姿じゃなくて、私服姿ですね…

まぁ学校に行くわけではないので当然ですか。

たしかさっき正面から見た感じでは、滝沢サンの服装はとてもシンプルでした。

紺のシャツに黒いジャケット。

そして濃い色のジーンズ。

そんなシンプルすぎる服装でもすごくきれいに着こなせる滝沢サン

はとてもすごいと思います。

「望月」

ぼんやりとしていた私は滝沢サンに名前を呼ばれてはっと我に帰った。

「は、はい！なんですか？？」

「着いたぞ」

「そうですか…って、えぇ！？」

滝沢サンの言うとおり目の前には映画館。

えっと…

少し近すぎませんか…？？

「ここ駅の近くにあるから便利なんだよなー。さ、行こうか」

た、たしかに便利ですね…

いや、それよりも！

私まだ心の準備が…

滝沢サンは私の気持ちなんておかまいなしでささっと映画館に入っていく。

うぅ…

仕方ないです…

がんばります…

席は昨日のうちに滝沢サンがパソコンでとってくださっていたようで、私達はすぐにスクリーンに入ることができた。

時間も滝沢サンがうまく合わせていたようでぴったりの時刻。

…どれだけ楽しみにしていたんですか??

そんなにゾンビの気持ち悪いのが見たいんですか…??

そんな風に考えているうちに、急に部屋の中が薄暗くなる。

そして映画の予告が始まった。

へぇ…

こんな映画が上映されるんですか…

私としてはどちらかと言うとこちらの方が見に行きたい気もするのですが…

そして予告の中に一つ恋愛物の映画があった。

予告なのに、主人公の2人は熱烈に口付けをする。

私は見ているだけで思わず顔が赤くなった。

す…すごいです。

こんなの子供が見ているかもしれないのに…

予告でしていいんでしょうか…??

そう思っているうちに部屋が完全に暗くなる。

こ、これは…

ついに始まってしまう感じです…

思ったとおり、本編が始まった。

最初はまだ大丈夫です。

ゾンビがでてくるわけではなく、ただの外国の映画みたいな感じです。

前半の途中…

ゾンビが登場。

この変でそろそろやばいです。

後半。

ゾンビの大軍が襲ってきます。

何やらボス的なゾンビまでてきました。

そろそろ限界です…

目に涙がたまる。

た、滝沢さぁん…

滝沢サンの方を見てみると、滝沢サンはとてもわくわくとした様子でスクリーンに見入っていた。

な、なんでそんなにも集中できるんですかぁ…??

私はこのまま見ていたら本当に泣きだしてしまいそうでとりあえず目をつぶって耳をふさいだ。

うぅ〜〜〜!!

早く終わってくださーい!!

……そして死闘の末、映画は終了。

「あー、すっげぇおもしろかったな!」

滝沢サンは珍しくにこにこと笑いながら言った。

「そ、そうですね…」

すごくこわかったですね…

おかげ様で私、後半ほとんど見ていませんよ…

「特にあそこの場面はハラハラしたな！あれはもう絶対無理かと思った！」

滝沢サンは楽しそうに映画の感想を言う。

だけどほとんど私が見ていないところばかり…

すいません…

私ほとんど耳と目、ふさいでたんです…

そして滝沢サンは一通り感想を話し終えたあと言った。

「よし！それじゃぁ映画も見たことだし…帰るか！」

「えっ？もう帰るんですか？？」

私が言うと滝沢サンは不思議そうな顔で私を見た。

「いや…だって今日の目的は映画だろ？それが終わったんだからもう帰るだろ」

えっ？？

そういうものなんですか？？

滝沢サンは映画が見たかっただけなんですか？？

他に買い物したり歩きまわったりしなくていいんですか??

これって…

デートじゃないんですか??

「滝沢サン…ただ、映画見たかっただけなんですね」

「えっ?いや、別に…」

なぜか怒りがこみあげてくる。

私が勝手にかんちがいしていただけなのに…

私ってすごく勝手です。

それでも、なぜか悲しくて腹が立つ。

「勝手にデートなのかもって思ってた私がバカでした」

私はそう言って滝沢サンに背を向けた。

「おい、望月!」

後ろから滝沢サンが私の名前を呼ぶ。

けど私は無視して駅の方向に向かった。

だんだんと早歩きになっていく。

…いいんです。

もともと滝沢サンは1人で行くつもりだったのに…

私が無理やりに一緒に行かせていただいただけですから。

別に映画だけでも滝沢サンと一緒に行けるってことだけでうれしかったはずなんですから。

だから、別に映画だけでもいいです。

だけど…

なぜでしょうか??

滝沢サンにとっては今日は別に特別でもなんでもない。

ですけど、

私にとっては滝沢サンとの初めてのデートだと思っていた。

その小さな違いがすごく悲しいんです…

「待てよ!」

滝沢サンに腕をつかまれた。

私は足をピタリと止める。

「何怒ってんだよ…??」

「…別に、怒ってなんかいませんよ?」

だって怒る理由がありませんから。

怒ってないですけど…

「なぜか、悲しいんです…」

返事が返ってこなかった。

後ろにいる滝沢サンの怪訝な表情が目に浮かぶ。

けど、しばらくしてから返ってきた返事は以外だった。

「ごめん」

…へっ?

私はびっくりして振り返った。

滝沢サンは申し訳なさそうな顔で私を見ている。

「どうして滝沢サンが謝るんですか??」

「いや…なんか無理やり見たくもない映画に連れてきちまって…」

ああ…

そのことですか…

「いいですよ。もともと行きたいと言ったのは私ですから」

「それと…」

滝沢サンは何かを言いかけてとどまった。

そしてほんの少し頬を染める。

「オレも、これってデートなのかもって思ってたぞ…??」

滝沢サンは小さな小さな声でそう言った。

私は思わず目を見開く。

えっ…??

そうだったんですか…??

「で、ですけどさっき目的は映画だって…」

「いや、普通に目的は映画だろ?映画行くだけじゃデートにならないのか?」

そう言った滝沢サンの言葉で私は気づいた。

あ……

そうですよね。

私は普通デートっていうのは2人でいろいろなところを回ったりするのがデートというのだと思っていましたけれど…

滝沢サンと私は違う人間ですから…

考え方が違ってて当然ですよね。

「…そうなんですか」

だけど…

私の考えじゃ、これだけじゃものたりません。

私は、もっともっと滝沢サンと一緒にいたいです。

「でも、私はまだ、他の所もいってみたいです」

滝沢サンと一緒に買い物もしたいですし…

お茶もしたいですし…

したいことがいっぱいあるんです。

「あと少しだけ、お付き合い願えませんか??」

「…ああ」

滝沢サンはそう言って小さく笑った。

それから私は滝沢サンに少しの買い物に付き合っていただいた。
時間はあまりなかったから少ししか見れませんでしたが…
私にとってとても楽しい時間だった。
そして帰り道。
「今日は楽しかったですね！」
私がそう言って滝沢サンに笑いかけると滝沢サンも笑顔を返してくれた。
「そうだな」
本当に楽しかったです。
滝沢サンと（無理やり）お揃いのキーホルダーを買いましたし！
ですけど…
これで終わりだと思うと、少しさびしいです…
そんな私の気持ちを見透かしたのか、不意に滝沢サンが言った。
「…これから夏休み始まるし、またどっか行こうぜ」
「は、はい！」
私はそれを聞いてうれしくて、大きく首を縦にふる。

やった…！！

また滝沢サンと一緒にどこかへ行ける。

学校がなくても、滝沢サンと同じ時を過ごせる。

…よし！

いっぱいいっぱい遊びますよ！！

夏休み、滝沢サンとの思い出をいっぱいいっぱい作ります！

☆１２話　初デート☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

一応『バイオ・〇（↑強調）ザード』です。
私結構好きな映画なんですよねー（＊＾―＾＊）
それにしても最後らへんがまたあまりよく分からない（汗

★12話　初デート★響ｓｉｄｅ

「なぁ、望月」

終業式を終え、望月と駅に向かう途中。

オレは最近ずっと考えていたことを思い出した。

「『バイオ・〇ザード』っておもしろそうだよな」

最近ＣＭでよく宣伝してて気になってたんだよなー…

オレ、あのシリーズのゲームももってるしこれはぜひ映画も見ておきたいところだよな。

「そうですか??私ああいう気持ち悪そうなのはムリです…」

「そうか??おもしろそうなんだけどな…」

まぁ女子から見たらあれは気持ち悪く見えるのか。

「なら見にいってはどうですか??」

オレは小さなため息をついた。

オレも見に行きたいのは山々なんだが…

「それが母親も弟も姉ちゃんも誰も一緒にきてくれねぇんだよな…」

別にちょっとくらい付き合ってくれてもいいのによ…

本当にケチな家族だな…

…というか、実はもしかしたら望月が一緒に行ってくれるかもとか思ってこの話してるんだけど、

『なら私が一緒に行きましょうか？』とか言ってくれねぇかな…？？

オレはそう思い望月を横目で見た。

「それなら1人で行けばいいじゃないですか」

けど望月は涼しい顔でそう言った。

…こりゃ、行く気ナシだな。

「そうだな…」

でも、1人で行くのもいいかも…

ちょっと恥ずかしいかもしれねぇけど…

オレそういうのは全然気にならねぇし…

…そうだよ。

なんでそれに気がつかなかったんだ？

よし、ならさっそく明日…！！

「…滝沢サン、やっぱり1人で行くのは止めた方がいいですよ?」

オレがそう決心しかけたとき、突然望月に止められた。

「えっ?さっきおまえが1人でいけっていったんだろ?」

あいかわらずこいつだけは始めに言ってたことと後で言うことが矛盾してるやつだな…

「でもやっぱり1人じゃ寂しいじゃありませんか」

「別にオレ、そんなの気にしねぇし…」

もう行くと決めたらなんかすげぇ楽しみになってきたし…

これはもう行くしかないだろ。

「それじゃぁ私もその映画、見に行きます」

望月はいきなりそう言った。

「え?怖いんじゃねぇの??」

さっき気持ち悪いって言ってたじゃねぇか。

もうオレはあきらめてたんだけど…

「…こ、怖くないですよ。ぜんっぜーん怖くないです!!」

望月はそう言って顔をひきつらせる。

…えっと、

笑ってるつもりなのかしれないが…

嘘ついてることバレバレだぞ…??

…でもまぁ、せっかく望月が一緒に行ってくれるって言ってんだし、

人の好意には甘えるべきだよな?

「そうか?んじゃ行くか」

オレは平静を装ってそう言ったが内心はすげぇうれしかった。

やっぱり映画って言うのは誰かといかねぇと終わった後とかに感想言いあえねぇもんな?

「それじゃ、さっそく明日行く?」

オレがそう提案すると望月はほんの少し目を大きく開けた。

「あ、明日ですか!?それはちょっと…」

…あぁ、やっぱいきなりすぎだよな?

オレ早く見たくて明日とか言っちまったけど…

やっぱ望月も予定とかあるもんな…

でもやっぱり明日行きてぇな…

望月はチラッとオレを見ると急に意見を変えた。

「…いや、明日、明日がいいです！明日行きましょう！！」

昨日、そんな風にオレは望月と映画の約束をこぎつけたわけなんだが…

昨日家に帰って冷静になってから考えてみると…

…これって、いわゆるデート…ってやつなのか??

だって好きな奴と2人で映画行くわけだし…

やっぱこれは世間で言うデートなのか??

オレは望月と待ち合わせた駅に行く道すがら、ずっとそんなことを考えていた。

…なんか初めて行く映画で『バイオ・〇ザード』ってなんか…って思うけど。

まぁ、いいか。

結構おもしろいだろうし。

オレデートとかそういうのよくわかんねぇけど…

一緒に楽しめたらそれでいいんだよな??

考えているうちに駅につく。

そこにはすでに望月がぼんやりと立っていた。

ドキッ

その姿を見て思わず心臓が高鳴る。

当然だが、望月は私服姿だった。

茶色のワンピースに白いブラウス。

望月らしい控え目な服装。

…すっげぇ可愛い。

思わずそう思ってしまう。

顔が熱くなった。

オレは慌てて首を横に振る。

いやいやいやいや。

私服くらいで赤くなってどうすんだ、オレ。

オレはすぅっと息をすって、まだオレに気づいていない望月を呼ぶ。

「望月」

「滝沢サン？」

望月が振り返る。

「悪い。待ったか？？」

一応まだ１０分前だけど…

望月なら３０分くらいまえにきていそうだ。

「いえ、全然待ってませんよ！」

望月はにこっと笑って首をふった。

いや、絶対だいぶ待っててくれた気がするけどな…

まぁ、本人がそう言ってんだからそういうことでいいか。

とにかく…

オレは時計を見た。

実は映画の席は昨日のうちにネットでとってある。

そしてこの待ち合わせの時間もちょうど映画館についてすぐ劇場内に入れるくらいの時間帯に合わせておいた。

それでも何かのトラブルがあるかもしれないし、はやく行っといた方がいいだろ。

「んじゃ行くか」

オレはそう言って足を進めた。

早く見たくて思わず早足になる。

ああ、映画版はどんななんだろう？

オレは昨日楽しみでずっとゲームの『バイオ・〇ザード』やってたんだからな。

そう思い、わくわくしながら足を進めているうちに映画館が見えてきた。

「望月」

望月にそれを伝えようと振り返ると望月はびくっとして慌てたように言った。

「は、はい！なんですか？？」

「着いたぞ」

そう言って目の前の映画館を指差す。

「そうですか…って、えぇ！？」

望月はそれを見て目を大きく見開く。

多分こんな近いとは思ってなかったんだろな。

「ここ駅の近くにあるから便利なんだよなー。さ、行こうか」

実はオレは映画を見るときはいつもここだったりする。

とにかく駅からかなり近い。

まさに人に優しい映画館だ。

オレはまた時計を確認した。

時刻はちょうど映画が始まる１５分前。

よし、ちょうどいい時間だ。

オレ達は映画館に入ってすぐに劇場内に入った。

いよいよだな…！！

急に劇場内が薄暗くなる。

そしてもうすぐ公開する映画の予告が始まった。

ったく…

毎回毎回思うが、予告って本当にいらねぇよな…

早く映画見せろっつの…

何本かの予告が終わり、やっと劇場内が完全に暗くなる。

そしてついに本編が始まった。

はじめの方はあまり面白くない。

ただ人間同士でのやりとりがあるだけだ。

もうそんなのはいいからゾンビをだせ！ゾンビを！！

そして前半の途中。

やっとゾンビ登場。

けどでてくるのはせいぜい一体か二体ずつ程度。

なのに主人公達はそれすらにてこずっている。

何やってんだよ、あいつら！

あんな弱そうなゾンビくらいオレならハンドガンで倒せるぞ！？

…後半。

やっと『バイオ・〇ザード』らしくなってきた。

ゾンビの大軍が襲ってきたり、ボスらしきゾンビまでがでてきた。

お…

以外と主人公強かったんだな。

まぁオレには及ばないけど。

…と、そんな風にゲームにおきかえて見ているうちに映画は終了。

思っていたより結構な迫力があっておもしろかった。

「あー、すっげぇおもしろかったな！」

「そ、そうですね…」

望月はなぜかどんよりとした表情で答える。

…??

やっぱ怖かったのか？

いや、でも怖いところとかなかったよな??

…疲れただけか！

オレはそう勝手に結論づけて話を続ける。

「特にあそこの場面はハラハラしたな！あれはもう絶対無理かと思った！」

まさかあそこで後ろから襲ってくるとは思わなかった！

もしあれがオレならよけきれなかったかもな！

オレは望月に感想をいいまくってやっと満足したところで言った。

「よし！それじゃぁ映画も見たことだし…帰るか！」

「えっ？もう帰るんですか？？」

望月は驚いたような表情でオレを見た。

「いや…だって今日の目的は映画だろ？それが終わったんだからもう帰るだろ」

そういうもんじゃねぇの？？

だって目的はもう終わったんだし他にすることねぇじゃん。

望月はなぜかむっとした表情をした。

「滝沢サン…ただ、映画見たかっただけなんですね」

「えっ？いや、別に…」

…？？

なんか望月、怒ってる？？

望月はなぜか怒りを含んだ笑顔をオレに向けた。

「勝手にデートなのかもって思ってた私がバカでした」

望月はそう言ってオレに背を向けた。

「おい、望月！」

呼びとめようとしても望月は振り返ろうとしない。

オレを無視して駅に向かっていく。

さっきの言葉が頭に響いた。

≪勝手にデートなのかもって思ってた私がバカでした≫

…デートって、こういうもんじゃねぇのか？？

けど望月が怒ってるってことはそういうものじゃなかったってことだ。

オレは慌てて望月の後を追った。

そして望月の腕をつかむ。

望月はピタリと足を止めた。

オレは望月がオレの手を振り払おうとしないことを確認してから言った。

「何怒ってんだよ…？？」

「…別に、怒ってなんかいませんよ？」

望月の声は少し震えている気がした。

少しの間をおいて、望月は小さな声で言った。

「なぜか、悲しいんです…」

びっくりして思わず固まる。

…悲しい？？

怒ってるんじゃないのか…？？

…理由はよくわかんねぇけど…

とりあえず望月はオレのせいで悲しい思いしてるってことだよな…？？

「ごめん」

望月は驚いたように振り返った。

「どうして滝沢サンが謝るんですか？？」

どうして？

そんなの、理由なんてよくわかんねぇよ…

まぁあえて理由をつくるとしたら…

「いや…なんか無理やり見たくもない映画に連れてきちまって…」

「いいですよ。もともと行きたいと言ったのは私ですから」

そう言って望月は気を使うように笑う。

違う。

オレが言いたいことはそんなことじゃない。

望月のそんな笑顔を見てオレはそう思った。

多分望月の欲しい言葉は…

「それと…」

言いかけて、言葉を飲み込む。

…こんなこと、あんま言いたくねぇ…

…けど、オレの気持ちもちゃんと伝えたいし…

意を決して、口を開く。

「オレも、これってデートなのかもって思ってたぞ…??」

あまりにも小さな声で言ったので、望月に聞こえているか分からない。

けどどうやら聞こえていたようで、望月は大きく目を見開いた。

「で、ですけどさっき目的は映画だって…」

「いや、普通に目的は映画だろ?映画行くだけじゃデートにならないのか?」

少なくとも、オレの考えはそうなんだけど…

望月、おまえの考えはどうなんだ??

「…そうなんですか」

望月は少しうつむきがちにそう言った。

「でも、私はまだ、他の所もいってみたいです」

望月は顔をあげ、オレを見てにっこりとほほ笑む。

「あと少しだけ、お付き合い願えませんか??」

「…ああ」

オレは少し笑ってそう言った。

それからオレは望月にちょっとした買い物につきあわされたりした。

オレは買い物とか嫌いなんだけど…

望月が楽しそうにしているのを見ると、それだけで楽しかった。

そしてそのうちにあたりは暗くなり…

駅へと向かう帰り道。

「今日は楽しかったですね！」

望月はそう言ってオレに笑いかけた。

「そうだな」

オレは笑顔を返してそう言う。

望月はまた前に視線を戻した。

その横顔を見て、このまま望月と離れることが名残惜しく感じた。

そうだ…

これから夏休みが始まるんだよな。

急に、そのことがさびしく感じた。

ってことは望月ともあんまり会えなくなるってことだよな…？？

なんとか夏休み中にも望月と会う約束をしようと、オレは口を開いた。

「…これから夏休み始まるし、またどっか行こうぜ」

望月は驚いたようにオレの方を見る。

「は、はい！」

大きく首を縦にふってそう言い、うれしそうににっこりと笑う。

その笑顔を見ると、思わずオレまで笑顔になる。

…夏休みか。

今までは別に楽しみでもなんでもなかったけど…

今年は、少し楽しみになるかもしれねぇな…

★12話　初デート★響ｓｉｄｅ（後書き）

この人どんだけ『バイオ・〇ザード』みたいんでしょうか？
ちょっと変わった人ですね。

☆13話　海☆詩織side

「……」

私はじーっとケータイ電話を凝視した。

だけど、ケータイ電話は何の変化もない。

私は小さなため息をついた。

…滝沢サンから全然連絡ないんですけど。

滝沢サンと映画に行ったあの日、滝沢サンもケータイ電話を持っていると知ってメールアドレスと電話番号を交換したのはいいんですけど…

あれから一週間。

まったくメールも電話もありません。

私はまたため息をついてベッドに横になった。

どうして滝沢サンは何の連絡もしてくれないんでしょうか？

私は一週間も滝沢サンに会えなくてこんなに寂しくて、夏休みも全く楽しめていないというのに…

私はできることなら夏休み中も毎日滝沢サンと会って、毎日お話したいくらいなんですよ？

それなのに…

……滝沢サンは一週間も私と会えなくても、全然平気なのでしょうか…??

そしてケータイ電話を手に取って見たとき、

私はふとあることに気がついた。

あ、そうだ。

私から連絡すればいいじゃないですか。

なんでもっと早く気がつかなかったんでしょう…??

私は自分の鈍感さ加減にあきれながらアドレス帳を開く。

えっと…

メールか電話…

どちらの方がいいんでしょうか…??

ふとケータイ電話の画面の右上にある時計に目が止まった。

時刻はちょうど１０時半。

電話するには少し遅い時間帯ですか??

ですが一応起きてはいらっしゃると思いますし…

いや、もしお休み中で起こしてしまったら申し訳ないですよね?

それならやっぱりメールにしますか??

そう思い、滝沢サンのアドレスを押してみる。

そして本文を打とうとしたところでふと手が止まった。

ですけど…

やっぱり、滝沢サンの声が聞きたい…

【突然すいません。今から電話してもよろしいでしょうか?】

確認してからなら…

電話してもいいですよね?

送信ボタンを押そうとして手が止まる。

ですけど…

やっぱりお休み中ならメールの音でも起こしてしまうかも…!!

…だけど、そんなこと言ってたら連絡なんて絶対とれませんよね…!!

私は意を決して送信ボタンを押した。

しばらくして、送信完了の画面がでる。

…お、送ってしまいました…

迷惑になってはいないでしょうか…??

私はそう思いながらケータイ電話を胸の前で握り締めた。

返事、返ってくるでしょうか…??

ドキドキしながらただケータイ電話が鳴るのを待つ。

そして10分程したとき…

プルルル……

着信音が鳴り、ケータイ電話がブルブルと震える。

へ、返事がきました!!

私は慌ててケータイ電話を開いた。

画面には新着メール一件という表示。

私はおそるおそるメールを開いてみた。

【いいよ】

たった三文字の短いメール。

うれしくて、私はすぐに滝沢サンの電話番号を押した。

プルルルル…プルルルル…

『もしもし』

コール音が二回鳴り、聞きなれた低い声が聞こえてくる。

ドキッ

一週間ぶりの滝沢サンの声に胸が高鳴る。

「滝沢…サン??」

『そうだけど…』

電話の向こうにいるのは本当に滝沢サンなんだ…

そう思うと安心して笑顔になった。

「うれしいです…」

私が思わずそう言うと、滝沢サンの怪訝そうな声が返ってきた。

『何が??』

「滝沢サンとお話できて、うれしいんです」

私は素直にそう答えた。

『…なんだよ、それ』

滝沢サンはそっけない声で言った。

それを聞いてくすっと笑う。

知ってますか？

滝沢サンがそっけなく言うときは照れているときなんですよ？？

「だって本当にうれしいんですもの。あ、滝沢サン今何してたんですか？？」

『今？今は弟の勉強教えてた。弟今年受験なんだよ』

電話の向こうから小さなため息が聞こえてくる。

「そうなんですか…でも、滝沢サンが教えるのなら弟さんは余裕で高校に受かりますね！」

だって滝沢サンは教えるのがとてもうまいですから！

『いや…弟、かなり頭悪いから無理かもしんねぇ…』

いやいや…

弟さんのことなのに頭悪いなんて言っていいんですか…？？

と、そんな風に私はしばらく滝沢サンとたわいのない話をして楽し

んだ。

そしてある話がきっかけで、海の話になった。

「海ですか…やっぱり夏ですもんね」

夏なんですからやっぱり海行きたいですよね。

…あ、そうだ！

「滝沢サン！今度、一緒に海行きましょう！！」

『え〝……』

電話の向こうからすごく嫌そうな声が聞こえてきた。

「えっと…嫌ですか…？？」

滝沢サンの声が少し止まる。

そしてしばらくしてから滝沢サンは言った。

『えっと…単刀直入に言うと、嫌だ』

…すごくはっきりと言い切りましたね。

「どうしてですか？海、楽しいですよ？」

やっぱりこんなに暑いんですから海に入って涼しくなりたいところです…

『嫌なものは嫌なんだよ』

滝沢サンはそうきっぱりと言った。

「…そうですか」

嫌と言っている人に無理を言ってはいけませんよね…??

私滝沢サンと一緒にすごく海に行きたかったんですけど…

あきらめるしかないですよね…

私が何も言わないでいると、ふと滝沢サンが言った。

『…やっぱ行く』

「えっ…!?」

『だからやっぱ海行きたくなった!』

滝沢サンは少し大きめの声で言った。

で、でも…

さっきはすごく嫌そうな声で…

そう思い、ふと気がついた。

…滝沢サンはきっと、私に気を使ってくださっているんだ。

思わず、笑顔になる。

やっぱり滝沢サンはとても優しいんですね。

せっかくの好意なんですから…

甘えても、いいですよね？

「そうですか！なら、行きましょう！」

そして、私達は今週の土曜日に電車で近くの海に行くことにした。

土曜日。

「うわー！きれいですね！！」

目の前には真っ青な海。

それは太陽の光を浴びてキラキラと輝いている。

やっぱり海っていうのはきれいですねー！

朝早くから電車で苦労してきたかいがありました！

「さぁ、滝沢サン！さっそく泳ぎましょう！」

「あ、ああ…」

滝沢サンがそういってぎこちなく笑う。

??

滝沢サン、なんだか朝から様子がおかしいですね…

「滝沢サン…やっぱり海、嫌だったんですか??」

「えっ、い、いや!そんなことねぇって!」

滝沢サンは首を横にふってそう言った。

「そうですか?あっ、じゃぁとりあえず私着替えてきます」

私はそういって近くに見つけた更衣室に入った。

下に水着を着てきたので上にきていた服をぬぐだけですんですぐに着替えは終わった。

「滝沢サン!」

外に出て見ると、ちょうど滝沢サンが砂浜にシートをひいている途中だった。

「ああ、望月。早かったな…」

滝沢サンは私を見てすぐに視線をそらした。

その顔が少し赤くなっているように見える。

「滝沢サン？どうしたんですか？？」

「いや、別に…」

滝沢サンはそう言って、シートを整えだした。

その後ろ姿をじっと見る。

滝沢サンは水着の上にシャツをはおっていた。

滝沢サン…

泳ぐ気なさそうですよね…

いや、それともただの日焼け防止でしょうか？

ですけど半そでのシャツですし…

滝沢サンはシートを整え終わるとそこに腰をおろした。

「よし、んじゃ海行ってこいよ。オレ、ここで見てるから」

「…はい？」

この人は何を言っているのでしょうか？？

「だからオレはここにいるから、泳いできていいよって」

…この人は、

私に一人で泳げといっているのですか??

「どうしてですか?滝沢サンも一緒に泳ぎましょうよ!」

「いや…オレは…」

滝沢サンは一向に動こうとしない。

なんで滝沢サンはそこまで海で泳ぎたくないんですか??

そしてふと気がついた。

もしかして…

「滝沢サン…泳げないんですか??」

滝沢サンの顔が一気に真っ赤になる。

「ち、ちがっ…!」

滝沢サンは一度否定しかけて、途中で止まった。

そして小さく首を縦にふる。

…なんだ。

だからそんなに海に行きたくないと言っていたんですね。

私はそんな滝沢サンがなぜか可愛く思えて、小さな笑顔をうかべた。

「…それなら、砂浜で遊びましょうか！」

「えっ…でもおまえ、泳ぎたいんじゃないのか？」

私は首を横にふった。

たしかに泳ぎたかったのは泳ぎたかったですけど…

それ以前に私は…

「私は滝沢サンと一緒に遊べたらそれでいいんです」

そう、

私は滝沢サンと2人で楽しめたらと思って滝沢サンを海に誘ったんですから。

滝沢サンが楽しめないのなら意味がないんですよ？

「…よし、んじゃ、そうするか」

滝沢サンはそういって小さく笑った。

そして私達は砂浜で大きなお城をつくってみることにした。

私、一回やってみたかったんですよね～♪

「やっぱ砂固めるのって水いるよな…」

「あっ！私バケツ持ってますよ！ちょっとくんできます！」

私はそういって砂遊びをしようと持ってきていた小さなバケツを持って海へ向かった。

そして水をバケツにいれて滝沢サンのところに戻る。

「ほら！くんできました！」

「それじゃそれ、ここにかけて」

「はい！」

私は滝沢サンに指示されたところに水をかけていく。

滝沢サンはそれを手でパンパンと叩いた。

すると砂はみるみると固まっていく。

そして滝沢サンに指示されてつくっていくうちにだんだんとそれはお城の形になってきた。

滝沢サン…

すごいです！

滝沢サンは砂のお城づくりの才能があります！

「ちょっと…暑いな」

滝沢サンは手の甲で汗をぬぐうと上にはおっていたシャツをぬいだ。

ドキッ

思わず鼓動が高鳴る。

だって滝沢サンの露出した肌があまりにもきれいだったから。

とても男の人とは思えない、白い肌。

私は見ているだけで恥ずかしくなって下を向いた。

「た、滝沢サン！次はどうすればいいんですか！？」

「ん？ああ…んじゃ次は…」

というふうに、作業していくうちについに結構大きな砂のお城が完成した。

「す、すごいです！滝沢サン、できましたよ！」

「ああ、結構いい出来だな」

滝沢サンはそう言って私に笑いかけた。

私も滝沢サンに笑顔を返す。

そして完成したお城を見てふと思った。

でも…

これだけ頑張って作ったお城も…

満潮になったら、海にのまれて一瞬で消えてしまうんでしょうね…

そう思うとなんだか悲しい気持ちになった。

ふと滝沢サンを見る。

この砂のお城と同じように、私の恋も何かのきっかけですぐに終わってしまうんでしょうか??

いつかは…

滝沢サンが私じゃない女の子のそばにいるところを見なくちゃいけない日がくるんでしょうか…??

そんなの…

絶対に、嫌です。

「望月?」

滝沢サンが不意に私の名前を呼んだ。

「どうかしたか?」

そう尋ねられて、私は笑顔をつくる。

「いいえ、何でもありません」

…だけど今、私は滝沢サンの隣にいる。

来年、滝沢サンの隣にいるのは私じゃないかもしれない。

でも、今滝沢サンの隣にいるのはたしかに私。

なら今滝沢サンと一緒にいられるこの一瞬一瞬を大事にしましょう。

そう、

滝沢サンといる時間は、

私にとって一番幸せで、一番大切な時間。

☆１３話　海☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

最後かなり無理やりです；

★13話　海★響side

夏休みが始まって一週間程。

はじめの日に望月と映画に行ってから、会ってもいないし、連絡もしていない。

あの日、望月もケータイを持っていると聞いて一応アドレスと電話番号を交換したのはいいんだが…

まったくメールしたり、電話したりしてないんだよな…

一応しようと思っていることは思っているんだ。

だけど…

「兄ちゃん！ここってどうやんの？？」

一樹がノートと参考書を交互に見ながら言う。

オレは大きなため息をついた。

なぜかオレは、この夏休み中一樹の勉強を見てやることになった。

あ、ちなみに一樹っていうのはオレの一つ下の弟で…

中学3年のいわば受験生だ。

しかもこいつ、頭はとてもいいとはいえない。

いや、はっきりと言ってかなり悪い。

そして塾とかに行かせてお金を使うのも面倒だということでオレがこいつの面倒を見ることになった。

「だからここはさっき教えただろ!?同じこと言わせんな!」

ったく…

こいつは望月よりも教えるのに苦労する…

というわけで、オレには望月に連絡をする暇がないんだ。

もしこいつの前でしてしまったら、絶対になんか言われるに決まってる。

オレがまたため息をついたとき…

プルルルル…

ふいにケータイの着信音が鳴った。

…望月?

メールを開いて確認しなくても、すぐにその名前が浮かんだ。

一樹が問題に集中しているのを確認してから、そのメールを開いてみる。

やっぱりそのメールは望月からだった。

【突然すいません。今から電話してもよろしいでしょうか?】

それを見てふっと笑う。

なんでメールまで敬語なんだよ…??

…今、からか。

一樹の勉強が終わってから…なんて、待っていられるわけがない。

オレは今すぐにでも望月の声を聞きたかった。

「今日はこれで終わりだ」

オレは一樹にそう一言言ってから一樹の部屋をでた。

【いいよ】

オレはすばやくそう打ち、送信ボタンを押した。

プルルル…

すぐに着信音が鳴る。

「もしもし」

オレはすぐに電話をとった。

『滝沢…サン？？』

望月の可愛らしい声が返ってくる。

一週間ぶりの声がなぜかとても懐かしく感じた。

「そうだけど…」

オレがそう言うと、電話の向こうからほっとしたような声が聞こえてくる。

『うれしいです…』

「何が？？」

理由がわからなくて、オレはそう尋ねた。

『滝沢サンとお話できて、うれしいんです』

望月の返事に思わず顔が熱くなる。

なんでこいつはさらっとこんなことが言えるんだ！？

…まぁ、オレも望月と話せてうれしいけど。

「…なんだよ、それ」

だけどオレはそんな気持ちなんて言わずにそっけなく答えた。

電話の向こうで、望月の小さな笑い声が聞こえてくる。

『だって本当にうれしいんですもの。あ、滝沢サン今何してたんですか??』

「今?今は弟の勉強教えてた。弟今年受験なんだよ」

あいつ、受検のわりに全然緊張感ないけどな…

まぁオレも別になかったけど。

『そうなんですか…でも、滝沢サンが教えるのなら弟さんは余裕で高校に受かりますね!』

…まぁ、受からせてやりたい気持ちは山々なんだが…

「いや…弟、かなり頭悪いから無理かもしんねぇ…」

オレがそう言うとまた電話の向こうで望月が笑う声がした。

それからオレ達はどうでもいいことをいろいろと話した。

そしてある話題から海の話になり…

『海ですか…やっぱり夏ですもんね』

望月がそうつぶやく。

しばらくの間があったあと、望月はふいに言った。

『滝沢サン!今度、一緒に海行きましょう!!』

「え゛……」

思わず変な声がでる。

こいつはいきなり何言ってんだよ…

『えっと…嫌ですか…??』

望月がうかがうような声で聞いてくる。

そんな声で聞かれてもな…

オレは少し悩んでから正直に答えた。

「えっと…単刀直入に言うと、嫌だ」

理由は少し言えないが…

とりあえず、海は遠慮したい。

『どうしてですか?海、楽しいですよ?』

そう言われてもだな…

「嫌なものは嫌なんだよ」

オレはきっぱりとそう言った。

『…そうですか』

電話の向こうから望月の悲しそうな声が聞こえてくる。

そしてそれから黙り込んでしまった。

……なんで急に黙り込むんだよ……

それにそんな声で言われたら…

「…やっぱ行く」

『えっ…!?』

望月は驚いたような声で聞き返してくる。

「だからやっぱ海行きたくなった!」

本当はすっげぇ行きたくねぇけどそんなに落ち込まれたら行くしかねぇだろ!?

『そうですか!なら、行きましょう!』

望月はうれしそうにそう言った。

その声を聞けただけで行くといって良かった気になる。

…まぁ、望月が喜んでくれるなら、行ってもいいかな。

オレはそう思ってしまう自分にあきれて苦笑いした。

そして土曜日。

「うわー！きれいですね！！」

望月は海を見て感嘆の声をもらした。

たしかに海は空と同じ澄み切った青で水平線がよく見える。

まぁ、きれいなことはきれいなんだけどな。

「さぁ、滝沢サン！さっそく泳ぎましょう！」

思わずギクッとしてしまう。

「あ、ああ…」

オレは無理やりに笑顔をつくって言った。

すると望月が気遣うような顔でオレを見てきた。

「滝沢サン…やっぱり海、嫌だったんですか？？」

「えっ、い、いや！そんなことねぇって！」

オレは慌てて首を横に振った。

「そうですか？あっ、じゃぁとりあえず私着替えてきます」

望月はうれしそうに笑うと近くにあった更衣室に入っていった。

よし、一応オレも着替えとくか…

海パンは下に着てきている。

というか、普通にズボン代わりにしてきたし。

…一応着替えることは着替えるけど…

オレはTシャツをぬぎながらため息をついた。

……オレ、実はカナヅチなんだよな。

だから海なんてきてもすることねぇし行きたくなかったんだよ…

すぐに着替えが終わり、シートをひきはじめたとき。

「滝沢サン！」

望月が更衣室からでてきた。

「ああ、望月。早かったな…」

望月の姿を見て、思わず言葉を飲み込む。

そしてすぐに視線をそらした。

顔が熱くなっていく。

望月は普通のシンプルな水着を着ていた。

だけど普段の服とは違ってやけに体にくっついていて望月の体のラインをそのまま表している。

望月は着やせするタイプのようで、意外と大きな胸が目だってどこに視線をおけばいいのか分からない。

オレ、水着くらいでこんなにドキドキしてどうするんだよ!?

「滝沢サン？どうしたんですか？？」

望月は何も気が付いていないらしくきょとんとした顔で聞いてきた。

どうしたも何も…

…望月の水着姿が可愛くてドキドキしてるなんて死んでも言えねぇ…

「いや、別に…」

オレはとりあえずそう答えた。

そしてまだしっかりとひけていなかったシートを整える。

手早くシートを整え終え、オレはそこに腰をおろした。

そして海に行きたそうでうずうずしている望月に言った。

「よし、んじゃ海行ってこいよ。オレ、ここで見てるから」

「…はい？」

望月はかなり怪訝な顔で聞き返してくる。

…まぁ、そんな顔にもなるわな。

「だからオレはここにいるから、泳いできていいよって」

オレ、泳げないし。

まぁそんなこと、正直に言うわけないけど。

「どうしてですか？滝沢サンも一緒に泳ぎましょうよ！」

望月は必至な顔でそういってくる。

う……

そんな顔で言われても…

「いや…オレは…」

どうしよ…

やっぱ正直にいわねぇとダメか…？？

そう思った時。

望月がはっとしたような顔で言った。

「滝沢サン…泳げないんですか??」

顔が一気に熱くなる。

「ち、ちがっ…！」

オレは否定しようとして言葉を飲み込んだ。

いや…

やっぱ正直に言っといた方がいいか…

そう思い、首を小さく縦にふる。

望月は驚いたような顔でオレを見ていたが、急に小さく笑った。

「…それなら、砂浜で遊びましょうか！」

望月はにっこりとした笑顔でそういう。

「えっ…でもおまえ、泳ぎたいんじゃないのか?」

だってさっきあんなに泳ぎたそうにしてたし…

望月は首を横に振った。

「私は滝沢サンと一緒に遊べたらそれでいいんです」

ドキッ

心臓の鼓動が高鳴った。

「…よし、んじゃ、そうするか」

オレはそういって小さく笑った。

オレは…

望月が楽しんでくれるなら、オレが嫌なことでもなんでもしようと思ってた。

だけど、望月はオレと一緒に楽しもうと思っててくれたんだな。

そう思うとすごくうれしかった。

そしてオレ達はなぜか砂で大きな城をつくることになった。

…まぁ、やるからには結構すごいのを作ろうと思う。

「やっぱ砂固めるのって水いるよな…」

「あっ！私バケツ持ってますよ！ちょっとくんできます！」

望月はそういって子供の砂遊びようのバケツを持って海に走って行った。

…なんであんなの持ってるんだ？

「ほら！くんできました！」

望月はすぐに戻ってきた。

「それじゃそれ、ここにかけて」

そんな望月に指示をだす。

「はい！」

望月はオレの言うとおりに動いた。

だんだんと城の形ができてくる。

よし、順調、順調。

…それにしても、

「ちょっと…暑いな」

オレは手の甲で額の汗をぬぐった。

やっぱこういうときに夏だってのを実感するよなー…

とりあえずこれ、ぬぐか。

オレはそう思い、上に羽織っていたシャツをぬいだ。

なんとなく少し涼しくなった気がする。

「た、滝沢サン！次はどうすればいいんですか！？」

望月がなぜか慌てた様子でそう言った。

その顔が少し赤く見える。

望月もすっげぇ暑そうだな…

オレも顔赤くなってるかもな。

「ん？ああ…んじゃ次は…」

オレはまた望月に指示をだしていった。

そしてそんなふうにつくっていくうちに、ついに砂の城が完成した。

「す、すごいです！滝沢サン、できましたよ！」

「ああ、結構いい出来だな」

結構というよりかなりいい出来だ。

オレ達、よくここまで頑張ったよな。

オレはそう思い、望月に笑いかけた。

すると望月からも笑顔が返ってくる。

そして急に望月が黙りこんだ。

なぜか、悲しそうな顔をする。

「望月？」

オレが名前を呼んでみると、望月は切なそうな表情でオレを見てきた。

その表情に思わずドキッとする。

「どうかしたか？」

そう聞いてみると、望月は作り笑いをして言った。

「いいえ、何でもありません」

そして帰りの電車。

それまで元気そうに話していた望月が何も話さなくなった。

どうしたんだろうと思いながらもそのままにしておくと、不意に肩に何かがのった。

それは望月の頭だった。

ねてる、のか…？？

望月はオレの肩の上で規則正しい寝息を立てている。

望月の髪から、潮の香りがした。

心臓の鼓動がドキドキと早くなる。

「滝、沢サン…」

不意に望月がオレの名前を呼んだ。

一瞬起きているのかと思ったが、それは寝言のようだった。

「なんだ?」

聞こえていないとわかりながらも尋ねてみる。

「ずっと…そばに…いてください…ね…??」

返事が返ってきたことに少し驚いて、そしてふっと笑う。

「ああ」

オレはそういって軽く望月の髪をなでた。

☆１４話　夏祭り☆詩織ｓｉｄｅ

私は時計を見ながら神社に早足で向かっていた。

急ごう急ごうと思っているのにゲタは歩きづらくてなかなか足が前に進まない。

やっと鳥居が見えてくる。

私は滝沢サンを探した。

そしてすぐに鳥居にもたれかかっている滝沢サンの姿を見つける。

「滝沢サン！」

名前を呼ぶと滝沢サンは私に気がついたようで私に笑顔を向けてくれた。

私は急いで滝沢サンのそばにいった。

「遅れてすいません…浴衣を着るのに少し手間取ってしまって…」

「ああ、別に。全然待ってないから」

そういって滝沢サンはにこっと笑う。

私達がなんで神社なんかにきているかというと…

今日が待ちに待った夏祭りだからです。

ずっと楽しみにしてたんですよね！

滝沢サンに一緒にきてもらえるように無理やり頼み込んだんですよ？

滝沢サンは最初嫌って言ってたのに結局は折れてくださってこうしてきてくださいましたし！

「それじゃ、行きましょうか」

私達は鳥居をくぐった。

神社の中はたくさんの人がいて…

私達は人ごみをかきわけながら進んだ。

それにしてもすごくうるさいですね…

いろんな人の声であたりがザワザワとしています。

私はどんな屋台があるのかと道の両側に並ぶ屋台を見回した。

そしてふと金魚すくいの屋台に目が止まった。

「あっ！滝沢サン、あれやりましょうよ！」

私はそういってその屋台を指差した。

「金魚すくい？？いいけど…」

私達は金魚すくいの屋台の前に言った。

そしておじさんに小さなボールとポイをもらう。

あっ、ポイっていうのは金魚をすくう道具のことですよ?

ちょっとした豆知識です。

私は比較的金魚がたくさんいそうな水槽の前にしゃがみこんだ。

滝沢サンも私の隣にしゃがみこむ。

「さぁ、たくさんすくいますよー!」

私はそう意気込んで金魚がいっぱいいるところを探し、ポイを水の中につけた。

その瞬間にさっきまでそこに集まっていたはずの金魚がさーっとはなれていく。

あれ??

おかしいですね…

私はまた金魚が集まっているところにポイを移動させる。

すると金魚はまたすーっと逃げていく。

むーーー!!

なんだかはらがたってきました！

私はむきになって1匹の金魚を追い、無理やりすくいあげてみた。

すると…

ビリッ

金魚が暴れまわり、ポイの真ん中がやぶれた。

や、やぶれてしまいました…！！

これ、破れやすすぎるんじゃありませんか…??

「おまえもう破れたのかよ…」

滝沢サンが私のポイを見てあきれたように言った。

「だってこれ、すぐにやぶけてしまうんですもの…」

「普通そんなにすぐやぶれねぇよ」

そういって滝沢サンは自分のポイを水につけた。

そして金魚を水槽の端に追い込みボールをそのそばにもってきてすばやく入れる。

「わー…滝沢サン、うまいですね…」

「いや、これくらい簡単だろ」

滝沢サンは驚いたように言う。

いやいや…

全然簡単なんかじゃありませんよ…

それからポイが破れるまでに滝沢サンは金魚を全部で6匹もすくった。

お店の人が金魚を袋に入れて滝沢サンに手渡す。

いいなぁ…

私も金魚欲しかったです…

そう思っていると、ふいに滝沢サンが金魚が入った袋を私の目の前にさしだした。

「やるよ」

「え…？？いいんですか？」

滝沢サンは首を縦にふった。

私は滝沢サンから金魚の袋を受け取る。

「ありがとうございます！」

私がお礼を言うと滝沢サンはにこっと笑った。

「ああ、それじゃ次どこの店行く？」

「そうですね…やっぱり次は食べ物屋さんでしょうか？」

食べ物屋さんですか。

夏祭りの夜店っていろいろな食べ物屋さんが出てますけど…

「食べ物屋か…食べ物屋といったらやっぱり…」

あれですよね！

夏祭りに定番の…

「リンゴ飴ですよね！」

「ベビーカステラだよな」

私と滝沢サンは同時に言った。

そして顔を見合す。

えっと…

「やっぱり、リンゴ飴ですよね？」

「いや、ベビーカステラだろ」

…いえいえ、どう考えてもリンゴ飴でしょう！？

ベビーカステラなんて全然夏祭りって感じしませんよ！！

「絶対リンゴ飴です！！」

私がむきになって言うと滝沢サンも言い返してきた。

「いや、絶対ベビーカステラだろ！！」

じーっと私達はにらみ合う。

けどやっぱりこういうのは滝沢サンの方が強くて…

私はつい、私を睨む滝沢サンを怖いと感じてしまった。

それを見るのに耐えきれず、私は滝沢サンに背を向けた。

「もういいですよ！滝沢サンなんて1人でベビーカステラでもなんでも食べてればいいんです！」

「はぁ！？なんだよ、それ！」

後ろから滝沢サンの怒ったような声が聞こえてくる。

私はそれを無視して滝沢サンから離れた。

「望月！」

後ろから滝沢サンが私を呼ぶ声がしたけれど、それも無視する。

しばらく歩いてから振り返ると、もう滝沢サンの姿は人ごみの中にのまれていた。

私は人ごみをぬけてはずれの木陰にしゃがみ込んだ。

…私、何やってるんでしょう。

たかが意見が合わなかったくらいで怒って…

でも…

滝沢サンがあんな風に私を睨んだから驚いたんです…

私、ひさしぶりに滝沢サンのことを怖いと思いました。

だって最近はいつも優しい表情をしているから…

怖いなんて気持ち、忘れてたんです…

でもだからって私、勝手すぎますよね…

「詩織？こんなところで何してるの？」

ふいに誰かに声をかけられた。

驚いて振り返ると、そこには優香ちゃんと楓ちゃんがいた。

「優香ちゃん…楓ちゃん…？？」

「詩織ちゃん、滝沢クンと一緒にきてたんじゃないの？もしかして

何かあった?」

楓ちゃんが心配そうにそう聞いてきた。

…私が勝手に怒って滝沢サンとはぐれたなんて、絶対に言いたくありません。

「…いえ、何もありませんよ?ここで滝沢サンに待ってろって言われたんです」

私は笑顔をつくってそう答えた。

「ふーん…」

とりあえず優香ちゃんと楓ちゃんは納得してくれたようなので私はほっと溜息をついた。

「それよりさ、詩織っていつまでも滝沢クンのこと『滝沢サン』って呼ぶつもり??」

「へっ…??」

急に優香ちゃんに言われて私は首をかしげる。

いつまでと言われましても…

滝沢サンは、滝沢サンですよ??

「そうだよ!もう一緒にお祭り来るくらい仲良いんだからそろそろ名前で呼んでみたら??」

楓ちゃんも笑顔でそう言う。

思わず顔が熱くなった。

えっ…

な、名前呼びですか…!?

「そ、そんなの恥ずかしくてできませんよ!」

だって…

そんなの…無理です…

「でも恋人なら普通よ?そんなんだったらいつまでもただの友達みたいな関係のままで終わるわよ!」

いや…

別にお付き合いしているのでただの友達の関係ではないのでは…

「まっ、とりあえず今日頑張ってみなさい!」

優香ちゃんがにこっと笑って言った。

「それじゃ私達もう行くねー!」

楓ちゃんがそう言って私に手をふった。

優香ちゃんもそれに続く。

私は2人に手をふって、2人の姿が人ごみに消えるのを確認してからうつむく。

名前呼び…ですか。

「響…くん…」

私は小さな声でそう呼んでみた。

それだけで顔が燃えるように熱くなる。

本人に向けて言ったわけじゃないのに…

それだけでこんな風になってしまう。

こんなのじゃ、名前呼びなんてできるわけありませんよね…

「ねぇ君、どうしたの？こんなところに一人で」

誰かに声をかけられて私は顔をあげた。

いつの間にか、私は3人の男の子にかこまれていた。

「え…その…」

どうしよう…

怖いです…

「オレ達といいことしようよ」

そう言って手を握られた。

……っ！

じわっと涙があふれる。

「…嫌っ！」

滝沢サン…！

助けてください…！！

心の中でそう叫んだ時。

「望月！」

私を呼ぶ声がした。

男の子達が声のした方を見る。

そこには、やっぱり滝沢サンがいた。

滝沢サンはきっと私を取り囲んでいる男の子達を睨む。

さっき私と睨みあったときよりも、ずっとずっと鋭い目。

「おまえら…何やってんだよ…」

滝沢サンはすごく低い、怒りのこもった声でそう言う。

男の子達は少し後ずさった。

だけど対抗しようとしたらしく、男の子達は滝沢サンを睨み返す。

でもやっぱり滝沢サンの鋭すぎる目にはかなわなかったようで、チッと舌を鳴らすと私から離れていった。

「滝沢サン…」

私が滝沢サンの名前を呼ぶと滝沢サンはきっと私を睨んだ。

「おまえ、何やってんだよ!?」

そして思いきり私を怒鳴りつける。

思わず体がびくっと震えた。

「す、すいません…」

泣きそうになりながらもそう謝る。

滝沢サンは私の目の前にしゃがみこんだ。

私はまた思わず体を震わせてしまう。

だけど滝沢サンは怒るわけでもなく、ただ優しく私の髪をなでた。

「もしオレがこなかったらどうなってたか分かってんのか…??」

滝沢サンの声にはまだ少し怒りがこもっていた。

だけどすごく優しい目。

私は滝沢サンがさっき私を怒鳴った理由に気がついた。

そうだ…

滝沢サンは私を心配してくれて…

涙が頬を伝う。

「ごめんなさい…」

私はまた謝った。

私は勝手に怒って勝手に滝沢サンから離れてこんなことになったのに…

全部全部私が勝手なことしたせいなのに…

滝沢サンはこんなに私のことを心配してくれていたんですね…

滝沢サンは私の涙をぬぐった。

「泣くなよ。別に怒ってねぇから」

そう言った滝沢サンの声は優しかった。

そのせいでまた涙があふれだす。

滝沢サンは困ったような表情をした。

そしてはっと気がついたように鞄の中から何かをとりだす。

「ほら、これでも食べて元気だせ」

そう言って手渡してくれたのはリンゴ飴だった。

「えっ…これ…」

「おまえさっき食べ物屋って言ったらリンゴ飴って言ってただろ？」

そう言って滝沢サンは鞄からもう一つリンゴ飴を取り出して封を開ける。

滝沢サンはベビーカステラが食べたかったんじゃ…

そして私は滝沢サンがまた私を気遣ってくれたことに気がつく。

…どうして滝沢サンはそんなに私に優しくしてくれるんですか？？

だから私はまた、滝沢サンに甘えてしまうんです…

滝沢サンはリンゴ飴をかじった。

そして私に優しい笑顔を向ける。

「これ、以外とうまいな」

私の涙は止まっていた。

滝沢サンの優しさが、

私の涙をぬぐってくれた。

私を包んでくれた。

私は滝沢サンに貰ったリンゴ飴の封をあけて、かじってみた。

甘くておいしい…

滝沢サンが私のために買ってくれたと思うだけで、余計においしく感じた。

『そんなんだったらいつまでもただの友達みたいな関係のままで終わるわよ！』

急に優香ちゃんの言葉が頭に浮かんだ。

ただの友達みたいな関係…

そんな風に、私達はいつか終わってしまうんでしょうか…??

そんなのは…嫌です。

私はもっともっと滝沢サンに近づきたい。

たしかにこのまま名字で呼んでいたら、滝沢サンとの間にほんの少しだけ溝があるような感じがする。

それはきっとほんの小さな小さな溝だと思うけど…

私はそんな小さな溝でさえ踏み越えたいと思う。

ほんの少しでもいいから滝沢サンに近づきたい。

「ありがとうございます……響、くん」

私は勇気を出してそう言った。

滝沢サンが目を見開く。

暗がりの中でよくわからなかったけど、滝沢サンの頬が少し赤く染まった気がした。

「おまえ、なんだよ…その呼び方」

「すいません…でも、名前で呼んでみたかったんです。…これからもそう呼んでいいですか？」

滝沢サンはほんの少し間をあけて小さな声で言った。

「…別にいいけど」

一瞬驚いて、そしてうれしくなって、笑顔になる。

ほんの小さなことだけど、

滝沢サンとの距離が縮まったような気がした。

☆１４話　夏祭り☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

この人達、すっごいどうでもいいことでケンカしてますよね（；一_一）

あと『金魚すくい』が何度も金魚救いになりそうになりました（T_T）／~~~

なんとなく意味は合っている気がするんですけどね…

★１４話　夏祭り★響ｓｉｄｅ

太陽が沈みかけ、薄暗くなってきた夕方。

オレは神社の鳥居の前にいた。

なんでオレがこんな時間にこんなところにいるかというと…

「滝沢サン！」

可愛らしい声がオレの名前を呼んだ。

声のした方を見ると、そこには浴衣姿の望月がいる。

オレは望月に笑いかけた。

今日は夏祭り。

オレはここで望月を待っていたんだ。

望月はとことこと走ってオレのそばにきた。

「遅れてすいません…浴衣を着るのに少し手間取ってしまって…」

そして申し訳なさそうに言う。

「ああ、別に。全然待ってないから」

オレはそう言って軽く笑った。

まぁ１０分くらい待ったけど…

心の中でそうつぶやく。

そしてあらためて望月を見た。

さっきもいったとおり望月は浴衣姿。

シンプルで清楚な浴衣が望月にぴったりで、余計に可愛らしくみえる。

ま、これが見れたんだから１０分くらいどうだっていいか。

「それじゃ、行きましょうか」

オレ達は鳥居をくぐった。

神社の中は人であふれかえっていた。

なんとなく知り合いがいそうな雰囲気だ。

というか…

絶対にいるだろうな…

そう思い、オレは軽いため息をついた。

「あっ！滝沢サン、あれやりましょうよ！」

望月が屋台を見回したかと思うと、すぐに金魚すくいの屋台を指差してそういってきた。

「金魚すくい？？いいけど…」

普通金魚すくいって盛り上がってきたころにやるもんじゃないか？？

…まぁ、望月がやりたいんならなんでもいいけど。

オレ達は金魚すくいの屋台の前にいった。

そして金を払い（２００円ってちょっと高くねぇか…？）、ボールとポイをもらう。

望月はボールとポイを手にするときょろきょろと水槽を見回して、一番金魚が多そうな水槽の前にしゃがみこんだ。

オレも望月の隣にしゃがみこむ。

「さぁ、たくさんすくいますよー！」

望月は意気揚揚と言い、金魚が集まっているところにポイをいれた。

当然だが金魚はそこから逃げていく。

望月は不思議そうな顔をしてまた金魚が集まっているところにポイを動かした。

やっぱり金魚はそこからはなれていく。

望月はそれでむきになったようで1匹の金魚を追い、無理やりすくいあげた

あーあ…

それって一番失敗するすくい方だろ…

思ったとおり、望月がすくいあげた金魚はポイの上で暴れ、紙はすぐに破れた。

望月があからさまにショックな顔をする。

「おまえもう破れたのかよ…」

オレがあきれてそう言うと、望月はしゅんとした声で言った。

「だってこれ、すぐにやぶけてしまうんですもの…」

それはお前のすくい方が悪いからだよ。

「普通そんなにすぐやぶれねぇよ」

オレはそう言って、望月と同じように金魚がたくさん集まっているところにポイをいれた。

そしてその中の1匹を水槽の端に追い込んでそのそばにボールをもってくる。

そのままオレは金魚をすばやくボールの中にいれた。

「わー…滝沢サン、うまいですね…」

望月は関心したように言った。

「いや、これくらい簡単だろ」

金魚端っこに追い込んだらいいだけだし。

まぁそれにもちょっとしたコツがいるけどな。

オレは少し得意気になり、そのあと破れるまでに全部で6匹の金魚をすくった。

店の人がオレがすくった金魚を袋にいれてオレに手渡す。

…金魚なんかもらってもいらねぇんだけどな。

オレは望月を見た。

望月は金魚を見て、いかにも欲しそうな顔をしている。

…わかりやすいやつだな。

オレは望月の前に金魚の袋をつきつけた。

「やるよ」

オレがそう言うと望月は戸惑うように言った。

「え…?? いいんですか?」

オレはうなずいた。

良いも何もオレはもらってくれた方がうれしいし。

だって家に持って帰ってもどうせ殺しちまうだけだしな…

「ありがとうございます！」

望月は金魚をうけとるとにっこりと笑ってそう言った。

その輝くような笑顔に、思わずオレも笑顔になる。

「ああ、それじゃ次どこの店行く？」

「そうですね…やっぱり次は食べ物屋さんでしょうか？」

そうだな。

夏祭りといえばやっぱ食べ物屋だよなー…

「食べ物屋か…食べ物屋といったらやっぱり…」

夜店には定番のあれだろ。

「リンゴ飴ですよね！」

「ベビーカステラだよな」

望月とオレは同時に言った。

そして驚いて顔を見合わせる。

「やっぱり、リンゴ飴ですよね？」

望月は確認するようにそういってきた。

「いや、ベビーカステラだろ」

だって夜店って聞いたらつい買ってしまうだろ？

リンゴ飴なんてたしかに周りの飴はおいしいかもしれねぇが中のリンゴはぱさぱさしててまずいだけじゃねぇか。

「絶対リンゴ飴です！！」

望月がなぜか怒ったように言ってくる。

それで思わずオレもむきになって言い返した。

「いや、絶対ベビーカステラだろ！！」

望月がきっとオレを睨んできた。

負けじとオレも睨み返す。

しばらく睨みあった後、望月は不意にオレに背を向けた。

「もういいですよ！滝沢サンなんて1人でベビーカステラでもなんでも食べてればいいんです！」

そしてそう怒鳴る。

「はぁ！？なんだよ、それ！」

望月はオレを無視してオレから離れるように歩いて言った。

何怒ってんだよ、あいつ！！

「望月！」

名前を呼んでも望月はオレを無視して早足でオレから離れていく。

あとを追おうとしても、人ごみに邪魔されて思うように進めない。

そしてあっという間に望月の姿は人ごみにのまれてしまった。

…なんであんなどうでもいいことでこんな風になるんだよ。

やっぱあいつわけわかんねぇ…

でも…

オレはさっき望月と睨みあったときのことを思い出した。

望月がオレに背を向ける前、望月がちょっとおびえたような表情をした気がする…

…そうだ。

オレ、なんかむきになって本気で睨んじまった…

望月ははじめオレのことを怖がってたんだ…

あんな風に睨んだら、おびえるのは当然なのに…

オレがあんなどうでもいいことにむきになったから悪いんだ…

別にベビーカステラなんてどうだっていいじゃないか。

オレは望月が喜ぶ顔を見れたらそれでいいんじゃなかったのか??

オレはあたりを見回して、リンゴ飴の屋台を探した。

それはすぐに見つかり、オレはそこでリンゴ飴を2つ買った。

望月、これで許してくれるだろうか…??

でも、もし許してくれなくても望月がこれで少しでも喜んでくれたらいいか。

そう思い、望月の姿を探す。

だけどどこを探しても望月の姿は見つからなかった。

もしかして…

もう帰っちまったのか…??

そう思ってあきらめかけたとき、

「あっ、滝沢クンじゃない！」

誰かがオレの方にかけよってきた。

「今から詩織ちゃんの所に行く途中？？」

それは中川と鳥山だった。

やっぱり知り合いがいたか…

いや、そんなこと思っている場合じゃない。

「おまえら、望月見なかったか？」

こいつらなら望月の居場所を知っているかと思い、そう尋ねてみた。

中川と鳥山はきょとんと顔を見合わせる。

「えっと…詩織ならさっきそこの木陰で滝沢クンを待ってるって言ってたけど…」

そう言って鳥山がはずれの方を指差す。

あいつ…

そんなところにいたのか！！

「ありがとう」

オレは一言そう言って鳥山が指さした方に早足で向かった。

はずれの方に行ってみるとそこに望月らしき姿が見えた。

だがその姿は3人の男に囲まれている。

あいつ…！！

「望月！」

オレは望月の名前を呼んだ。

望月と、望月を囲んでいる男達が同時にオレを見る。

オレは望月を囲んでいる男達を睨んだ。

おまえら…

人の女に何やってんだよ…！？

よく見ると男の一人が望月の手をつかんでいる。

あんなやつが望月の手に触れていると思うと怒りがこみあげてきた。

「おまえら…何やってんだよ…」

オレは低い声で言った。

男達は少し後ずさりしたが負けじと睨み返してくる。

なんだ？

こいつらオレに対抗しようっていうのか？

ふん、できるものならしてみろよ。

オレはさらに強く男達を睨み返した。

すると男達はあきらめたらしくちっと軽く舌打ちして望月から離れていった。

「滝沢サン…」

残された望月がオレの名前を呼ぶ。

オレはそんな望月を睨んだ。

「おまえ、何やってんだよ!?」

そして思わずそう怒鳴る。

望月がびくっと体を震わせた。

「す、すいません…」

そう泣きそうな声で謝る。

オレは望月の前にしゃがみこんだ。

望月はまたびくっと震える。

オレはそんな望月の髪を撫でた。

「もしオレがこなかったらどうなってたか分かってんのか…??」

おまえ、襲われてたんだぞ…??

もしそんなことになったらオレ……

望月の頬に涙が伝った。

「ごめんなさい…」

そしてもう一度オレに謝る。

…えっと、

オレ、怖がらせちまったか?

オレは望月の頬に伝った涙をぬぐった。

「泣くなよ。別に怒ってねぇから」

そういうと望月は余計に涙を流した。

弱ったな…

自分で泣かせておいてあれだけど…

こんなときどうすりゃいいんだろ?

そう思いふと気がついた。

そうだ。

オレたしかリンゴ飴買ってきてたんだった。

それで少しは元気だしてくれるか？

オレは鞄の中からリンゴ飴をとりだした。

そして望月にそれをさしだす。

「ほら、これでも食べて元気だせ」

望月は軽く目を見開いた。

「えっ…これ…」

「おまえさっき食べ物屋って言ったらリンゴ飴って言ってただろ？」

オレは望月がそれを受け取ってから、鞄からもう一つをとりだした。

そしてその封をあけ、リンゴ飴をかじってみた。

飴の甘い味とリンゴの酸味が口の中で混じる。

…ふーん。

以外といけるもんだな。

「これ、以外とうまいな」

そう言ってオレは望月に笑いかけた。

望月は泣きやみ、リンゴ飴の封をあけた。

そして小さな口でリンゴ飴をかじる。

「ありがとうございます……響、くん」

不意に呼ばれた名前に驚いて思わず目を見開く。

顔が熱くなった。

やばい…

絶対にオレ、赤くなってる…

でも、今暗いし気付かれてないよな…??

「おまえ、なんだよ…その呼び方」

なんでいきなり名前呼びなんだよ??

今すっげぇ焦ったぞ…??

望月は恥ずかしそうに目をふせて言った。

「すいません…でも、名前で呼んでみたかったんです。…これから

もそう呼んでいいですか？」

これからもって…

オレ、今呼ばれただけでも顔赤くなっちまったのに…

そんなんで大丈夫なのか…？？

でも…

せっかく望月がそう言ってくれてるんだ…

「…別にいいけど」

望月は目を見開いて、そしてうれしそうに笑った。

暗がりでも分かる可愛らしい笑顔に思わずみとれてしまう。

…まぁ、望月が喜んでくれるならなんでもいいか。

オレは望月のことを名前でなんか呼べそうにもないけど…

望月がオレに名前で呼ばれることを望むのならそう呼ぶ。

オレは望月のこの笑顔を見られるんなら…

きっと、どんな願いでも叶えられる。

★１４話　夏祭り★響ｓｉｄｅ（後書き）

最後、途中から名前の話になってます（－＿－；）
詩織に頼まれるの待たずに自分から名前で呼べ！って感じですね（－－；）

☆15話　宿泊☆詩織ｓｉｄｅ

ある日の昼下がり。

私はクーラーのきいた部屋でぼんやりとテレビガイドをめくっていた。

今日の夜の分を見てふと7時から始まる番組に目が止まる。

「こ、これは…！！」

私が思わず目をとめてしまったのは毎年、夏にやっている番組。

そう、『本当にあった怖い話』です！

私怖いのってすごく苦手なんですけど…

なぜか好奇心があって、どうしても見たくなってしまうんですよね…

ですけど…

今日はお父さんもお母さんも仕事で出張中。

明日の夕方には返ってくるそうで、それまで私はずっとこの家に一人なんです…

やっぱり、1人で見るのは少し怖いですね…

そうだ、ビデオをとってお母さん達と一緒に見るというのはどうで

しょう??

…いえ、でももしビデオでとったせいで聞こえてはいけないはずの声などが入ってはいけませんし。

やっぱりあきらめた方がいいのでしょうか…??

ですけどどうしても見たいですし…

…あっ！

いいこと思いつきました！

私はケータイを手にとって楓ちゃんの電話番号を押す。

家に誰もいないんだったら泊まりにきてもらったらいいんですよー♪

どうしてこんなことに気がつかなかったんでしょうね??

『詩織ちゃん?』

「あっ！楓ちゃんですか?ちょっと突然なお願いがあるんですけど…」

『なぁに?』

「今日私の家に泊まりにきていただけませんか?」

『えっ!?今日!?…ごめん。ちょっと用事があって…』

「…あ、そうですか…それならいいです。いきなりすいません…」

『あっ！うん、私こそホントゴメンね！それじゃまた今度！』

「は、はい！それでは…」

私は通話を切った。

…見事に断られましたね。

まぁいきなりだから仕方ありませんか。

でも私、あきらめませんよ！

まだ優香ちゃんがいますからね！

そう思い、私は今度優香ちゃんの番号に電話してみた。

ワンコールですぐに優香ちゃんが電話にでる。

『もしもし、詩織ー？？何か用？？』

「あっ、優香ちゃんですか？あの…ちょっとお願いがあるんですけど…」

『何？』

「突然なんですけど、今日私のうちに泊まりにきていただけませんか？」

『えっ！？今日！？』

優香ちゃんはさっきの楓ちゃんと同じような反応をした。

えっと…

やっぱり皆さんいきなりすぎて驚いてしまうようですね…

『ゴメン…今日はダメなの。…実はさ、今日中島クンの家に泊まりにいくんだよね』

「えっ！？中島サンって…あの、中島サンですか？？」

『あのって…どの中島クンかわからないけど、多分詩織が思ってる人だよ。実は私達このまえ付き合うことになったのよ！』

お、お付き合いすることになったんですか！？

そ、それは…

以外です…

「それはそれは…おめでとうございます」

電話の向こうで優香ちゃんが笑う声が聞こえた。

『ありがとー！ま、そういうことで、どうせなら詩織も滝沢クンを家に呼んでみたら？』

ドキッ

心臓が強く鳴る。

響くんを…ですか??

「で、でも…それは…」

『いいじゃない!勢いで誘ってみなさいよ!それじゃーね!』

優香ちゃんは明るくそう言って電話をきった。

私はしばらくケータイを持ったまま固まる。

どうしましょう…

響くんを誘ってみましょうかね…??

で、でも…

やっぱりお泊りというのはちょっと…

身の危険を感じるというか…

顔が熱くなる。

そしてそんなことを思っている自分が恥ずかしくなった。

…私、何考えているんでしょうか??

別にそんな心配をしなくても、響くんはそんな変なことをしようと

する人じゃありませんのに…

それに優香ちゃんだってまだお付き合いしたばかりの中島サンの家に泊まりに行くんですから…

私達も、それくらいしても普通ですよね？

そう納得して、私は響くんの電話番号を押した。

3回ほどコール音が鳴る。

『もしもし』

電話の向こうから響くんの声が聞こえる。

「あ、響、くんですか？」

『ああ。なんか用？』

「いや…その…」

やっぱり少しとまどってしまう。

なんとなく、断られたらどうしようと不安になった。

「…あの、今日家にお父さんもお母さんもいないんですけど…」

『へー。んじゃ、うるさくなくていいじゃん。よかったな』

電話の向こうから響くんの小さな笑い声が聞こえてくる。

い、いや…

そういうのが言いたいわけではなくて…

私はこくりと唾を飲み込んだ。

そして意を決して言う。

「だ、だから、今日私の家に泊まりにきませんか！？」

『……え？』

響くんの怪訝そうな声が聞こえた。

「い、いや！別に変な意味じゃないんですよ！？ただ今日の7時から『本当にあった怖い話』っていうのがあるんですけど1人で見るのは少し怖いなぁ…と思ってですね！」

私はなぜか焦って弁解してしまう。

響くんは黙ってしまった。

私もなぜか黙り込んでしまう。

…やっぱりいきなりこんなこと言っちゃ迷惑ですかね…？？

響くんに変な子って思われてしまったかも…

そう思い落ち込んでいた時。

『…いいよ』

ふいに響くんが沈黙をやぶった。

「え…ほんと、ですか??」

『別にオレ、今日も明日も予定ねぇし…』

響くんはそっけなく言った。

「…なら、今日の夕方くらいにきてください」

私は自然と笑顔をつくって言った。

『…分かった』

プツッ

小さな音がして通話が切れる。

私はケータイ電話を閉じて、ソファにドサッと腰かけた。

心臓がドキドキと鳴っている。

…ここに響くんがきてくれる。

そう思うと、急にいまいる部屋が汚く感じた。

はっ！

そうです！

響くんが来る前にこの部屋を掃除しませんと！

響くんの家はあんなにきれいだったのに、私の家がこんなに汚いなんて絶対にいけません！

私は大いそぎで家中の掃除に取りかかった。

そして夕方6時ごろ。

家のインターホンが鳴る。

私は確認する間も惜しくて、すぐに玄関の扉をあけた。

「望月？」

思ったとおりそこには響くんの姿があった。

肩には小さなボストンバッグを下げている。

「あっ、どうぞ！はいってください！」

私は響くんに手まねきした。

「…お邪魔します」

響くんは小さな声でそう言うと玄関に足を踏み入れた。
私はとりあえず響くんをリビングにとおす。
「あっ、適当に座っていただいて結構ですよ！」
響くんが困ったように立っていたので私はそう言った。
響くんは少し部屋の中を見回して、真ん中にあるテーブルの前に座る。
えっと…
それで、何をすればいいんでしょうか…？？
そう思い、私はふと気がついた。
あ、そうだ！
7時から『本当にあった怖い話』が始まるんですからそれまでにお風呂にはいっておかないと！
怖い話を見たあとからじゃ絶対に一人で入れません！
私はふと時計を見た。
うーん…
一時間じゃとても湯船につかっている時間はありませんし…

シャワーでいいですよね！

「あの、いきなりで本当に申し訳ないんですが…私、ちょっとシャワーしてきますね？」

私がそう言うと響くんはなぜか目を見開いて頬を染めた。

「あ、ああ！いってこいよ！」

なぜか慌てたようにそう言う。

「は、はい…」

私は響くんの反応を不思議に思いながらも着替えをもってお風呂場に向かった。

そしてできるだけ急いでシャワーを浴びる。

響くんを待たせてはいけないと思い、私はすばやく服を着てリビングに戻った。

私がリビングのドアをあけると、響くんは驚いたように振り返った。

「おまえ…早いな」

そしてまた響くんの頬が少し赤く染まる。

…？？

なんでしょうか？

私は少し怪訝に思いながら時計を見た。

時刻はちょうど6時半。

やばいです！

もうすぐ始まってしまいます！

あ、それよりもそろそろ晩御飯の時間ですよね？？

実はちゃーんと準備だけはしてたんですよねー！

ちなみに今日の晩御飯はハンバーグです！

まぁ別に深い理由はないんですけど…

とりあえず、あとは焼くだけなんです！

「私、ちょっと晩御飯の準備してきます！」

私はそう言って響くんに笑いかけた。

「え、晩飯くらいオレが作るぞ？」

響くんは慌てたように言った。

「いえ、大丈夫です！あとはもう焼くだけなので」

私はそう言って台所に行った。

そしてコンロに火をかけて、手早くハンバーグを焼く。

そしてお皿にできるだけきれいに盛りつけて…

完成です！

私はお皿をお盆に入れると急いでテーブルに持っていった。

そして晩御飯の準備を全部終えてからテレビをつける。

本当はご飯を食べながらテレビを見るって行儀が悪いですが…

別にいいですよね！

「それじゃ、食べましょうか！」

「あ、ああ」

響くんは手を合わせるとお箸を手にとってハンバーグを口にはこんだ。

思わずそれをじーっと見てしまう。

えっと…

響くんにかぎってそれは言わないと思いますが…

万が一まずいと言われてしまったらどうしましょう…？？

「お味は…どうですか…？？」

「…うん。うまいんじゃねぇの？」

響くんはそう言ってにこりと私に笑いかけてくれた。

うれしくて、私も響くんに笑顔を返す。

なんだか…

他の誰に言われるよりも、

響くんにおいしいと言ってもらえることがすごくうれしいです。

私は自分が食べるのも忘れて、響くんが私がつくった料理を食べてくれるのを眺めていた。

「…おまえ、食べねぇの？」

響くんが私の視線に気がついたのか、怪訝そうな顔でそう言ってくる。

「あ！いえ、食べますよ！」

私は慌ててハンバーグを口にはこんだ。

…うん。

我ながらいい出来ですね！

「あ、始まったみたいだぞ？」

ふいに響くんがテレビを見て言った。

「え！？」

私は慌ててテレビを見る。

画面には大きく『本当にあった怖い話』と題名が映し出されていた。

…よーし、

ついに始まりましたよ！

今日は絶対に途中で目をそむけませんからね！

私はそう意気込んでテレビに集中した。

2時間後。

只今、時刻は午後9時です。

ちなみに私、固まっております。

「望月、大丈夫か？？」

響くんが心配そうに私の顔をのぞきこんだ。

「は…い…大…丈夫…です…」

すごく…怖かったです…

絶対に目をそむけないと誓ったはずなのに思いきり目をそむけてました…

だって本当にひどいんですよ!?

まさかあんなところでいきなりあんなに怖い顔がでてくるとは普通思わないですよ!!

「えっと…オレ、風呂貸してもらいたいんだけど…大丈夫か?」

「ええ、大丈夫です…」

響くんは気づかわし気に私を見ながらもリビングをでていった。

急にリビングがシーンと静まりかえった気がする。

こ、これは本気で怖いですね…

で、でも!

幽霊なんて本当は科学的には存在しないんですから!

ほら!『おばけなんてないさ』って歌もあるじゃないですか!!

…でも、何もしないでいるのは少し怖いので、晩御飯の片付けでもしましょうか…

私はとりあえず自分と響くんの使ったお皿を台所に持って行った。

食器を洗い終えると、また何もやることがなくて仕方がなく1人テーブルの前に座る。

…響くん、お風呂長いです。

やっぱり1人は少し怖いですよ…

ガチャッ

扉が開く音がした。

思わずびくっと震える。

「望月、大丈夫か?」

振り返るとやっぱり心配そうに私を見てくれている響くんの姿があった。

ほっと安堵の息をつく。

なんだ…

響くんですか…

てっきり幽霊かと…

響くんは私の隣に座った。

ふわっとシャンプーの香りが鼻をかすめる。

私は驚いて、あらためて響くんを見た。

お風呂あがりで湿っている黒い髪。

少し、蒸気した頬。

思わず顔が熱くなる。

私は慌ててうつむいた。

どうしよう…

響くんがきれいすぎて…

まともに顔を見れない…

「…おまえ、やっぱりあんな怖いの見ない方が良かったんじゃねぇか？」

響くんは私がうつむいた理由をかんちがいしたようでまた心配そうにそう言ってくれた。

い、いや…

今私はさっきの怖い話のことよりも、あなたのことで頭がいっぱいなんですけど…

「いえ、全然大丈夫ですから！」

私はなんとか顔をあげて笑顔をつくった。

「そうか？ならいいけど」

そう言って響くんは私に笑い返した。

余計に心臓の鼓動が速くなる。

ダメですよ…

せっかく最近は響くんの笑顔にも慣れてきたところなのに…

あなたは自分がどんなにきれいか分かっていないんですか？

そう思うほどに、私には響くんがとてもきれいに見えた。

私達は少しの間談笑して、寝ることにした。

とりあえず響くんにはお母さんとお父さんの部屋を使ってもらってます。

…あ、これ内緒ですよ？

「それでは…おやすみなさい」

「おやすみ」

私は響くんに軽くあいさつしてからベッドに入った。

そして眠ろうと目を閉じる。

だけど、目を閉じるとどうしてもさっき見た怖い話の女の人の顔がうかんできた。

うぅ…

やっぱり見なければよかったです…

いつもならこういうときお母さんのベッドにもぐりこむんですけど…

今はいませんし…

たえるしかないですよね…??

そう思い、なんとかその顔を振り払おうとする。

だけどその時、

ゴトッ

小さな音を立てて何かがおちた。

〜〜〜〜っ!!

…ダメです!

やっぱり1人でなんて絶対に眠れません！

私は一刻も早くこの部屋から立ち去ろうと急いで部屋を出た。

そして無我夢中で響くんがいる部屋にかけこむ。

「響くん！」

私がそう言ってドアを勢いよく開くと響くんは驚いたような顔で上半身をおこした。

「望月…！？どうしたんだよ？？」

「いや…その…やっぱり1人じゃ眠れなくて…」

どうしてもあの怖い顔がうかんでくるんですよー…

「あの…申し訳ありませんが一緒に寝かせていただいてもよろしいでしょうか？？」

無理なお願いだと思いながらも、私はそう尋ねてみた。

「別に…いいけど…」

響くんはしばらく間をあけてからそう言った。

「本当ですか？？それじゃぁ…」

私はいそいそと響くんの隣にもぐりこんだ。

「ったく…あんなの見るからだろ??」

響くんが私のすぐそばで言った。

見てみるとほんのすぐそばに響くんがいる。

顔が燃えるように熱くなった。

響くんもそれに気がついたようで慌てたように私に背を向ける。

「はやく寝ろよ…!!」

響くんはそう言ったきり黙ってしまった。

私はその背中を見つめる。

私よりずっと大きな背中。

急に思いきり抱きついてみたくなった。

だけど私にはそんなこととてもできない。

そっと目を閉じて見る。

もう、瞼の裏に怖い女の人の姿はなかった。

変わりに響くんがいる。

まったく恐怖も感じなかった。

変わりに心臓がドキドキと鳴り響いている。

そして私はなぜか安心していた。

…響くんには迷惑だったかもしれませんが、

私、響くんのところにきてよかったです。

だって、響くんのそばにいると響くんのことしか考えなくてすむんですもの。

頭の中が響くんでいっぱいになって、安心できる。

ねぇ、響くん。

私のこんな気持ちに、あなたは気が付いていますか？

☆15話　宿泊☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

ムダにながくて、しかもかなりの適当な文章…
最悪ですね（ー＿ー；）
あともう詩織は普通に響のことを名前呼びしてます。
もう統一しちゃおっかな？っておもいまして（＾ー＾）
ちなみに私も恐い話みると寝られなくなるって分かってるのに見てしまうタイプです（；一＿一）

★15話　宿泊★響side

去年、オレの部屋のクーラーは壊れた。
なのでオレは今、扇風機に座り込んでいる。

「…暑い」

扇風機からくる風は生暖かい。
これ、絶対に扇風機の意味ないだろ…
とにかくオレの部屋は熱中症になりそうなくらい暑かった。
かといってリビングに行くと一樹に怒られる。
…どうやら今、彼女がきているらしい。
一樹の部屋にはクーラーがない。
そしてリビングにはクーラーがある。
…だからってみんなのリビングに彼女を連れてくるってのはおかしいだろ…??
ったく、なんでオレがこんな部屋にずっととじこもってなきゃいけねぇんだよ…!?
ここはオレの家だぞ??

…まぁ、ここにずっといるのも暑いだけだしコンビニにでも涼みに行くか。

そう思って立ち上がった時、

プルルル…

ケータイの着信音が鳴った。

誰だよ、せっかく人が動こうとしてるときに…

ケータイを開いてみると、画面には『望月』と表示されていた。

慌てて電話にでる。

「もしもし」

『あ、響、くんですか?』

ドキッ

いきなり名前で呼ばれて、鼓動が少し強くなる。

「ああ。なんか用?」

オレはそれを悟られないようにわざとそっけなく言った。

『いや…その…』

望月はとまどっているような声で言った。

『…あの、今日家にお父さんもお母さんもいないんですけど…』

「へー。んじゃ、うるさくなくていいじゃん。よかったな」

オレなんて母親も父親も姉ちゃんも家にいるわけじゃねぇけど、一番うるさい弟がいるんだぞ??

…多分望月はクーラーのきいた部屋でのんびりとしているんだろうな。

いや、オレと同じように扇風機一つで頑張ってたりしてな。

そう思ってオレは小さく笑った。

『だ、だから、今日私の家に泊まりにきませんか!?』

「……え?」

突然の望月の提案に思わず息をのむ。

…こいつ、何言ってんだよ…??

どういう意味で言ってんだ…??

『い、いや!別に変な意味じゃないんですよ!?ただ今日の7時から『本当にあった怖い話』っていうのがあるんですけど1人で見るのは少し怖いなぁ…と思ってですね!』

望月は慌てたようにそう付け加えた。

オレはなぜかほっと安堵する。

…って、安心してる場合じゃねぇだろ。

オレ、望月と2人きりで一晩いられるのか…??

……でもちょっと泊ってみたいっていう気持ちもあったりする。

「…いいよ」

『え…ほんと、ですか??』

望月は驚いたように言った。

「別にオレ、今日も明日も予定ねぇし…」

『…なら、今日の夕方くらいにきてください』

望月はうれしそうにそう言った。

「…分かった」

オレはそう言って通話を切った。

…さて、とりあえず準備でもするか。

そう思い、オレは修学旅行で使ったボストンバックに荷物をつめこんだ。

そして夕方。

オレは5時半ごろに家をでた。

そして電車にのり、6時ごろに望月の家につく。

オレはなぜか緊張しながら望月の家のインターホンを押した。

すぐに望月がでてくる。

「望月？」

「あっ、どうぞ！はいってください！」

望月に手まねきされて、オレは望月の家の扉をくぐる。

「…お邪魔します」

そう言って玄関にあがった。

そしてオレは望月にリビングにとおされた。

その部屋を見回して、思わず感心する。

そこはとてもきれいに片付いていた。

なんか望月の家らしいな…

「あっ、適当に座っていただいて結構ですよ！」

オレの様子を見て、望月はそう言った。

…適当に座れと言われてもだな…

オレは部屋を見回してみた。

部屋の真ん中にテーブルがある。

…あそこでいいか。

オレはとりあえずそのテーブルの前に座った。

さて、これからどうするんだ？？

そう思った時。

「あの、いきなりで本当に申し訳ないんですが…私、ちょっとシャワーしてきますね？」

ふと望月が言った。

驚いて、思わず顔が熱くなる。

はぁっ！？

いきなりシャワーって…

い、いや…

別に変な意味で言ったわけじゃねぇよな…

「あ、ああ！いってこいよ！」

…何慌ててるんだ？オレ。

なんかバカみたいじゃねぇか…

「は、はい…」

望月は怪訝そうにそう言うとリビングをでていった。

ふと、時計を見てみる。

時刻は６時くらい。

シャワーするの、ちょっと早すぎじゃねぇか…？？

まぁ、人それぞれだから別にいいけど。

とりあえずテレビでも見させてもらうか。

そう思い、テレビをつけようとしたとき、

ガチャ

後ろで扉が開く音がした。

振り返ると、そこには望月の姿。

シャワーするの早すぎるだろ…

「おまえ…早いな」

そう言って、オレはあらためて望月を見た。

望月はいつもは二つにくくっている髪をおろしていた。

その長い黒髪が湿り気を帯びている。

望月の蒸気した頬がなぜか少し色っぽく見えた。

思わず顔が熱くなる。

望月はきょとんとした顔でオレを見る。

こいつ…

無防備すぎるだろ…

オレがこんなやつだったから良かったものの…

もしオレが橋本みたいなやつだったらどうなってたか分かってんのか…??

「私、ちょっと晩御飯の準備してきます！」

望月は急にはっと気がついたように言った。

「え、晩飯くらいオレが作るぞ？」

オレは慌ててそう言った。

泊めてもらうのに晩飯まで用意してもらうのってなんか悪い気がするし…

それにオレ、これでも結構料理できる方だしな。

「いえ、大丈夫です！あとはもう焼くだけなので」

望月はそう言うとさっさと台所に入ってしまった。

…まぁいいか。

せっかく望月がオレのために作ってくれるんだしな。

そう思い、オレは望月が何かを焼く音をただ座りながら聞いていた。

しばらくして、望月が盆をもっていそいそとこっちにきた。

そしてオレの前にハンバーグがのった皿をおく。

望月はそれを自分の前にもおくとテレビをつけた。

「それじゃ、食べましょうか！」

そう言ってにっこりとオレに笑いかける。

「あ、ああ」

オレは軽く手を合わせてから、箸を手にとった。

そして望月がつくってくれたハンバーグを口にはこぶ。

「お味は…どうですか…??」

望月が心配そうにそう聞いてきた。

「…うん。うまいんじゃねぇの?」

オレはそう言って望月ににこりと笑いかける。

すると望月はほっとしたようにオレに笑顔を返してきた。

それから望月は自分の分を食べようとせずに、にこにことオレが食べる様子を見てきた。

…そんなに見られると、食べ辛いんだが…

「…おまえ、食べねぇの?」

「あ!いえ、食べますよ!」

望月ははっとしたようにそう言って、自分の分を口にはこんだ。

ふと、テレビの方を見る。

テレビにはいかにも恐ろしそうな字で『本当にあった怖い話』と題

名が映し出されていた。

望月がみたいって言ってたのってこれじゃねぇか…??

「あ、始まったみたいだぞ?」

「え!?」

望月はすばやくテレビに視線をうつした。

そしてわくわくした表情でテレビを食い入るように見つめる。

…こんな怖そうなのみて大丈夫なのか…??

オレはそう心配しながらテレビを見る望月を眺めていた。

そして『本当にあった怖い話』が終わり…

時刻はすでに9時をまわっていた。

ちなみに隣にいる望月はかちこちに固まっている。

「望月、大丈夫か??」

オレは望月の顔をのぞきこんだ。

「は…い…大…丈夫…です…」

望月は固まったままそう答える。

…いや、大丈夫じゃねぇだろ。

大体はじめの話から今までずーっと固まってたし…

オレ、今から風呂はいらしてもらおうかと思ってたんだけど…

こんな望月を一人残してても大丈夫なのか…??

「えっと…オレ、風呂貸してもらいたいんだけど…大丈夫か?」

「ええ、大丈夫です…」

…大丈夫じゃなさそうだな。

まぁとりあえず超特急で入ってきたら大丈夫だろ。

オレはそう思い、荷物から着替えを取り出してリビングをでた。

そして急いで風呂に入り、リビングに戻る。

オレがリビングの扉をあけると、望月がびくっと体を震わせた。

「望月、大丈夫か?」

望月は振り返るとほっと安心したような顔をした。

…多分1人でいたのが相当怖かったんだろうな…

望月を1人で部屋にいさせたのを後悔しながらオレは望月の隣に座った。

望月はなぜかうつむく。

…そんなに怖いのか??

「…おまえ、やっぱりあんな怖いの見ない方が良かったんじゃねぇか?」

あれってオレが見ても結構怖かったし…

『バイオ・〇ザード』でも怖がる望月には少し刺激が強すぎたんじゃ…

「いえ、全然大丈夫ですから!」

望月は顔をあげて笑顔でそう言った。

それを見て少し安心する。

…なんだ、そこまでおびえてるってわけじゃないんだな。

「そうか?ならいいけど」

オレはそう言って望月に笑い返した。

そしてオレ達は少しの間談笑して寝ることにした。

「それでは…おやすみなさい」

「おやすみ」

軽いあいさつをして、望月に言われた部屋に入る。

どうやらこの部屋は望月の母親と父親の部屋らしい。

ベッドはダブルベッドだった。

…望月の母親と父親は仲良いんだな。

そう思いながらオレはベッドに入った。

そして眠ろうとした時…

「響くん！」

急に望月の声がしたかと思うと、部屋の扉が勢いよく開く音がした。

オレは驚いて、上半身を起こして扉の方を見る。

「望月…！？どうしたんだよ？？」

「いや…その…やっぱり1人じゃ眠れなくて…」

望月はうつむきながら恥ずかしそうに言った。

「あの…申し訳ありませんが一緒に寝かせていただいてもよろしいでしょうか？？」

こいつは…

怖いからって、自分のことを好いている男の隣で寝れるのか…??

本当にこいつは無防備すぎる。

何もしねぇっていう自信はねぇぞ…??

「別に…いいけど…」

「本当ですか??それじゃぁ…」

望月はうれしそうにそう言ってオレの隣にもぐりこんできた。

「ったく…あんなの見るからだろ??」

そう言ってから、望月の顔がほんのすぐそばにあることに気がついた。

顔が火がでそうになるくらい熱くなる。

「はやく寝ろよ…!!」

オレは慌てて望月に背を向けて言った。

そしてオレも早く寝てしまおうと目を閉じてみた。

だけどすぐそばに望月がいると思うだけで、オレは眠りにつけなかった。

…やっぱ、ダメだ。

「望月…」

オレは小さな声で名前を呼んでみた。

返事は返ってこない。

思い切って振り返ってみる。

「……寝たのか」

望月はすでにすやすやと小さな寝息を立てて眠っていた。

そっと、顔を近づけてみる。

このまま襲ってしまおうか…

ふとそんな考えが頭によぎった。

けど、すぐにそんな気はなくなった。

そして望月の髪をなでる。

あどけない、子供みたいな寝顔。

望月が眠っているのを邪魔したくない。

そう思い、オレは望月に背を向けた。

そして目を閉じた時…

「こ…わい…」

後ろで望月が何かをつぶやいた。

振り返ってみると、望月はおびえたような表情をしていた。

ほんの少し、涙が目の端に光っている。

「幽霊が…怖いです…」

望月はまた怯えた声でそう言う。

…さっきのテレビの夢でも見てるのか??

オレはふっと笑った。

そして望月の耳元で囁く。

「大丈夫だよ。オレがいるから」

望月の表情が少し柔らかくなった。

そしてオレがまた望月に背を向けようとした時、

「響くん…好き、です…」

ふいに望月がそう言った。

ドキッ

心臓が強く鳴る。

オレは望月に顔を近づけた。

「オレも…好き、だよ」

小さな声でそうつぶやいた。

そして思いきって望月の瞼にキスしてみた。

顔が熱くなる。

…オレ、何してんだろ??

……まぁ、これくらいはいいよな。

そう思い、オレは目を閉じた。

★15話　宿泊★響ｓｉｄｅ（後書き）

最後のあたりを書いていたときに急にその内容が全部消えてしまいました…
また一から書くの大変でしたよ…
ちなみに火曜日はパソコンの不具合で更新できませんでした（T―T）

☆16話　やきもち☆詩織ｓｉｄｅ

まだまだうだるような暑さが続いていますが…

とりあえず、9月になりました。

夏休みは終わりを迎え、新学期が始まっています。

事件（？）が起きたのは、新学期を迎えて1週間程がたったときのことでした。

私はいつものように響くんと一緒に帰っていました。

「それでですね、その人が私にぶつかったのに私その人に睨まれたんですよ！どう思います！？」

「まぁ、そんな奴ってよくいるからな…」

と、そんなふうに私達がたわいもない話をしていた時…

「詩織？」

ふと誰かに名前を呼ばれた。

どこか懐かしい声。

えっと…

誰でしたっけ？？

声のした方を見てみるとそこには懐かしい姿があった。

「伊吹??」

伊吹は私を見て顔を輝かせた。

「やっぱり詩織だ!ひさしぶり!」

「ひさしぶりですね!」

私もひさしぶりに会えたことがうれしくって笑顔で答えた。

「小学校の時以来だよな?なんかすっげぇ変わってたから詩織かどうかわからなかったんだけど、声かけてみて良かったよ」

「私も一瞬誰かと思いましたよ…だって伊吹ったらすっごく背ものびてますし、顔も大人っぽくなってるんですもの」

本当にあのときは私よりも小さくて子供っぽかったのに…

いつの間にか私よりすごく背が高くなってますし…

もう『子供』じゃないって感じですね!

「望月、誰?」

響くんが怪訝そうな顔でそう聞いてきた。

あっ、そうでした…

響くんは伊吹のことを知らないんでしたね…

「えっと、この人は原田伊吹っていって私の幼なじみです」

「あっ、もしかして詩織の彼氏？」

伊吹は響くんを見て言った。

えっと…

私は心配しながら響くんを見た。

もし否定されたらどうしましょう…

だけど心配する必要はなかった。

「そうだけど」

響くんがきっぱりとそう言ってくれたから。

心臓の鼓動が少し強く鳴る。

私は思わず小さな笑顔をうかべた。

「ふーん。名前、なんていうの？？」

「滝沢響」

響くんは短くそう答えた。

伊吹はにこっと響くんに笑いかける。

「そう。んじゃ滝沢！よろしくな！」

「……」

響くんはなぜか返事をせず、軽く伊吹を睨んだ。

…えっと、

何でしょうか？

この空気は…

「んじゃオレ急いでるし…あっ、詩織！とりあえずアドレス交換しようぜ！」

伊吹はそう言ってケータイをとりだした。

「は、はい！」

なんとなくこのまま伊吹といると響くんの機嫌が悪くなりそうなので私は急いでケータイをとりだした。

「…よし！それじゃぁな、詩織！！」

アドレスの交換が終わり、伊吹はそう言って笑顔で私に手をふった。

私も手を振り返す。

そして伊吹の姿が見えなくなった後…

「…仲、良かったのか？」

ふいに響くんがそう聞いてきた。

「あ、その…」

じ、実は…

伊吹は、私の初恋の相手だったんですけど…

そんなこと、響くんには絶対に言いたくありませんし…

えっと…

なんて言えばいいんでしょうか…？？

私が戸惑っていると響くんはにこりと私に頬笑みかけた。

「別に気にしてないから。嫌なら答えなくていいぞ」

それを聞いて、私はほっと安堵の息をもらした。

そして同時になぜか小さな苛立ちを覚える。

響くんは…

私が他の男の子と仲が良かったなんて聞いても平気なんですか…？？

「…伊吹は私の初恋の相手です」

私は正直にそう答えた。

…響くんはどんな反応をするんでしょうか？

私はほんの少し期待をした。

何を期待したのかは分からない。

だけど響くんの反応は私の期待とは大きくかけはなれたものだった。

「ふーん。意外だな」

響くんはそう言って笑った。

…なんでそんな風に笑えるんですか…！？

「そうですか？？」

私はたしかな苛立ちを覚えながらも、にこりと笑った。

…なんで私もこんな風に笑っているんでしょうか…？？

その日の帰り道、私の頭の中はもやもやとした気持ちでいっぱいだった。

そしてその日の夜。

プルルルル…

ケータイの着信音が鳴った。

響、くんでしょうか…??

そう思いながらメールを確認してみる。

それは伊吹からだった。

ほんの少しがっかりする。

そう思った自分に驚いた。

小学校のころは、伊吹からの電話が飛びあがるほどうれしかったのに…

私の心にはいつの間にか、本当に響くんしかいなくなったんですね。

そう思って小さな笑顔をうかべた。

そして伊吹からのメールをひらいてみる。

【明日、学校の前で待ってるから一緒に帰ろうぜ!】

えっ……??

メールの内容に、私は思わず目を見開いた。

一緒に帰ろうと言われましても…

私は響くんと一緒に帰りますし…

【すみません。私、響くんと一緒に帰るので…】

本文を打ち終わり、送信ボタンを押そうとして思いとどまった。

…もし、私が伊吹と一緒に帰ったなら…

響くんは、やきもちを焼いてくれるでしょうか…??

私は元の文を消して、新しい文を打ちなおした。

【いいですよ】

そして送信ボタンを押す。

ケータイを閉じて、それを胸の前に当てる。

すいません、響くん…

だけど私、どうしても響くんにやきもちをやかれてみたいんです。

こんな勝手な私でごめんなさい…

そして次の日。

「すいません。私、今日は伊吹と帰る約束をしてしまったんです」

放課後、私は響くんにそう言って頭を下げた。

響くんはほんの少し目を見開き、小さな笑顔をつくった。

「ああ、分かった」

その反応にまた、小さな苛立ちを覚える。

響くんは私が他の男の子と帰るって言ってもやきもちをやいてくれないんですね…

やっぱり響くんはその程度しか私のことを思ってくれていないってことですか??

私は響くんにさようならと頭を下げると教室をでた。

そして外に出てみると、校門の前に伊吹が立っていた。

そして私を見て片手をあげる。

「よっ、詩織！」

「遅くなってもうしわけありません…」

私がそう言うと伊吹はにっこりと笑った。

「全然遅くなんかなってねぇよ??それじゃ、行こうか！」

私は伊吹と並んで歩きはじめた。
そして駅につくまで、私は伊吹と小学校のころの話に花を咲かせた。
「そういえば、おまえってオレのこと好きだったんだろ？」
ふいに伊吹がそう言った。
思わず心臓の鼓動が強く鳴る。
「え、ええ…そうですよ…？？」
私がそう答えると、伊吹は照れたように笑った。
「実はオレも詩織のことが好きだったんだぜ？でも詩織と中学離れちまうし…あきらめてたんだ」
そして伊吹は急に真剣な顔で私を見た。
「…でも、また詩織と会えた。オレ思ったんだ。それって運命ってやつじゃないのかって」
「えっ…？？」
伊吹は少し頬を染めた。
そしてまっすぐに私の目を見つめて言う。
「オレ、まだ詩織のことが好きなんだ」

ドキッ

心臓の鼓動が高鳴る。

ど、どうして今頃そんなこと言うんですか…??

「で、でも…私には響くんがいますし…」

「オレ、昨日見て思ったんだけど、詩織とあいつって合ってないと思うぞ?」

「……!!」

ズキッ

胸が締め付けられるように痛くなった。

たしかに…そうかもしれませんが…

そんなにはっきり言われると…

「だってあいつ目つき悪いし…なんか不良っぽいし…詩織には悪いけど、詩織とは合ってないと思う」

そうなんでしょうか…??

やっぱり私と響くんは合っていないんですか…??

…ですけど、

「だからって、私は響くんとお付き合いしてはいけないんですか？」

私は伊吹にそう尋ねてみた。

「いや…そういうわけじゃねぇけど…」

「なら、いいじゃないですか。私はたしかに響くんと合ってなんかいないかもしれませんが、それでも響くんが好きなんです」

伊吹は目を見開いて、そして悲しそうに笑った。

「…そうか。なんか悪いな、変なこと言って」

「…私こそ、すいません」

少しの沈黙が続く。

しばらくして、伊吹が沈黙を破った。

「…よし！んじゃオレ、おまえと滝沢を応援してやるよ！今、なんか悩み事とかねぇか？？」

「え…？？」

悩み事、ですか…？？

……響くんが私にやきもちを焼いてくれないこと……

ふいにそんな考えが頭にうかんだ。

ですけど…

たった今、きっと私が傷つけてしまった伊吹にそんなことを言うのは気が引けます…

私が戸惑っていると伊吹はにっと笑って言った。

「オレのことなんか気にしなくていいからさ！なんでも言えよ！！」

……伊吹は優しいですね。

なんとなく、伊吹は少し響くんに似ている気がします。

そんな伊吹に…

私は甘えてしまってもいいのでしょうか…？？

少し悩んで、私は口を開いた。

「響くんが、私にやきもちをやいてくれないんです」

「やきもち？？」

私はこくりとうなずいた。

「響くん、私の初恋の人が伊吹だって言っても普段どおりなんですよ？それに今日だって…伊吹と一緒に帰るって言っても普段どおりでしたし…」

私が響くんの立場なら、絶対にやきもちをやいてしまうのに…

やっぱり、こんなにも響くんを好きなのは私だけで、響くんは私のことをそこまで好いてはくれていないということなんですか…??

「…んじゃ、オレが滝沢にやきもちをやかせる方法教えてやるよ」

伊吹はにやりと笑ってそういった。

「やきもちをやかせる方法…??」

伊吹はうなずいた。

そして私の耳元である言葉をささやく。

私は目を見開いた。

「そんなこと…とても言えませんよ…」

「でも、そう言ったら確実にあいつはやきもちをやくと思うぜ??」

そう言って伊吹はまたにやりと笑った。

次の日。

私は響くんと屋上で昼食をとっているときに、昨日伊吹に言われたことを実行してみることにした。

「あの、響くん…」

「何??」

響くんは焼きそばパンの袋を開けながら言った。

…本当に、こんなこと言っていいんでしょうか…??

ですけど…

私、響くんにやきもちをやいて欲しいですし…

これでやきもちをやいてくれなかったら、響くんはそこまで私のことを好きじゃないってことですよね…??

「…私、昨日伊吹とホテルに言ったんです」

ピクッ

響くんの肩眉が動いた。

「…どういうこと?」

そしていつもよりも低い声で言う。

ビクッ

思わず私は体を震わせた。

「い、いや…そ、その…!?」

急に響くんに両手を押さえつけられた。

響くんはそのまま私をフェンスに押しつける。

「やっ…響、くん…??」

「おまえ、それであいつと何したんだ??」

響くんは低い声でそう言い、私を睨みつけた。

……!!

瞳に涙がたまる。

響くんが怖いと感じた。

「い、いや…その、さっきのは冗談です…すいません…」

そう言えば、優しい響くんは許してくれると思った。

だけど響くんは私を押さえつける手をはなそうとはしない。

「本当は冗談なんかじゃないんだろ?正直に言えよ」

響くんはそう言って私の首筋に乱暴にキスした。

「あっ…!」

驚いて、思わず高い声がでる。

「こういうこと、されたんじゃねぇの？？」

そう言ってふっと笑う。

だけどその目はまったく笑っていなかった。

「ち、違います…！！伊吹とはそんなのじゃありませんっ！」

「あいつのこと、呼び捨てで呼ぶなよ！」

響くんはそう怒鳴った。

体がびくっと震える。

「ご、ごめんなさい…」

私が謝ると、響くんはにこっと笑った。

そして優しく私の髪を撫でる。

「別に、怒ってねぇよ…？？」

響くんは優しくそう言ってくれた。

その声を聞いて、私は響くんが許してくれたんだと思った。

ほっとして安堵の息を漏らしたとき、

「その変わり、オレのことも呼び捨てで呼んでみろよ」

そう言われて、響くんはまだ全然私のことを許してくれていないことに気がついた。

「えっ…!?あっ！」

響くんは私の耳たぶを甘がみした。

そして耳元で囁く。

「響って呼んだら許してやるよ…」

甘い、甘い声に思わずくらっとしてしまう。

だけど、それは本当の響くんの声じゃなかった。

そして私は悟った。

私は…

たった一言で、響くんをこんなにおかしくなるくらいに傷つけてしまったんですね…

きっと響くんは私を困らせないように、無理して普通にしててくれたのに…

無理して笑っててくれたのに…

私…

最低です…

「もっとして欲しいから呼ばないのか？」

響くんはそう言って、私の首筋をなめあげた。

「あぁっ…！」

また高い声がでて、涙があふれる。

響くん…

私は、どうすれば許してもらえるんですか…？？

どうすれば、もとの優しい響くんに戻ってくれるんですか…？？

シュルッ

響くんが私の制服のリボンをはずした。

そして胸元のボタンをあける。

「い…や…」

私は震える声でそうつぶやいた。

そんな私を響くんはきっと睨む。

「おまえが悪いんだ」

そう一言言って、また作業を続ける。

いやです…

私…

こんな響くん、嫌です…！

「響くん…お願いです…」

頬に涙が伝った。

響くんの手がぴたりと止まる。

「元の…優しい響くんに戻ってください…」

響くんがほんの少し、目を見開いた。

そして驚いたように私を見る。

「もち…づき…??」

響くんの顔がだんだんと赤く染まっていった。

そして慌てて私を押さえつけていた手をはなす。

良かった…

いつもの、響くんです…

私は安心して、思わずそこに座り込んだ。

ぽろぽろと涙があふれ出てくる。

「響くん…ごめんなさい、ごめんなさい…私…」

どれだけ謝ったらいいのか分かりません。

私のせいで響くんがあんなふうになるほど傷つけてしまって…

響くんはそっと私の頭をなでた。

「オレも…急に変なことしてごめん…」

…どうして響くんが謝るんですか??

全部全部私が悪いのに…

響くんは全然悪くなんてないのに…

「私、ただ、響くんにやきもちを焼いて欲しくて…」

私がそう言うと、響くんは目を見開いた。

そして優しい笑顔を私に向ける。

「…なんだ、そんな理由か」

響くんは頬を染めると、少しの間を置いて小さな声で言った。

「……心配しなくても、やきもちなんてあいつがお前の名前を呼んだときからずっとやいてたよ」

私は驚いて、目を見開いた。

そしてほっと安堵する。

良かった…

やきもちをやいてくれるってことは響くんは私のことをちゃんと好きだってことですよね??

さっきは怖い思いしましたけど…

私、その気持ちを知ることができて、すごくうれしいです。

☆１６話　やきもち☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

響が詩織に何にもしてくれないので、ちょっとこんな話にしてみました。
こんな風にでもしなくちゃ何もできなさそうなので…

★16話　やきもち★響ｓｉｄｅ

夏休みが終わり、新学期が始まった。

そして新学期が始まって一週間くらいがたった。

「それでですね、その人が私にぶつかったのに私その人に睨まれたんですよ！どう思います！？」

「まぁ、そんな奴ってよくいるからな…」

オレはいつものように望月とどうでもいいような話をしながら帰っていた。

いつもどおりの帰り道。

だけど、今日は少し違うことがおきた。

「詩織？」

望月の名前を呼ぶ、男の声。

初めは近くに望月と同じ名前のやつがいるのかと思った。

だけど望月は声のした方を見て、目を見開いた。

「伊吹？？」

そして知らない名前を呼ぶ。

そこにいたのはオレ達と同い年くらいのどこにでもいそうな普通の男。

伊吹と呼ばれたその男は望月を見て顔を輝かせた。

「やっぱり詩織だ！ひさしぶり！」

「ひさしぶりですね！」

望月もうれしそうに笑う。

望月がオレ以外の男に笑顔を見せたことに、ほんの少しの苛立ちを覚えた。

「小学校の時以来だよな？なんかすっげぇ変わってたから詩織かどうかわからなかったんだけど、声かけてみて良かったよ」

「私も一瞬誰かと思いましたよ…だって伊吹ったらすっごく背ものびてますし、顔も大人っぽくなってるんですもの」

オレのことはおかまいなしで、２人は楽しそうに話し出した。

望月…

オレがいること忘れてねぇか…？？

大体こいつ誰だよ。

望月の知り合いなのか？？

「望月、誰？」

そう尋ねてみると、望月ははっとしたように言った。

「えっと、この人は原田伊吹っていって私の幼なじみです」

「あっ、もしかして詩織の彼氏？」

原田はオレを見て、少し驚いたようにそう言った。

「そうだけど」

オレはきっぱりとそう言った。

だから望月に気安く話しかけるな。

そう言ってしまいたかった。

だけどその言葉をぐっとのみこむ。

「ふーん。名前、なんていうの？？」

「滝沢響」

原田はじーっとオレを見て、急ににっと笑った。

「そう。んじゃ滝沢！よろしくな！」

「……」

オレは何も答えずに、軽く原田を睨む。

オレはなんとなく望月と親しかったそうなこの男に敵意を覚えていた。

ほんの少し、気まずい空気になる。

原田はそれにたえられなくなったのか、ふと望月に言った。

「んじゃオレ急いでるし…あっ、詩織！とりあえずアドレス交換しようぜ！」

そして鞄からケータイを取り出す。

「は、はい！」

望月も慌てたようにケータイをとりだした。

オレは2人がアドレスを交換する様子を、止めるわけでもなくただ眺めていた。

「…よし！それじゃぁな、詩織！！」

アドレスの交換が終わり、原田はにっと笑って望月に手をふる。

望月も手を振り返した。

その様子を見て、なぜか苛立ちが大きくなる。

…なんであいつ、望月のこと名前で、しかも呼び捨てで呼んでるんだよ…

しかも望月もあいつのことを名前で、しかも呼び捨てで呼んでるし…

こいつら、どういう関係だったんだ?

そのことがたまらなく気になった。

「…仲、良かったのか?」

原田の姿が見えなくなったあと、望月にそう尋ねてみる。

「あ、その…」

望月は返事にとまどった。

なんだよ…

オレに言えないような関係だったのか…??

嫌な感情が頭の中を渦巻く。

オレはなんとかそれを振り払った。

…いや、別に望月とあいつがどんな関係だったかんてどうだっていいだろ?

今、望月はオレのことを好いてくれているんだから。

オレはなんとか顔に笑顔をはりつけた。

「別に気にしてないから。嫌なら答えなくていいぞ」

望月はほんの少し目を見開き、少しの間をおいて小さな声でつぶやいた。

「…伊吹は私の初恋の相手です」

ズキッ

なぜか胸に突き刺さるような痛みが走った。

初恋…の、相手??

また、もやもやとした感情が頭の中を渦巻く。

いや…、それって昔の話だろ??

……でもオレの初恋は望月だ。

別にいいじゃないか。

さっきも思った通り、今の望月が好きなのはきっとオレなんだ。

……だけど、望月にはたしかに原田のことが好きだったころがあったんだ。

……もしかしたら、またそうなるかもしれない。

……なんで、あんな普通のやつが『初恋の相手』なんだよ……
……

思わずそう思ってしまった自分に嫌気がさした。

そしてそんな気持ちを望月に悟られないようにできるだけ普通を装った。

「ふーん。意外だな」

そう言って無理に笑顔を作る。

「そうですか??」

望月はそう言ってにこりと笑った。

その後の帰り道、オレ達の間にはなぜか気まずい空気が流れていた。

次の日の放課後。

「すいません。私、今日は伊吹と帰る約束をしてしまったんです」

帰ろうとした時に、急に望月にそうきりだされた。

原田…と…??

一緒に帰るって…

なんでだよ……??

もしかして昨日、オレが知らない間にあいつと望月との間に何か会ったのか…??

もしかして…

望月はまた、原田のことを……??

そんな考えがふと頭にうかんだ。

そしてすぐにその考えを振り払う。

…いや、きっと望月は原田と小さい頃の話とかをしたいだけなんだ。

一日くらい…

いいじゃないか…

「ああ、分かった」

オレはそうって笑顔をつくった。

ここで怒ったような素振りを見せたら望月を困らせてしまうだけだ。

もし、これから先ずっと原田と帰るとかいいだすようなら止めればいい。

オレはそこまで望月を縛りつけようとは思わない……

望月はオレにさようならと頭を下げると、教室を出ていった。

その後ろ姿を見送りながら、ふと思う。

……本当に??

本当は、望月をオレだけのものにしてしまいたいんじゃないのか…??

オレから離れられないように縛りつけてしまいたいんじゃないのか…??

だってオレは、望月が他の男と話しているだけでいらいらするんだ。

望月が他の男に笑顔を向けているのをみると、その男が殺したいほど憎いと思ってしまうんだ。

……いや、

男だけじゃ、ないかもしれない…

本当は、他の誰に対しても……

そう思った自分に驚き、オレは頭をかかえた。

「…オレ、何考えてんだよ…??」

今まで気付きもしなかった自分の強い独占欲に、強い嫌悪感を覚えた。

次の日の昼休み。

オレは望月と屋上で昼飯を食べていた。

「あの、響くん…」

今までなぜか黙り込んでいた望月が急に口を開く。

「何??」

もしかして…

原田のことが好きになったから、別れてくれとかいいだすんじゃねぇだろな…??

オレは焦る気持ちをおさえて、なんとか平静を装いながら言った。

「…私、昨日伊吹とホテルに言ったんです」

……!!!!

ホ、テル……??

望月…

もしかして、昨日原田と……

プチッ

オレの中で何かが切れる音がした。

同時に自分でも嫌悪してしまうほどの強い独占欲をおさえられなくなる。

「…どういうこと？」

望月がビクッと体を震わせた。

「い、いや…そ、その…！？」

戸惑う望月の両手をおさえつけ、そのまま望月をフェンスに押しつける。

「やっ…響、くん…？？」

怯えた声。

怯えた表情。

いつものオレなら、こんな望月の表情を見るだけで罪悪感を感じる。

だけど、今オレの頭の中にはひとつの言葉だけが渦巻いていた。

……オレは望月を信じていたのに、望月はオレを裏切った……

「おまえ、それであいつと何したんだ？？」

オレはそう言って望月を睨んだ。

望月の瞳に涙がたまる。

「い、いや…その、さっきのは冗談です…すいません…」

望月は小さな声でそう言った。

だけど、オレは望月をおさえる手をはなそうとはしなかった。

本当に冗談なのか??

もし冗談だとしても、そんな冗談言っていいと思っているのか??

「本当は冗談なんかじゃないんだろ?正直に言えよ」

オレはそう言って望月の首筋にキスした。

「あっ…!」

望月の体がびくっと震え、いつもと違う高い声をだす。

その声が魅力的で、そしてそれを、いや、それ以上の声を原田が聞いたのかもしれないと思うと、嫌な感情で頭がいっぱいになる。

「こういうこと、されたんじゃねぇの??」

オレは小さく笑いながら言った。

望月は慌てて言いかえす。

「ち、違います…！！伊吹とはそんなのじゃありませんっ！」

望月が原田の名前を呼び捨てにしたことに強い怒りを感じた。

「あいつのこと、呼び捨てで呼ぶなよ！」

そう望月を怒鳴りつける。

「ご、ごめんなさい…」

望月は体を震わせて、小さな声で謝った。

…謝れば、許してもらえるとでも思っているのか??

オレは笑顔をつくった。

そして望月の髪をなでる。

「別に、怒ってねぇよ…??」

怒っているわけじゃない。

ただ、おまえがオレだけのものだっていう自覚がないから…

気付かせてやろうとしているだけだよ。

「その変わり、オレのことも呼び捨てで呼んでみろよ」

望月は小さく目を見開いた。

「えっ…！？あっ！」

オレが望月の耳たぶを甘がみすると、また望月は高い声をだす。

「響って呼んだら許してやるよ…」

耳元でそう囁いてみると、望月の表情が魅力な表情に変わる。

だけど望月はオレの名前を呼ぼうとはしなかった。

なんだよ…

おまえはオレの彼女なんだろ？

それなら別に名前くらい呼び捨てで呼べるだろ…？？

……ああ、そうか。

「もっとして欲しいから呼ばないのか？」

オレは望月の首筋をなめあげた。

「あぁっ…！」

オレは望月の声に夢中になった。

もっともっと、その声が聞きたくなる。

オレは望月の制服のリボンをはずした。

そして望月の胸元のボタンに手をかける。

「い…や…」

望月は震える声で、そうつぶやいた。

オレはそんな望月を強く睨む。

「おまえが悪いんだ」

おまえが変なこと言うから…

おまえがオレの気持ちも知らずにあんな奴と親し気にするから…

オレは、気付きたくもない感情に気がついちまったんだよ。

全部全部、おまえのせいだ。

オレは作業を続けた。

望月の胸元が少しずつ露わになってく。

「響くん…お願いです…」

望月はうったえるように言った。

その頬に涙が伝う。

思わず、オレは手を止めた。

「元の…優しい響くんに戻ってください…」

望月のその言葉が、頭の中に響いた。

……オレ、何やってるんだ??

「もち…づき…??」

オレは自分がしていたことに驚き、望月を見た。

望月は顔を赤く染めて、頬に涙を伝わせている。

そしてオレの手で、少し開かれた胸元。

顔が、沸騰するほどに熱くなった。

慌てて望月を解放する。

望月は崩れ落ちるようにそこに座りこんだ。

「響くん…ごめんなさい、ごめんなさい…私…」

そして涙をぽろぽろと流しながら謝罪の言葉を繰り返す。

なんで…

なんでおまえが謝るんだよ……??

オレは泣きながら謝る望月の頭をなでた。

「オレも…急に変なことしてごめん…」

でも、止められなかったんだ。

いつもなら絶対あんなことできないのに…

望月がオレ以外のやつと寝たかもしれないと思うと、嫉妬心を止められなかったんだ。

オレって…

本当に最低なやつだよな……

「私、ただ、響くんにやきもちを焼いて欲しくて…」

望月は涙声でそう言った。

驚いて、思わず目を見開く。

それじゃ…

原田と一緒に帰ったのも、さっきあんなこと言ったのも…

オレは安心して、望月に笑いかけた。

「…なんだ、そんな理由か」

そんな余計なことしなくても…

「……心配しなくても、やきもちなんてあいつがお前の名前を呼ん

だときからずっとやいてたよ」

あいつが、おまえの名前を呼び捨てで呼んだ時から。

おまえが、あいつに笑いかけた時から。

望月は目を見開いて、そして安心したように笑った。

その笑顔を見て、オレは思った。

…もう、絶対に望月にこんなことしない。

絶対に望月を傷つけるようなまねはしない。

そしてそれを必ず守りとおそう。

それを心に誓った。

★16話　やきもち★響ｓｉｄｅ（後書き）

……自分で読み返してみて、まったく意味がわかりませんでした。

☆17話　文化祭☆詩織ｓｉｄｅ

「それじゃ今から文化祭でする劇の登場人物を決めたいと思います」

学級委員長の蓮見サンはそう言って小さな紙をクラスのみんなに配り始めた。

そうです。

もうすぐ、文化祭が始まります。

私達の学校では各クラスごとに舞台の上で催し物をするらしく、私達のクラスは劇をすることになりました。

内容は『眠り姫』です。

ちなみに登場人物は喧嘩がないように投票で決めます。

今配られた紙に『眠り姫』の登場人物、【眠り姫】、【王子様】、【悪い魔法使い】に相応しい人を書いて、一番票が多かった人がその役になります。

他にも１２人の魔法使いの役や、国王夫婦の役などその他もろもろの役もあるのですが…

さすがにそこまで投票するのは時間がかかるので、その役はやりたい人達がやることに決まりました。

私はできたら大道具や小道具など、目立たないことをしたいんです

がね…

とりあえず、私はシャープペンシルをとった。

まず【眠り姫】の役ですね。

やっぱりお姫様と言えば…

笹川サンでしょうか??

あっ、笹川サンっていうのはこのクラスで一番の美少女のことです。

本当に美人でスタイルもよくて、この学校で一番きれいなんじゃないかと思ってしまうほど可愛らしい方です。

そんな人がお姫様の役をやったらきっとすごく似合うでしょうね！

私は【眠り姫】の隣に、『笹川美空』と書いた。

次は【王子様】の役ですね。

王子様といえばやっぱり…

無意識に、チラッと横を見る。

響くんはすでに紙を折りたたんでぼーっとしていた。

きれいな横顔。

…やっぱり、王子様と言えば響くんしか思いつきません。

そう思い、私は【王子様】の隣に『滝沢響』と書く。

最後は…

【悪い魔法使い】ですか。

悪い魔法使いと言われても…

別に思い当たる方はいないのですが…

私は頭をひねって思い当たりそうな人を考えてみた。

だけどやっぱりそんな人はでてこない。

…別に、ひとつくらい空欄があってもいいですよね。

そう思い、私はその紙を折りたたんだ。

「それでは、後ろから票を集めてください」

蓮見サンの指示で、各列の一番後ろの席の方が票を集めていく。

そして票が全部集まったところで開票が始まった。

「…よし、それじゃ結果を発表します」

しばらくしてから、副委員長の今泉サンが票を集計した紙を見ながら言った。

「【眠り姫】は、笹川美空サン」

教室中が歓喜の声でいっぱいになった。

笹川サンもうれしそうにとてもきれいな笑顔をうかべる。

「【王子様】は、滝沢響クン」

キャーッと、主に女の子が歓声をあげた。

「えっ…!?オレ??なんで??」

響くんは驚いたように言った。

なんでって…

それは響くんがとっても【王子様】役に相応しいからですよ!

「良かったですね!響くん!」

私がそう言って響くんに笑いかけると、響くんは困ったような表情をした。

「別にオレ、そんな役したくねぇんだけど……」

「それでも、投票で決まったんですからやらないとですよ!!」

私達がそんな風に話している間に、次の名前が読み上げられた。

「【悪い魔法使い】、…望月詩織サン」

……へっ??

私は耳を疑った。

「私、ですか…??」

くすくすと小さな笑い声が耳に入る。

私が…

悪い、魔法使いの役ですか??

そんな……

私そんな役、とてもできません……

自分が他のみんなにそんな風に思われていたのかと思うと、どっと悲しい気持ちが押し寄せてきた。

私がうつむいていると、響くんは怒ったように言った。

「おい、なんで望月がそんな役なんだよ??」

シン……

教室が静まり返った。

「そうよ!絶対詩織にそんな役なんか合ってないって!ねぇ?」

「うん、そうだよ！詩織ちゃんには絶対にできないと思う！」

優香ちゃんと楓ちゃんも大きな声でそう言う。

「でも、もう決まったんだからそれでいいじゃん」

1人の女の子がぽつりと言った。

響くんがガタッと大きな音を立てて、席を立つ。

「おまえ、自分がそんな役にされてもいいのか…？？」

教室の空気がこおる。

私のせいでこんな風な空気になっている。

そう思うとたまらなくなった。

「響くん！座ってください！」

響くんは驚いたようにわたしを見る。

「でも、おまえ…」

「いいんです。みなさんに選ばれたんですから、喜んでやりませんとね」

私はそう言って響くんに微笑みかけた。

響くんは納得できないような顔をしながらも席に座る。

…ごめんなさい、響くん。

私、響くんが私をかばってくれたことはとてもうれしいです。

ですけど、結局誰かがこの役をしなければいけないんですよ?

それなら、私のわがままでこんな嫌な役を押し付けるくらいなら、

私がこころよく引き受けた方がいいんです。

休み時間。

「私って、そんなに性格が悪そうに見えるんでしょうか…??」

私は優香ちゃんと楓ちゃんに向かってぽつりと言った。

だって…

やっぱり、ちょっとショックですよー…

私、実は【悪い魔法使い】の役に向いているんでしょうか…??

「いや!全然向いてない!むしろ一番かけはなれてるって!」

優香ちゃんは怒ったように言った。

「ホント、なんで詩織がそんな役にされたか全然分かんないっ!」

「…あれじゃないかな？」

楓ちゃんがためらうようにぽつりと言った。

…？？

「ほら、滝沢クンって最近すっごく女の子に人気あるでしょ？それで、みんなきっと詩織ちゃんに嫉妬してるんだよ」

「嫉妬…ですか？？」

そんな……

私、女の子達にそんな気持ちを抱かれていたなんて…

「ああ、分かるかも…まぁ、別に気にしなくても大丈夫だからねっ！！」

優香ちゃんはそう言ってぽんっと肩を叩いてくれた。

「そうそう！もし詩織ちゃんが万が一いじめられちゃいそうになっても私達が絶対に守ってあげるから！」

「優香ちゃん…楓ちゃん…」

2人の優しさに、とても感激してしまう。

ありがとうございます。

2人にそう言ってもらえると、私元気がでてきました。

…よし！

【悪い魔法使い】の役、難しいと思いますががんばります！

そして放課後の練習時間。

文化祭まで時間がないので、いきなり劇の練習が始まった。

ちなみに監督は蓮見サンです。

「よし！それじゃ祝宴の途中、悪い魔法使いが入ってくるところから始めようか！」

蓮見サンが合図をだす。

私は慌てて台本を見た。

ええと…

『祝宴に呼ばれなかったことに怒りを感じている』

どんな表情をすればいいんでしょうか…？？

とりあえず私は自分にできる精一杯の悪そうな怒りの表情を作ってみた。

そしてセリフをできるだけ意地悪く言う。

「お、王女は糸車の針に刺されて亡くなってしまうでしょう…！！」

「カーット！！」

蓮見サンが大声で言い、劇が止まる。

「なんで【悪い魔法使い】が敬語なんだよ！もう一回台本読み直してもう一回！」

へっ？？

わ、私ですか…！？

私は慌てて台本を読み直した。

ええと…

正しくは、『王女は糸車の針に刺されて死ぬだろう』ですね…！！

よし、覚えましたよ！

「お、王女は糸車の針に刺されてお死にになるだろう…！！」

「だから違う！！」

そのあとも、私は蓮見サンに怒られながら何回もやり直しをさせられた。

そして15回目くらいでついにあきらめてしまったのか、大きなため息をついた。

「うん、まぁいいや。それじゃ次の場面行こう！」

私がでない場面はスムーズに進んでいく。

私はそれを見ながらため息をついた。

…私、みなさんに迷惑をかけているだけになってます。

やっぱり私には【悪い魔法使い】の役なんてできないのでしょうか…？？

ぼーっとしているうちに、王子様が眠り姫に出会う場面になった。

…そういえば、響くんは王子様だったんですね。

ということは…

私は慌てて台本を読み直す。

キス…シーンがあります…

響くんが…

笹川サンと…？？

……いや、いくらなんでも演技なんですから！

本当にキスなんてしませんよね！

……ですけど…

私はもう一度台本を読み直してみた。

眠り姫と王子様は、最後に結婚するんですよね……？？

胸が、締め付けられるように痛くなる。

たとえそれが演技でも…

響くんの隣には、私じゃなくて、笹川サン。

胸の痛みがひどくなる。

…こんなことなら響くんが【王子様】の役になんか選ばれなかったらよかったのに。

私は思わずそう思ってしまった。

そして文化祭当日。

私は一応家でも学校でも一生懸命に練習しました。

今日はがんばって、精一杯その成果を出し切りたいと思います！

ちなみに私達のクラスの発表は４番目です。

他のクラスは合唱やバンドなど…

いろいろと楽しめる出し物をしていて、とても楽しむことができました。

そしてついに私達のクラスの番。

…すっごく緊張します。

私の出番は実はあまりないんですけど…

それでも大勢の人の前で何かをするっていうのはとても緊張しますね…

「望月、大丈夫か??」

本番前、響くんが声をかけてくれた。

「は、はい…それなりに練習はしてきたつもりですけど…」

ちゃんと、できるでしょうか…??

「そう。あとおまえ、その衣装全然似合ってないな」

響くんはそう言ってぷっと笑った。

「へっ…??そ、そうですか??」

そんなに笑ってしまうほど似合っていませんか!?

なんだか…

ほんの少しショックです…

響くんは…

私はあらためて響くんの姿を見た。

そして心臓が高鳴る。

響くんの衣装は、青い、豪華そうに見えるけど、シンプルな服。

それがあまりにも響くんに似合っていて、本当に王子様みたいだった。

「響くんは…」

「滝沢クン！詩織ちゃん！」

私の言葉をさえぎるように、笹川サンが私達の名前を呼んだ。

そしてこっちにかけよってくる。

「今日はがんばりましょうね！」

笹川サンそう言ってにこっと私達に笑いかけた。

私までドキッとしてしまうほど、きれいな笑顔。

眠り姫の衣装も、笹川サンには驚くほど似合っていた。

響くんと笹川サンが並んで立つと、2人のあまりのきれいさに心が奪われてしまう。

それほど響くんと笹川サンはお似合いだった。

私なんかよりも、ずっと……

笹川サンの方が、響くんに似合っている。

それなのにずうずうしくも響くんの隣にいる自分がとても恥ずかしいと思った。

ついに、劇が始まる。

私の出番はあっという間に終わり、響くんと笹川サンの出番になった。

王子様(ひびきくん)が眠り姫(ささがわサン)が眠るお城へとたどりつく。

王子様(ひびきくん)は眠り姫(ささがわサン)を見つけ、そっと眠り姫(ささがわサン)の髪をなでた。

「“なんて、美しい人なんだろう…”」

ズキッ…

ただのセリフだと、ただの演技だと分かっているのに、胸が痛くなった。

勝手な嫉妬心を抱いてしまう。

私はそんな気持ちを振り払った。

ついに王子様(ひびきくん)が眠り姫(ささがわサン)にキスする。

予定では、寸前で止めるはずだった。

それなのに…

響くんが笹川サンの唇の前で寸止めをしたとき、

笹川サンがほんの少し首をあげた。

響くんと笹川サンの唇が重なる。

「……！！」

ショックで、わけがわからなくなった。

瞳に温かい物があふれる。

「い…や…」

響くんと笹川サンがキスした。

その言葉だけが頭の中を巡る。

いたたまれなくなって、私はその場から逃げるように走った。

「詩織！？」

後ろから優香ちゃんの声が私を呼ぶ声がした。

それでも私は夢中で走った。

衣装を着替えることも忘れていた。

文化祭を見にきていた人が、走る私を不審げな目で見る。

でもそんなこと、まったく気にならなかった。

瞳からは涙がとめどなく流れ落ちる。

私は逃げ込むように屋上に行った。

そして壁を背にして座りこむ。

「あ…ひ、響くん…」

分かってる。

響くんもそんなことするつもりはなかった。

ですけど…

響くんが他の女の子とキスした。

その現実が、胸をしめつける。

私が、私が初めにしたかったのに…！！

どうして…

どうして笹川サンが……？？

どうしてですか…？？

たしかに響くんと笹川サンはお似合いかもしれません。

それでも…

それでも、響くんは私だけの響くんなのに……！！！！

私はしばらくそこで泣き続けた。

たくさん、たくさん泣いて、涙も枯れかけてきたころ…

「望月…！？」

聞きなれた低い声と一緒に、屋上の扉が勢いよく開いた。

「ひ、響くん……？？」

そこには、息を切らした響くんがいた。

枯れかけていた涙が、またあふれだす。

「ど、どうして…」

「どうしてって…こっちが聞きたいよ。おまえ、いきなりこんなとこきて一体どうしたんだ??結構探したんだぞ??」

響くんは泣いてる私を不思議そうに見ながら言った。

もしかして…

響くんは、分かってないんですか…??

「だって…響くんが、笹川サンと…!初めては…私が…!」

気持ちを伝えたいのに、涙のせいでうまく言葉にならなかった。

だけど響くんには大体意味が伝わったらしい。

私を見て、ほんの少し目を見開いた。

「おまえ…そんなこと気にしてたのか…??」

そんなことって…

私にとっては、すごく重要なことなんですよ…??

響くんはぽんっと私の頭を軽く叩いた。

「あんなの事故だよ。事故。だから気にしなくていいって」

響くんになだめられて、だんだんと涙が止まっていく。

やっと普通に話せるようになってから、私は口を開いた。

「…でも、事故だったとしても、響くんは笹川サンとキスしたじゃないですか…」

そのことは、消せない事実なんですよ??

響くんのファーストキスは、笹川サンに取られてしまったんですよ…??

「私…響くんの初めての相手になりたかったのに…」

つぶやくようにそう言うと、響くんは驚いたように頬を赤く染めた。

そして、私の体が何かに包まれる。

「…えっ??」

響くんに、抱きしめられていた。

驚いて、体中の血が顔に集中する。

心臓が早鐘のように早く鳴り響いた。

どうなっているんですか…??

どうして私は響くんに…

抱きしめられているんですか…??

「…オレ、こんなことしたのって初めてだ」

響くんは小さな声でぽつりと言った。

「……？？」

響くんはほんの少し、口を閉ざす。

そしてためらうように言った。

「…だから、オレの他の初めては全部おまえだから…さっきのことなんて、気にすんな」

一瞬、響くんの言葉の意味を考えて、すぐにそれを理解する。

同時にとても幸せな気持ちになった。

「はい…！」

私は笑顔でそう言って、響くんの背中に手をまわした。

響くんがほんのすぐそばにいる。

響くんの香りを感じる。

響くんの吐息を感じる。

私は今、響くんに包まれている。

とても幸せで、ずっとずっとこうしていたいと思った。

☆17話　文化祭☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

文化祭の話が書きたかったんですが…
ちょっと中途半端になってしまいました…（―＿―；）

★17話　文化祭★響ｓｉｄｅ

あっという間に、１０月になっていた。

もうすぐ文化祭が始まる。

「それじゃ今から文化祭でする劇の登場人物を決めたいと思います」

委員長の蓮見はそう言うと、小さな紙を配り始めた。

この高校では各クラスごとに舞台で出し物をするらしい。

うちのクラスでは『眠り姫』の劇をするそうだ。

それで、今からその代表的な登場人物を投票で決める。

【眠り姫】と【王子様】と【悪い魔法使い】の役だ。

といっても…

別にどれも連想するやつなんていねぇしなぁ……

……ひとつ、連想できるやつと言えば、

オレは横目で隣を見た。

望月はシャーペンを手に持ちながら、頭を悩ませている。

【眠り姫】は…

望月にぴったりだと思うんだけど。

でも、もし望月が【眠り姫】の役になっちまったら…

【王子様】役の他の男が望月の恋人役になるんだよな??

……それは嫌だ。

オレはシャーペンをおき、紙を折りたたんだ。

別にオレ1人くらい投票しなくても、役ぐらい普通に決まるだろ。

「それでは、後ろから票を集めてください」

蓮見の指示で、後ろの席のやつが票を集めにきた。

すべての票が集まったところで集計が始まる。

「…よし、それじゃ結果を発表します」

しばらくして、副委員長の今泉が結果の紙を見ながら言った。

「【眠り姫】は、笹川美空サン」

教室中が歓喜の声に包まれた。

なんだ、望月じゃないのか。

それにしても笹川美空って誰だ…??

少し気になりまわりを見まわしてみると、真ん中の席にうれしそうに笑っている女子がいた。

ふーん。

あいつか…

あいつより絶対望月の方が【眠り姫】に合ってる気がするが…

「【王子様】は、滝沢響クン」

不意に自分の名前を呼ばれて驚く。

なぜか歓声があがった。

「えっ…!?オレ??なんで??」

オレが、【王子様】役……??

そんな役、絶対に嫌なんだけど……

「良かったですね!響くん!」

望月がにっこりとオレに向けて笑いかけた。

いや、そんなこと笑顔で言われても…

「別にオレ、そんな役したくねぇんだけど……」

「それでも、投票で決まったんですからやらないとですよ！！」

……たしかに。

変に嫌がったりしてクラスの輪を壊すのもなんだしな…

ったく、なんでオレがそんな役に選ばれないといけないんだよ…！？

そう思っているうちに、次の名前が読み上げられた。

「【悪い魔法使い】、…望月詩織サン」

……はぁ？？

あまりに以外な名前に、オレは思わず目を見開いた。

「私、ですか…？？」

望月も驚いたような声で言う。

なんでだよ？

望月に【眠り姫】は合ってるかもしれねぇが、百歩譲っても望月が【悪い魔法使い】の役なんて絶対に似合ってないだろ……

くすくすと、小さな笑い声が聞こえた。

望月はそれを聞いて、うつむいてしまった。

その様子を見て、言いようもない怒りがこみあげる。

何笑ってんだよ…??

望月が傷つくのを見て楽しいのか…!?

「おい、なんで望月がそんな役なんだよ??」

オレが低い声でそう言うと、シンッとクラス中が静まり返った。

「そうよ!絶対詩織にそんな役なんか合ってないって!ねぇ?」

「うん、そうだよ!詩織ちゃんには絶対にできないと思う!」

鳥山と中川もオレに賛同するように言った。

「でも、もう決まったんだからそれでいいじゃん」

不意に、1人の女子がぽつりと言った。

思わず、オレはガタッと音を立てて席を立つ。

「おまえ、自分がそんな役にされてもいいのか…??」

どうせ自分だったら泣いたりして絶対にそんな役やろうとしないんだろ?

それなのに人には押し付けられるんだな。

どんだけ根性悪いんだよっ!?

「響くん！座ってください！」

怒鳴ろうとしたとき、望月に止められた。

えっ……？？

「でも、おまえ…」

そんな嫌な役で、いいのか…？？

「いいんです。みなさんに選ばれたんですから、喜んでやりませんとね」

望月はそう言ってオレに向かって微笑みかけた。

無理な笑顔。

……なんで笑えるんだよ。

こんなの、ほとんど嫌がらせじゃねぇか……

正直オレは全然納得できていなかった。

だけど望月がじっとオレを見るので、オレは席についた。

…くそ、

なんで望月がこんな嫌がらせみたいなことをされないといけないんだ…？？

そう思い、オレは軽い舌打ちをした。

放課後。

文化祭はすぐ近くにまでせまっているので、今日からいきなり練習をすることになった。

物語に沿って、台本を見ながらの劇が進められていく。

そして望月がでるシーンになった。

「よし！それじゃ祝宴の途中、悪い魔法使いが入ってくるところから始めようか！」

蓮見の合図を出し、練習が始まった。

望月は何やらよく分からない微妙な顔をして、少し低い声で言った。

「お、王女は糸車の針に刺されて亡くなってしまうでしょう…！！」

ぷっ

思わず吹き出してしまう。

ぜ、絶対に望月には合ってないだろ…

なんだよ？

あの顔…！！

しかもセリフ敬語になってるし…！！

そのあとも、望月は何度も同じシーンを練習させられていた。

そして15回ほどやったあと、ついに蓮見はあきらめたようで大きなため息をついた。

「うん、まぁいいや。それじゃ次の場面行こう！」

その後の練習はスムーズに進んでいった。

そしてついにオレがでる場面になる。

オレは一応台本を読み直した。

ええと…

『王子は眠り姫を見て、あまりの美貌にうっとりとする』って……

んー…

よくわかんねぇなぁ…

オレはとりあえず、ほとんど棒読みでその日の練習を終えた。

そして文化祭の前日の練習後。

オレが帰ろうとすると、不意に笹川に呼びとめられた。

「滝沢クン！ちょっと待って！」

「…何？？」

オレは怪訝に思いながらも立ち止まる。

多分外で望月が待ってると思うからできるだけ早く帰りたいんだけど……

「いや、用っていうわけじゃないんだけど……」

笹川はそう言って少しとまどうように口を閉じる。

…なんだよ？

「用がないなら帰るけど…」

オレがそう言うと、笹川は慌てたように言った。

「あっ！その…！私、劇で滝沢クンと恋人みたいな役やれてうれしいなって思って…！！」

はぁ…？？

こいつ、いきなり何言ってるんだ？？

笹川は少し頬を赤らめた。

そしてにこっとオレに笑いかける。

「だから、明日の劇がんばろうねっ！って言いたくて」

…もしかして、用ってそれだけ??

そんなの別に呼びとめてまで言わなくてもいいだろ??

「そうだな。それじゃ」

オレは短く言って教室を出ようとした。

「あっ！ちょっと待ってよ！」

それをまた笹川が呼びとめる。

今度はなんだよ！?

少しいらいらしながら振り返ると、笹川は顔を真っ赤に染めて言った。

「私、滝沢クンのことが好きなの！！」

「……??」

驚いて、オレは思わず目を見開いた。

好き??

オレのことが??

なんで??

オレ、別に笹川と話したことなんてあんまりないんだけど……

それに好きと言われても…

「…ごめん。オレ、好きなやついるから」

オレがそう言うと、笹川はにこっと笑った。

「知ってるよ。詩織ちゃんでしょ?だって2人は付き合ってるんだもんね」

ずばりと言われて、少し顔が熱くなる。

「…ああ」

だけど、なんでオレが望月と付き合ってるって知ってて告白したんだ??

絶対に断られるの分かってるはずなのに…

多分気持ちが顔にでていたのだと思う。

笹川はオレの顔を見て、悲しそうに笑った。

「…ただ、伝えたかっただけだから。ごめんね?もう帰っていいよ」

多分オレ以外のやつだったら、こんなことを言われると心臓が跳ね上がるんだろう。

だが、オレにはその言葉に何も感じなかった。

オレはただ、何も言わずに教室をでた。

別に…

望月以外のやつに何を言われても、何も感じない。

…それくらい、オレの頭の中には望月しかないんだろうな。

そう思い、オレは小さな笑顔をうかべた。

文化祭当日。

他のクラスのいろんな発表が終わり、ついにオレ達の番がやってきた。

やっぱ…

さすがにちょっとは緊張するもんだな…

そう思いながら舞台裏を見まわしていると、緊張でかちこちになっている望月の姿を見つけた。

「望月、大丈夫か??」

望月はオレに気がつくと、固い笑顔をうかべた。

「は、はい…それなりに練習はしてきたつもりですけど…」

…こいつ、かなり緊張してるんだな。

オレは少しでも緊張をほぐしてやろうと、望月をじっと見た。

望月は今、【悪い魔法使い】の衣装を着ている。

それはほぼ黒一色に統一されていて、驚くほどに望月に似合っていなかった。

「そう。あとおまえ、その衣装全然似合ってないな」

あらためてよく見ると、思わずぷっとふきだしてしまう。

「へっ…??そ、そうですか??」

望月は少しむっとしたような顔をして、じっとオレを見てきた。

多分オレの衣装も変だとか言おうとしているんだろう。

でも別にオレは平気だぞ?

だって自分でも似合ってないなって思ってるからな。

「響くんは…」

「滝沢クン！詩織ちゃん！」

望月が何かを言いかけた時、笹川がそれをさえぎるかのようにこっちにきた。

「今日はがんばりましょうね！」

そう言ってにこっと笑う。

そんな笹川の姿を望月はうっとりとしたように見た。

少し、むかっとしてしまう。

…オレ、なんで女にまで嫉妬してんだろ??

オレはそんな自分にあきれてしまった。

そして、劇が始まる。

望月の演技はなんとか初日よりはましになっていた。

だけど、やっぱり【悪い魔法使い】という気はしない。

やっぱ望月には【眠り姫】の方がいいと思うんだけどな。

もし望月が【眠り姫】なら、オレもほんの少しやる気がでるのに…

そう思っているうちに、オレの出番がきた。

オレは適当に、でもそれなりに人に見れるように演技をこなした。

そして眠り姫（ささがわ）にキスをするシーンの時。

オレは予定どおり、客席からはキスをしているように見えるギリギリのところで止めた。

そして顔を離そうとしたとき…

ぐっ

笹川が首をもちあげた。

「……！！！」

笹川の唇が、オレのそれに重なる。

オレは驚いて、慌てて笹川から離れた。

笹川は目をあけて、にっこりとオレに笑いかける。

…こいつ、何すんだよ……？？

オレは口を手の甲でぬぐった。

「“……王子、様？？”」

笹川は何もなかったかのように次のセリフを言う。

……？？

今のは、わざとじゃないのか??

…そうだよな。

ただの事故だ。

なら別に気にしなくてもいいか。

オレはそう思い、そのまま劇を続けた。

そして劇を終えたあと…

「…あれ?望月は??」

舞台裏を見まわしても、望月の姿はなかった。

あいつ、どこ行ったんだ?

「あっ、滝沢クン!大変なの!詩織がどっかいっちゃった!」

オレが望月を探していると、鳥山が言った。

「は??なんで??」

「分かんないけど…突然泣きだして…」

…??

泣きだした…??

なんか、あったのか??

「オレ、探してくる」

オレは舞台裏をでた。

そして、望月が行きそうな場所をいろいろと探してみる。

教室や、校舎裏とかを探しまわって、最後に屋上の扉をあけたとき、

そこに、望月の姿があった。

「望月…!?」

名前を呼ぶと、望月は驚いたように振り返る。

「ひ、響くん……??」

望月の目は赤くはれていた。

そして、その目に涙がにじむ。

「ど、どうして…」

「どうしてって…こっちが聞きたいよ。おまえ、いきなりこんなとこきて一体どうしたんだ??結構探したんだぞ??」

大体こいつ、なんで泣いてるんだ??

やっぱりあの役が嫌だったのか…??

オレはそう不思議に思っていると、望月は涙でとだえとだえの声で言った。

「だって…響くんが、笹川サンと…！初めては…私が…！」

ほとんど言葉になっていなかったが、なんとなくオレはその言葉の意味を理解した。

もしかして…

あの、事故のことを言ってるのか??

「おまえ…そんなこと気にしてたのか…??」

オレはそんなことを気にしている望月がなんとなく可笑しくて、ぽんっと望月の頭を軽く叩いた。

「あんなの事故だよ。事故。だから気にしなくていいって」

望月はしばらく何も言わなかったが、やっと話せるようになったらしく口を開いた。

「…でも、事故だったとしても、響くんは笹川サンとキスしたじゃないですか…」

…まぁ、そうだけど。

別にそれくらいいいんじゃねぇの??

オレはする気なかったんだし…

「私…響くんの初めての相手になりたかったのに…」

望月はぽつりとそう言った。

驚いて、顔に熱がのぼる。

そんな風に思ってくれていた望月が愛おしく思えて、オレは無意識に望月を抱きしめていた。

「…えっ??」

望月は驚いたような声を漏らす。

心臓がバクバクと強く鳴り響いていた。

顔が燃えるように熱くなっている。

「…オレ、こんなことしたのって初めてだ」

オレは小さな声でつぶやいた。

「……??」

…このあと、何と言えばいいんだろうか??

オレは、何と言いたいんだろう?

少し考えて、ふと思いついた。

そしてその考えを口にする。

「…だから、オレの他の初めては全部おまえだから…さっきのことなんて、気にすんな」

そうだ。

オレの他の初めては全部、全部おまえなんだ。

誰かのことで頭がいっぱいになったことも、

誰かに対して嫉妬するようになったことも、

誰かといて幸せだと思えたのも、

こんなふうに誰かを抱きしめたいと思ったのも、

こんなふうに、誰かを好きになったのも…

全部、おまえが初めてなんだ。

そしてきっと、他の初めても全部おまえだと思う。

だから、キスくらいどうだっていいだろ…??

「はい…！」

望月はうれしそうにそう言った。

そしてオレの背中に手をまわす。

それがあまりにも幸せで…

オレは、初めて時が止まって欲しいと思った。

★17話　文化祭★響ｓｉｄｅ（後書き）

実は、笹川サンがこれから重要な人物になったりするかもです…！

！

☆１８話　帰り道☆詩織ｓｉｄｅ

外もだんだんと寒くなってきました。

そんな１１月の後半くらいのころ…

私には小さな悩みがありました。

「響くんって…本当に私のことが好きなんでしょうか…??」

「いきなりどうしたの??」

優香ちゃんが怪訝そうに言った。

「いえ…少し気になってしまって…」

そうなんです。

最近、響くんの気持ちが分からないんですよね……

「どうして?私的にはらぶらぶに見えるけど…何か不安なことでもあるの?」

楓ちゃんが大きな目をぱちくりとさせた。

「不安、というわけではないんですけど…響くんが恋人らしいことを何もしてくれないというか……」

だって…

ついまえまではもっと恋人らしかったと思うんです。

夏休みにもいろいろなことがありましたし…

私が伊吹と仲良くしていたときにはやきもちをやいてくれたりしましたし…

文化祭のときには抱きしめてくれたりしましたし…

それなのに最近はどこか冷めているというか…

私がまだ伊吹とメールしてると言っても、短い返事で終わらされますし、

抱きしめてくれたりとかも全然ありませんし、

なんとなく、ただ一緒にいるだけって感じがするんですよね…

「…それってさ、倦怠期っていうんじゃないの??」

優香ちゃんが首をかしげながら言った。

「倦怠期、ですか…??」

それって熟年の夫婦がお互いのことを飽きて嫌になるっていう、あの…??

「だって滝沢クンと詩織ってもう付き合って半年くらいたつでしょ?もうそんなころじゃない??」

え…??

そ、そうなんですか…??

ってことは…

やっぱり、響くんはもう私に飽きてしまったかもしれないということですか…!?

じわっ

瞳に温かいものがあふれた。

それを見て優香ちゃんは慌てたように付け加える。

「えっ!?い、いや!大丈夫だって!!倦怠期になったからって絶対に別れなきゃいけないってわけじゃないし!」

「そうだよ!っていうか…詩織ちゃんって滝沢クンとどこまでいったの??」

楓ちゃんが唐突にそう聞いてきた。

「へ…??」

どこまで、ですか??

「えっと…海まででしょうか?」

「いや、そういう意味じゃないんだけど…」

楓ちゃんは困ったように笑いながら言った。

「んー…それじゃ詩織って、滝沢クンと手つないだことある??」

手、ですか…??

「それは…ない、ですけど…」

優香ちゃんと楓ちゃんが同時に目を見開いた。

「えっ…??ないの…??」

「…??は、はい…」

え…??

それってそんなにおかしいことなんですか…?

しばらくの沈黙のあと、楓ちゃんがぽんっと私の肩をたたいた。

「それじゃ今日の帰り道、滝沢クンと手つないでみなよ!」

へ…!?

私が、ですか!?

「そんなのできませんよ!!」

私が慌ててそう言うと優香ちゃんはにやりと笑った。

「でもさ、ちょっとしたことで新鮮さってでるものだと思うよ？？」

「そうそう！めざせ、倦怠期脱出ー！だよっ！！」

「は、はぁ…」

そ、それなら…

手をつなぐことで倦怠期というものを脱出できるのなら…

少し、がんばってみましょうか…？？

その日の帰り道。

私はいつものように響くんの隣を歩く。

たわいのない会話。

なんだか恋人同士というより、友達同士といった感じです…

…でも、今日から変わるんです！

今日は響くんと手をつないで新鮮さをとりもどし、絶対に倦怠期というものを脱出してみせます！！

ですけど、口で手をつなぎましょうと言うのはやっぱり恥ずかしい

ですね…

これはやっぱり、何気なく手を握るっていうのが一番恥ずかしくないのでしょうか??

…私に、そんな器用なことができますか…??

……いえ!

やるしかないんです!

なんとしても倦怠期というものを脱出しませんと!

私はそっと響くんの右手に自分の左手を触れさせてみた。

すると響くんの手はさっと私の手から離れる。

…??

たまたまでしょうか…??

私はもう一度響くんの手に触れてみた。

やっぱり響くんの手は私の手から離れる。

……なんとなく、悔しくなってきますね。

私はむきになって何度も響くんの手を握ろうとした。

だけどやっぱり響くんの手は手を触れるたびに私の手から離れてし

まう。

しばらくそれが延々と続き、ふと響くんが言った。

「…何??」

「い、いえ。なんでもありませんよ??」

私は笑顔を作って言った。

ほんの少し、私が手をつなごうとしていることを察知してくれるかもしれないと期待してみる。

「そうか??」

だけど響くんはそう言ってその話を終わらせてしまった。

そしてまた、どうでもいいようなことを話し始める。

ぷちっ

私の中で何かが切れたような気がした。

「……響くんは……すか??」

「…??なんだよ?」

響くんはきょとんとしたような顔をする。

私はそんな響くんに向かって怒鳴った。

「響くんは私のこと、好きじゃないんですか！？」

「…！？」

響くんは驚いたように目を見開いた。

「どうして私が手をつなごうとしていることに気が付いてくれないんですか…！？」

せっかく私なりに勇気をだしたのに…

どうして響くんは私の気持ちに気がついてくれないんですか！？

ぽろぽろと涙があふれてくる。

「望月…？？」

「名字でなんか呼ばないでくださいっ！！」

私はちゃんと名前で呼んでいるじゃないですか！！

私は響くんとの距離を少しでも縮めたくて名前で呼んでいるのに…

響くんは、そう思ったりしないんですか…？？

「どうして、響くんは気持ちを言葉にしてくれないんですか…？？

どうして私に恋人らしいことを何もしてくれないんですか…？？」

私、あの告白のとき以来、響くんに『好き』と言われたことなんて

ありませんよ…??

響くんの気持ちは何も分からないのに…

私ばっかり響くんのことが好きみたいで…

そんなの、馬鹿みたいじゃないですか…

「私…不安なんです。響くんと一緒にいて、すごく不安になるです」

私は本当に響くんの隣にいていいのかって…

すごく…

すごく、不安になるんです。

私はいたたまれなくなって、その場から逃げだした。

こんなとき、いつも後ろから私を呼ぶ響くんの声が今は聞こえない。

…やっぱり、響くんの気持ちは変わってしまったんですか…??

私達の関係は、もう終わってしまうんでしょうか…??

そう思うと、涙が止まらなかった。

次の日の放課後。

その日、私は響くんと一言も話さなかった。

響くんも、私と話そうとはしなかった。

私達はいつもあまり他の人の目につかないように、校門で待ち合わせて一緒に帰る。

もし…

響くんがずっとそこで私のことを待っていてくれたとしたら…

まるで少女漫画のような展開。

だけど、きっとそんなことありえない。

でも、ほんの少しの淡い期待を抱いた。

少しだけ、遅れて帰りましょうか…

私は鞄から勉強道具を取り出した。

そして今日の復習をしようと教科書を開いた。

だけどどうしても勉強する気がおこらない。

私は小さなため息をついて、机に顔を伏せた。

そして眠ろうと目を閉じたとき…

ガラッ

教室の扉が開く音がした。

誰でしょうか…？？

「望月…！？」

驚いたようにそう言った声は、響くんのものだった。

ドキッ

心臓が強く鳴る。

なんとなく顔を合わせ辛くて、私はそのまま寝た振りを決め込んだ。

どうしたんでしょうか…？？

もしかして、私を探しに…？？

ですけど、あの反応は…

ガサッ

隣で机をあさる音がした。

しばらくして、何かを見つけたようで鞄の開く音がする。

……なんだ。

忘れ物を取りにきただけですか…

そうですよね。

私を探しにきてくれたなんて…

そんなわけ、ありませんよね。

そのまま響くんの足音は教室の扉の方に向かっていった。

ガラッ

扉をあける音が聞こえ、不意に足音が止まる。

そして、なぜか足音がこっちに向かってきた。

…え??

まだ、忘れ物があったのでしょうか…??

足音は私のすぐそばでぴたりと止まった。

ふわっ……

不意に響くんが優しく私の髪に触れる。

そして小さな声で私の名前を呼んだ。

「詩織」

とくん…

心臓の音が少し強く鳴った。

え…？？

今、私のこと……

「…なんて、呼べたらいいんだけどな」

響くんはそう言って大きなため息をついた。

どうやら、私が寝たふりをしていることに気が付いていないらしい。

どうしよう…

目を開けた方がいいんでしょうか…？？

…だけど、

なんとなく、このまま寝た振りをしていれば、響くんの気持ちが聞ける気がする…

そう思い、私は寝た振りを続けた。

「…おまえ、オレが気持ちを言葉にしてくれないとか、オレが恋人らしいこと何もしないとか言ってたけど…オレ的には結構がんばってる方なんだけど」

しばらくの沈黙が続く。

どうしたんでしょうか…??

少し気になって、私は気付かれない程度に薄目をあけてみた。

響くんはしゃがみこんで、じっと私を見ている。

心臓の鼓動が速くなって、まともに響くんを見ていると気付かれるくらい顔が赤くなりそうで、私はまた瞼を閉じた。

「本当に、可愛いよな…」

響くんはそう言ってまた私の髪をなでた。

普段の響くんなら絶対に言わないような言葉。

それだけで、私の心臓は破裂しそうなくらいにバクバクと強く鳴り響いた。

「オレさ……」

響くんは何かを言いかけて、口をつぐんだ。

ほんの少しの沈黙のあと、響くんの声が私の耳に届く。

「おまえのこと、すっげぇ好きだから」

ドクンッ!

もう、寝た振りなんてできなかった。

響くんがたまらなく愛おしくなって、私はすぐそばにいる響くんに抱きついた。

「はっ！？望月っ！？」

響くんが驚いたような声をだす。

私はかまわずに、響くんを強く抱きしめた。

「私も…私も、響くんのことが大好きです……！！」

今まで分からなかった響くんの気持ち。

それを知れたことがたまらなくうれしかった。

それから私達は一緒に校門をでた。

そして、いつものように私は響くんの隣を歩く。

昨日と同じ。

だけど、全然違う。

昨日は響くんの気持ちが分からなくて、すごく不安だった。

だけど、今は響くんの気持ちがちゃんと分かっている。

ちゃんと、響くんも私のことが好きだって分かってる。

「手、寒くないか…??」

不意に響くんが言った。

「え…??別に寒くないですけど…」

「…じゃ、いいよ」

響くんはそう言ってふいっと顔をそむけた。

…??

なんでしょうか??

別に11月といっても、まだ手袋は必要ない季節ですよね…??

不思議に思い、そしてふと気がついた。

…ああ、そういうことですか。

自然と頬が緩む。

「…やっぱり、少し寒いです」

響くんは私の方を見て、頬を少し染めて微笑んだ。

「そう」

響くんの右手が私の左手を包んだ。

私よりも、ずっとずっと大きな手。

心臓の鼓動が速くなって、顔が熱くなった。

恥ずかしくて何も話せない。

ヒュゥっと冷たい風が私達をすり抜けた。

思わず、体を震わせる。

だけど、響くんとつないだ手と、赤くなった頬は暖かくて…

とても、とても幸せだった。

きっと今、響くんも同じことを考えてくれているんでしょうね。

そう思う私は少し自惚れすぎていますか??

だけど響くんの気持ちを知った今なら…

私はそう、確信することができるんです。

☆１８話　帰り道☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

実はずっと前から書きたかった話…なんですが…
少し内容が適当になってしまったかもです（―｜―；）

★18話　帰り道★響ｓｉｄｅ

11月の後半ごろのある日。

オレはいつものように望月と駅に向かって歩いていた。

いつものようにどうでもいいような会話をする。

ふいに望月の手がオレの手に触れた。

…近づきすぎたか??

そう思いオレは望月の手が当たらないように少し離れた。

すると、また望月はオレに手を触れさせてくる。

……??

何?

もっと離れろってことか??

そう思い、オレはまた少し望月の手から離れた。

だけどやっぱり望月はオレに手を触れさせてくる。

何度かそれを繰り返したあと、オレはやっと望月が意図的にしてるんだと気がついた。

「…何？？」

そう尋ねてみると、望月はにっこりと笑った。

「い、いえ。なんでもありませんよ？？」

「そうか？？」

…なんだ。

オレの思いすごしか。

オレはそう納得し、他の話を始めた。

「……響くんは……すか？？」

不意に望月が小さな声で何かを言った。

「…？？なんだよ？」

望月はきっとオレを睨んで怒鳴った。

「響くんは私のこと、好きじゃないんですか！？」

「…！？」

…はぁ！？

こいつ、いきなり怒って何言いだすんだ…！？

「どうして私が手をつなごうとしていることに気が付いてくれないんですか…！？」

望月の目に涙があふれ、それがぽろぽろと望月の頬を伝った。

「望月…？？」

「名字でなんか呼ばないでくださいっ！！」

……！！

オレは驚いて、思わず固まった。

「どうして、響くんは気持ちを言葉にしてくれないんですか…？？どうして私に恋人らしいことを何もしてくれないんですか…？？」

何も言葉が出なかった。

ただ、望月の言葉を聞くことしかできなかった。

「私…不安なんです。響くんと一緒にいて、すごく不安になるです」

望月は震える声でそう言うと、くるりとオレに背を向けた。

そしてオレから逃げるように走って行く。

後を追おうとすると、なぜか足がぴたりと止まった。

なすすべもなくその場に立ち尽くす。

…オレに、望月の後を追う資格があるのか??

望月に言われた言葉が何度も頭の中に流れた。

『響くんは私のこと、好きじゃないんですか!?』

なんだよ、いきなり。

オレ、別に望月のことを嫌いだなんて言ってないじゃないか。

『どうして私が手をつなごうとしていることに気が付いてくれないんですか…!?』

だって言ってくれないと分からないだろ?

オレは望月に気を使って…

『名字でなんか呼ばないでくださいっ!!』

なんで急にそんなこと言うんだよ。

それなら名前で呼んでくれって言えばいいじゃないか…

『どうして、響くんは気持ちを言葉にしてくれないんですか…??
どうして私に恋人らしいことを何もしてくれないんですか…??』

そんなの、オレは十分していると思っていた。

なのに…

望月は、それ以上何を望んでいるんだ??

望月の言葉をすべて打ち消して、そしてそんな自分に腹が立った。

だからダメなんだ。

そんな考え方しかできないから…

だから望月を不安にさせたんだ。

こんなオレが望月の後を追ったとしても、望月を安心させることなんてできない。

『私…不安なんです。響くんと一緒にいて、すごく不安になるです』

最後の望月の言葉が胸をしめつけ、

そして望月の泣き顔が脳裏に焼き付いていた。

次の日の放課後。

オレはその日、望月と何も話さなかった。

望月と話すと、望月の不安を大きくさせてしまいそうで怖かった。

オレは望月に何も声をかけずに教室をでた。

校門をでようとしたとき、ふと足が止まる。

いつも、望月と待ち合わせている場所。

もし…

もしここでオレがずっと待っていたとしたら…

望月は、どんな反応をするだろう??

望月は…

……いや、ダメだ。

望月がオレといて不安になるんだったら…

オレはもう、望月と一緒にいない方がいいのかもしれない。

そう思い、足を進めようとした時、

ふと、筆箱を教室に置き忘れていたことに気がついた。

…取りに戻るのも面倒だよな…

でもまだ学校でてないし…

もしかしたら今日使うかもしれねぇし…

オレは一応筆箱を取りに戻ることにした。

さっさと済ませようと思いながら教室の扉をあけたとき、

オレは思わず息をのんだ。

「望月…！？」

望月が、机に顔を伏せて眠っていた。

まだ…

帰ってなかったのか…

そう思いながら、オレは望月の隣の自分の席に行く。

そして机の中から筆箱を取り出して教室を出ようとした。

だけど、扉をあけたところで足が止まる。

オレは無意識に望月のそばに向かった。

望月の目の前にしゃがみこむと、眠っている望月の顔が見えた。

そっと、望月の髪に触れてみる。

やわらかい髪がオレの指にからまった。

望月……

今、寝てるんだよな…？？

「詩織」

オレは思い切ってそう呼んでみた。

顔が熱くなる。

「…なんて、呼べたらいいんだけどな」

オレは大きなため息をついた。

やっぱオレにはとてもそんな風には呼べない。

望月が眠っている今だって、名前で呼んでみるとこんなに心臓の鼓動が速くなるんだ。

「…おまえ、オレが気持ちを言葉にしてくれないとか、オレが恋人らしいこと何もしないとか言ってたけど…オレ的には結構がんばってる方なんだけど」

もちろん、返事はない。

望月は変わらず目を閉じている。

……そうだよ。

オレはおまえに精一杯のことをしているつもりなんだ。

でも、おまえはそれ以上のことを望んでいるのか??

おまえはもっと、歯が浮くような甘いセリフや行動を望んでいるのか…??

……もし、おまえがそんなのを望んでたとしても、

オレにはとても、そんなこと言う勇気もなければする勇気もない。

やっぱ、オレといても物足りないだけだよな…

オレはじっと眠っている望月を見た。

長いまつ毛。

すべすべとした頬。

やわらかそうな唇。

「本当に、可愛いよな…」

ぽつりとつぶやいて、また望月の髪をなでた。

なんでこんなやつがオレのことを好きだなんて言うんだろう？

望月はオレのどこが好きなんだ？

オレにはいいところなんて一つもないだろ？？

……『気持ち』を『言葉』に、か。

望月が眠っている今なら、できるかもしれねぇな。

「オレさ……」

そのあとの言葉がでてこなくて、口をつぐむ。

このあと、何を言えばいいんだ??

望月に伝えたいことは言いきれないほどにある。

望月が他の誰よりも可愛く見えること。

望月が他のやつと話していると嫉妬してしまうこと。

望月の仕草や表情で、一喜一憂してしまうこと。

望月の笑顔を見ると、オレも笑顔になれること。

他にも、まだまだいっぱいある。

その中で…

何を言えばいいんだ…??

少し考え、ふと気がついた。

そうだ…

結局全部まとめたら…

「おまえのこと、すっげぇ好きだから」

オレは、もうどうしようもないくらいに望月のことが好きなんだ。

ただ、それだけなんだ。

不意に体が何かに包まれた。

「はっ!?望月っ!?」

オレは望月に抱きしめられていた。

…って、寝てたんじゃないのか!?

「私も…私も、響くんのことが大好きです……!!」

望月はうれしそうな声でそう言った。

心臓の鼓動が速くなる。

もしかして…

さっきまでオレが言ってたこと、全部聞かれてたのか…??

顔が燃えるように熱くなった。

…でも、

ちょっと、いや、すっげぇ恥ずかしいけど…

オレの気持ちが少しでも伝わったなら…

それでも、いいか。

そして帰り道。

オレは望月と並んで歩いていた。

昨日と同じ。

……そういえば昨日、望月は手をつなごうとしていたとかなんとかいってたよな…??

オレは昨日、望月がやけにオレに手を触れさせてきたことを思い出した。

…望月はちゃんと行動してくれたんだ。

なら、オレも…

「手、寒くないか…??」

直接手をつなごうというのはためらわれたので、オレは遠まわしに言ってみた。

だけど意味は伝わらなかったようで、望月はきょとんとした顔でオレを見る。

「え…??別に寒くないですけど…」

こいつ…

全然分かってない……

「…じゃ、いいよ」

しつこく言うほどでもなかったので、オレはそう言って顔をそむけた。

「…やっぱり、少し寒いです」

しばらくしてから、ふと望月が言った。

少し驚いて望月を見ると、望月は少し頬を染めてオレに微笑みかけていた。

…やっと気付いたんだな。

そう思い、オレは望月に微笑み返した。

「そう」

オレは望月の左手を握った。

オレの手にすっぽりと収まる小さな頼りない手。

その手がぎゅっとオレの手を握った。

つないだ手にだけ集中してしまって、話すことにまで意識が回らない。

不意に冷たい風が頬をなでた。

不思議と、寒くは感じなかった。

全神経が手だけに集中して、寒いなんて感じてられなかった。

こんな小さなことが、すごく幸せに感じる。

望月も…

そう思ってくれているだろうか？

望月は今、オレといて安心してくれているだろうか？？

だけど、

不思議と望月は今、オレと同じことを考えていると思えた。

★18話　帰り道★響ｓｉｄｅ（後書き）

ちょっとだけ詩織ｓｉｄｅに文を追加しました。
多分響ｓｉｄｅであれ？とか思うと思います…

☆19話　疑心暗鬼☆詩織ｓｉｄｅ

「ねぇ、詩織ちゃん。ちょっといいかな？」

不意に笹川サンに声をかけられた。

「えっ？は、はい…」

「あのね？詩織ちゃんに紹介したい人がいるんだ」

笹川サンはそう言ってにっこりと笑った。

わ、私にですか…？？

「とりあえず今日の放課後私と一緒にきてくれる？？」

笹川サンにそう言われて、私はその日の放課後、笹川サンと一緒に近くの喫茶店に入った。

「あっ、美空！こっちこっち！」

入口の近くの席に座っていた男の子が笹川サンを呼ぶ。

笹川サンにうながされて、私はその人の前に座った。

笹川サンも並んで私の隣に座る。

「えっとね？この人がさっき紹介したいって言った人なんだけど…」

…えっ？

私に紹介したい人って…

男の人、ですか…？？

「オレ、富岡大河って言うんだ。よろしく」

そう言ってその男の子はにこっと私に微笑みかけた。

「は、はぁ…」

私は一応頭を下げた。

「大河がね？文化祭のときに詩織ちゃんのこと見て可愛いなって思ったんだって！だからぜひ紹介してくれって頼まれちゃって！」

「えっ…？？」

男の子は少し照れたように頭をかいた。

「なんか一生懸命に役してるのが可愛くてさ、だから望月サンと知り合いになりたいなって思って」

はにかんだ笑顔。

響くんには到底かなわないけど、でも他の人と比べたらとてもきれいな人。

そしてとても優しそうな人。

そんな人に、知り合いになりたいなんて言われるのは光栄なんですが…

私は前に、伊吹と仲良くしていて、響くんが少しおかしくなってしまったことを思い出した。

…やっぱり、必要以上に他の男の子と仲良くすると響くんを傷つけてしまうかもしれませんし…

「…あの、すいませんが私、お付き合いしている人がいて…」

私がそう言うと富岡サンはふっと笑った。

「知ってるよ。でも、友達にだけでも、なってくれないかな?」

少し切な気な表情。

私にはとても、富岡サンの頼みを断ることはできなかった。

…別に、お友達になるくらいならいいですよね?

ちゃんと、響くんにも報告すれば…

大丈夫、ですよね?

「…友達なら、大丈夫ですよ?」

私がそう言うと、富岡サンはうれしそうににっこりとほほ笑んだ。

「本当に!?ありがとう!」

そうして、私は富岡サンと友達になってしまった。

それが、響くんとの間に小さな溝を作ってしまうとは知らずに。

その日、家に帰って私はすぐに響くんに電話をかけた。

『望月?何??』

二回コール音が鳴り、低い声が電話の向こうから聞こえた。

「いえ、たいした用ではないんですけど…」

私は一部始終を響くんに話した。

『…そう』

響くんは短く返事をした。

「あ、あの…やっぱりそんなの断った方が良かったですかね?」

心配になってそう聞いてみると、電話の向こうから少しいらだったような声が聞こえた。

『まぁ、正直言ったら断って欲しかったけど』

…やっぱり、そうですよね。

「…すいません」

私は小さな声でそう謝った。

すると、少し照れたような声が帰ってきた。

『…でも、望月はその富岡ってやつと変な関係にはならないって分かってるから』

とくん…

心臓が少し強く鳴る。

頭の中に響くんの照れた顔が鮮明にうかんできた。

…響くんは、私を信じてくれている。

私は正直、響くんにすごく怒られるかもしれないと思っていた。

すぐに友達なんかやめろって言われるかもしれないと思っていた。

だけど…

別に、心配なんてする必要がなかったんですね。

私は響くんの言葉がうれしくて、小さな笑顔をつくった。

そしてそれから何日か経って…

もうすぐ、冬休み。

そして、もうすぐクリスマスです！

クリスマス、楽しみですねー！！

…あっ、別にサンタさんがくるから楽しみなんじゃないですよ？

私だってサンタさんの正体くらい知ってます。

まぁ、去年お母さんとお父さんに言われてやっと気がついたんですけどね…

とりあえず、どうして私がクリスマスを楽しみにしているかというと…

その日は一日、響くんとデートするんです！

晩御飯も一緒に食べるんですよ？？

本当に、すっごく楽しみです…！！

「でもやっぱり、クリスマスといえばプレゼントがいりますよねー…？？」

『まぁ、そういうものだよね』

電話の向こうで富岡サンが苦笑した。

今、私は富岡サンと電話しています。

いや、別に私からしたわけではなくて…

富岡サンから電話がかかってきたので、話をしていただけなんですが…

「でも、響くんは何が欲しいんでしょうか…??私、男の子が欲しい物とか分かりませんし…」

それに響くんっていつも特に何もいらないって感じですし…

余計に分かり辛いんですよねー…

『それじゃぁさ、オレが一緒にいって見てあげようか?オレ一応男だし、参考になるかもよ?』

「えっ…で、でも…」

い、いや…

それは…

そんなところ、響くんに見られたりしたら…

…でも、

男の人の意見を聞けば、参考になるというのは事実。

……遠くまで行けば、ばれませんよね??

「…それじゃ、お願いします」

どうせなら、少しでも響くんが喜ぶものを買ってあげたい。

だから、別に変な気持ちなんてないんです。

≪…でも、望月はその富岡ってやつと変な関係にはならないって分かってるから≫

響くんはそう言ってくれましたよね?

だから…

買い物にお付き合いしていただくくらい、響くんはなんとも思いませんよね…??

日曜日。

私は富岡サンと一緒に高校よりも少し離れたショッピングモールに行った。

よし…

今日はさっさと響くんへのプレゼントを買ってすぐに帰ります!

富岡サンと2人で買い物にきたというだけでもすごい罪悪感を感じ

るというのに…

長い時間ずっと一緒にいるなんて、私の良心が許しません！

私はそう意気込んで、とりあえず目に入った雑貨屋さんに入ってみた。

「えっと…シャープペンシルなどはどうでしょうか…？？」

響くんってよく勉強してそうですし……

私は黒いシャープペンシルを手にとってみた。

これなんか、響くんによくお似合いだと思いますけど…

「いや、それはちょっと普通すぎだと思う。クリスマスのプレゼントなんだろ？ならもうちょっと高価なのの方がいいんじゃないか？」

そ、その意見は一理あります。

たしかにクリスマスにシャープペンシルなんてもらってもあまりうれしくありませんよね…？

「それじゃ、何がいいんでしょうか…？？」

「んー…ま、別にオレは彼女からなら何もらってもうれしいかな！」

いや、それ全然参考になってませんよ…

でも…

どうせなら、響くんがずっと身につけていられるような物がいいですね…

それを見て、響くんがいつでも私を思い出せるような物…

それって…

なんでしょう…??

ネックレス?

指輪??

でも、そんなの響くんがつけてくださるでしょうか…??

入学当初はピアスをしていらっしゃいましたが…

最近はあまりしているところなんて見たことありませんし…

何か、普通につけられて、そして普段何気なく見る物。

そんな物がいいです。

少し頭を悩ませていると、ふと時計店が視界にうつった。

…そうだ!

「時計、時計にします!」

時計なら普通につけられるし、時間を見る時に何気なく目にします！

そう思い、私は時計店に入った。

やっぱり響くんには黒い腕時計ですかね？

少し高価そうな腕時計を手にとってみる。

とてもシンプルで響くんにぴったりな腕時計。

…うん。

これがいいですね。

「あの…これって、いくらですか？」

「８万５０００円ですね」

私が訪ねてみると、店員さんはにっこりと笑顔でそう言った。

は、は、は、は…

８万、ですか…！？

「ちょっと高すぎない…？？」

富岡サンがそう言い、苦笑いした。

た…

たしかに……

高校生には少し無理がある値段な気が……

大体私、今日1万円ほどしか持ってきていませんよ…

「あの…もう少しお手頃な価格のものはありませんでしょうか…？」

「それなら…」

店員さんはそれなりに高そうな時計を持ってきた。

縁が銀色で、真ん中が黒い時計。

お値段はどうやら8千円。

プレゼント用に予想していた値段よりはずいぶんと高いですけど…

まぁ、いいですよね！

「それじゃ、これ買います！」

私は思い切ってその腕時計を買った。

そしてプレゼント用に包装してもらう。

響くん…

喜んでくれるでしょうか…？？

私は響くんが喜んでくれる顔を想像するだけで笑顔になれた。

「そんな高いの買うなんて…詩織ちゃんって本当に彼氏のことが大好きなんだな」

富岡サンに言われて、少し顔が赤くなる。

「え、ええ…まぁ…」

本当にすっごく好きなんですけど…

やっぱり他人に言われると照れちゃいますね…

「あ…あれって美空じゃない？」

不意に富岡サンが少し向こうを指差して言った。

富岡サンが指差す方を見ると、たしかにそこに笹川サンがいた。

そして隣には見覚えのある姿。

…あれ？？

あの、笹川サンの隣にいる人って…

「ひ、びき、くん…？？」

私は驚いて大きく目を見開いた。

遠くからなので、見間違いかもしれない。

そう思って目をこらしてみたけれど、それはやっぱり響くんの姿だった。

どう…して…??

どうして、響くんが笹川サンと……??

ふと響くんが笹川サンに微笑みかけた。

優しい笑顔。

どうして…

それを笹川サンに…??

響くんの笑顔は、私だけのものなのに…!!

他の誰にも、見せて欲しくないのに…!!

じわっと目に温かいものがあふれた。

楽しそうな2人を見ていられなくて、顔をそむける。

どうしてですか…??

どうして笹川サンなんかと一緒にいるんですか…!?

「詩織ちゃん??どうしたの…??」

富岡サンが泣いている私を見て、心配そうに言った。

そしてふと思い出す。

そうだ。

私も響くんに秘密で富岡サンと一緒にいるんです。

響くんのことをひどいなんて思う資格なんて、ありません。

…でも……！！

私は響くんのためにきたのに…！

私は、響くんに少しでも喜んでもらおうと、そのために富岡サンに意見してもらおうと思っただけなのに…！！

響くんは、笹川サンとあんなに楽しそうに…！

響くんに裏切られたような気がした。

涙があふれて止まらない。

…でも、響くんは私に好きって言ってくれた。

響くんは私を信じてるって言ってくれた。

だから、私も響くんを信じないと…

そう思うと、少し心が落ち着いた。

なんとか富岡サンに微笑みかける。

「大丈夫です。少しあくびをしただけ…！！」

私の言葉が終わる前に、唇がふさがれた。

目の前には富岡サン。

そして…

唇には、たしかに富岡サンのそれの感触。

数秒してからやっと、私は富岡サンにキスされたのだと気がついた。

「や…！！」

富岡サンは嫌がる私の手を抑えつけてキスを続ける。

そしていつの間にか、私は抵抗することを忘れていた。

ただ、頭の中には悲しいという気持ちだけがあふれていた。

嗚呼…

私のファーストキス…

初めては響くんが良かったのに…

私、響くんのファーストキスを笹川サンにとられたときは、すっご

く悲しいと思いました。
けど、結局私も同じ。
私も響くんじゃない人と…
涙が更にあふれてきて、頬にぼろぼろとこぼれた。
それに気がついたのか、富岡サンは私から唇を離した。
「ごめん…」
そして小さな声で謝る。
「どう…し…て…？？」
私は涙でとぎれとぎれになりながら、声を絞り出した。
「私の…私の、ファーストキスを…なんで、そんなに簡単に奪えるん…ですか…！？」
今、私はたまらなく富岡サンが憎いという気持ちでいっぱいだった。
初めてだったのに…！
響くんと、するつもりだったのに…！！
「ごめん…でも、オレも詩織ちゃんが好きだから…」
富岡サンは私の頬に触れた。

それがたまらなく不快に感じて、思わず手を振り払う。

富岡サンは少し目を見開いて、そして小さく笑った。

「…あんなやつのどこがいいの?休みの日に他の女と遊びに行くようなやつだよ??」

ズキッ

胸に突き刺さるような痛みが走る。

笹川サンと響くんが笑いあう光景が頭の中にフラッシュバックした。

「まぁ、とりあえずオレのことも考えてみてよ」

富岡サンはそう言うと、私を置いて去っていった。

次の日の昼休み。

「なぁ、望月って昨日何してた??」

ふと、響くんにそう尋ねられた。

ドキッ

昨日の富岡サンとのキスが頭によぎった。

だけど、私はそんなことがあったなんて悟られないように笑顔で言った。

「えっと…昨日はお母さんとお買いものに行っていました」

とっさについた嘘。

響くんについた、初めての嘘。

「響くんは何をしていたんですか？」

私もそう問いかえしてみた。

本当は知っている。

昨日、響くんは笹川サンと一緒にいた。

…だけど響くんは、本当のことを言ってくださりますか？？

私は嘘をついたくせに、響くんには嘘をついて欲しくなかった。

本当に勝手な私。

そんな私の心に気付いていたのか…

「オレは昨日、ずっと家にいたけど」

響くんも、嘘をついた。

ズキッ…

心が痛くなる。

どうして、嘘なんてつくんですか…？？

はっきりと言ってくだされればいいのに。

昨日は笹川サンといたと。

そうすれば私は昨日、響くんと笹川サンの間に何かがあったかもしれないなんて思わない。

それなのに…

そんな風に隠されたら、どうしても何かあったんじゃないかと思ってしまう…

「そうなんですか」

私はそう言って響くんに笑いかけた。

響くんも私に笑顔をかえす。

だけどその笑顔は笑顔であって笑顔じゃない。

いつわりの笑顔。

今、私達の間に小さな溝ができてしまった。

…嘘という名の、小さいようで、大きな溝。

☆19話　疑心暗鬼☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

詩織って結構勝手ですねー（ー＿ー；）
しかもとっさに考えた話なので、内容がうまく組み立てられてないです（＊＿＊；

★19話　疑心暗鬼★響side

ある日の夜。

急に望月から電話がかかってきた。

「望月？何？？」

『いえ、たいした用ではないんですけど…』

望月は困ったような声で、今日あったことの一部始終を話しだした。

どうやら笹川に男を紹介されたらしい。

それで友達になってしまったと…

そういえば、今日用事で一緒に帰れないとか言ってたな…

「…そう」

『あ、あの…やっぱりそんなの断った方が良かったですかね？』

望月はオレの機嫌を伺うような声で言った。

そりゃぁ…

断った方が良かったにきまってるだろ。

「まぁ、正直言ったら断って欲しかったけど」

だってそりゃ望月に男の知り合いが増えるなんて嫌だし。

どうせオレのことだから、またつまらねぇ嫉妬とかしそうだし…

『…すいません』

望月は小さな声で謝った。

そのあまりにも落ち込んだような声に、思わず慌ててしまう。

そ、そんな風に謝られてもだな…

……

「…でも、望月はその富岡ってやつと変な関係にはならないって分かってるから」

少し顔が熱くなった。

…オレは望月を信用できる気がする。

いや、信用しないといけない気がする。

望月はオレの彼女なんだ。

だから、絶対にあいつはオレを裏切ったりしない。

なんとなく、オレは確信をもってそう思えた。

そしてそれから何日か後。

もうすぐ冬休みが始まる。

いや、その前にクリスマスがある。

その日には望月と一日デートするってことに決めてたんだが…

やっぱり、クリスマスってプレゼントとかいるのか…??

プルルルル…

不意にケータイの着信音が鳴った。

…ん?

メール…??

多分望月だろうと期待して、オレはメールを開いた。

だが、それは笹川からのもの。

【滝沢クン!今度の日曜買い物付き合ってよ!】

…??

えっと…

オレ、一応彼女いるんだからそんなの無理だろ、普通に考えて。

こいつはバカなのか…??

ちなみになんで笹川がオレのアドレスを知っているかというと…

……どうやら無理やり望月から聞きだしたらしい。

それでよくメールしてくるんだが…

まぁ、大体は無視してる。

だから、今日も無視するつもりでいた。

けど、ケータイを閉じようとした時、

ふと望月へのプレゼントのことが頭によぎった。

プレゼントって…

何買えばいいんだ??

オレ1人で行くより、他の女の意見も聞いた方がいいんじゃないか…??

…いや、でもさすがに笹川といくってのはだめだろ。

そんなの望月のことを裏切ってるみたいになるし。

けど……

もし、せっかく買って望月が喜んでくれなかったら…

それも、嫌だよな…

オレは少し悩んで、返信を打った。

【いいけど。できるだけ遠い所な】

ここから結構離れたとこなら望月に合うことはないだろう。

そして言わなければばれることはない。

これは別に望月を裏切るわけじゃない。

ただ、望月のために…

望月に少しでも喜んでもらえるように、そうするんだ。

日曜日。

オレは笹川と、普段は行かないような結構離れたショッピングモールに行った。

笹川の案でここに行くことになったんだが…

まぁ、別にここなら望月に見られることもないだろう。

「でもホントうれしい！滝沢クンが私の買い物に付き合ってくれるなんてね！」

笹川はそう言ってオレに微笑みかけた。

別に…

オレはおまえの買い物に付き合うためにきたわけじゃないんだけどな…

「で、何買いたいの？」

「うーん…なんでもいいんだけど…やっぱアクセサリーかなっ？」

……こいつは、何を決めたいかも決めずに買い物に行きたいとか言ってたのか…？？

望月もたまにそういうところあるけど、こいつは特に分からない。

とりあえずオレは、笹川にひっぱられて近くの店に入った。

「えっと…何にしよっかなー？？」

笹川は目をキラキラさせながらところせましと並べられているネックレスやら指輪やらを見ている。

…やっぱ、望月もこんなのがいいのか？？

そう思い、オレも笹川の隣に並んでいろいろと見てみる。

でも望月ってそういうのしそうにないからな…

ブレスレッドくらないならしそうだけど…

オレは笹川から離れて、ブレスレッドばかりが並んでいる棚を見てみた。

そしてその中の一つを手にとってみる。

これ…

結構いいんじゃないのか…??

「滝沢クーン！何見てるの！?」

不意に後ろから笹川に声をかけられて、思わずビクッとしてしまった。

「い、いや…別に?」

オレが何気ない調子で言うと、笹川はオレが手に持っていたブレスレッドをとりあげた。

「へぇー…こんなの見てたんだ…。これってもしかして詩織ちゃんへのプレゼント??」

な、なんで分かるんだよ…??

別に隠す必要もなかったので、オレは黙ってうなずいた。

「ふーん。いいんじゃない？詩織ちゃんらしいし！」

笹川はそう言ってにっと笑った。

予想していなかった反応に驚いてしまう。

「あ、ああ…そうか？？」

笹川はオレから取り上げていたブレスレッドをオレに返した。

もう一度、そのブレスレッドを眺めてみる。

淡いオレンジを基調にしたブレスレッド。

望月らしい、控えめな色。

これで、いいか。

結局オレはそれを買うことにした。

会計を済ませて、その店をでる。

「詩織ちゃん喜んでくれたらいいのにね」

笹川はそう言ってオレに微笑みかけた。

「そうだな」

そう言って笹川に微笑みかえす。

そしてオレは少しは笹川の買い物にも付き合ってやろうと、他のアクセサリー店を探してまわりを見まわした。

そのとき、

「…？？」

一瞬、望月らしい人影が目の端にうつった気がした。

望月…？？

なんでこんなとこに…？？

……いや、見間違いだよな。

そう思ったものの、やっぱり気になって近づいてみる。

「……！！」

やっぱりそこに、望月がいた。

…他の男と、キスしている。

信じられなくて、オレは目を疑った。

だけど、何度見なおしても、その事実は変わらない。

オレはその場から動けなかった。

目をそらすこともできない。

ただ、望月が何の抵抗もせずに他の男にキスされているのを、黙って見つめていた。

「滝沢クン？どうしたの？？」

後ろから笹川に声をかけられた。

「…いや、なんでもない」

なんとか、平気な声を装った。

胸が、つぶれるほどに痛かった。

なんで…

なんで望月がここにいるんだよ…？？

しかも…

他の男と…

何の抵抗もせずに…！！

…もしかして、あれが富岡ってやつか…？？

あいつとは、友達じゃなかったのか…？？

なんで…

なんで…！！

なんでだよ！？

オレは望月が富岡ってやつと友達になるって聞いた時、望月が富岡ってやつと変な関係にならないと分かってると言った。

そう、信じていた。

なのに…

なのに、望月は裏切った。

オレは望月を信じていたのに…

今すぐ望月のところにいって、怒鳴りつけたかった。

富岡ってやつをぼろぼろにしてやりたかった。

だけど、その気持ちをぐっと抑えつける。

いや…

違う。

あれは事故だったのかもしれない。

そうだよ。

オレも事故で笹川とキスしてしまったことがある。

そのとき、オレに全然その気はなかったんだ。

だから…

望月も、それと同じなのかもしれない。

いや、絶対にそうなんだ。

オレはなんとかそう、自分を納得させた。

次の日の昼休み。

オレは昨日、何も見ていなかった風を装って望月と接していた。

いつものように望月と屋上で食べる昼食。

望月と、二人きり。

本当に望月はオレの彼女なんだ。

そう実感できる時間。

だけど、今日オレは素直にそう思えなかった。

不安で仕方がなくなって、望月に昨日のことを問い詰めてやりたかった。

けど、なんとかその気持ちをおさえ、軽い感じで聞いてみる。

「なぁ、望月って昨日何してた??」

普通の、普段の会話を装って。

本当は知りたくて仕方がないのに、何気ない調子を装う。

オレは望月が本当のことを言ってくれると信じていた。

他の男とキスしてしまったのは偶然だと。

自分は、そんなつもり全然なかったと。

だけど、望月の答えは違っていた。

「えっと…昨日はお母さんとお買いものに行っていました」

ズキッ…

胸がしめつけられる。

そして同時に望月に言いようもない怒りを覚えた。

望月に、嘘をつかれた。

なんで嘘つくんだよ?

なんでもなかったなら正直に言えばいいじゃないか。

なんで…

なんで嘘なんて…

……望月が、富岡ってやつに心変わりしたから……？？

「響くんは何をしていたんですか？」

不意に望月にそう聞かれた。

「オレは昨日、ずっと家にいたけど」

オレは嘘をついた。

望月はどうせ知らない。

オレが笹川と一緒に買い物に行っていて、そこで偶然望月を見たなんて。

なら、わざわざ知らせてやることもない。

もし、知らせてしまったら…

望月にふられてしまうかもしれない。

望月との関係が終わってしまうかもしれない。

オレは、望月に裏切られても、

それでも、どうしようもなく望月が好きなんだ。

だから、絶対に別れたりなんてしたくない。

このまま…

このまま何も言わなければ……

何も気付いていないふりをすれば……

もし、望月が富岡ってやつのことが好きになっていたとしても、

あと少しはこのままでいられるかもしれない。

「そうなんですか」

望月はそう言ってオレに笑いかけた。

愛しくて、オレが一番好きな笑顔。

この笑顔を手放したくない。

他のやつなんかに渡したくない。

少しでも、

あと少しの間でも、オレのものにしておきたい。

オレは望月に笑顔をかえした。

このまま、昨日のキスのことなんか知らない風を装っていれば……

たとえそれがあと少しの間だけだとしても……

望月との関係を続けることができる。

★19話　疑心暗鬼★響side（後書き）

んー…
なんとなく最後の方、同じことばっかり言ってる気がします（＊―＊；
しかも早とちりしすぎです…（；一―一）

☆２０話　クリスマス☆詩織ｓｉｄｅ

気まずいままむかえた、クリスマス。

今日、響くんと駅で待ち合わせしている。

ずっと楽しみにしていた日。

なのに…

その当日の今日、私は行きたくないと思っていた。

こんな状態で、響くんと一日ずっと一緒にいられるかどうか不安だった。

だけど、約束は約束。

行かなくちゃ…

いけませんよね…？？

私は小さなため息をついて家をでた。

そして少し早く駅につき、ぼんやりと響くんを待っていた時、

「詩織ちゃん」

不意に後ろから誰かに声をかけられた。

驚いて振り返ると、そこには富岡サンの姿。

「富岡サン??どうしてここに…!!」

突然何かで口を押さえつけられた。

えっ…!?

なん、ですか…?

これ…!?

だんだんと意識が遠のいていく。

富岡サンが、にっと薄く笑った。

その後ろには何人かの不良っぽい男の人達がいる。

嫌…

なにがなんだかわからなくって、とても怖かった。

助けてください…!!

「ひ…びき…くん…」

私はそのまま意識を手放した。

目を覚ますと、私は暗い部屋にいた。

ここ…は…??

私、どうしてこんな所に…

「目が覚めた??」

突然誰かが言った。

暗がりで姿は見えないけど、声はたしかに富岡サンの声。

そうだ…

駅で響くんを待っていたら、突然富岡サンに声をかけられて…

そして後ろから誰かに口を押さえつけられて…

気がついたらここに…

そこまで思い出して、私ははっと気がついた。

「響くん…響くんと待ち合わせを…早く、行かなくちゃ…」

きっと響くんは私を待ってくれている。

私はこんなところにいる場合じゃないのに…

「だめだよ。行かせない」

富岡サンが低い声で言った。

そして私の手首をつかむ。

富岡サンが私に顔を近づけてくるのが分かった。

キスされる…！！

私は直感的にそう思い、顔をそむけた。

もうこれ以上、響くん以外の人にキスなんてされたくなかった。

「止めてください…！！」

富岡サンの動きが止まった。

しばらくの沈黙の後、少し笑ったような声がふってくる。

「…それじゃ、唇にはしないようにするよ」

「え…？……やっ！！」

富岡サンが私の首筋にキスをした。

そして私のブラウスのボタンをあけながら、唇以外のいろいろな所にキスをする。

嫌…

嫌です…

響くん以外の人に、こんなことされたくない…

「止めてください…！！」

必死にそう言っても、富岡サンは手を止めようとはしない。

だんだんと目が慣れてきて、富岡サンの表情が見えてきた。

私にこんなことしてても何も思っていないような、全くの無表情。

私は、富岡サンが望んでこんなことをしてるんじゃないと悟った。

「なんで、やりたくもないことしようとしているんですか…？？」

富岡サンの手がぴたりと止まった。

「富岡サンは、本当はこんなことしたくないんでしょう…？？」

富岡サンは驚いたように、じっと私を見る。

「…なんで？なんでそう思うの？？」

富岡サンが私に向かってつぶやくように言った。

「なんとなく…富岡サンが、そんな表情をしていましたから」

富岡サンは目を見開いて、口を閉ざした。

そしてしばらくの沈黙のあと、

「…詩織ちゃんは、あの滝沢ってやつのどこが好きなの??」

富岡サンは小さな声で私に問いかけた。

突然の予想していなかった質問に、私は少し戸惑ってしまった。

突然どこが好きなのかって聞かれましても…

「そんなの…いっぱいありすぎて、伝えきれません」

私は小さな声でそうつぶやいた。

「おまえも、あいつの顔が好きなだけだろ?」

富岡サンは軽蔑するような声でそう言った。

「ち、違いますっ!!」

少し腹が立って、私は少し荒らげた。

そんな私を見て富岡サンはふんっと笑った。

「無理しなくてもいい。…美空も、そうだから」

切な気な声。

富岡サンの表情が少し、変わる。

え……??

美空って…

笹川、サン…ですか??

笹川サンも…

響くんのことが好きなんですか…??

「おまえも美空と同じだ。そうだろ?」

やっぱり、少し軽蔑しているような声。

違う…

私は、響くんの顔が好きなだけなんかじゃない…

私は、笹川サンとは違う。

「違います…私は、響くんのそんなところが好きなんじゃないです」

たしかに、響くんは他の人とは比べようもないくらいにきれいだと思います。

だけど…

それは、私にとっては響くんの好きなところのほんの一部でしかない。

「私は…響くんの優しい所や、照れ屋な所、その他にもいろんな所、

…響くんの全部が好きなんです」

富岡サンが少し目を見開いた。

そしてふっと笑う。

「…そうか。オレも…そう、なんだけどな」

…??

富岡サンの言っている言葉の意味が分からなかった。

どういうことか尋ねようとした時、

「…!?」

ぐっと、口に布を押さえつけられた。

また、意識が遠のいていく。

「…あいつは、気がついてくれないんだ」

消えていく意識の中で、富岡サンの悲しそうな声が聞こえた気がした。

≪望月≫

夢の中で優しい声が私を呼んだ。

低い、私が一番安心できる声。

その声は…

響、くん…??

瞼を開くと、目の前に大好きな姿があった。

「望月!大丈夫か!?」

「響…くん…」

響くんを見て、響くんの声を聞いて、私はすごく安心できた。

「私は、大丈夫ですよ?」

だんだんと意識がはっきりしてきて、私はにこっと響くんに微笑みかけた。

「…良かった」

響くんは安心したような表情をして、私に笑顔を返す。

私は上半身をおこして、辺りを見回してみた。

以前にも見たことがある部屋。

「ここは…響くんの部屋ですか?」

「ん？ああ、そうだけど」

…あれ？

私さっきまで暗い部屋にいたはずなのに…

「どうしてここに？？」

そう問いかけてみると、響くんは口を閉ざした。

「響くん？？」

響くんは苦虫をかみつぶしたような顔をしながら言った。

「…おまえが約束の時間にこなくて心配になって電話してみたら、富岡が…」

そこまで言うと、響くんは言葉を止め、にこっと私に笑いかけた。

「まぁ、そんなのどうだっていいんだ。今、望月はここにいるんだから」

響くんはそうつぶやくと、私に言った。

「それよりオレ、おまえに言わなくちゃいけないことがある」

「言わなくちゃ…いけないこと…？？」

なんとなく、私には響くんが言いたいことが分かった。

……それなら、私にもあります。

「オレ…」

「待ってください」

響くんが言いかけた言葉を、私は慌てて制した。

響くんが怪訝な顔で私を見る。

「私も、言いたいことがあるんですけど…先に言ってもいいですか？」

少しの間のあと、響くんは小さくうなずいた。

コクリと唾を飲み込み、勇気を出して言う。

「私、本当は日曜日、富岡サンとお買いものに行っていたんです。そして…」

次の言葉が、なかなかでてこなかった。

言ってしまうと、響くんを傷つけてしまいそうで。

だけど…

言わなくちゃ。

響くんには、嘘をつきたくないから。

「私、富岡サンと…キス、してしまったんです…」

響くんが大きく目を見開いた。

私は慌てて弁解をする。

「いや、その！望んでしたわけじゃなくって！無理やりされたというか…！！」

驚いて、私は言葉を止めた。

「良かった…！！」

響くんのうれしそうな声が、すぐ耳元で聞こえる。

響くんの香りが、私をつつんでいる。

響くんが、私を抱きしめている。

「え…？？」

うれしくってたまらなかったけど、それよりも私は『良かった…！』という言葉の意味が気になった。

響くんはそんな私の気持ちに気付いたのか、ぎゅっと強く私を抱きしめながら言った。

「オレ、本当は見てたんだ。おまえが富岡ってやつとキスしてるところ…」

え…？？

そう、だったんですか…？？

響くんは、知っていたんですか…？？

「オレも笹川と買い物行ってて…。おまえに、クリスマスプレゼントを買いたかったんだ」

……！！

クリスマス、プレゼント…？？

私に…？？

「なんで…笹川サンと…？？」

私がそう尋ねると、響くんは小さな声で言った。

「……オレ、何買ったらいいか分かんなかったし…笹川なら、女の好きなものとか分かるかと思って…」

私はあっけにとられて呆然とした。

そして思わず吹き出す。

響くんは抱きしめるのをやめて、怪訝な顔で私を見た。

「…何笑ってんだよ？？」

「いえ…響くんも、私と同じこと考えてたんだなって思って」

私も、響くんに何を買えば分からなくて富岡サンに付き合ってもらった。

響くんも、それと同じだったんですね。

そう思うと、すごく安心できた。

そして、私が富岡サンとキスしたことを響くんに黙っていたことに対して、響くんがどう思っていたかを考えてみると、ものすごい罪悪感がわいてきた。

響くんは…

私が富岡サンとキスしたことを知ってたのに…

私は何も言わなくて、きっとそれですごく傷ついていたんでしょうね…

私…

響くんにひどいことをしてしまいました…

「響くん…ごめんなさい」

私は笑うのをやめて、響くんに謝った。

響くんは私が何に対して謝っているのか悟ったようで、優しい笑顔で私の髪をなでた。

「別に…。おまえはちゃんと言ってくれたんだし」

響くんはそう言うと、机から何かをとりだした。

そしてそれを私にさしだす。

「これ、そのとき買ったやつ」

私はその小さな袋を受け取った。

「あけてみても、いいですか??」

そう尋ねてみると、響くんは首を縦にふった。

響くんからの初めてのプレゼント。

うれしくて、ドキドキしながらあけてみる。

「わぁ…」

中身を取り出して、私は思わず感嘆の声をあげた。

淡いオレンジを基調にした、シンプルなブレスレッド。

響くんが私のために選んでくれた、ブレスレッド。

「すごくうれしいです…!!」

うれしくて、うれしくてたまらなかった。

私はそれを鞄の中に大事に入れると、代わりに響くんへのプレゼントを取り出した。

そしてそれを響くんにそれを差し出す。

「私も、響くんにプレゼントです」

私はそう言って響くんに向かって微笑んだ。

「…オレ、に??」

響くんは驚いたような表情で、私のプレゼントを受け取った。

そして中身を取り出す。

私はドキドキしながら響くんの反応を見ていた。

響くんは…

喜んで、くれるでしょうか…??

響くんは時計をみると、大きく目を見開いた。

「これ、高かったんじゃないのか??」

「いえ、それほどでもありませんでしたよ」

私はにっこりと笑って言った。

本当は少し高かったですけど…

ここは言わない方がいいですよね！

響くんはしばらくまじまじと時計を眺めると、にこっと私に笑いかけた。

「…ありがとう。大事にする」

どうやら喜んでくれたようです。

私は安心して、響くんに笑顔を返した。

「…オレな？」

響くんは突然真剣な声で言った。

自然と、私も真剣にその言葉に耳を傾ける。

「文化祭の時、オレが笹川と事故でキスしちまったの見て、おまえは初めてがなんとか言ってたけど…オレ、正直そんなのどうでもいいだろって思ってたんだ」

…えっ？？

そうだったんですか？？

たしかに響くんはそこまで重大に思ってない雰囲気でしたけど…

「でも、おまえが富岡ってやつとキスしてるのを見た時、すげぇシ

ョックだった。それでおまえも同じ気持ちだったんだなと思った」

響くんは少し間をあけて、小さな声で言った。

「それでオレ、思ったんだ。あいつに先こされるなら、オレが先にしとけばよかったって」

ドキッ…

心臓が強く鳴る。

「今さら、遅いけど…でもオレ、おまえにキスしたい」

響くんは頬を真っ赤に染めて、熱っぽい目で私を見た。

それがあまりにも魅力的で…

どうしましょう…

心臓がドキドキしすぎて…

つぶれてしまいそう…

顔に血がのぼりすぎて、頭がくらくらしてくる。

「…いいか？」

響くんの黒い瞳がまっすぐに私をとらえて、吸い込まれそうになる。

私は小さく首を縦にふった。

響くんがゆっくりと私に近づいてきた。
私はそっと目を閉じる。
唇に、やわらかいものが触れた。
そっと、触れる程度のキス。
すぐに、響くんの唇は私から離れる。
ほんの短いキスだったけど、私にとっては永遠のように長く感じた。
富岡サンに何度もキスされたときよりも…
すごく長くて、心地よく感じた。
目をあけると、響くんが顔を真っ赤にしてそっぽをむいていた。
それがすごく響くんらしくて、私はくすっと小さく笑った。
…クリスマスは、キリストが誕生した日。
神様が生まれた日。
きっと、この幸せは神様からの贈り物なんでしょうね。
それとも、サンタさんからのプレゼントなのでしょうか??
サンタさんなんていないって分かったつもりでしたが…

案外、サンタさんはいるのかもしれません。

☆２０話　クリスマス☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

ちょっと急展開すぎますかね？
あと、響を美化しすぎたかもです…（↑いつもです（―＿―；））

★２０話　クリスマス★響ｓｉｄｅ

１２月２５日。

今日はクリスマス。

オレは望月と待ち合わせている駅に向かって走っていた。

時計を見ると、すでに待ち合わせの時間から１５分は遅れている。

絶対望月待ってるよな??

ったく、なんでこんな日にかぎって寝坊するんだよ、オレ!!

そして待ち合わせの時間から３０分ほどの時間が過ぎたころ、やっと駅についた。

だけど、そこにはオレを待つ望月の姿はない。

「望月??」

オレはキョロキョロとあたりを見回して、望月を探してみた。

だけど、一向に望月の姿は見つからない。

もしかして…

オレが来るのが遅すぎたから、もう帰っちまったのか…??

でも、それなら電話くらいしてくれたらいいだろ？

……それとも、

嫌な考えが頭によぎる。

もともと、ここに来るつもりはなかった…

のかも、しれない…

なんで？

…富岡ってやつと過ごすから。

もう、オレのことなんて好きじゃないから…？？

オレは首をふって、嫌な考えを振り払った。

そして大きく息を吸う。

いや、落ちつけよ、オレ。

もしかしたら望月もオレと同じように寝坊したのかもしれない。

もしかしたら急な用事ができたのかもしれない。

それで電話する暇もなかったのかもしれない。

それじゃ、とりあえずオレから電話してみればいいんだ。

そう思い、オレはケータイをとりだした。

そして望月の電話番号を押す。

プルルル…プルルル…プルルル…

何回かのコール音のあと、無機質な機械音がした。

『只今、電話にでることができません。ピーという発信音のあとに…』

オレは呆然としながら通話を切った。

出ない。

ますます嫌な予感が大きくなる。

今、富岡ってやつといるから?

だから、オレの電話にでられないのか…??

「…なんでだよ…!?」

オレはやるせない思いでいっぱいになって、たまらずぽつりとつぶやいた。

オレはとぼとぼと家路についていた。

もう、何もする気力がなかった。

ただ早く家に帰って眠ってしまおうと思っていた。

そのとき、

「あっ！滝沢クン！！」

不意に後ろから声をかけられた。

振り返ると、笹川が笑顔でオレに手を振っている。

そしてオレにかけよってきた。

「どうしたの？こんなとこで…」

オレの表情を見て、少し心配そうに言う。

「…別に、なんでもない」

オレは笹川に背を向けて足を進めた。

後ろから、オレを追いかけてくる足音が聞こえる。

オレは無視してそのまま歩いた。

だけど、いつまでたっても足音はついてくる。

…しつこい！

「なんだよ？」

オレは振り返って笹川を睨んだ。

「別に？滝沢クン、どこ行くのかなー？って思って」

「…家、帰るだけだよ」

オレがそう言うと、笹川は少し驚いたような表情をした。

「え？今日は詩織ちゃんとデートじゃないの？せっかくのクリスマスなのに…」

ズキッ…

胸がしめつけられる。

…本当は、その予定だった。

今頃、望月といるはずだったんだ…

だけど…

望月はこなかったんだ。

「…関係ないだろ」

オレはふいと笹川から目をそらした。

「…私、さっき詩織ちゃんと大河が一緒にいるところ見たよ？」

ピタッ

思わず、足が止まる。

「滝沢クンも知ってるよね？大河のこと」

大河って…

富岡、ってやつのことか…？？

そいつが…

望月と一緒にいた…？？

「もしかしたら、詩織ちゃんって大河のことが好きなんじゃないの？」

ズキッ！

鋭い痛みが胸を貫いた。

そう…なのか…？？

望月は…

やっぱり、富岡ってやつのことが好きなのか…？？

笹川はそっとオレの頬に触れた。

「落ち込まないで？大丈夫。詩織ちゃんはもう、滝沢クンのことが好きじゃないかもしれないけど…私は…滝沢クンのことが好きだよ？？」

笹川が少し頬を染めて微笑んだ。

「滝沢クンは…どうしても、詩織ちゃんじゃなきゃダメなの？？私じゃ…ダメ？」

笹川は上目づかいでオレを見た。

少し、瞳が潤んでいる。

ドキッ…

少しだけ、心臓が強く鳴った。

…笹川は、オレのことが、好き、なんだよな…？？

なら…

望月を思っているより…

こいつを好きになった方が…

楽なんじゃないのか…？？

オレは頬に触れている笹川の手をとった。

「笹川…」

頭の中に、望月が富岡とキスしている情景が浮かんだ。

望月はもう、富岡のことがすきなんだ。

だから…

オレも…

プルルルル…

不意にケータイが鳴った。

望月…！？

直感的にそう思い、オレはすぐに電話にでた。

「もしもし！？望月！？」

『…○？区の廃校』

電話から聞こえた声は、望月の声じゃなかった。

知らない、男の声。

「おまえ…富岡…？？なんでおまえが…」

なんでおまえが望月のケータイからオレに…！！

『そんなこと、どうでもいい。早く今いった場所にこい』

「はぁ!?何で…」

プツッ…

小さな音がして、通話が切れた。

しばらく、呆然と電話を見つめる。

「滝沢クン?どうしたの??」

笹川がオレに声をかけてきた。

「…悪い。オレはやっぱり望月以外、好きになんてなれない」

オレはそう一言言うと、急いでさっき富岡が言った廃校に向かって走った。

そこに望月がいるかもしれない。

望月が危ない目にあっているかもしれない。

そう思うと、オレの足どりは自然と早くなっていた。

廃校につくと、門の前に望月をかかえた富岡の姿があった。

望月はぐったりと眠っている。

オレはきっと富岡を睨んだ。

「おまえ…望月に何かしたのか??」

富岡は涼しい顔でふんっと笑った。

「安心しろ。何もしてないから」

「…なんで、こんなところにいるんだ?」

そう尋ねると、富岡は小さな声で言った。

「…あるやつに、頼まれたんだ。詩織ちゃんと襲えって」

襲えって…

やっぱり、何かしたんじゃ…!?

「大丈夫だよ。オレには詩織ちゃんを襲うことなんてできなかった」

富岡は望月をオレに差しだした。

オレはそっと望月を抱えた。

たしかに望月に、何かされたような跡はない。

オレはほっと安堵の息をついた。

「…おまえは、いいよな」

不意に富岡がつぶやいた。

「…何がだよ?」

オレが問いかけると富岡はせつな気に笑った。

「なんでもない。早く行けよ」

オレは少し、富岡の反応が気になったが、無視して富岡に背を向けた。

とりあえず、オレは望月をオレの家に連れてきて、ベッドに寝かされた。

ベッドのそばで、すやすやと眠る望月を見つめる。

軽く、髪に触れてみた。

やわらかい髪。

…富岡は、何が言いたかったんだ??

なんで、何もせずに望月をオレに返したんだ…??

「なぁ、なんでだろうな?望月…」

望月から返事はかえってこない。

なんとなく、望月がこのまま目を覚まさないような気がしてきた。

「望月？望月、望月…」

心配になり、何度も望月の名前を呼んでみる。

肩をゆさぶってみても、望月は目を覚まさない。

不安が、大きくなる。

もしも…

もしも、富岡が望月に変な薬を飲ませたんだとしたら…？？

一生目を覚まさないような、そんな薬を…

いや、でもそんな薬、あるわけない。

ばかばかしい。

どうせただの睡眠薬だろ？

……

「望月」

オレはもう一度、望月の名前を呼んだ。

望月の瞼が少し動く。

……！！

望月がゆっくりと目を開き、オレをとらえる。

「望月！大丈夫か！？」

「響…くん…」

望月はしばらくじっとオレを見て、にっこりとオレに向かって微笑みかけた。

「私は、大丈夫ですよ？」

そんな望月の声を聞いて、オレは安心して体から力がぬけていくのを感じた。

「…良かった」

そうつぶやいて、望月に微笑み返す。

「ここは…響くんの部屋ですか？」

望月は上半身を起こして、キョロキョロとまわりを見回しながら言った。

「ん？ああ、そうだけど」

「どうしてここに？？」

オレは思わず口を閉ざした。

富岡に居場所を知らされて…

そこで、富岡に望月を渡されたなんて…

なんとなく、言いにくい。

「響くん??」

望月はきょとんとしてオレの顔をのぞきこんだ。

仕方なく、オレは口を開いた。

「…おまえが約束の時間にこなくて心配になって電話してみたら、富岡が…」

ふと、そこで言葉を止める。

富岡は、誰かに望月を襲えと言われたらしい。

そんなの、望月には言わない方がいいよな…??

「まぁ、そんなのどうだっていいんだ。今、望月はここにいるんだから」

オレはそうつぶやいて、望月に微笑みかけた。

うまくごまかせたようで、望月はそれ以上詮索しようとはしてこなかった。

そう、今望月はここにいる。

何事もなく、オレのそばにいるんだ。

ふと、頭の中に望月と富岡がキスしていたときの情景が浮かんできた。

…オレ、望月が富岡とキスしてたところ実は見てたって、望月に言おうかな。

オレから言ったら、望月はちゃんと事故だったって言ってくれるかもしれない。

多分、望月は富岡のことが好きなわけじゃなさそうだし…

「それよりオレ、おまえに言わなくちゃいけないことがある」

「言わなくちゃ…いけないこと…??」

望月はオレの言葉を繰り返した。

やっぱり、少し勇気がいる。

どうしても、心のどこかで、もしかしたら望月は富岡のことが好きなのかもしれないと思うオレがいるんだ。

だけど…

言わないと、どうなるかわからないもんな。

「オレ…」

「待ってください」

オレが口を開きかけた時、望月がオレを制した。

…？？

なんだよ…

人がせっかく勇気だして本当のことを言おうとしたのに…

「私も、言いたいことがあるんですけど…先に言ってもいいですか？」

……

なんとなく、望月が言いたいことがわかった。

多分、それはオレと同じこと。

オレは小さくうなずいた。

望月がコクリと喉を鳴らす。

「私、本当は日曜日、富岡サンとお買いものに行っていたんです。そして…」

望月はそこで言葉を止めた。

とまどうように視線をさまよわせる。

そして、小さな声で口を開いた。

「私、富岡サンと…キス、してしまったんです…」

……！！

オレは思わず目を大きく見開いた。

望月が…

自分から、本当のことを言ってくれたんだ……！！

「いや、その！望んでしたわけじゃなくって！無理やりされたというか…！！」

望月はオレの反応を勘違いしたようで、慌てて弁解しだした。

だけどそんな弁解、オレの耳には入らなかった。

オレはただうれしくて、気がついたら望月を抱きしめていた。

「良かった…！！」

やっぱりあれは事故だったんだ。

望月がしようとしてしたわけじゃなかったんだ。

望月はオレを裏切ったわけじゃなかったんだ…！！

「え…??」

「オレ、本当は見てたんだ。おまえが富岡ってやつとキスしてるところ…」

オレも本当のことを言わないといけない。

オレが望月達がキスしてるのを見ていたことを。

…オレも、笹川と出かけていたことを。

「オレも笹川と買い物行ってて…。おまえに、クリスマスプレゼントを買いたかったんだ」

「なんで…笹川サンと…??」

望月は驚いたように言った。

「……オレ、何買ったらいいか分かんなかったし…笹川なら、女の好きなものとか分かるかと思って…」

オレは小さな声でそう言った。

こんなの、望月にとってはただの言い訳に聞こえるかもしれない。

でも、本当なんだ。

オレは、ただ…

おまえに少しでも喜んでもらいたかっただけなんだ…

望月はしばらく黙っていた。

そして突然ぷっと吹き出す。

……??

何で今笑うんだ…??

絶対今は笑い時じゃないだろ?

オレは怪訝に思い、抱きしめるのを止めて望月を見た。

「…何笑ってんだよ??」

「いえ…響くんも、私と同じこと考えてたんだなって思って」

……??

意味がよくわからなかった。

でも、望月が楽しそうに笑っているので、まぁいいかと納得する。

望月が不意に笑うのをやめ、真剣な声で言った。

「響くん…ごめんなさい」

何に対して謝っているのか分からなくて、一瞬戸惑う。

だけど、すぐに理解した。

望月は、富岡とキスしてしまったことに対して謝ってるんだ…

「別に…。おまえはちゃんと言ってくれたんだし」

オレは笑顔を作って望月の髪をなでた。

なんとなく、オレと望月の間にできていた微妙な距離がなくなった気がした。

…そうだ。

もう、望月に渡しとくか。

オレはそう思い、机から小さな袋をとりだした。

そして、それを望月に差し出す。

「これ、そのとき買ったやつ」

望月はそれを受け取って、まじまじと見つめた。

「あけてみても、いいですか??」

オレは首を縦にふった。

望月はそっと中身を取り出した。

なんとなく、緊張する。

もし、気に入らないと言われたらどうしようか。

まぁ、望月にかぎってそんなこと言わないともうけど…

「わぁ…」

望月はブレスレッドを取り出して、小さな感嘆の声をあげた。

まじまじとそれを見つめて、にっこりとオレに向かって微笑んだ。

「すごくうれしいです…！！」

その素直な言葉が、たまらなくうれしかった。

望月はそれを大事そうに鞄にしまうと、代わりに中から何かを取り出した。

そしてその袋をオレに差し出す。

「私も、響くんにプレゼントです」

望月はそう言ってオレに微笑んだ。

「…オレ、に??」

まさか望月も用意してくれているとは思っていなかったので、オレは驚きながらそれを受け取った。

そして中のものを取り出してみる。

それは少し高そうな、黒い腕時計。

「これ、高かったんじゃないのか??」

オレが訪ねてみると、望月はにっこりと微笑んで言った。

「いえ、それほどでもありませんでしたよ」

…本当に?

オレはまじまじと時計を見つめた。

望月が、オレのために買ってくれた腕時計。

多分、本当は高かったんだと思う。

それでも、オレのために買ってくれたんだ。

「…ありがとう。大事にする」

オレはそう言って望月に微笑みかけた。

望月からもらったものなんだ。

これから絶対に、肌身離さずつけていよう。

望月は安心したような表情でオレに微笑みかえした。

そんな望月を見て、不意に望月がたまらなく愛おしく感じた。

「…オレな？」

オレ、何言いたいんだろう？

よくわからねぇけど…

口が、勝手に動く。

「文化祭の時、オレが笹川と事故でキスしちまったの見て、おまえは初めてがなんとか言ってたけど…オレ、正直そんなのどうでもいいだろって思ってたんだ」

だって初めてだって、そうじゃなくたって、どうせキスするなら同じだろ？

別に、順番なんて関係ない。

そう思っていた。

「でも、おまえが富岡ってやつとキスしてるのを見た時、すげぇショックだった。それでおまえも同じ気持ちだったんだなと思った」

それでオレは気付いたんだ。

たしかに、順番なんてどうだっていい。

でも、好きなやつが他のやつにキスされるのは、すごく嫌だ。

そして、望月も多分、あのときそんな気持ちだったんだと思う。

「それでオレ、思ったんだ。あいつに先こされるなら、オレが先にしとけばよかったって」

どうせなら…

どうせあいつに望月がキスされるって決まってたんなら…

オレが初めにしとけばよかった。

あんなどこの誰かもしらねぇやつに先をこされるなんて、悔しくてたまらない。

「今さら、遅いけど…でもオレ、おまえにキスしたい」

自分で言ったことに驚いた。

顔が燃え上がる。

だけど、それがオレの正直な気持ちだった。

オレ以外のやつが望月にキスしてるのに、彼氏のオレがキスしたことないなんて、絶対に変だ。

望月は顔を真っ赤にさせて、じっとオレを見た。

オレもその瞳を覗き込んで、了承をとってみる。

「…いいか？」

望月は熱に浮かされたような表情で、小さく首を縦にふった。

……！！

まさか、いいと言われると思わなくて、少し驚く。

心臓がドキドキと早鐘のように脈打つ。

オレがゆっくりと望月に顔を近づけると、望月はそっと目を閉じた。

オレは変な所にキスしてしまったらいけないと思い、ギリギリまで目をあけていた。

望月の唇まで、ほんのあと一センチくらいまで近づいた時、ぴたりと動きを止める。

ほんのすぐそばにせまった望月を見て、おかしくなりそうになる。

……本当に、いいのか？

オレは一瞬戸惑って、そして覚悟を決めて目を閉じた。

唇に、やわらかい感触を感じる。

オレはすぐに唇を離した。

顔が燃えるように熱い。

まともに望月の顔が見れない。

望月がそっと目をあけた。

オレは慌ててそっぽをむく。

望月がそんなオレを見て、小さく笑う声が聞こえた。

…どうせ、オレはキスくらいでこんなになる根性無しだよ…！

オレは心の中でそうつぶやいた。

そしてにっと笑う。

今年のクリスマス。

6年の頃にいなくなった赤服のじいさんは、最高のプレゼントをくれた。

★２０話　クリスマス★響ｓｉｄｅ（後書き）

最後の文がおもいっきり詩織とかぶってます…
でもクリスマスっぽいとこ全然なかったので…
ちょっとでも、と思いまして（＾―＾）

☆★不器用な愛し方★☆大河ｓｉｄｅ

『私、笹川美空！よろしくね！』

５歳の時。

そう言ってオレに手を差し出したあいつは、

とても、輝いていた。

美空はオレ達がまだ幼稚園児の頃に、オレの隣に引っ越してきた。

そのころ、友達が少なかったオレにとっての初めての友達。

それからオレ達はどんなときでも一緒だった。

他の友達を作ろうとせず、いつも２人で遊ぶ方法を考えては、笑いあっていた。

オレにとって、美空は親友だと思っていた。

だけど、あることがきっかけで、オレの気持ちは変わった。

…それは、中学１年のころ。

『富岡クン、付き合ってください！』

突然、クラスでも可愛い方の女の子に告白された。

別にその子のことが好きだったってわけじゃなかったけど…

そのときのオレには、付き合うということに対してわずかな興味があった。

『…うん。良いよ』

オレは好奇心に素直に従い、一応オッケーした。

それから、いつも美空といたオレの日常は変わっていた。

いつの間にか、オレは美空よりも、その女の子と一緒にいることが多くなっていた。

でもオレにとってそんな毎日は新鮮で…

美空が1人になっていることになんて、気がつかなかった。

そしてある日。

オレがいつものように、その女の子と一緒に帰ろうとすると、美空に呼びとめられた。

『大河！待って！』

その声が、なぜかあまりにも弱々しく聞こえた。

『何？オレ、早く行かないと…！』

オレが振り返ると、美空は目に涙をいっぱいためながらオレにすがりついた。

『なんで…なんで最近あの子とばっかりいるの…？？』

『美空…？？』

『大河は私だけの友達でしょ…？？どうして他の子と話したりするの？』

美空はぎゅっとオレの制服を強くつかんだ。

『やめてよ…大河は私だけの友達なの…！！ねぇ！そうでしょ！？』

いつもの美空じゃなかった。

普通のやつなら絶対引いてしまうような言動、行動。

美空は完全におかしくなっていた。

そして、オレもおかしかったのかもしれない。

…そんな美空が、ひどく可愛らしく見えた。

必死にオレにすがりつく美空が愛おしく思えた。

『お願い…お願い…1人に、しないで…？？』

オレはそっと美空の頭をなでた。

『うん…。ごめん、な？』

その時思った。

美空はオレがいないと何もできない。

美空はオレなしでは生きていけない。

オレはこのもろくて弱い少女をずっと守っていてやりたいと思った。

『…ねぇ、大河。彼女と、別れて？』

その日、すぐにオレは彼女と別れた。

美空の願いは、どんなことでも叶えてやりたいと思った。

そして、そう思ったその日から、オレは美空の親友じゃなくなった。

美空の言うことならどんなことでも聞く、ただの【操り人形】になり下がった。

美空のためならなんでもやった。

美空が誰とも口を聞くなと言ったら、その通りにした。

美空が気に入らないやつをいじめようと言ったら、周りの人間を使って容赦なくいじめた。

周りのバカなやつらはオレ達のルックスに騙されて、オレ達の言いなりになっていた。

そしていつしか、美空の『命令』はエスカレートしていった。

『ねぇ、大河。あの子と、して？』

そう言って美空が指差したのは、美空が好きになった男の彼女。

『え…？』

全然かかわりのない女。

なんでオレがそんなこと…

オレは、美空が好きなのに…

『私、あの子の彼氏がどうしても欲しいの。だから……ダメ？？』

上目づかいでそう懇願してくる美空。

当然、美空が好きなオレは、断れるわけがない。

『…分かった』

オレは美空に言われたとおりにした。

その女はオレのことが好きになって、彼氏と別れた。

美空が狙っていた男は、美空のものになった。

だけど、美空はすぐにその相手に飽きてしまう。

そんなことが何度もあり、オレはそのたびに何度も美空の言うことを聞いてきた。

そしていつしかオレ達は高校生になった。

学校が離れても、オレ達はたびたび会っていた。

『大河。私、また好きな人できちゃった♪』

そう言って見せられたのは、一枚の集合写真。

美空が指差したのは、目つきの悪い、だけど男のオレが見てもきれいだと思ってしまう、そんな男。

『滝沢響クンって言うんだ！かっこいいでしょー？？』

『…おまえは、こいつのどこが好きなの？』

そう尋ねてみると、美空は笑って即答した。

『そりゃ決まってるでしょ！このすっごいかっこいいところ！』

……いつも、そう。

美空は、いつも男を顔で選ぶ。

…オレの顔は、気に入らないの？

オレの顔が悪いから、美空はオレを好きにはなってくれないの？

そう言いたかった。

だけど、そんなの言えるはずもなく…

『…それじゃ、今度はこの男の彼女をとればいいんだね？』

オレはおとなしく、美空の命令に従った。

今回の相手はおとなしくて、可愛らしい女の子。

望月詩織。

純情そうで、こんな女ならすぐにおとしてしまえるな、と思った。

美空に紹介されて、とりあえず気がある素振りを見せる。

初めは『友達』ということにして、何日か電話したりした。

その会話にはいつも彼氏の話がでてきて…

この女は、本当に滝沢響のことが好きなんだなと思った。

だけど、きっとそれは美空と同じ気持ち。

きっとこの女も、顔であいつを選んだろう。

オレはずっと、そう思っていた。

そしてクリスマスが近くなったある日。

美空と打ち合わせて、オレは望月詩織と一緒に買い物に行った。

ちょうど、そこには美空と滝沢響もいて、2人がはちあわせするようにしていた。

作戦は成功。

予想どおり、望月詩織は美空と滝沢響が一緒にいるところを見て落ち込んでいた。

そんな望月詩織にキスをする。

どんな反応をしているんだろう?

そう思い、少し反応をうかがってみると、

望月詩織は、泣いていた。

驚いて、キスをやめる。

そして思わず謝った。

『どう…して…??私の…私の、ファーストキスを…なんで、そんなに簡単に奪えるん…ですか…!?』

そう言われて、驚いた。

今まで一度もそんなこと言われたことがなかった。

いつも、オレにこんなことされた女は、いつの間にかオレのことが好きになっていた。

…こいつ、今までの女と少し違う。

そう思ったが、きっとすぐにおちるだろうと思った。

だって、今までに一度も、オレが美空の命令をしくじったことはないのだから。

クリスマスの日。

オレは美空に望月詩織を襲えと命令された。

オレはその通りに、駅で滝沢響を待つ望月詩織を眠らせ、廃校の一室に連れて行った。

さっさと終わらせようと、目が覚めた望月詩織にキスしながら、ブラウスのボタンをあけていく。

その時、

「なんで、やりたくもないことしようとしているんですか…??」

不意に望月詩織がそう言った。

思わず、手が止まる。

「富岡サンは、本当はこんなことしたくないんでしょう…??」

ドキリとした。

オレ、それっぽい仕草を見せた…??

だけど、心あたりはない。

「…なんで?なんでそう思うの??」

そう尋ねると、望月詩織は首を少しかしげた。

「なんとなく…富岡サンが、そんな表情をしていましたから」

……!!

心の奥を、見透かされた気がした。

そうだよ。

オレだって、本当はこんなことしたくない。

でも、願いを叶えないと…

美空に役立たずと思われて捨てられるのが怖いんだ。

美空の願いを叶えていれば…

オレは、美空のそばにいれるんだ。

「…詩織ちゃんは、あの滝沢ってやつのどこが好きなの??」

ふと気になってそう尋ねてみた。

望月詩織は少し目を見開いて戸惑うと、小さな声で答えた。

「そんなの…いっぱいありすぎて、伝えきれません」

「おまえも、あいつの顔が好きなだけだろ?」

そうだと言って欲しかった。

女はみんな、男を顔で選んでいる。

そう思えば少し安心できるような気がした。

「ち、違いますっ!!」

だけど望月詩織は少し声を荒らげて反論した。

そんな望月詩織を見て、ふんっと鼻で笑う。

「無理しなくてもいい。…美空も、そうだから」

美空も、滝沢響の顔が好きだから。

オレがどんなに美空のことを思っていても、オレの顔じゃ無理なんだ。

「おまえも美空と同じだ。そうだろ?」

そうだと…

そうだと言ってくれ。

オレに、女は誰でも同じなんだと、そう思わせてくれ…！！

「違います…私は、響くんのそんなところが好きなんじゃないです」

望月詩織ははっきりとそう言った。

「私は…響くんの優しい所や、照れ屋な所、その他にもいろんな所、
…響くんの全部が好きなんです」

驚いて、少し目を見開く。

…全部??

顔だけじゃ、なくて…??

やっぱり、望月詩織は他の女と違っていた。

望月詩織は、本気で滝沢響のことが好きだったんだ。

オレはふっと笑った。

「…そうか。オレも…そう、なんだけどな」

オレだって…

本気で美空のことが好きだ。

だけど、どうすればいい？？

オレが美空のそばにいるためには、望んでないことも平気でしなくちゃいけないんだ。

でも、オレはどうしても望月詩織を襲えなかった。

望月詩織を汚したくなかった。

オレとは違う、素直に好きな人を愛せる人間を、汚せなかった。

「…！？」

オレは望月詩織の口に睡眠薬をしみこませたハンカチを押し付けた。

「…あいつは、気がついてくれないんだ」

望月詩織が眠りにつく瞬間、オレはそうつぶやいた。

そう、

あいつは何も気付いてくれない。

オレの気持ちに、何も……

オレは望月詩織のケータイから滝沢響に連絡を入れた。

滝沢響はすぐにかけつけてきた。

望月詩織を抱えたオレを、きっと強く睨む。

怒りのこもった目。

オレが望月詩織を差しだすと、滝沢響は壊れ物を扱うように、そっと望月詩織を抱えた。

そしてほっと息をつき、愛おしそうに望月詩織を見つめる。

それを見て、こいつも本当に望月詩織のことが好きなんだと思った。

この2人の間に、美空が入る間なんてない。

自然とそう思った。

お互いがお互いを真剣に好き合っている、本当の恋人。

「…おまえは、いいよな」

そんな2人がうらやましくって、オレはぽつりとそうつぶやいた。

オレだって、美空とそんな風になりたかった。

もっと美空を素直に愛していたら、美空もオレの気持ちに応えてくれたのかもしれない。

……いつから、オレはこんなに不器用になってしまったんだろう?

なんで美空を素直に愛することができないんだろう?

初めは、すぐ近くにいた大好きな親友。

今は、遠く離れた好きな人。

もう、今からじゃこの2人のようになれない。

だから、オレはオレなりに美空を愛そう。

美空の望みを叶えること。

そして、美空のそばにいること。

それがオレなりの精一杯の愛し方。

☆★不器用な愛し方★☆大河ｓｉｄｅ（後書き）

ちょっと大河の話が書きたくて書いてみました。
本編にはあんまりでてきてないんですけど…
こんな風に思ってたってことで。
また、美空ｓｉｄｅもしてみたいです（＾＾♪

☆★ホントの気持ち★☆美空ｓｉｄｅ

富岡大河。

私の幼馴染。

５歳の時に出会ってから、私達は本当に仲が良い親友だった。

私は大河が大好きだった。

…その気持ちが歪んでしまったのはいつからだったんだろう??

はっきりとは分からない。

だけど、

それはきっと小学校の高学年になって、大河が女の子達に好かれはじめてからのこと。

かっこよくて、優しい大河。

そんな大河を女の子達がほおっておくわけない。

だけど大河のそばにはいつも私がいたから、大河の友達はずっと私だけだった。

私にも、大河しか友達はいなかった。

さびしいと思う??

でも私はそれでよかったの。

大河さえいれば、私は全然さびしくなんかなかった。

だけど、中学に入った時。

それまでおとなしくしていた女の子達が急に積極的になりだした。

みんな隙をついては大河と話そうとした。

みんな、私から親友（タイガ）を奪おうとした。

でも、絶対に私から大河を奪うことなんてできない。

だって私は大河の親友なんだもの。

大河はいつも、私と話しているときが一番楽しそう。

あなた達はきっとただの他人。

友達ですら、ない。

だって、大河には私以外に友達はいらないから。

どれだけ頑張ったって、あなた達は大河の親友の私には遠くおよばないの。

ずっとずっと、そう思って自分を安心させていた。

それなのに…

『富岡クン、付き合ってください！』

1人の女の子が、大河に告白した。

もちろん、大河は断ると思っていた。

だけど、違った。

『…うん。良いよ』

大河は、その子の告白をオーケーした。

少しだけショックだったけど、別にそれほどショックな出来事じゃなかった。

だって『カノジョ』より『親友』の方がずっとずっと大切なものだって思ってたから。

でも、大河はその日からあまり私の相手をしてくれなくなった。

いつも、『カノジョ』と一緒にいた。

その女の子は、まんまと私から大河を奪い去っていた。

私のたった一人の友達は、いつの間にか私だけのものじゃなくなっていた。

そんな毎日は、私にとって苦痛でしかなかった。

いつでも私の隣にいた大河は、今は違う女の子の隣。

私はそれを、ただ見ているだけ。

そんなの、とてもたえられなかった。

そして、ある日の放課後。

私はカノジョと帰ろうとする大河を呼びとめた。

『大河！待って！』

『何？オレ、早く行かないと…！』

少しうっとうしそうな大河の声。

そんなに、早くカノジョのところに行きたいの？

シンユウは、もういらないノ…？？

嫌だ…

嫌だいやだイヤだイヤダ！！

私は必死になって大河にすがりついた。

『なんで…なんで最近あの子とばっかりいるの…？？』

ドウシテワタシは、ヒトリでイナクチャいけないノ？？

『美空…??』

『大河は私だけの友達でしょ…??どうして他の子と話したりするの?』

ヤメテ…

他の子とナンか話さないデ!!

カノジョなんかいらないデショ??

タイガにはワタシがいるんダカラ…

『やめてよ…大河は私だけの友達なの…!!ねぇ!そうでしょ!?』

勝手に他のトコなんていっちゃヤだぁ…!!!

タイガはワタシだけのモノなんだカラ!!!

『お願い…お願い…1人に、しないで…??』

ヒトリは…イヤ。

ヒトリはイヤなの…

大河の手がそっと私の頭に触れた。

『うん…。ごめん、な?』

優しい大河の声。

優しい優しい大河。

…ごめん、って、ホントに思ってるの??

心の底から、そう思ってるの??

…ちゃんと、そう思ってるなら…

もう、他の誰のものにもなっちゃだめだよ?

大河は私だけのもの…

『…ねぇ、大河。彼女と、別れて?』

そうお願いすると、大河はすぐにカノジョと別れてくれた。

これで、大河は本当に私だけのもの。

大河の体も心も、全部私のモノ……

あなたに私以外の人のことを考える心は必要ないの。

大河はただ、私の言うことだけを聞いてればいい…

私は、このときから狂っていた。

大河を自分だけのものにするために、私は大河にも、他の人にも、ひどいことをたくさんした。

大河は本当に私の言うことだけを聞いてくれるの？

そう思って誰とも口をきかないでと言ってみた。

すると大河はそのとおりに、私以外の人とは口をきかなくなった。

大河のことを好きだって言っている女の子の噂を聞いたら、すぐに大河にその子をいじめさせた。

まわりの人達を操るのは簡単。

男の子は、私がちょっとお願いするだけで、すぐに言いなりになる。

女の子は、大河にお願いさせればいい。

いつの間にか、私はその中学校の頂点みたいな存在になっていた。

初めは楽しかった。

私の隣にはいつも大河がいる。

そして誰も大河に手をだそうとはしない。

みんな私を恐れている。

だけど私には逆らえないの。

私には、腕力みたいな、純粋な力はまったくない。

でも、私にはルックスがある。

それは純粋な力よりも、ずっとずっと大きな力。

私がこの中学校の頂点。

みんなが自分よりも下の人間で、それを見下す生活。

だけど、だんだんそんな生活にも飽きてきた。

新しい刺激が欲しい。

どんなのがいいだろう??

そう思ったときに、ふと仲の好さそうなカップルを見つけた。

…へぇー。結構、カレシの方かっこいいな。

…私のモノにできるかな?

自信はあった。

だって、所詮恋なんて脆いもの。

あの男の子だって、すぐに私のものになるに違いない。

そう思い、私はその男の子にアピールしてみた。

だけどその男の子は本当にカノジョのことが大切だったみたいで、

全然私のことなんか見てくれなかった。

どうして？

こんなに可愛い私にアピールされてるのに、どうして私を見てくれないの？

恋なんてちょっとつつけば壊れるものなんじゃないの？

私はそう信じて、どうやってもその男の子を奪おうと思った。

ただ、その子が欲しかったから。

でも、今思うと違うのかもしれない。

きっと、私は恋よりも友情の方が大きな気持ちだってことを証明したかったんだ。

どんなに想っていても、恋なんてすぐに壊れてしまうと証明したかったんだ。

『ねぇ、大河。あの子と、して？』

私はその男の子のカノジョを指差して言った。

『え…？』

少し目を見開く大河。

そりゃ驚くよね。

でも、言うこと、聞いてくれるでしょ？

大河に拒否権はないんだよ？

だって大河の体は、私のモノなんだもん。

『私、あの子の彼氏がどうしても欲しいの。だから……ダメ？？』

上目づかいでそう懇願してみると、少しの沈黙のあと大河がうなずいた。

『…分かった』

大河は本当に言ったとおりのことをしてくれたみたいで…

気がついたら、あんなに仲の良かったカップルは別れていた。

そしてずっと欲しかった男の子は私のものになった。

だけど、なぜか満たされない。

なぜか胸がしめつけられる。

どうしてだろう…？？

……心の奥では、分かっていた。

大河が、他の女の子に触れた。

それが、たまらなく嫌だったんだ…

本当に勝手な私。

私が命令したのに…

悲しいって思う私は本当に勝手。

でもバカな私は、そんな悲しいって気持ちに気が付いてなかったんだ。

だから、物足りない心を埋めようと、何度も大河に同じようなお願いをした。

そのたびに手に入る男の子。

だけど、私の心は埋まらない。

だって私が本当に欲しかったのは大河なんだから。

大河は、私だけのものなのに、私だけのものじゃない。

私は大河のすべてを手に入れてなかった。

そう、

私がまだ手に入れていないもの…

それは、大河の気持ち。

私がお願いしても、絶対に手に入らない、本当の気持ち。

でも、そんな簡単なことにも私は気が付いていなかった。

ただ、埋まらない心を埋めようと必死だった。

そしていつのまにか私達は高校生になっていて…

大河と私は別の高校に入った。

それでも私と大河は毎日のように会っていた。

そして新しい高校でも、私は自分の心の穴を埋めてくれるような人を探した。

しばらくして、見つけた新しい男の子。

滝沢響クン。

すっごくかっこいい男の子。

でも、滝沢クンにはカノジョがいた。

望月詩織ちゃん。

こっちも、すごく可愛い女の子。

2人は誰が見てもすっごく仲がよかった。

滝沢クンが詩織ちゃんにだけ見せる、優しい表情。

それを、詩織ちゃんから奪いたくなった。

そして、滝沢クンを自分のモノにしたら、私の心の穴は埋まるかもしれないと思った。

文化祭のとき。

私は滝沢クンに告白してみた。

だけど、本当にきっぱりと断られた。

…まぁ、わかってたけど。

だって簡単に手にはいってもおもしろくない。

私は大河に詩織ちゃんを滝沢クンからとるようにお願いしてみた。

大河を使えば、絶対に滝沢クンは私のモノになる。

今までもずっとそうだったから。

クリスマス前のある日。

私は滝沢クンとでかけた。

大河も詩織ちゃんとでかけることになっていた。

あらかじめ2人で打ち合わせていたこと。

滝沢クンと詩織ちゃんをはち合わせさせる。

きっと、滝沢クンが他の男の子と一緒にいる詩織ちゃんを見れば、
2人の間に亀裂が入ると思った。

作戦は大成功。

滝沢クンは詩織ちゃんと大河がキスしてるところを見て、すっごく
ショックを受けたみたいだった。

これで、2人の間に亀裂が入るはず。

作戦は成功したんだ。

うれしいはずなのに…

私の胸はしめつけられた。

私、大河に詩織ちゃんとキスしろなんて頼んでないのに…

初めて、目の前で大河が他の女の子に触れているところを見た。

悲しいという気持ち。

だけど私はその気持ちを振り払った。

そして変わりにうれしいという気持ちを作る。

そう、私は今うれしいはず。

だって、もうすぐ滝沢クンが私のモノになるんだから。

もうすぐ、この心の穴は埋まる。

そしてクリスマスの日。

大河からうまく詩織ちゃんを廃学校に連れていけたと連絡が入った。

ってことは…

滝沢クンは今、家に帰る途中だってことだよね？

滝沢クンの家の近くに行ってみると、予想どおり下を向いて歩いている滝沢クンを見つけた。

待ち合わせの場所に詩織ちゃんがこなかったことに落ち込んでいるらしい滝沢クン。

でも、それは当然。

だって今詩織ちゃんは大河といるんだから。

きっと、今頃は大河と…

なぜか、胸がしめつけられる。

私はそんな気持ちを振り払い、滝沢クンに必死でアピールしてみた。

「もしかしたら、詩織ちゃんって大河のことが好きなんじゃないの？」

そう言ってみると、滝沢クンの態度が変わった。

私はそんな滝沢クンの頬にそっと触れた。

「落ち込まないで？大丈夫。詩織ちゃんはもう、滝沢クンのことが好きじゃないかもしれないけど…私は…滝沢クンのことが好きだよ？？」

滝沢クンが少し目を見開く。

もうすぐ…

もうすぐだ。

もうすぐ滝沢クンは私のモノになる…

「滝沢クンは…どうしても、詩織ちゃんじゃなきゃダメなの？？私じゃ…ダメ？」

私は少し目に涙をためて、上目づかいで滝沢クンを見た。

滝沢クンが、頬に触れた私の手に触れる。

「笹川…」

そして低い声で私の名前を呼んだ。

おちた…！

そう思った時、

プルルルルル…

急に滝沢クンのケータイが鳴った。

滝沢クンははっとして、すぐにケータイをとる。

「もしもし!?望月!?」

すぐに詩織ちゃんの名前を呼ぶ。

…詩織ちゃん?

おかしいな。

詩織ちゃんは今、大河と…

滝沢クンは少し目を見開いた。

「おまえ…富岡…??なんでおまえが…」

思わず目を見開く。

…大河??

滝沢クンは、今大河と話してるの…!?

「はぁ!?何で…」

電話が終わったようで、滝沢クンは呆然とケータイを見つめた。

「滝沢クン？どうしたの？？」

そう滝沢クンに問いかけてみる。

大河は何の用事で滝沢クンに電話したの？

今ごろ、詩織ちゃんとしてるはずなんじゃないの…？？

「…悪い。オレはやっぱり望月以外、好きになんてなれない」

滝沢クンはそうはっきりと言った。

そして走って私の横を通りすぎていく。

私は呆然とその場に立ち尽くした。

…どうして？

滝沢クンはそんなに詩織ちゃんのことが好きなの？

詩織ちゃんもたしかに可愛いけど…

それでも、私の方が……！！

私のどこがいけないの？

どうして私のものになってくれないの？？

恋なんて脆いものなんじゃなかったの…！？

ねぇ…

どうして…??

その日の夜、私は大河を家に呼びだした。

すぐに、家のインターホンが鳴る。

私は大河を家に入れて、自分の部屋に連れ込んだ。

「美空…??こんな夜に、オレなんか家にいれてもいいの?」

少し不安気にそう聞いてくる大河。

私はそんな大河に向かってにっこりとほほ笑んだ。

「いいの。今日はお父さんもお母さんもいないから」

私は大河に歩み寄った。

「ねぇ、今日滝沢クンと電話で何話してたの?」

ビクッ。

大河の体が少し震える。

「もう少しで滝沢クンは私のモノになったのに…大河のせいでダメ

になっちゃった」

「…ご、ごめん」

私は大河の頬に手を触れた。

「いいの。…もう、滝沢クンはいいや。だから…」

上目づかいで、じっと大河を見る。

「今日、私として？」

大河の目が少し見開かれた。

こんなお願い初めて。

でも、大河はきっと聞いてくれる。

そんな自信があった。

「……ごめん、それはできない」

だけど、大河はうつむいてそう答えた。

……！！

「…どうして…！？」

どうして…？？

どうして私とはできないの…！？

大河は私のことが嫌いだから？？

他の子とはできるのに…

そんなに、そんなに私のことが嫌いなの！？

「どうしてよ！大河は私のお願いならなんでも聞くじゃ…！！！」

私の言葉は、途中で遮られた。

……えっ？？

唇にやわらかい物が触れていた。

たい…が…？？

それは、大河の唇だった。

「ん…っ！」

大河は深く、深く私にキスした。

角度を変えて、何度も、何度も。

心臓がドキドキとして、顔が熱くなる。

自分が自分でなくなりそうで、怖かった。

でも、気持ちよくって夢中になる。

このまま…

大河としたい…

そう思った時、

大河が唇を離した。

そしてじっと私を見つめる。

「オレ、好きなやつは大切にしたいんだ。だから…これで我慢して？」

……！？

私は耳を疑った。

あれ…？？

今…

「今…なんて…？？」

大河が顔を耳まで赤く染める。

だけどしっかりと私の目を見て言った。

「オレ、中学のときからずっと、美空のことが好きだった」

「……！！」

大河が…

私の、ことを…？？

「な、んで…？？私、大河にひどいこと…いっぱいしたのに…」

私、大河に無理なお願いいっぱいしたんだよ？

ずっと、大河を利用してたんだよ？

それなのに…

なんで…

大河は苦笑いした。

「確かに。…でも、好きじゃなかったら美空の言うことなんて聞くわけないだろ？」

大河がそっと私の髪に触れる。

「美空を喜ばせたかったんだ…オレ、美空のためなら何でもやれる」

真剣な目。

大河は、本当に私のことが、好きなんだ。

ずっと満たされなかった心が埋まっていくような気がした。

そうだ…

「私も…」

私も…

ずっとずっと前から、大河を求めていた。

いつの間にか、歪んでしまっていた、私の本当の気持ち。

「私も…大河が大好きだよ…！！」

大河は少し目を見開いて、うれしそうに微笑んだ。

そしてぎゅっと私を抱きしめる。

ずっとずっと欲しかった、大河のホントの気持ち。

やっと、手に入れられたよ。

私達はもう、『親友』じゃないよね？

今日から、私は大河の『カノジョ』になるの。

すっごい、すっごいうれしい。

私、今すっごく幸せだよ？大河。

☆★ホントの気持ち★☆美空ｓｉｄｅ（後書き）

最後がすっごいあっさりとなってしまいました（ー｜ー；）
本当はどっちも報われない感じにしようと思ったんですけど…
やっぱり私は悲しいのよりも幸せな感じの方が好きなんで（＾＾♪

☆21話　初詣☆詩織ｓｉｄｅ

「あけましておめでとうございます！響くん！」

「ああ、おめでとう」

響くんはにこりと笑ってそう返した。

今日は1月1日、元旦です！

今から響くんと初詣です。

それにしても……

私はじっと響くんを見た。

「…なんだよ??」

そんな私を響くんが怪訝そうに見る。

「いえ、なんでもないですよ！さぁ、行きましょう！」

「??」

私が歩き始めると、響くんは顔をしかめながらも私の隣を歩き始めた。

新年早々響くんとこうして顔を合わせて、でかけられるなんて私はすごく幸せです！

去年の元旦と言えば、受験のために家族で神社をいろいろ回っていたんですけども…

今年はこうして好きな人と新しい年を迎えられる。

ああ私、本当にあの高校に入ってよかったです…

「響くん、今年もよろしくお願いしますね！」

「ん、ああ」

と、そんな風に幸せいっぱいの気分を満喫しているうちに目的地の神社に着いた。

「人多いな…」

響くんがぽつりとつぶやいた。

たしかにすごい人ですね…

まぁ元旦ですので当然と言えば当然なんですけど…

「なんだかはぐれちゃいそうですね」

苦笑いでそう言うと、少ししてから響くんが私に手を差し出した。

「なんですか??」

「…手」

ぼそっと響くんが言った。

「えっ？」

よく聞き取れなくて、もう一度聞きかえしてみる。

すると響くんは頬を染めて、私を見ずに言った。

「はぐれたらいけないだろ？」

思わず顔が熱くなる。

「…はい！」

響くんのさりげない気遣いがうれしくて、私はにっこりと微笑んで響くんの手をとった。

大きくて温かい手。

はぐれないように、その手をぎゅっと握りしめる。

響くんの赤く染まった頬と、何も話さない沈黙が、響くんの気持ちを表しているようで…

私はあらためて幸せだなと思った。

「滝沢クン！詩織ちゃん！」

そんな時、不意に肩を叩かれた。

驚いて、私と響くんは同時に振り返った。

「さ、笹川サン！？」

そこにはにっこり笑顔の笹川サン。

そして隣には富岡サンがいた。

「なんでおまえらがいるんだよ？」

響くんは顔をしかめてそう言い、ぎゅっと強く私の手を握り締めた。

私もその手を強く握り返す。

クリスマスの時、私達はこの2人のせいでさんざんな目にあったんです。

笹川サンが響くんのことが好きだってことも分かってしまいましたし…

気をつけないと…

そんな風に警戒している私達を見て、笹川サンはくすっと笑った。

「大丈夫だよ、詩織ちゃん！私もう、滝沢クンのこと好きなわけじゃないし！」

笹川サンはそう言って、富岡サンの腕に抱きついた。

「私、今大河と付き合ってるの！」

「…へ？」

私は思わずぽかんと口を開けた。

富岡サンは申し訳なさそうな顔で言った。

「あのときはいろいろとごめんな？なんか詩織ちゃんに嫌なこといっぱいして…」

ふと、富岡サンにファーストキスを奪われたことを思い出した。

たしかに…

嫌なこと、されました…

でも、

「いいですよ。あまり気にしていませんから」

私はにっこりと笑って言った。

たしかにファーストキスを奪われたことはすごく嫌でしたけど…

あれは一方的にされたので、ファーストキスとは言いません！

というふうに、頭の中で整理をつけたので…

…

あまり気にしていません。

「…それじゃ、今年もよろしくね♪ほら、大河。いこ！」

笹川サンは私達に手をふると、富岡サンの手をひっぱった。

「分かったからあんま引っ張るなよ」

富岡サンは苦笑いしながらも、愛おしそうな目で笹川サンを見ていた。

ふと、富岡サンにどこか暗い部屋に連れていかれた時のことを思い出す。

『…そうか。オレも…そう、なんだけどな』

私が響くんの全部が好きだと言った時に、悲しそうな顔でそう言った富岡サン。

きっと富岡サンはあのとき、笹川サンのことを言っていたんでしょうね。

なのにどうして私のことが好きなふりをしたのか分かりませんが…

『…あいつは、気がついてくれないんだ』

私が眠ってしまう前に聞こえたような、悲しそうな富岡サンの声。

でも、気付いてもらえたんですね。

良かったです…

「望月、オレ達も行こう」

「あ、そうですね！」

私は響くんに手をひかれて、足を進めた。

本当にすごく人が多くて、お参りするまでに４０分ほど時間がかかった。

やっとお賽銭箱の前までたどり着き、人ごみにもまれながらお賽銭を投げた。

そして仏像の前で手を合わせる。

ええと…

何をお願いしましょうか？

お願いしたいことがたくさんありすぎて言いきれるかどうか…

私はとりあえず、小さなお願いごとから言ってみた。

「今年こそは響くんに名前で呼んでもらえますように…」

今年こそは、呼んでもらいたいです。

私はちゃんと名前で呼んでいますのに…

何度言っても、響くんは絶対私のことを名字で呼ぶんですもの。

まったく、名字と名前は全然違いますのに！

「…おまえ、願い事って声に出したら叶わないんだぞ？」

隣にいた響くんが小さく笑って言った。

「へっ！？そうなんですか！？」

そ、それは初耳です…

「あと願いは一個までだ。よくばったら叶わないぞ？」

う〝……

そ、それもそうですね…

たしかに、欲張るのはよくないです。

私はもう一度仏像に手を合わせた。

たくさん願いごとがありましたが、一個を選ぶことなんて簡単です。

私の一番の願い事…

……今年も、ずっと響くんと一緒にいられますように……

私達はとりあえず人ごみをぬけてお参りの列の脇に出た。

そして両脇に出店が連なる道を歩く。

「ちゃんと願いは一個だけにしたか？」

響くんにそう問われて、私は強くうなずいた。

「はい！ちゃんと一つだけにしましたよ！」

「何にしたんだ？」

「ええと……『今年も、ずっと響くんと一緒にいられますように』ってお願いしました！」

響くんが少し目を見開いて、頬を淡く染めた。

「…ふーん」

「響くんはなんてお願いしたんですか？」

「さぁ」

響くんはそう言って意地悪く笑った。

「願い事っていうのは人に言っても叶わないんだぞ？」

…えっ？？

それじゃぁ…

「私のお願い…叶わないってことじゃないですか！」

そういうことはもっと早く言っていただかないと！

というかそのまえに、どうして私の願い事なんか聞いたんですかぁ～…

私、何も知らないんだから言ってしまうにきまってるじゃないですかぁ…

「…まぁ、そんな願い事ならわざわざ神様にお願いしなくてもいいだろ」

「へっ…？？」

響くんは頬を染めて、私から視線をそらして言った。

「そんなのだったら、オレが叶えられるだろ？」

驚いて、思わず目を見開く。

そ、そうですけど…

「で、でも！もし、人に言ってしまったせいで叶わなかったら…」

ぽんっ

不意に響くんが軽く私の頭を叩いた。

「…大丈夫だよ。……詩織」

ほんの、ほんの小さな声で、たしかに響くんが私の名前を呼んだ。

「響くん…今、私の名前…」

響くんはさっきよりも更に顔を赤くさせた。

「ほら、一個叶えただろ！？」

妙に怒ったような声。

こんな風に言うのは、響くんの照れ隠し。

「…はい！」

うれしくて、私は響くんににっこりと笑いかけた。

響くんなら、きっと私の願い事を叶えてくれる。

これから私達におこることなんてなんにもしらない私は、

ただ、響くんがずっと私と一緒にいてくれると、

信じて、疑わなかった。

☆21話　初詣☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

かなり更新が遅くなってしまいました…
テスト期間中だったんで時間がなかったんです…（－＿－；）
そしていきなり年が明けました。
実は早く次の展開に行きたいんですけど、それは2人が2年にならないとできないんですよねー…
だからかなり時間を早く進めると思いますが…
よろしくです＞ｍ（＿＿）ｍ＜

★21話　初詣★響side

「あけましておめでとうございます！響くん！」

望月がオレににっこりと笑いかけた。

「ああ、おめでとう」

オレも笑顔でそう返す。

今日は元旦。

今から望月と初詣に行く。

なぜか望月がにこにこと笑ってオレの顔をじっと見てきた。

……？？

オレの顔になんかついてるのか…？？

「…なんだよ？？」

怪訝に思いそう言うと、望月はにぱっと笑った。

「いえ、なんでもないですよ！さぁ、行きましょう！」

「？？」

なら、なんでそんなに見るんだよ？

あとで一応鏡見とくか…

そう思っているうちに、望月が歩き始めた。

慌ててオレも望月の隣に並ぶ。

それにしても…

オレはちらりと隣にいる望月を見た。

年があけても、まだ望月はオレの隣にいる。

オレはこうして望月と共に新しい年を迎えている。

それってすげぇ奇跡なのかもな…

でもなんとなく不安になる。

来年も同じように望月の隣にオレはいるのだろうか？

オレの気持ちは変わってないのだろうか？

そして望月の気持ちが他の奴へと移っていないだろうか？

この奇跡は、いつまで続くんだろうか…？？

「響くん、今年もよろしくお願いしますね！」

不意に望月がオレにそう言って笑いかけた。

可愛らしい、望月の笑顔。

「ん、ああ」

オレも自然と笑顔で返した。

…まぁ、せっかく年があけたんだ。

そんなことうじうじ悩んでても仕方がないだろ？

どうせなら、今望月といられる時間を楽しもう。

そう思い、望月とたわいのない話をしているうちに目的地の神社についた。

「人多いな…」

あまりの人の多さに驚き、オレはぽつりとそう漏らした。

まぁ、元旦だからな。

オレ達みたいな奴は多いとは思うけど…

でも、この行列は長すぎるだろ…

長すぎて本堂が見えねぇ…

「なんだかはぐれちゃいそうですね」

望月が苦笑いしてそう言った。

たしかに…

これは下手をすればはぐれそうだよな…

……

オレは少し考えてから、望月に手を差し出した。

「なんですか??」

望月はきょとんとして首をかしげる。

「…手」

うまく言えずに、一言ぼそりとつぶやく。

「えっ?」

けど望月は理解できなかったようで、きょとんとして聞きかえしてきた。

ちょっとは察しろよ……！

頬が熱くなっていくのが分かった。

なんとなく恥ずかしくて、オレは望月を見ずに言った。

「はぐれたらいけないだろ?」

横目で、望月の様子をうかがってみる。

望月は少し目を見開き、ほんのりと頬を赤く染めた。

「…はい！」

そしてはにかんだ笑顔でそう言うと、オレの手をとった。

望月の小さな手がオレの手をぎゅっと握りしめる。

望月って本当に子供みたいだよな…

でもそんなところも愛おしくてたまらない。

どちらも何も話さず、沈黙が続いたが、オレにはそれさえ心地よく思えた。

そんな時、

「滝沢クン！詩織ちゃん！」

突然ぽんっと肩を叩かれた。

驚いて、望月と同時に後ろを振り返る。

「さ、笹川サン！？」

望月が驚いたような声をあげた。

そこにいたのは、笹川と富岡。

うわ…

一番会いたくないやつらだ…

「なんでおまえらがいるんだよ？」

オレは語勢を強くしてそう言った。

無意識に、望月の手を強く握る。

きゅっと、望月もオレの手を握り締める。

オレ達は一度、こいつらのせいでさんざんな目に会ったんだ。

また何をしようとするかわからねぇ…

もしかしたらここで会ったのも偶然じゃないかもしれねぇし…

そんな風にオレ達が警戒していると、笹川はくすっと笑って言った。

「大丈夫だよ、詩織ちゃん！私もう、滝沢クンのこと好きなわけじゃないし！」

そして笹川は富岡の腕に抱きついた。

「私、今大河と付き合ってるの！」

「…へ？」

望月があっけにとられたようにぽかんと口をあけた。

オレも思わず目を見開く。

そ、そんな展開なのか…??

まぁその方がオレ達的にはいいけど…

オレは少し安心して、ほっと息をついた。

「あのときはいろいろとごめんな?なんか詩織ちゃんに嫌なこといっぱいして…」

富岡が申し訳なさそうな顔で望月に謝る。

…オレには謝らないのか?

それにそんな謝り方で望月が許すわけないだろ?

謝るんだったらもっと頭下げるとかいろいろ方法があるだろ「いいですよ。あまり気にしていませんから」

望月はそう言ってにっこりと富岡に笑いかけた。

……はっ?

そんなに簡単に許せるものなのか…??

あいつはおまえにキスしたりとかしたんだぞ?

それを気にしてないからって…！！

……まぁ、望月が許すっていってるなら、それにオレが反対するのもだよな…

オレはなんとかそう苛立ちをおさえた。

「…それじゃ、今年もよろしくね♪ほら、大河。いこ！」

笹川はオレ達に手を振ると、富岡の腕をひっぱった。

「分かったからあんま引っ張るなよ」

そう言って苦笑いする富岡。

その目はまっすぐに笹川だけを見ている。

……あんな感じなら、もう望月がなんかされそうになるとかないよな。

まぁこれで安心ってことだ。

「望月、オレ達も行こう」

「あ、そうですね！」

オレは望月の手を引いて、行列の最後尾に並んだ。

そこから本堂に入るまで４０分くらいの時間がかかった。

やっと賽銭箱の前にたどりつき、なんとか賽銭を投げいれる。
オレが手を合わせた時、隣で望月が願い事をつぶやく声が聞こえた。
「今年こそは響くんに名前で呼んでもらえますように…」
思わず心臓が強く鳴る。
な、なんだよ?
その願い事…
そんなの別に神様に頼むほどのものでもないだろ…
でもオレのことだったことが少しうれしくて、思わず頬が緩む。
「…おまえ、願い事って声に出したら叶わないんだぞ?」
オレは小さく笑ってそう言った。
「へっ!?そうなんですか!?」
望月は本気で驚いて、目を大きく見開いた。
「あと願いは一個までだ。よくばったら叶わないぞ?」
たしか望月が入れたのって10円玉だよな?
そんなんでたくさんの願いを叶えてもらおうなんてずうずうしいだ

ろ…

ちなみにオレもいれたのは１０円だけだから願いは一つだけにする。

オレは改めて、仏像に向かって手を合わせた。

……今年も奇跡が続きますように……

そして来年もこうして、望月が隣にいて欲しい。

神頼みってのはどうかと思うが、少しでも頼れるものには頼りたい。

…やっぱ１０円じゃたりないか??

オレは財布から５０円を取り出して、賽銭箱に投げいれた。

オレ達はとりあえず、参拝の行列をぬけて脇にでた。

そして両脇に出店が並ぶ道を並んで歩く。

「ちゃんと願いは一個だけにしたか?」

オレがそう問いかけると、望月は強くうなずいた。

「はい!ちゃんと一つだけにしましたよ!」

「何にしたんだ?」

「ええと……『今年も、ずっと響くんと一緒にいられますように』ってお願いしました！」

思わず目を見開く。

顔に熱が昇った。

な、なんでそんなのをオレのまえでさらっと言えるんだよ…??

「…ふーん」

「響くんはなんてお願いしたんですか?」

「さぁ」

おまえと同じようなことだよ…とは、オレにはとても言えない。

代わりにオレはにっと笑って言った。

「願い事っていうのは人に言っても叶わないんだぞ?」

望月が大きく目を見開いた。

「私のお願い…叶わないってことじゃないですか！」

まぁ…

そういうことになるけど…

「…まぁ、そんな願い事ならわざわざ神様にお願いしなくてもいい

だろ」

「へっ…??」

望月がきょとんとオレを見た。

だって望月の願いはオレとずっと一緒にいたいってことだろ??

それなら…

「そんなのだったら、オレが叶えられるだろ?」

顔が熱くなり、オレは望月から視線をそらして言った。

そんな願い、望月の気持ちが変わらないかぎり、絶対に叶えられる。

オレはオレの気持ちが変わらないと断言できる。

「で、でも!もし、人に言ってしまったせいで叶わなかったら…」

望月は落ち込んだような顔をしてうつむいた。

な、なんでそんな後ろ向きなんだよ…!!

……どうすれば望月を安心させられるんだ?

そう思った時、不意に望月が声にだして言った願いを思い出した。

『今年こそは響くんに名前で呼んでもらえますように…』

…そうだ。

一つ、願いを叶えてやれば…

オレはぽんっと望月の頭を軽く叩いた。

「…大丈夫だよ。……詩織」

ほんの小さな声で、望月の名前を呼んでみた。

もしかしたら聞こえなかったかもしれない…

だが、幸か不幸か、望月にはしっかりと聞こえていたらしい。

「響くん…今、私の名前…」

カァァァ…

顔が燃えるように熱くなる。

「ほら、一個叶えただろ!?」

オレはそれを隠すように、わざと怒ったような声で言った。

「…はい！」

望月は頬を赤く染めて、にっこりとオレに笑いかけた。

そんな望月を見て、あらためて思った。

絶対に、オレはおまえの願いを叶えられる。

だってオレの気持ちは変わらないのだから。

でも、オレはまだ知らなかったんだ。

たとえ、オレと望月の気持ちが変わらなくても…

『ずっと一緒にいる』

そんな簡単なことができなくなることもあるということを。

でもそのことにオレが気付くのは、まだ先のこと。

何も知らないオレは、望月といられる幸せな時間を、ただなんとなく過ごしていた。

★２１話　初詣★響ｓｉｄｅ（後書き）

美空と大河がでてきていますけど…
この２人はこれからもなんとなくでてくると思います！
そして後３、４話くらいは幸せな感じの話です（＾＾♪

☆22話　風邪☆詩織ｓｉｄｅ

新学期が始まり、1か月くらいがたった今日。

私はぼやーっと窓の外を見ていた。

……退屈です。

どうしてですかって？

それはですね…

響くんが学校にきていないからですよー…

響くん、いったいどうしたんでしょうか…？？

うーー…

心配ですぅ……

さっきメールしてみたのですが、何の返事もありませんし…

もしかしたら何か大変なことにまきこまれてしまったのかも…！！

ダメです！

私、こんなところでぼーっとしている場合じゃありません！

…でも、やっぱり学校を途中で抜け出すというのは私にはとてもで

きないので…

放課後、響くんのうちに行ってみましょうか…

そして放課後。

私は響くんの家まで行ってみた。

迷惑になったらどうしましょう…

そう思いながらも、インターホンを押す。

『はい』

インターホンから響くんの声が聞こえた。

少し安心して、ほっと息をつく。

「あっ、あの…望月ですけど…」

『望月…？？』

突然プツッと音がして、インターホンが切れた。

ドアがガチャリと音を立てて開く。

そして中から栗色の髪の、響くんに良く似た男の子がでてきた。

へっ…??

えっと…

どなたでしょうか…??

男の子はつかつかと私に歩み寄ってきて、じっと私の顔を見つめた。

「あんたが兄ちゃんのカノジョ?」

兄ちゃん…??

ということは、この男の子は響くんの弟サンでしょうか…??

それにしても…

顔、近いです…

男の子はまじまじと私を見て、突然にっと笑った。

「ふーん。あんた、可愛いね」

「へっ…??」

響くんとほとんど同じ声。

そして同じ瞳に見つめられて、胸が高鳴る。

男の子は私の耳元に口を近づけて囁いた。

「ねぇ望月サン、兄ちゃんなんか止めてオレの女になりなよ」

…はい？

なんですか？

とても響くんの弟とは思えません…

でも…

響くんと同じ声だから、ドキドキしてしまう…

「あ、あの…私…」

「…なーんて！冗談だよ！」

男の子は笑いながら私から離れた。

「兄ちゃんに会いにきたんだろ？入りなよ！」

「は、はぁ…お邪魔します…」

私は呆然としながらも、その男の子に連れられて玄関をくぐった。

そして響くんの部屋に行く。

「兄ちゃん！望月サンがきたぞ！」

私が部屋に入ると、ベッドで寝ていたらしい響くんが驚いたように上半身をおこした。

「詩織!?なんで…」

「そ、その…先生からプリントを預かってきましたので…」

本当は響くんが心配できただけなんですけど…

一応先生からプリントは預かっていますので嘘じゃありませんよ?

「それじゃ望月サン!オレ隣の部屋にいるから帰るときまた言ってよ!オレ、送るからさ!」

男の子はそう言って部屋を出て言った。

私は部屋に取り残されて、響くんと二人きりになる。

「えっと…すごく性格の違う弟サンですね…」

「ああ、一樹っていうんだ…あいつは女好きだから気つけろよ」

響くんはそう言うとゴホゴホと咳をした。

「あっ!無理しないで寝ていてください!」

「ん…いや、大丈夫だよ」

そう言いつつも響くんの目はぼんやりとしてて、頬が赤くなっている。

響くん、今日風邪をひいていて学校を休んでいたんですね…

なんとなく辛そうです…

「大丈夫じゃないです！寝ていてください！」

「じゃ…悪いけどそうする…」

響くんは弱々しい声でそう言うとベッドに横になった。

私はそのそばにひざまずく。

そして響くんの額を触ってみた。

…！！

すごく熱いです…！

「響くん…大丈夫なんですか！？すごい熱ですよ！？」

「大丈夫だって…大げさだな」

響くんはそう言って私に小さく笑いかけた。

いや、全然大丈夫なんかじゃないです！

というか、響くんのお母様は響くんがこんななのにほおっておいていいんですか！？

「あの…失礼ですが、お母様は…？？」

「ああ、今母親も父親も出張してていないから」

「え？出張ですか！？」

それじゃぁ…

今、この家には響くんと一樹くんの2人だけってことですか！？

そんなの…

ダメですよ…

響くんが死んじゃいます…

……よし。

「響くん、今日私、泊ってもいいですか？」

響くんは少し目を見開いた。

「はぁ…？？何言ってんだよ…無理だよ。オレ多分起きられないし、つまんないだけだぞ？」

「いいんです！今日は私が響くんの看病をしてあげます！決めました！」

こんな響くんをほおっておくわけにはいきません！

私はとりあえずお母さんに今日は友達の家に泊まらせていただくと連絡をした。

「おい…おまえ、勝手に…」

「いいから寝ていてください！」

私がぴしゃりと言うと、響くんは顔をしかめながらも反論しようとはしなかった。

「一樹クン、ご飯ができましたよ」

「お！ありがとうございます！」

一樹クンはそう言ってにっと笑った。

そして私が作った料理をおいしそうに食べてくれる。

「うまいですよ！ホント、今日望月サンが泊ってくれてよかったです！もう、兄ちゃんも風邪でダウンしてるから、オレ1人でまずい飯食わないといけないとこでした」

「そうですか？そう言っていただけるとうれしいです」

私が一樹クンに笑いかけると、一樹クンはじっと私を見つめた。

「ホント…望月サンって兄ちゃんにはもったいないですよね」

「へっ？？」

「だって…望月サンって可愛いし、性格もいいし…完璧じゃないですか」

真剣な声で言われて、思わず顔が熱くなる。

「そ、そんな…！！あっ！私響くんにおかゆ持っていきます！」

私は逃げるように作っておいたおかゆを持って2階にあがった。

びっくりしました…

本当に響くんと一樹クンは全然性格が違いますね…

兄弟なのにどうしてあんなにも違いがあるんでしょうか…？？

私はため息をついて響くんの部屋に入った。

「響くん、大丈夫ですか？」

返事は帰ってこない。

心配になって近づいてみると、変わりに小さな寝息が聞こえてきた。

なんだ…

眠っていただけですか…

ほっとして眠っている響くんの額に触れる。

やっぱりまだ熱いです…

眠っている顔も心なしか辛そうに見えますし…

「ん……」

響くんは気だるそうに瞼をあけた。

「詩織…??」

響くんの瞳が私をとらえる。

そして手をぴたりと私の頬に触れさせた。

「気持ちいい…」

響くんはぼんやりとそう言った。

熱っぽい瞳に、心臓の鼓動が速くなる。

「あ、あの!おかゆ持ってきたんですけど!!」

私は慌ててそう言った。

「おかゆ…??ああ…」

だんだんと目が覚めてきたようで、響くんは上半身をおこした。

「悪いな。ありがとう」

「いえ、それじゃ口あけてください」

私がおかゆをスプーンにすくってそう言うと、響くんは少し目を見開いて頬を赤く染めた。

「いや、オレ自分で食べれるから…」

「ダメですよ！こぼしちゃったらどうするんですか！？弱ってるときくらい甘えてください！」

私がそう言うと響くんはなんとも言えないような顔をして、おとなしく口をあけた。

それがなんとなく可愛くて、私はくすっと笑ってスプーンを響くんの口に運んだ。

「どうですか？？」

「ん、うまい…でも、やっぱ自分で食べる」

響くんはそう言って私からおかゆとスプーンをとりあげた。

むーーー……

なんだかお母さんみたいで楽しかったんですけど…

…まぁ、こんなときは1人でいる方が落ち着きますよね。

私がいても気を使わせてしまうだけかもしれませんし。

私はそう思い、立ち上がった。

「それじゃぁ、響くんが食べ終わったころにまたきますね」

「え…？？あ、ああ…」

さて、そろそろ一樹クンも食べ終えているところでしょうし…

お片づけでもしましょうか。

そう思い響くんから離れようとしたとき…

ガシッ

不意に腕を掴まれた。

「…？？響くん？」

驚いて振り返ると、響くんは自分でも驚いたように目を少し見開いていた。

そして慌てたように私を掴んでいた手を離す。

「あ…いや、なんでもない」

……

私はため息をついて響くんに笑いかけた。

「大丈夫ですよ。そばにいますから」

私は響くんのそばに座りこんだ。

やっぱり風邪の時というのは心細くなるものなんですね。

響くんもいて欲しいならはっきりと言えばいいのに…

…まぁ、はっきりと言わないのが響くんなんですけど。

そう思い、私はまたくすりと笑った。

…でも、こうして響くんが私を頼ってくれていることが、すごくうれしいです…

響くんはおかゆを食べ終えると、またベッドに横になった。

「ごめん…オレ、また寝るけど…」

「ええ、いいですよ」

私はそう言って響くんの手を握った。

響くんは安心したように目を閉じる。

それを見て、小さく微笑む。

ゆっくり眠ってくださいね、響くん。

響くんがいないと私、学校に行ってもつまらないですから…

「おい、詩織。起きろよ」

突然響くんの声がして、私は目をあけた。

「ん…??」

視界に、制服姿の響くんが映る。

あれ…??

どうして響くんがいるんですかぁ…??

私は目をこすりながら上半身をおこした。

たしか…

昨日響くんの看病してて…

って…

あれ?

どうして私が響くんのベッドで寝ているんですか??

というか…

「響くん、風邪は…??」

「もう治ったよ。それよりはやく準備しろ。遅刻するぞ?」

へ…？？

学校…？？

学校……

だんだんと目が覚めてきた。

…そうです！

私、昨日勢いで泊るとか言ってしまいましたけど…！！

今日は学校があるんでした！

私は飛び起きた。

「じゃ、オレ先下おりてるから」

響くんはにっと私に笑いかけて、部屋をでていった。

私は慌てて制服に着替える。

…あ、そういえば私…

今日の教科の用意とか何も持ってきていませんよ…

今からうちに戻ってもきっと間に合いませんし…

私は落ち込みながら用意を終えて下に降りた。

「望月サン、おはようございます！」

一樹クンは私を見て、にこっと私に笑いかけた。

「あ、おはようございます。一樹くん…」

一樹クンは落ち込んでいる私を見てきょとんとし、そしてふと気がついたように私に鞄を差し出した。

「これ、兄ちゃんが望月サンに渡しとけって言ってましたよ？」

「え…？？」

響くんが…？？

これって、私の鞄ですよね…？？

もしかして…

私は鞄を開いてみた。

予想通り、今日の時間割分の教科書やノートがきっちりと入っている。

もしかして…

私の家まで行ってとってきてくれたんですか…？？

うれしくて、私は思わず笑顔になった。

しかも…

それを一樹クンに渡させるところがまた、響くんらしいです。

玄関をでると、家の前で響くんが立っていた。

「詩織、早く行くぞ！」

少し苛立ったような声。

私は声の方にかけよった。

「はい！」

良かった…

今日は響くんが学校にきてくれる。

今日は、楽しい1日になりそうです♪

☆２２話　風邪☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

実はこの話、一樹を登場させるためだけに作りました。
一樹はこれからすごい重要人物になります！
あと、響がいきなり『詩織』ってよんじゃってますが、初詣の時から結構時間たっている設定なんで、もう慣れたってことで…

★22話　風邪★響side

体がだるい。

頭がくらくらとする。

「兄ちゃん、37度だってさ」

一樹が体温計を見て言った。

37度…

完璧風邪引いたな…

「大丈夫か?今日母さんも父さんもいないけど…」

「大丈夫だよ。とりあえず学校休む…」

「分かった。んじゃオレは行ってくるな!」

一樹はそう言ってオレの部屋を出ていった。

最悪だ…

風邪なんかひさしぶりにひいたぞ…

まぁ…

とりあえず今日は家でおとなしく寝てるか。

たまには学校休むってのもいいもんだな。

オレはそう思い、のんびりとベッドに横になった。

どうせすぐ治るだろうし、治ったら好きなことするか…

と、朝はそう思っていたんだが…

夕方、そうはいかなくなった。

一樹が帰ってきて、また熱をはかってみる。

「ああ、兄ちゃん。熱あがったな。３８度だ」

たしかに…

朝よりだるいし、頭がぼんやりとする。

なんでだ?

「あ、兄ちゃん、勉強してただろ!なんで風邪ひいてんのに勉強するんだよ!?」

一樹がオレの机を見て言った。

「いや…学校一日休んだし…勉強遅れるだろ??」

しかも昼はちょっと元気だったんだよ…

一樹ははぁと大きなため息をついた。

「まぁ、しんどいのはオレじゃないから別にいいけどな！ま、おとなしくしてろよ！」

「ああ…」

くっそ…

一樹に命令されるなんてなんか嫌だな…

ま、とりあえずまた寝るか。

そう思い目を閉じた時。

下でインターホンが鳴る音が聞こえた。

誰か来たのか…??

ぼんやりと思い、オレは眠ろうとした。

ガチャ

下でドアが開く音がする。

ん?

家にいれるのか??

一樹の彼女…??

ったく…

人が風邪ひいてるってときによく彼女なんか家にいれられるな…

まったくあいつだけは…

そう思いため息をついたとき、

なぜかオレの部屋のドアがあいた。

「兄ちゃん！望月サンがきたぞ！」

…はっ？？

オレは驚いて上半身をおこした。

「詩織！？なんで…」

「そ、その…先生からプリントを預かってきましたので…」

あ、ああ…

でもそんなのわざわざこなくても一樹に渡せばいいのに…

「それじゃ望月サン！オレ隣の部屋にいるから帰るときまた言ってよ！オレ、送るからさ！」

一樹はそう言って詩織に笑いかけると部屋をでていった。

詩織はそんな一樹を呆然と見て言った。

「えっと…すごく性格の違う弟サンですね…」

たしかに…

それはよく言われるよ…

「ああ、一樹っていうんだ…あいつは女好きだから気つけろよ」

そう言った時、不意に咳がでた。

そんなオレを見て、詩織はあたふたと言った。

「あっ！無理しないで寝ていてください！」

「ん…いや、大丈夫だよ」

オレはなんとか笑顔を作った。

「大丈夫じゃないです！寝ていてください！」

だけど詩織は怒ったように言った。

「じゃ…悪いけどそうする…」

たしかに上半身おこしてるのも結構辛い…

ここは詩織に甘えとくか…

オレはそう思い、ベッドに横になった。

詩織はオレのそばにひざまずくと、オレの額に手を触れさせた。

そして驚いたように少し目を見開く。

「響くん…大丈夫なんですか！？すごい熱ですよ！？」

すごい熱って…

たかだか３８度程度だぞ？？

「大丈夫だって…大げさだな」

オレはそう言って詩織に笑いかけた。

だけど詩織は泣き出しそうな顔でオレを見ている。

なんでそんな顔するんだよ…

オレ、風邪ひいただけだし…

本当に心配症だな。

「あの…失礼ですが、お母様は…？？」

「ああ、今母親も父親も出張してていないから」

「え？出張ですか！？」

詩織は驚いたように目を見開いた。

そして悩むように首をかしげてから言った。

「響くん、今日私、泊ってもいいですか?」

思わず目を見開く。

「はぁ…?何言ってんだよ…無理だよ。オレ多分起きられないし、つまんないだけだぞ?」

「いいんです!今日は私が響くんの看病をしてあげます!決めました!」

詩織はオレに反論する暇を与えず、家に電話をかけ始めた。

おいおい…

泊るって…

明日も学校あるんだぞ??

しかもオレの風邪うつるかもしれねぇのに…

詩織は電話をかけ終えてふぅっと息をついた。

「おい…おまえ、勝手に…」

「いいから寝ていてください!」

望月にぴしゃりと言われて、オレは顔をしかめた。

…まぁ、いいか。

もう反論する元気もないしな……

「ん……」

眠っていたオレは、不意に視線を感じて目を覚ました。

重たい瞼をあけると、心配そうにオレを見つめる詩織の姿がうつる。

「詩織…??」

なんでここにいるんだ…??

それより…

体が熱い…

オレはぴたりと詩織の頬に手を触れさせた。

ひんやりとした冷たさが手に伝わってくる。

「気持ちいい…」

あー…

なんかぼんやりする…

「あ、あの！おかゆ持ってきたんですけど！！」

詩織は慌てたように言った。

「おかゆ…？？ああ…」

だんだんと意識がはっきりしてきた。

そういえば詩織、泊るとか言ってたよな…

それでおかゆ持ってきてくれたのか。

オレはとりあえず上半身をおこした。

「悪いな。ありがとう」

なんとなくすげぇ詩織に迷惑かけている気がする。

本当に詩織っていいやつだよな…

なんか弱ってるときって人の優しさが身にしみるもんだ…

「いえ、それじゃ口あけてください」

詩織はおかゆをスプーンにすくって言った。

…は？？

それって…

熱くなっている顔がさらに熱くなる。

「いや、オレ自分で食べれるから…」

「ダメですよ！こぼしちゃったらどうするんですか！？弱ってるときくらい甘えてください！」

う〝……

そ、そう言われると……

…はぁ、ダメだ。

ここはおとなしく詩織に従ってた方がいいような気がする。

そう思い、オレはしぶしぶと口をあけた。

詩織はオレの口にスプーンを運ぶ。

あー……

こんなんじゃオレ、子供みたいじゃねぇか……

「どうですか？？」

「ん、うまい…でも、やっぱ自分で食べる」

オレは詩織からおかゆとスプーンをとりあげた。

やっぱ自分で食べた方が絶対楽だ。

詩織はそんなオレを恨めしそうに見つめ、そして不意に立ち上がった。

「それじゃぁ、響くんが食べ終わったころにまたきますね」

「え…??あ、ああ…」

もう、行くのか…

なんとなくすごく心細かった。

思わず、オレから離れようとする詩織の腕をつかむ。

「…??響くん?」

詩織は驚いたように振り返った。

…え??

オレ、何してるんだ…!?

オレは慌てて詩織から手を離した。

「あ…いや、なんでもない」

なんでもないけど…

でも、行って欲しくないというか…

詩織ははぁとため息をついて、オレに笑いかけた。

「大丈夫ですよ。そばにいますから」

ドキッ…

その笑顔があまりにも優しくて、心臓が高鳴った。

なんでだろう…??

詩織がそばにいると…

安心する…

オレはおかゆを食べ終えるとまた横になった。

「ごめん…オレ、また寝るけど…」

「ええ、いいですよ」

望月はそう言ってオレの手を握った。

冷たさが手に伝わってくる。

オレは安心して目を閉じた。

気持ちいい…

詩織が熱を奪ってくれてるみたいだ…

オレは風邪をひいていたことも忘れて、ぐっすりと眠ることができた。

目を覚ますと、熱は完全にひいていた。

オレ…

治ったみたいだな。

不意に、規則正しい寝息が聞こえた。

…詩織？？

詩織はオレの手を握ったまま、すやすやと眠っている。

オレはしばらくぼんやりと詩織を見つめてふっと笑った。

そしてそっと詩織の髪をなでる。

ずっとオレのそばにいてくれてたんだな。

多分、オレおまえのおかげでこんなにはやく治ったんだ。

おまえがいてくれたから安心して眠れた。

「…ありがとな、詩織」

…そういえば、明日詩織は学校どうするんだろう？

オレはこの調子だったら余裕でいけるけど…

こいつ、明日の用意とか何も持ってないんじゃないか？？

……

オレは時計を見た。

…9時か。

オレんちから詩織の家まで電車使って1時間くらい。

10時に行くとか、絶対迷惑だよな…

……まぁ、オレが謝ればすむと思うし…

今から行くか。

オレはベッドからおりて、代わりに詩織をベッドに寝かせた。

そして上着を羽織って家をでる。

詩織の母親は別に怒るわけでもなく、笑顔で詩織の明日の用意を手渡してくれた。

さすが詩織の母親だな。

そう思いながらうちに帰る。

家につくと、時刻は１１時半をまわっていた。

うわ…

結構遅くなったな…

まぁ今までずっと寝てたからあんま眠たくないけど。

それにちょっとしたことだけど、詩織に礼っぽいことができたからいいか。

オレは部屋に戻り、詩織の額にそっと口付けた。

少し顔が熱くなる。

「…おやすみ」

オレは詩織にそう笑いかけて、ベッドのそばに座りこみ、目を閉じた。

★２２話　風邪★響ｓｉｄｅ（後書き）

えらく中途半端に終わっています（ー＿ー；）
すいません＞ｍ（＿）ｍ＜

☆23話　バレンタイデー☆詩織side

「ねぇ、詩織ちゃん！今週の土曜日暇ー？？」

突然笹川サンに話しかけられた。

「え、ええ…特に用事はありませんけど…」

「なら一緒にチョコ作らない！？」

「チョコ、ですか…？？いいですけど…」

また、どうしてチョコなんか作るんでしょうか？？

私が首をかしげていると笹川サンは笑いながら言った。

「あれ？詩織ちゃんたら忘れてる？もうすぐバレンタイデーだよー♪」

へっ…？？

バレンタイデーって…

……！！

そ、そうでした！！

もうすぐ2月14日です！！

良かった…

笹川サンに言われなければ忘れるところでした……

「私も大河においしそうなの作りたいし、詩織ちゃんって料理うまそうだからさっ！」

「いや、そんなことないですよ……」

「そんな謙遜しちゃってー！とりあえず、私土曜日に材料とか買って詩織ちゃんのうちに行くねー！！」

「ええ！？私のうちですか！？」

「うん！それじゃまた土曜日ねー！！」

笹川サンは私に反論する間を与えずに帰っていってしまった。

私、ちょっと笹川サンって苦手です……

「何話してたんだ？詩織」

響くんが顔をしかめて笹川サンの後ろ姿を見ながら言った。

思わずびくっと震える。

えっと…

一応響くんには内緒の方がいいですよね？

「いえ、なんでもないですよ！さぁ帰りましょう！」

私は慌てて教科書やらノートやらを鞄に詰め込んだ。

響くんは怪訝な顔をしていたが、それ以上深く聞こうとはしなかった。

…よし、

私も響くんのためにおいしいチョコを作って、響くんのハートをつかんじゃいます！

そしてあわよくば、またキスしてみたいなぁーなんて…

よーし！待っていてください、響くん！

「お邪魔しまーす♪」

土曜日。

笹川サンはたくさんのチョコの材料を買いこんでうちにきた。

「詩織ちゃん！いろいろ買ってきたよー！」

「こ、こんなにたくさん…よろしいのですか…？？」

「うん！使えそうなのいっぱい買ってきたんだ♪」

使えそうなのって…

それはいいですけど、少し買いすぎじゃありませんか…？？

まぁいいですけど…

「それでは作りはじめましょうか」

「うん！！で、何作るの？？」

何作るって…

何も考えずにこんなにいろいろと買ってきたのですか…？？

…まぁ、私も何を作ろうか考えていたから別にいいですけど……

「えっと…あんまりこりすぎても失敗する確率が高まるので…普通のシンプルなチョコでいいんじゃないですか？」

「シンプルなチョコ？？うん、いいよ！！」

笹川サンはそう言ってにっこりと笑った。

よーし！

それじゃがんばって作りますよー！！

作り方は簡単です！

まず、板チョコを切り刻みます。

そしてそれを５０度程度のお湯で湯煎して溶かします。

溶かしたチョコを型に流し込みます。

あとは冷蔵庫に入れて待つだけ…

「待って！！」

私が湯煎で溶かしたチョコを型に流し込もうとしたとき、不意に笹川サンに止められた。

「どうしたんですか？？」

「これいれなくちゃ！」

そう言って笹川サンが取り出したのは料理酒。

…？？

チョコ作りに料理酒なんて使いましたっけ…？？

「あのねー？大河ってちょっとしたお酒でもすぐ酔うんだぁ！だからこれをたっぷりいれたら絶対に酔うはずだよ！」

「はぁ…」

料理酒で酔うものなのですかね…？？

「でも、酔ったからって何があるんですか？？」

私が訪ねてみると、笹川サンはにっと笑った。

「大河はね、酔ったらおもしろいの。いろんなことしてくれるんだぁ。だから、ね？」

……笹川サン、ちょっと怖いです。

「もしかしたら滝沢クンも同じかもしれないよ？だから詩織ちゃんも一応いれときなよ！」

「は、はぁ…」

いろんなことって…なんでしょうか…？？

それに普通は料理酒で人は酔わないと思いますが…

しかもチョコに料理酒って入れていいんですか？？

そう思いながらも私はほんの少しだけチョコの中に料理酒を混ぜた。

（隣では笹川サンがどぼどぼとたくさんいれてますが…）

そしてあらためてチョコをハート型の型に流し込む。

あとは冷蔵庫で３０分くらい冷やすだけです！

そして３０分後…

「できました！」

「かんせーい♪」

あとはラッピングして渡すだけです！

「明日が楽しみだね！詩織ちゃん！」

笹川サンはそう言ってにこっと私に笑いかけた。

「そうですね！」

さっき味見してみてもおいしかったですし！

さぁ、響くんは喜んでくれるでしょうか？？

そして月曜日。

私は鞄の中に昨日作ったチョコを忍ばせて学校にいった。

「おはようございます！響くん！」

「ああ、おはよう」

響くんは笑顔であいさつを返してくれる。

ええと…

もう今渡しちゃいましょうかね？？

そう思い、鞄からチョコをとりだそうとしたとき…

「あ、あの！滝沢クン！」

数人の女の子が響くんのところにきた。

その手には可愛らしく包装された袋を持っている。

え…？？

もしかして響くんにチョコを…？？

「これ、受け取ってください…！！」

1人の女の子が響くんにチョコを差し出した。

少し胸が締め付けられる。

嫌…

受け取らないでください…！

響くん…！！

響くんは顔をしかめて言った。

「えっと…悪いけど、オレ甘い物嫌いだから」

……へ？

そうだったんですか??

「え…?で、でも…!!」

女の子達はショックを受けたようにおろおろとうろたえている。

その隣で私もさりげなくショックを受けた。

そ、そんな…

私、思い切り甘く作っちゃいました…

糖分多めなんですけど…

響くん、もしかしたら私のも受け取ってくれないかも……

だけど少しだけほっとした。

でも、たとえ響くんが私のチョコも受け取ってくれなくても…

他の誰のチョコも受け取らないってことですよね??

少し安心です…

……けど、やっぱりショックです。

私は大きなため息をついた。

そして昼休み。

私は一応お弁当箱と一緒にチョコを持って、響くんと屋上に行った。

ええと…

どうしましょう…

やっぱり受け取ってもらえないでしょうかね？

でも…

もしかしたら受け取ってもらえるかもしれませんし…

…一応、渡してみましょう！！

「あ、あの！わ、私もチョコ作ってきたんですけど！」

そう言って響くんにチョコを差し出す。

「えっと…受け取って、いただけますか…？？」

響くんは少し驚いたような顔をして、そして私に微笑みかけた。

「ありがとう」

一言そう言って、チョコを受け取る。

え…？？

受け取ってくださるんですか？？

…良かったです。

「あの、良かったら今食べてみてください」

ふと、笹川サンが言っていた『酔ったら面白い』という言葉が頭にうかんできた。

料理酒で酔うなんて思えませんが、響くんは酔ったらどうなるんでしょうか…??

「ああ」

響くんは袋の中から一粒チョコを取り出して、口に運んだ。

私はわくわくしながらその様子を見守る。

だけど響くんは別にどうにかなるわけでもなく、にこっと私に微笑みかけた。

「うん、うまいよ…ちょっと甘いけどな」

…別に、何もなりませんよ?

まぁ、喜んでいただけたのはうれしいですけど…

私はがっくりと肩を落として大きなため息をついた。

「…??なんだよ、ため息なんかついて…」

響くんはそんな私を怪訝そうに見る。

「いえ…別にたいしたことではないのですが……そのチョコに、料理酒を入れてみたんです」

「料理酒??」

私はこくっとうなずいた。

「笹川サンが、滝沢クンも酔ったらおもしろいことになるかもよ?って言ってましたから…」

結局、おもしろいことってなんだったんでしょうか??

響くんはなぜか黙ってしまった。

…??

どうしたんでしょうか?

「響くん?どうしたんですか??」

私が尋ねてみると、響くんは小さな声で言った。

「おまえもちょっとこれ食べろよ」

「??」

不思議に思いながらも、袋から一粒チョコをとって口に入れる。

甘い味が口の中に広がった時…

「んっ！」

突然響くんの唇が私の唇に触れた。

な、なんですか！？急に！！

響くんは私のあいた口に舌をいれて、私の口の中のチョコをからめとった。

そして自分の口に運ぶ。

顔が燃えるように熱くなって、熱で頭がぼんやりとしてきた。

響くんは一度唇を離すと、また角度を変えてキスしてきた。

そして今度はまだ口内に残っていたチョコをなめとる。

響くんの熱がたまらなく心地よかった。

口の中にチョコがなくなって、響くんは唇を離した。

「響、くん…？？」

響くんの顔は真っ赤になっていて、視線を私からそらしていた。

「ホントにこのチョコ…甘いな…」

照れ隠しをするようにそう言う響くん。

私はそんな響くんを見てくすっと笑った。

「ずるいですよ。私にも食べさせてください」

私はそう言って響くんの口にチョコを運んだ。

響くんは驚いたように目を見開く。

私はそんな響くんにキスした。

そしてさっきの響くんと同じように、響くんの口の中のチョコをからめとる。

もともと甘いチョコがさらに甘く感じた。

響くんの口の中のチョコを全部食べ終えて、私は唇をはなした。

お互い真っ赤になった顔を見合わせて、恥ずかしくなってうつむく。

わ、私ったらなんて大胆なことをしたんでしょうか…??

でも…

私はそっと自分の唇に触れた。

とっても甘くて、おいしかったです……

☆２３話　バレンタイデー☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

最後、２人ともかなり積極的に…
途中で詩織が積極的すぎるだろ！と思って慌てて変な終わり方になりました（一―一；）

★23話　バレンタイデー★響side

2月のある日の放課後。

いつものように詩織と帰ろうとした時、詩織と笹川が話しているのが目にうつった。

ん…??

なんで笹川と話してるんだ…??

…なんか心配だ。

笹川と富岡はもう付き合っているから安心だと分かってても、やっぱ嫌な感じがする…

オレは笹川が詩織から離れてから詩織に声をかけた。

「何話してたんだ?詩織」

詩織はびくっと震えた。

「いえ、なんでもないですよ!さぁ帰りましょう!」

慌てたようにそう言い、教科書やらノートやらを鞄に詰め込みはじめた。

…??

やっぱなんか怪しい。

…まぁ、無駄に深く聞いても何もいわねぇだろうし…

オレは特にそれ以上聞かなかった。

それにしても…

オレはぶるっと震えた。

なんとなく詩織から変な気を感じる気がするんだが…

…気のせい、だよな？

「そういえば、明後日ってバレンタイデーだよな！」

富岡がポテトを口に運びながら言った。

「そういえばそうだな…」

……まぁ、それはどうでもいいとして…

「で、何の用？？」

なんでオレが今、富岡なんかとマクドで向かいあって座ってるんだ？？

「何の用って…暇だったから」

富岡はきょとんとして答えた。

暇だったからって…

どんな理由だよ!?

「それなら笹川でも呼んで遊んでればいいだろ!?」

オレが言うと、富岡はため息をついた。

「オレも最初はそうしようと思ったんだけど…美空、今日用事あるみたいでさ」

「用事??」

そういえば、おとといくらいに笹川と詩織が何か話してたよな??

それに関係あるのか??

…まぁ、多分心配することじゃないと思うけど…

「それよりさ!」

富岡は少し身を乗り出して言った。

「おまえ、詩織ちゃんとどこまでいったんだよ?」

「はぁ!?」

思わず顔が熱くなる。

なんでいきなりそんなの聞くんだよ！？

しかもそんなのおまえなんかに教える必要ねぇし！

「おまえには関係ないだろ？？」

オレはふいっとそっぽを向いた。

そんなオレを富岡はにやにやしながら見てくる。

「何？照れてんの？もしかして最後までいっちゃった？？」

「いってねぇよ！！」

オレは慌てて否定した。

富岡は驚いたように目を見開く。

「え…？？いってないの…？？おまえら、たしかもうすぐ1年になるんじゃ…」

そ、そんなに驚かれることか…？？

「そうだよ、悪いか？そういうおまえはどうなんだよ？」

「オレはもういってるぞ？」

富岡はさらっと言った。

…あれ？

こいつらって付き合い始めて結構短くないか…？？

まぁ…

それは人の勝手だと思うけど…

「だって美空がうるさいから…オレはもうちょっと大事にしたかったんだけどなー」

富岡はそう言ってまたため息をついた。

「…まぁ、オレ達のことはいいや。じゃぁさ、いくらなんでもキスはしたよな？？」

「まぁ…な」

1回しかしてねぇけど。

しかもかなり短い感じの。

で、でも一応したことはした！…あれってキスになってるかわかんねぇけど…

「それってどんな感じの？深い感じ？？」

富岡は興味津々の顔で聞いてくる。

な、なんでそこまで聞きたいんだよ!?

「そ、その…触れる感じ??」

…でも思わず答えてしまうオレもオレだな……

「触れる感じって…どんな感じだよ?」

「どんな感じって…一瞬?」

富岡は目を見開いて、はぁと大きなため息をついた。

「おまえ…全然ダメなんだな」

「なっ!ダメってなんだよ!?」

別にそういうことしなくても、好きってだけでいいじゃねぇか!!

「全然ダメダメだ。こりゃ詩織ちゃんも不満たまってるだろうな…」

ふ、不満…!?

そ、そうなのか…!?

「詩織ちゃんも純情だから何も言わないけど…でもそのうちおまえ、ふられるぞ??」

な…

ふられる…!?

ショックをうけて、頭の中でゴーンと鐘が鳴り響いた。

「ど、どうすりゃいいんだよ…??」

「そうだな…オレもよくわからないけど…とりあえずもう一回キスしてみたら?今度は深い感じで」

ふ、深い感じ??

「それってどういう感じだよ…??」

「んー…そうだな…」

それからオレは2時間ほど、富岡にいろんなことを話された。

……で、なんでオレはこんなに素直に富岡の話を聞いてるんだろう…??

そして月曜。

「おはようございます!響くん!」

いつものように詩織が笑顔でオレにあいさつする。

「ああ、おはよう」

オレもあいさつをかえして、あらためて詩織を見た。

やっぱり…

富岡が言うように不満がたまってるのか??

そうは見えねぇけど…

「あ、あの！滝沢クン！」

不意に数人の女子に声をかけられた。

ん…??

オレがそっちを見ると、１人の女子がオレに小さな袋を差し出した。

「これ、受け取ってください…！！」

え…??

なんでいきなり??

そう思い、ふと思い出す。

ああ、そういえば今日ってバレンタイデーだったな。

「えっと…悪いけど、オレ甘い物嫌いだから」

オレはとりあえずそう言って断った。

その前に詩織がいるまえで受け取れねぇし。

「え…？で、でも…！！」

女子達はショックをうけたようにおろおろとしだした。

んー…

なんか言い方まずかったかな？？

まぁ、いいか。

それより…

オレは横目で詩織を見た。

…なんでこいつまでショック受けた感じの顔してんだろ…？？

そして昼休み。

オレはいつものように詩織と屋上に行った。

そして昼食を食べようとしたとき。

「あ、あの！わ、私もチョコ作ってきたんですけど！」

詩織が突然そう言って、オレにチョコを差し出した。

「えっと…受け取って、いただけますか…？？」

？？

受け取ってくれるかって…

そんなの受け取るに決まってるだろ??

不思議に思い、そしてふと気がついた。

ああ、そうか。

さっきオレが甘い物嫌いって言ったこと、気にしてるのか。

オレは詩織に微笑みかけて、チョコを受け取った。

「ありがとう」

別に…

甘い物嫌いだけど、詩織からもらえるものならうれしいし…

気にする必要なんてないのにな。

「あの、良かったら今食べてみてください」

詩織はおずおずと言った。

「ああ」

オレは袋の中から一粒チョコを取り出した。

小さなハート型のチョコ。

オレのために作ってくれたのか…

なんかうれしいな。

そう思いながら食べてみる。

「うん、うまいよ…ちょっと甘いけどな」

オレはそう言って詩織に微笑みかけた。

ちょっとというか、だいぶ甘いけどな……

詩織はなぜか肩を落として、はぁと大きなため息をついた。

「…??なんだよ、ため息なんかついて…」

オレ、うまいって言っただけなんだけど…

それともちょっと甘いって言ったことがダメだったのか??

「いえ…別にたいしたことではないのですが……そのチョコに、料理酒を入れてみたんです」

「料理酒??」

詩織はこくっとうなずいた。

「笹川サンが、滝沢クンも酔ったらおもしろいことになるかもよ?って言ってましたから…」

酔う…??

おもしろいこと…??

オレは土曜日に富岡に言われたことを思い出した。

お、おもしろいことって…

『こりゃ詩織ちゃんも不満たまってるだろうな…』

そ、そうなのか…??

詩織もそういうこと、して欲しいのか…??

……

「響くん?どうしたんですか??」

詩織はきょとんとした顔でオレを見た。

「おまえもちょっとこれ食べろよ」

オレは小さな声で言って、詩織からもらった袋を差し出す。

「??」

詩織は不思議そうな顔をしながらも袋から一粒チョコを取り出して口に運んだ。

……すげぇ恥ずかしいけど…

詩織が望んでるならやるしかねぇよな……

オレは軽く息を吸って、詩織に口付けた。

「んっ！」

詩織は驚いたように目を見開く。

オレは詩織のあいた口に舌をいれて、詩織の口の中のチョコをからめとった。

甘い味と、熱が口の中に広がる。

自分がしていることが恥ずかしくて、顔が燃えるように熱くなった。

だけど、心地よくなってきて、唇を離して角度を変えてもう一度キスする。

そして今度は微妙に残ったチョコをからめとった。

全部を食べ終えて、唇を離す。

「響、くん…？？」

詩織が真っ赤な顔でオレを見た。

やばい…

かなり恥ずかしい…

まともに詩織が見れなくて、オレは目をそらした。

「ホントにこのチョコ…甘いな…」

照れ隠しにそう言うと、詩織はくすっと笑った。

「ずるいですよ。私にも食べさせてください」

詩織はそう言うと、チョコを一粒オレの口に運んだ。

そして今度は詩織からキスをする。

詩織の舌がオレの口の中のチョコをからめとった。

驚いて固まってしまい、されるがままになる。

詩織はオレの口の中のチョコをすべて食べ終え、唇を離した。

そして詩織は顔を真っ赤にさせてうつむいた。

オレも恥ずかしくなってそっぽを向く。

びっくりした…

まさか詩織からされるとは思わなかった…

……

オレ、甘い物嫌いだけど……

たまには、甘い物もいいかもしれない…

オレはそう思い、ふっと笑った。

★２３話　バレンタイデー★響ｓｉｄｅ（後書き）

大河の話をおとなしく聞いてしまう響。
大河はこれからも響のアドバイザーみたいな感じでよくでてくると思います。
響って友達少ないですからね（＊＿＊；

☆２４話　新しいクラス☆詩織ｓｉｄｅ

４月です。

私がこの高校に入学してから、早いものでもう一年が過ぎました。

というわけで、学年が１つあがります。

学年が１つあがるということは…

当然ですが、クラス替えがあります。

私はドキドキする鼓動をおさえながら、すぅっと深く息をすった。

どうか…

響くんと同じクラスでありますように……！！

私は勇気を出して目をあけた。

そしてＡ組から順番に自分の名前を探す。

望月詩織…望月詩織…

あ、ありました。

ええと…

私はＢ組ですね。

さて、響くんは…

「……C組か」

不意に隣から響くんの声が聞こえた。

「えっ…??響くん?」

響くんは私に気が付いていなかったようで、私を見て少しだけ目を見開いた。

「ああ、詩織。いたのか」

「は、はい…」

いたのかって…

仮にも私は響くんの彼女なのに…

そんな言い方ひどいですよ…

…って、そうじゃなくて!

「響くん、C組なんですか!?」

私は驚いて言った。

「ああ、ほら、見てみろよ」

…あ、たしかに…

C組の所に、たしかに『滝沢響』と名前が書いてあります…

そして私は…

……やっぱり、B組の所に名前が書いていますね…

私ははぁっと大きなため息をついた。

「クラス…離れちゃいましたね…」

ああ…

これからはいつでも響くんと顔を合わせることはできなくなるんですね……

残念です……

私は悲しくなってうつむいた。

そんな私の頭を、響くんがぽんっと叩く。

「そんな落ち込まなくても……別に、休み時間も、昼も、放課後も会えるだろ？」

そう言って優しく私に微笑みかけてくれる響くん。

「で、ですけど…」

私は授業中だってずっとずっと響くんといたいのに…

それに私がいない間に、響くんが他の女の子と仲良くしてないかとか、心配になりますよ……

「響くん、あんまり私以外の女の子と話さないでくださいね？」

私は少しわがままを言ってみた。

響くんは少し驚いたような表情をして、にっとはにかんだ笑顔をうかべた。

「オレは大丈夫だよ。…でも、おまえもあまり他の男と仲良くしたりするなよ？」

「そ、それは当然ですよ！！」

私は慌てて言った。

「そうか？でもおまえ、結構前例あるからな…」

響くんは真顔で言った。

た、たしかにそういえばそうですけど…

「でも！私は響くんだけですから！！」

カァァァっと顔が熱くなった。

響くんは少し頬を染めて、きれいな笑顔を私に向ける。

「そう。ならいいけど」

とくん…

心臓が少し強く鳴る。

そういえば…

私と響くんが出会って、もう1年がたったんですね…

はじめ、響くんを見た時はすごく怖いと思ったのに…

今では、愛しくてたまらない。

あの時は響くんのこんな笑顔、想像もできなかったです…。

本当に私…

響くんに出会えて良かった。

私はあらためて響くんと出会えた奇跡がうれしく思い、にっこりと響くんに微笑みかけた。

「よっ！2人ともらぶらぶだなぁ！！」

突然誰かにとんっと肩を叩かれた。

あれ？

この声って…

「一樹……」

響くんが振り返って、怒ったように言った。

振り返ってみると、私達を見てにやにやと笑う一樹クンがいた。

「ええと…どうして一樹クンがいるんですか??」

「どうしてって…オレ、今日からここの新1年ですから」

一樹クンはそう言ってにっこりと笑った。

「ったく…なんでオレと同じ高校なんか来るんだよ…」

響くんはしかめ面で言った。

「可愛い弟に向かってそんな言い方ないだろ?…まっ、そういうことで、よろしくお願いしまっす!望月センパイ!」

「は、はい…」

私は苦笑いして答えた。

そうでした…

今年から新しい1年生も入学してきたんですね。

これから、一樹クンも一緒に生活することになるんですね!

なんだか楽しくなりそうです♪

「詩織！また同じクラスだね！」

「またよろしくー♪」

優香ちゃんと楓ちゃんが私に声をかけてきてくれた。

「そうですね！またよろしくお願いします！」

響くんとは離れてしまいましたが、この2人とは同じクラスだったんですね！

良かったです…

もしクラスに友達がいなかったらって心配だったんですよねー…

「でも私、中島クンとクラス離れちゃった…」

優香ちゃんはそう言って大きなため息をついた。

ああ…

そういえば、優香ちゃんは中島サンとお付き合いしてたんでしたね…

「私も…響くんとクラス、離れちゃいました…」

「あらら―。２人とも残念だねー…」

楓ちゃんは苦笑いしてそう言った。

「うん…。あっ、それよりもさ！うちの学年に転入生が来るらしいよ！」

「転入生…ですか？？」

「ああ、私もそれ知ってる！なんでもすっごくお金持ちの財閥のお嬢様らしいよー」

財閥の…お嬢様ですか…？？

へぇー…

今の世の中にもそんな人がいたんですねー…

一体どんな子なんでしょうか……？？

そしてその日の帰り道。

「響くん！遅くなってすいません！」

私は急いで校門前で私を待ってくれている響くんにかけよった。

「ん。じゃ、行くか」

響くんはそう言って微笑む。

歩きだした響くんの隣に並ぼうとした時、不意に視界の端に一樹クンの姿が映った。

一樹クンは数人の女の子達に囲まれて、楽しそうに話している。

「一樹クン、もてもてですねー…」

私は苦笑いしてつぶやいた。

響くんは足を止めて、一樹クンの方を見る。

「…ああ、いつもあんな感じだよ。言っただろ?あいつ女好きだから」

お、女好きだからって入学して早々、あんなにも女の子の友達が増えるものなのでしょうか…??

いや、あの人達が全員友達かどうかっていうのも少し怪しいです…

私は歩きだしている響くんの隣に慌てて並んだ。

そしてちらっと響くんの方を見てみる。

いつも思ってるんですが、本当に響くんってきれいですよねー…

響くんも一樹クンみたいな性格だったら、きっとあんな風にもてもてなんでしょうね。

…いや、今でもすごくおもてになっているんですけど……

響くんったら全然相手にもしてませんし…

…まぁ、響くんが一樹クン見たいな性格じゃなくて良かったです。

響くんはちゃんと、私だけを見てくれていますものね。

そう思い、うれしくなって私は響くんに微笑みかけた。

「何??」

響くんは怪訝な顔で私を見る。

「いえ。響くんって本当にきれいだなって思って」

響くんは驚いたような表情をして、顔を赤く染めた。

「いきなり…なんだそれ…」

そんな響くんを見てくすっと笑う。

この照れ屋な所も、すごく好きです。

「ねぇ、響くん。私、響くんが大好きですよ?」

響くんの顔がさらに赤くなった。

「…オレも」

小さな声でそう言って、うつむく響くん。

その小さな一言がうれしくて、思わず笑顔になる。

本当に、本当に大好きです。響くん。

クラス、離れてしまいましたけど…

こうして少しでも、毎日あなたと同じ時間を過ごせるのならそれだけで幸せです。

こんないつもの帰り道だって、あなたと一緒なら輝いて見える。

私にとって、あなたと過ごせるありふれた日常が、たまらなく幸せで、大切な時間。

そんな日常が…

これから少しづつ、崩れていくなんて……

私はこのとき、夢にも思いませんでした。

☆２４話　新しいクラス☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

いきなり2年生になりました。
そして結構短くなってしまいました…（―＿―；）
でも響ｓｉｄｅは少し長くなるかも…？？

★２４話　新しいクラス★響ｓｉｄｅ

４月になった。

オレ達は２年になり…

クラス替えがある……

詩織とクラス同じだったらいいけど……

オレは心の中でそう願いながら、クラス発表の張り紙を見た。

Ａ組から、並んでいる名前を追っていく。

そしてＢ組の所で詩織の名前を見つけた。

ああ、詩織はＢ組か。

オレもＢ組だったら…

そう思い、Ｂ組の場所を探してみる。

だけどそこにオレの名前はなかった。

代わりにＢ組の下の、Ｃ組の所に自分の名前を見つける。

「……Ｃ組か」

オレがそうつぶやくと、隣にいた奴が驚いたようにオレを見た。

「えっ…??響くん?」

その声を聞いて、驚いて隣を見る。

視界の中に詩織が映って、オレは驚き少し目を見開いた。

「ああ、詩織。いたのか」

名前探すのに夢中で全然気がつかなかった…

「は、はい…」

詩織は少し怪訝な顔をした。

そしてはっと気がついたように目を見開く。

「響くん、C組なんですか!?」

なんだ、まだ知らなかったのか。

「ああ、ほら、見てみろよ」

詩織はオレが指差した先を見て、はぁと大きなため息をついた。

「クラス…離れちゃいましたね…」

詩織は落ち込んだようにそう言うと、うつむいてしまった。

そんな詩織がとても可愛らしく見える。

オレはぽんっと軽く詩織の頭を叩いた。

「そんな落ち込まなくても……別に、休み時間も、昼も、放課後も会えるだろ？」

オレはそう言って詩織に微笑みかけた。

「で、ですけど…」

だけど詩織は泣きだしそうな顔でオレを見た。

「響くん、あんまり私以外の女の子と話さないでくださいね？」

少し驚き、同時にうれしくなる。

…詩織も、そういうの気になるんだな。

オレはにっと笑った。

「オレは大丈夫だよ。…でも、おまえもあまり他の男と仲良くしたりするなよ？」

「そ、それは当然ですよ！！」

詩織は慌てたように言った。

「そうか？でもおまえ、結構前例あるからな…」

あの幼馴染とかいうやつとも仲良くしてたし…

富岡とも仲良くしてたしな。

そういや橋本と仲良くしてたときもあった。

……かなり不安だ。

「でも！私は響くんだけですから！！」

詩織は顔を赤く染めて言った。

オレも、少し顔が熱くなる。

だけどうれしくて、思わず笑顔になった。

「そう。ならいいけど」

オレだけ、か。

ちょうど一年前は、そんなこと言われるとも思わなかったな。

詩織はオレのこと怖がってたし…

なんだかんだでオレも詩織のことが苦手だったし…

でも、今は違う。

オレは……

「よっ！2人ともらぶらぶだなぁ！！」

聞きなれた声とともに、突然肩を叩かれた。

この声…とかそんな前に、

こんなくだらないこと言うやつは決まってる……

「一樹……」

振り返ると、一樹がオレ達を見てにやにやと笑っていた。

そういや…

こいつもこの高校入ったんだったな…

「ええと…どうして一樹クンがいるんですか??」

詩織は一樹を見て驚いたように言った。

「どうしてって…オレ、今日からここの新1年ですから」

一樹はそう言ってにっと詩織に笑いかける。

「ったく…なんでオレと同じ高校なんか来るんだよ…」

嫌でも家で顔合わせるってのに、学校でまで顔合わせなくちゃいけなくなるだろ……

「可愛い弟に向かってそんな言い方ないだろ?…まっ、そういうことで、よろしくお願いしまっす!望月センパイ!」

「は、はい…」

詩織は苦笑いで返事した。

はぁ…

一樹が同じ高校来るなんてな……

しかも詩織のこと気に入ってるっぽいし……

なんだか面倒なことになりそうだ…。

そう思い、オレは大きなため息をついた。

始業式を終え、クラスでのホームルームが始まる。

「いきなりだが、今日から新しく生活する仲間ができた」

担任が軽いあいさつを終え、突然そう言った。

??

新しく生活する仲間??

それって転校生のことか??

しかし途中から編入できるなんて、相当頭のいいやつなんだな…

オレはぼんやりとそう思いながら、ドアの方を見た。
ガラリとドアが開き、長い髪の女が入ってくる。
「転校生の桜井千里さんだ」
「桜井千里です。みなさん、よろしく」
転校生ははっきりとした声でそう言い、にっこりとほほ笑んだ。
一部の男が歓声をあげる。
まぁ、人よりは結構美人なのかもしれない。
それに、なぜか人と違うオーラがある。
「それじゃあの開いてる席に座って」
「はい」
転校生はまっすぐに開いていた席に向かった。
そしてオレの隣を通るとき……
なぜか転校生がオレの方を見て、にっと笑った気がした。
ぶるっと寒気がする。
…??

今、あいつオレの方見た??

…いや、気のせいか……

と、その時はそんな風に少し変な感じがしただけだった。

だけど、ホームルームが終わったあと…

「滝沢クン！また同じクラスだね！」

笹川が笑顔でオレの方にかけよってきた。

「詩織とは離れたけどな」

オレはぶすっと言った。

笹川は苦笑いする。

「あらら…でも大丈夫だよ！私と大河に比べたらマシじゃない！私達なら学校も違うんだよ？」

ああ、そういや富岡は学校違うんだったな。

……そうだよな。

こいつらと比べたらマシか……

そう思いながらも、小さなため息をつく。

でも、やっぱり同じクラスが良かった…

「ねぇ、あなた」

突然誰かに声をかけられた。

顔をあげると、転校生がオレを見下ろしている。

「…何??」

転校生はにこっと笑った。

「私とお付き合いしましょう??」

「…??」

はっ…??

えっと…

そんなのいきなり言われても……

「そんなの無理だよ。滝沢クンには詩織ちゃんがいるもの。ねぇ?」

笹川が顔をしかめて言った。

「ああ。えっと…オレ彼女いるから。悪いけど無理だな」

転校生は驚いたように目を見開いた。

「この私からお付き合いしたいと言ってあげてるのに…断るの？」

……

オレと笹川は顔を見合わせた。

『この私』って…

少し自意識過剰すぎないか？？

たしかに人よりは美人かもしれないが…

そんな良く知りもしないやつにいきなり付き合いたいとか言われてもな……

「ああ、悪いな」

オレは突き放すようにそう言った。

転校生はポカンと口をあけて、不意にくすっと笑った。

「…気にいった」

「……何が？？」

転校生はオレの耳に口をよせると、小さな声で囁いた。

「　　」

意味がわからなくて、オレは顔をしかめる。

「それじゃぁね」

転校生は満面に笑顔をうかべてオレに手をふり、教室を出ていった。

「滝沢クン、なんて言われたの??」

笹川が顔をしかめて転校生を見送りながら言った。

「別に……」

オレは転校生の言葉を頭の中で思い浮かべてみた。

あれ、多分脅しかなんかで言ったと思うけど…

なんだか嫌な予感がする…

その日の帰り道。

オレは校門の前でぼんやりと詩織を待っていた。

少しして、詩織がオレの方にかけよってくる。

「響くん!遅くなってすいません!」

「ん。じゃ、行くか」

オレはそう言って微笑み、歩き始めた。

詩織もオレの隣に並ぼうとし、ふと足を止める。

「一樹クン、もてもてですねー…」

そしてぽつりとつぶやいた。

オレは足を止めて、詩織の視線の先を見てみる。

そこには数人の女子に囲まれた一樹がいた。

「…ああ、いつもあんな感じだよ。言っただろ?あいつ女好きだから」

外で一樹を見る時は絶対に隣に何人か女がいるからな。

まぁ、高校入って一日目でいきなりあんなに囲まれているのには少し驚くけどな……

オレは一樹から視線をそらしてまた歩き始めた。

詩織が小走りでオレの隣に並ぶ。

そしていきなりオレに向かって笑いかけてきた。

「何??」

何も言わずにオレ見て笑われても…

「いえ。響くんって本当にきれいだなって思って」

詩織は笑顔で言った。

思わず顔が熱くなる。

だから、なんでいつもそんなにストレートに言うんだよ…！！

「いきなり…なんだそれ…」

詩織はオレを見てくすっと笑った。

そして少し頬を染めて言う。

「ねぇ、響くん。私、響くんが大好きですよ？」

顔がさらに熱くなる。

だから……

なんでもない時にそんな風に言われてもだな……！！

……

「…オレも」

オレは小さな声で言って、うつむいた。

ダメだ…

オレってなんで一言言うだけでこんなに恥ずかしいと思ってしまう

んだろう…

…まぁ、いいか。

そう思い、オレは小さく微笑んだ。

詩織と過ごす幸せな時間。

オレはそれに夢中になりすぎて、あの転校生のことなんてすっかり忘れていた。

オレは何も知らなかったんだ。

この時こそが、オレが素直に詩織を好きでいられる最後の時間だったなんて…

★２４話　新しいクラス★響ｓｉｄｅ（後書き）

やっと考えてた話のところまできました！
そしてこれからしばらく響ｓｉｄｅはなくなります（―｜―；）
響ｓｉｄｅも書いてたら、謎（？）も何もなくなってしまいますので…
ということで、しばらくは詩織ｓｉｄｅだけになると思います！（（多分

☆25話　隠し事☆詩織ｓｉｄｅ

「ど、どうしたんですか…！？一樹クン……」

始業式の次の日。

私は一樹クンを見て絶句した。

「んー…ちょっといろいろありましてね」

そう言って笑う一樹クン。

「大丈夫じゃないですよ…すっごいケガしてるじゃないですか……」

一樹クンの顔や手足にはたくさんの絆創膏やシップが貼られていた。

どうみても大ケガです……

「大丈夫ですって！心配しないでください。じゃ、オレ彼女待たせてるんで」

一樹クンはそう言って生徒玄関前で待っていた女の子の方に走っていった。

だけどやっぱり、その走り方はぎこちない。

一樹クン、何があったんでしょうか…？？

私はぼんやりと思いながら隣にいる響くんを見た。

響くんは険しい顔で一樹クンの後ろ姿を見送っている。

「一樹クン…昨日何があったんですか??」

もしかしたら響くんなら知ってるかもしれない。

そう思って私は響くんに尋ねてみた。

響くんは私を見て、曖昧に笑う。

「ん…ちょっとな…」

曖昧な返事。

そんなんじゃ分からないですよ…

私はなんとなく、響くんと一樹クンが何かを隠している気がした。

「ちょっとじゃないですよ…。響くん、何があったか知っているんでしょう?」

「……大したことじゃないから」

大したことじゃないって…

「一樹クンがあんな大ケガしているんですよ?十分に大したことですよ!」

響くんは何も言わず、ただ私を見つめる。

本当に、言ってくれるつもりはないようです…

そこまで私に言えないことって…

何なんでしょうか…??

私に言えないほど、大切なことなんですか…??

なんとなく、響くんに隠し事をされていることが、自分が信用してもらえていないようで悲しかった。

「響くん…どうして私には教えてくれないんですか…??そんなに、私って信用ないですか?」

私は少しうつむきながらそう聞いてみた。

「違う…けど、言えないんだ」

響くんは小さな声で言った。

そして突然私を抱きしめる。

驚いて、体が固まった。

顔が一気に熱くなる。

「ひ、響くん…??」

そこは朝、丁度登校してくる生徒が集まる校門前。

こ、こんなところで抱きしめられたら…

校門を通る人の視線が痛い。

顔がさらに熱くなる。

は、恥ずかしいです……

だけど響くんはお構いなしに私を強く抱きしめた。

そして私の耳元でつぶやくように言った。

「…大丈夫だ。おまえは…オレが守るから」

突然の言葉に心臓が強く鳴る。

だけど、うれしいという気持ちよりも、おかしいと思う気持ちの方が大きかった。

いつもの響くんなら…

人前でこんなこと絶対しないし、こんなこと絶対に言わない……

もしかして、その言葉は響くんのしている隠し事と何か関係があるんですか??

隠し事ってなんですか…??

どうして私には教えてくれないんですか…??

私、うれしいはずのことを言われてるのに…

なぜか悲しいです…

私はそんな気持ちを隠すように、響くんの背中に手をまわした。

その日の放課後。

いつもの帰り道を響くんと並んで歩く。

響くんはやっぱりいつもと様子が違っていた。

険しい顔で、妙に辺りをキョロキョロと見まわしている。

私はふと、朝響くんに言われたことを思い出した。

『…大丈夫だ。おまえは…オレが守るから』

…どうして、響くんは突然そんなこと言ったんでしょうか??

もしかして、私が危ない目にあうような心当たりがあるから??

でも、それをどうして私に言ってくれないんしょうか…??

私は無意識にじっと響くんを見ていた。

響くんはそんな私に気がついて、優しく微笑む。

「どうかしたか??」

その笑顔が作られた物に思えて、なんとなく悲しかった。

「響くん、どうしてさっきからそんなにキョロキョロとしているんですか?何か探し物でも??」

私が尋ねてみると、響くんは少し表情を変えた。

だけどまた、作った笑顔に戻る。

「いや…別に……」

突然響くんが大きく目を見開いた。

??

どうしたんでしょうか…??

不思議に思い、響くんの視線の先を見る。

すると…

「え…??」

すぐ目の前に大きな木の棒が私に向かって倒れ掛かってきた。

ぶつかる……!!

そう思った時。

「詩織！」

響くんが勢いよく私の手を引いた。

私は響くんの胸に倒れこむ。

すぐ後ろで木材が地面にぶつかる大きな音がした。

それを見て思わず蒼白する。

も、もし…

響くんが私の手を引いてくれなかったら…

私は、あの木材の下敷きに……

「大丈夫か！？詩織！！」

「ひ、響くん……」

見上げると、響くんが蒼白して私を見ていた。

「だ、大丈夫ですけど…驚きました…」

私はそばの工事現場を見た。

多分、ここから木材が落ちてきたんだと思う。

もう少しで人に被害があったかもしれないのに、工事現場の人達は謝りもしようとはしない。

「もう…あの工事現場、いったいどうなっているんでしょうか！？」

もう少しで私、下敷きになるところだったんですよ！？

謝るくらいしたっていいじゃないですか！

「そうだな…」

響くんはきっと工事現場の方を睨んで、そして突然目を見開いた。

「…どうしたんですか？？」

不思議に思って尋ねてみると、響くんはまた作った笑顔を私に向けた。

「…別に。…大丈夫なら早く帰ろうか」

「は、はい…」

私は怪訝に思いながらも、響くんが一瞬見せた険しい表情にとまどって私はとりあえずうなずいた。

次の日の休み時間。

私のクラスに、突然響くんがきた。

どうしたんでしょうか…??

昼休みと放課後に会う約束ですのに…

休み時間にまできてくださるなんて…

まぁ、私はうれしいですけどね♪

「響くん!どうしたんですか??」

「…悪い。すぐにすむから…ちょっときてもらえるか??」

なぜか響くんは真剣な顔でそう言った。

「??は、はい…」

不思議に思いながらも、響くんについていく。

響くんはあまり人の気配のない廊下で止まった。

しばらく沈黙が続く。

私は怪訝に思いながらもまわりを見回した。

こんなところで…一体何をしたいんでしょうか??

そう思いながら響くんの言葉を待っていると、やっと響くんが口を開いた。

「詩織。…オレ達、別れよう」

「…えっ??」

突然の衝撃的な言葉に、私は耳を疑った。

「今…なんて…??」

「だから、別れようって」

響くんは少し声のボリュームをあげてはっきりと言った。

え……??

別れようだなんて…

そんなの、嘘ですよね??

…そうですよ、きっと冗談ですよ!

響くんは冗談がヘタですね!

「ひ、響くん!冗談はやめてくださいよ!そんなの私ひっかからな
「冗談じゃない」

響くんは私の言葉を遮るように言った。

「本気で言ってるんだ」

真剣な声。

冗談なんかじゃない。

響くんは本気で私と別れたいと思っている。

じわっと瞳に温かいものがあふれた。

瞬きすると、それが頬を伝って落ちてくる。

「そんな…突然、どうしてですか…??」

だって、昨日まではあんなに優しかったじゃないですか…

私を抱きしめてくれたじゃないですか…

それなのに…

なんで突然……

響くんは少し言葉をつまらせ、そしてはっきりと言った。

「おまえに飽きたんだよ。一年近く付き合ってるんだぞ?飽きるに決まってるだろ?」

ズキッ

胸に鋭い痛みが走った。

飽きた……??

そんな、理由なんですか……？？

響くんにとっての私って…

そんな理由で簡単に別れられるようなものだったんですか……？？

……そんな…ひどい…です……！！

涙が次から次へとあふれだして止まらない。

でも…

たとえ響くんの気持ちがそんな小さなものだったのだとしても…

「嫌です…！！別れたくなんかありません！！」

私は響くんに訴えるように言った。

私はまだ響くんが好きなんです…！！

別れるなんて…

そんなの、絶対嫌です…！！

響くんは顔をしかめると、冷たく言い放った。

「…無理だよ。オレ、新しく好きな奴できたから」

「え…？？」

私は言葉を失った。

好きな奴って……

響くんが…

私以外の女の子を……??

休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴った。

響くんは何も言えない私の隣を平然と通り過ぎていく。

私も…

はやく、教室に戻らないと……

授業に遅れてしまいます……

だけど、私はそこから動けなかった。

代わりにその場に崩れ落ちる。

響くんは、もう他の女の子を好きになってしまった。

だから私は別れなくちゃいけないんですか??

そして、響くんはその新しい女の子とお付き合いするんですか??

その女の子の言動に、頬を染めるんですか??

その女の子に、優しい表情を向けるんですか??

その女の子に、優しい笑顔を向けるんですか??

響くんは…

違う女の子のものになってしまうんですか……??

そして私はそれを見ているだけしかできない……

ただ、響くんが他の女の子に恋しているのを見ているだけ…

「嫌…嫌…いやぁ……!!」

私の必死に絞り出した声は、誰もいない廊下に響いて、消えた。

☆２５話　隠し事☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

別れちゃいました……
でもあんまり表現がうまくないです…
それと話が突然変わりすぎです…（―＿―；）

☆２６話　現実☆詩織ｓｉｄｅ

昨日、私は響くんにふられてしまった。

悲しくて、信じられなくて、私は昨日、一晩中泣き明かした。

そして涙も枯れたころ…

私は思ったんです。

どんなに悲しくても、響くんの心が変わってしまったことはまぎれもない現実。

それなのに、私がいつまでも響くんのことを思っていても、響くんの迷惑になるだけ。

昨日はあんなに冷たかったけど…

きっと優しい響くんのことです。

私がずっと響くんのことを好きなままでいたら、響くんはまっすぐに新しい女の子を好きになれない。

私は響くんの恋の邪魔なんてしたくない。

響くんが他の誰かを好きになるなんて…

本当はすごく嫌です。

だけど、響くんにはずっと笑顔でいて欲しい。

困らせるなんて…そんなの、嫌。

だから…

私は素直に現実を受け入れて、響くんへの気持ちも忘れます。

そうすれば……

響くんの迷惑になんか、なりませんよね??

次の日。

私はいつものように学校に行った。

できるだけ普段と変わらないように。

響くんに会っても、普通でいられるように。

普通の友達として、響くんに笑顔を向けることができるように。

だけどその日、私は響くんに会うことはなかった。

笹川サンによると、どうやら響くんは学校を休んでいるらしい。

風邪でもひかれたのでしょうか…??

もしかして、またお母さんとお父さんがいない状態だったら……

どうしても、すごく心配になってしまう。

「詩織ちゃん、今日お見舞い行ってあげたらー?? 滝沢クンもきっと喜ぶよ♪」

笹川サンがからかうように言った。

そうですね…

お見舞い…行きましょうか…

そう思ったところで、はっと気がつき首をふった。

そうだ…

私はもう、響くんの彼女じゃないんですから…

そんなことしても、ただの迷惑です……

「いえ。行きませんよ。…私達、昨日別れたんです」

私が苦笑いで言うと、笹川サンは大きく目を見開いた。

「え…!? そうなの!?」

「はい。ふられちゃいました」

できるだけ、明るく言うように努める。

「そっか……。なんか残念だな。私、ずっと詩織ちゃん達って理想の恋人だなぁーって思ってたのに…」

笹川サンは少しうつむいて、ぱっと顔をあげた。

そしてにっこりと私に笑顔を向ける。

「まぁ、大丈夫だよ！詩織ちゃんだったらきっと新しい人見つけられるから！」

「…そうですよね！ありがとうございます！」

なんとなく、笹川サンに勇気づけられた気がした。

…不思議です。

笹川サンって、つい前までは響くんのことが好きで、私達の邪魔をしてた感じだったのに…

今じゃ、私を応援してくれている。

笹川サンはもう、私のお友達になってくださっているんですね。

私はうれしくて、笑顔になれた。

昼休み。

私は優香ちゃんと楓ちゃんにお昼を一緒にしてもらった。

「どうしたの？詩織。いつも滝沢クンとご飯してるんじゃないのー？？」

優香ちゃんが驚いたように言った。

「いえ。…昨日、響くんにふられちゃいましたので」

私が笑顔で言うと、優香ちゃんと楓ちゃんは同時に大きく目を見開いた。

「えぇ！？なんで！？」

「響くんに新しく好きな人ができたそうなんです」

私がそう言うと、楓ちゃんは怒ったような表情をした。

「何それ！？そんなの勝手すぎるよ！ちょっとかっこいいからって調子のってるんじゃないの！？」

楓ちゃんが怒ったところなんてめったに見ないので、驚いてしまう。

だけど、それだけ私のことを思ってくれているんだと思うとうれしくなった。

「いいんです。私も早く新しい人を見つければいいだけですから」

私はそう言って笑顔を作った。

「そう…？？でも…大丈夫？詩織？？」

優香ちゃんが心配そうにそう言ってくれる。

「大丈夫ですよ！私、ふられちゃったくらいでそんなに落ち込むほど弱くなんかありません！」

そう言って強がってみせる。

すると優香ちゃんと楓ちゃんはにこっと笑った。

「…うん！そうだよね！よし、それじゃ早く新しい男作って滝沢クンを見返してあげよう！」

「そうだよ！詩織ちゃん、がんばれ！！」

「はい！」

優香ちゃんと楓ちゃんに励まされて、少し勇気がでる。

本当に、友達って大切なんですね…！！

笹川サンが…優香ちゃんと楓ちゃんが…

友達がいて、本当に良かった。

私はあらためて、友達の大切さを実感したような気がした。

そして放課後。

帰ろうとする私に一樹クンがかけよってきた。

「望月センパイ！」

「一樹クン？？どうしたんですか？？」

一樹クンは深刻そうな顔をしていた。

急いでかけよってきたらしく、息を切らしながらに尋ねる。

「あの…兄ちゃん、知りませんか？？」

「えっ？？」

響くんですか…？？

「えっと…知りませんけど…」

「…そうですか」

一樹くんは小さなため息をついてうつむいた。

「響くんがどうかしたんですか？？」

私が尋ねてみると、一樹クンは目を伏せて、ためらいがちに言った。

「実は…兄ちゃんが昨日から帰ってきていないんです。……望月センパイなら、何か知っているかもしれないと思って」

ズキッ…

少しだけ胸がしめつけられる。

私は何も知らない……

だって、もう響くんの彼女じゃないから。

私はその悲しい気持ちを隠すように笑顔を作った。

「すいません。…私、昨日響くんにふられちゃったんですよね！だから…昨日は響くんとお話していないので……」

「え…？？」

一樹クンは大きく目を見開いた。

「そ、そうなんですか…えっと…すいません…」

申し訳なさそうに謝る一樹クン。

私はそれを見て、できるだけ明るい笑顔を一樹クンに向けた。

「謝らなくてもいいですよ。私、そこまで落ち込んでいませんし！」

そうです。

落ち込んでなんかいません。

だって私は大切なお友達に励まされて、もう立ち直っていますから。

「全然気にしてなんかいません。もう、響くんはただのお友達ですから…」

自分に言い聞かせるように言うと、不意に体が何かに包まれた。

「一樹…クン…??」

なぜか、私は一樹クンに抱きしめられていた。

いきなり…

どうして……??

「望月センパイ…無理して、笑わなくてもいいですよ??」

優しい声。

それは、響くんの声に似ていた。

思わず、涙があふれる。

だけどそれを必死でこらえた。

「む、無理なんかしていませんよ?私は…別に……響くんのこと…!!」

やっぱり涙がおさえられない。

次から次へとあふれだして止まらない。

だって…だって…

無理してなくちゃ……

笑っていなくちゃ……

こんな悲しい現実、たえられない……！！

涙と一緒に、我慢していた気持ちがあふれだした。

「…私、本当は響くんと別れたくなんかないですよ……！！でも、我慢しなくちゃ、響くんを忘れなくっちゃ…！！そうしないと、ダメなんですよ…！！」

響くんに迷惑かけちゃいけないのに…！！

響くんを忘れなくちゃいけないのに…！！

どうしても、気持ちだけは変えられないんです……！！

だって…

響くんと過ごした愛おしい日々を忘れられるはずがないじゃないですか……！！

一樹クンは優しく私を抱きしめていてくれた。

「…大丈夫ですよ。我慢なんてしなくていいです」

私はしばらく一樹クンの胸の中で泣いていた。

そしてそろそろ落ち着いてきたころ、一樹クンは私を腕の中から解

放する。

「……ごめんなさい。ありがとうございます」

私がお礼を言うと、一樹クンはにっこりと笑った。

「ええ。…それより」

一樹クンは突然真剣な顔をして、まっすぐに私の目を見た。

響くんと同じ瞳が、私の瞳をとらえる。

心臓の鼓動が強くなる。

「望月センパイ。…オレと、付き合いませんか??」

「……え??」

そんな…

突然言われましても…

そういえば、初めて会った時にも同じようなこと言われた気がします。

その時は冗談でしたし…

今回もきっと冗談かも……

だけど、一樹クンの目は以前の時とあきらかに違っていた。

本当に真剣な目。

そこから一樹クンの気持ちが伝わってくるよう。

「でも…私は…響くんが…」

きっと、私は一樹クンとお付き合いしても、響くんのことを忘れることなんてできない。

「いいんです。兄ちゃんのことを思ったままでも」

……！！

一樹クンの真剣な声に、思わず心が揺れ動いた。

…だ、だけど…

「たしか、一樹クンには彼女がいたんじゃ…」

「あんなの、ただの遊びです。望月センパイがＯＫしてくれるのなら、すぐに別れます」

あんなのって…

彼女のこと、そんな風に言えるんですか…！？

…そうですよ。

一樹クンは女好きだって響くんが言ってましたし…

どうせ私のこともただの遊びかもしれない…

……だけど……

「…それなら…お願いします」

私は小さな声で言った。

一樹クンは響くんと本当にそっくりなんです。

そんな人の告白を、断れるはずがない。

「本当ですか!?ありがとうございます!!」

うれしそうに笑う一樹クン。

本当に、響くんにそっくりなきれいな笑顔。

ああ、私は本当に悪い人間です……。

きっと、一樹クンのことを利用してしまう……。

一樹クンを響くんの代わりにしてしまう……。

でも、許してください。

やっぱり、私はどうしても響くんを忘れることなんてできないんです……。

☆２６話　現実☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

サブタイトルがよくわからない…
思いつきませんでした＞ｍ（＿）ｍ＜

☆27話　決意☆詩織ｓｉｄｅ

一樹クンとお付き合いを始めてから2カ月程が経ちました。

それでも私の気持ちは変わらない。

私はずっと、響くんのことが好きなまま。

そしてその響くんは……

不思議なことに、あの日から一度も学校に来ることはなく、家に帰ってもいないらしい。

どうしても気になってしまうけど、できるだけ考えないようにする。

だって、気にしたってどうすることもできないのだから。

きっと、私には関係のない理由があるのだろうから。

一樹クンもすごく心配しているようだったけど、私達の間でその話題がでることはなかった。

だんだんと、響くんの存在がおぼろげになってくる。

響くんを忘れられるかもしれない。

そう思ったこともあったけれど…

一樹クンの顔を見るたびに、どうしても響くんに対する気持ちがあ

ふれだす。

一樹クンは一樹クンで、響くんとは別の人間なのに……

私はどうしても、一樹クンに響くんを重ねてしまう。

だけど、一樹クンはそれでもいいと言ってくれた。

だから私は、一樹クンに甘えてしまう……

昼休み。

いつも屋上で響くんと過ごしていた時間。

だけど、今では一樹クンと過ごす時間……

「そのお弁当、望月センパイが自分で作ってるんですか？」

不意に一樹クンが私のお弁当をのぞきこんで言った。

「はい。お母さんは仕事が忙しいので……」

いつも、私が起きる時間にはお母さんは仕事にいってしまっているんですよねー……

「すごく上手ですね！そうだ、今度オレにも作ってきてくださいよ！」

「いいですよ。私なんかのでよければ」

私がそう言うと、一樹クンはうれしそうに笑った。

「ありがとうございます！本当に望月センパイ、大好きです！」

突然一樹クンに抱きしめられた。

いきなりのことに驚いて顔が熱くなる。

「か、一樹クン！いきなり抱きつかないでください！！」

「どうしてですかー？？オレは望月センパイはオレのものなんだから、何しようと勝手でしょう？？」

そう意地悪に言う一樹クン。

初めは積極的な一樹クンに翻弄されていたけど、今では少し慣れてきた。

「そ、そうですけど……」

私は恥ずかしくって、小さな声で言った。

「望月センパイ、照れてるんですか？？…可愛いですね」

そっと耳元で囁かれる。

響くんと同じ声。

頭に血がのぼりすぎて、くらくらとする。

一樹クンは不意に私の耳たぶにキスした。

そして軽く甘がみする。

「か、一樹クン……」

一樹クンは肩を抱いて私の真っ赤になった顔を見ると、にっと笑った。

「望月センパイ、顔リンゴみたいですよ??」

「だって……」

私が目を伏せて言うと、突然キスされた。

「ん……!!」

一樹クンは角度を変えて何度もキスを繰り返す。

熱で、頭がぼんやりとする。

……目を開くと、うつるのは響くんの顔。

……響くん……

そう思った瞬間から、一樹クンは響くんになる。

私はぎゅっと強く一樹クンを抱きしめ、自分からキスした。

一樹クンは少し驚いたように目をあけて、そして私を受け入れた。

気持ちいい……

私は夢中になって、何度も一樹クンにキスした。

息をするために唇を離したとき、熱くなった息と共に、愛しい名前をつぶやく。

「響…くん……」

一樹クンは閉じていた目を大きく見開かせた。

そして突然私から離れる。

「……オレは、兄ちゃんじゃありません」

悲しそうな表情。

悲痛そうな声。

熱でぼんやりとしていた頭に、冷水を浴びせられたような気がした。

「す、すいません……！！」

私ったら……

なんてことを……

一樹くんはそっと私の髪に触れた。

「この髪にも、兄ちゃんは触れていたんですね……」

ぼそりとつぶやくと、私の髪にキスをした。

「全部、オレだけのものにしたいのに……」

一樹クンは悔しそうな顔で、ぎゅっと拳を握りしめた。

「一樹クン……」

一樹クンがそこまで私のことを思っていてくれたなんて知らなくて、そしてその気持ちを利用しているということに大きな罪悪感を感じる。

「オレ、望月センパイと付き合いたいって言った時、兄ちゃんのこと想ったままでもいいって言いましたよね？」

私は小さく首を縦に振った。

「でも、やっぱり嫌です。望月センパイにはオレだけを想ってほしい……」

その言葉に、思わず心臓が高鳴った。

たしかに響くんじゃなくて、一樹クンに対して心臓が強く反応した。

「……そう思うのって、やっぱり我がままですよね？」

悲しげな、無理に作ったような笑顔。

その笑顔で、一樹クンの気持ちが痛いほど伝わってきて、私まで悲しくなった。

「…我がままなんかじゃありませんよ」

好きな人には、自分だけを想っていて欲しい。

そう思うのはあたりまえのことだから。

私だって…

響くんに対して、そう思っている。

だけど……

一樹クンはいつのまにか、こんなにも私のことを好きになってくれている。

初めのころには、いつでもまわりに女の子がいたのに…

今はいつ見ても、一樹クンのまわりに女の子はいない。

一樹クンはきっと、本気で私を好きと思ってくれている。

そして、私もその気持ちに答えたいと思った。

「……私、もう響くんのこと、忘れます」

一樹クンは大きく目を見開いた。

「え…??」

私はそっと一樹クンを抱きしめた。

「だから……安心してください。一樹クン……」

そう……

私が一樹クンを好きになれば、楽になれる。

私も一樹クンも、幸せになる。

だからもう、絶対に一樹クンに響くんを重ねたりなんかしません。

私は、一樹クンのことが好きになりたい。

その日の放課後。

私は帰り道に、美容室によった。

「どうしますか??」

「…肩につかない程度に、短くしてください」

店員さんにそうお願いする。

今までのばしていた長い髪が、どんどんと切り落とされていく。

私は鏡に映る自分を見て、その様子をぼんやりと見つめていた。

今日決めたことを、少しでも形にしたい。

…今まで、何度も響くんに触れられてきた髪。

それを切り落とすことで、響くんへの気持ちも断ち切るつもりで……

気持ちが揺らいでも、鏡を見たらまた、強く決意できるように……

もう、響くんのことが好きでたまらなかった自分はいらない。

今日から、私は一樹クンのことが好きになる。

私は短くなった髪を見て、もう一度強くそう思った。

☆27話　決意☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

ええと……

詩織の髪を短くしたかったただけです！

すいません＞ｍ（＿＿）ｍ＜！！

☆２８話　揺らぐ気持ち☆詩織ｓｉｄｅ

私は一樹クンのことが好きになる。

私はそれを、昨日心に誓った。

もう、響くんのことは忘れます。

そうすれば……

誰も、悲しまずにすむと思うから。

そう…

私自身も……

「はい、一樹クン。お弁当作ってきましたよ！」

私がお弁当を手渡すと、一樹クンはうれしそうに受け取ってくれた。

「ありがとうございます！ちゃんと覚えていてくれたんですね！」

一樹クンはお弁当を開いて軽い歓声をあげた。

「おー、うまそうです！」

「そうですか?うまくできたか分かりませんが…一度食べてみてください」

私がそう言っても一樹クンは食べようとせず、なぜかにこにこと私の方を見てきた。

…??

「えっと…食べないんですか??」

私は不思議に思って尋ねてみた。

「望月センパイ、食べさせてください」

一樹クンはそう言って口をあける。

「えっ!?」

私は驚いて、目を大きく開けた。

ほ、本当に一樹クンはなんでも素直に言いますねー…

「い、いいですよ」

私はお弁当のエビフライをお箸でつかんで一樹クンの口に運んだ。

「えっと…おいしいですか??」

私が尋ねてみると、一樹クンはにっと笑った。

「すっげぇうまいです！」

無邪気な笑顔。

一年しか変わらないのに、私よりずっと小さな子みたい。

そう思い、思わず私はくすっと小さな笑みをこぼした。

「そういえば、望月センパイ髪切ったんですね」

お弁当を食べ終えた一樹クンは、ふと私を見て言った。

「ええ。ちゃんと響くんのことを忘れようと思って…。その決意みたいなものです」

「決…意…？？」

一樹クンはきょとんとしてつぶやいた。

なんだか自分がおかしなことを言ったような気持ちになり、少し慌ててしまう。

「あ、その！すいません！私ったら大げさに言ってしま……」

驚いて、私は途中で言葉を止めた。

一樹クンがぎゅっと強く私を抱きしめている。

「うれしいです…！！」

本当にうれしそうな声色。

胸がドキドキとする。

一樹クンはそっと私の髪に触れた。

「髪、すっごい似合ってます。…これからは誰にも触れさせませんから」

一樹クンはそう言って、愛おしそうに私の髪を撫でる。

「…はい。誰にも触れさせなんかしませんよ」

私は笑顔でそう言って一樹クンの背中に手をまわした。

一樹クンはさらに強く私を抱きしめると、うれしそうにつぶやいた。

「望月センパイはオレだけのものです…。絶対に、離しません」

顔が熱くなる。

分かりやすい一樹クンの独占欲。

それがとてもうれしかった。

そしてこの時本気で思った。

…きっと、私は一樹クンのことが好きになれる。

だって、私はだんだんと一樹クンにひかれていっているから。

そう思っていたのに……

あなたが、また私の気持ちを変えてしまう……

その日の放課後。

私は校門でぼんやりと一樹クンがくるのを待っていた。

一樹クン…遅いですねー……

さっき一年生の人達も帰っていったというのに…

いったい何をしているんでしょうか??

そう思ってため息をついたとき……

「詩織…??」

不意に名前を呼ばれた。

一樹クン?

……あれ?

一樹クンって私のこと、名前で呼んでいましたっけ??

不思議に思いながら振り返る。

そして思わず目を大きく見開いた。

「……え??」

そこに立っていたのは一樹クンによく似た男の子。

だけど、一樹クンとは違う、黒い髪。

一樹クンよりも少し大人びた、きれいな顔。

きっとした鋭い目。

大好きで、だけど忘れてしまいたくって仕方がない人。

「ひ…びき…くん…??」

信じられなくて、私は目をこすった。

夢……じゃ、ないんですか……??

だけど、たしかに目の前に響くんがいる。

こらえていた気持ちがあふれだしそうになった。

忘れようとしていた感情が涙になってあふれそうだった。

だけど、私は必死で笑顔を作る。

「ひさしぶり…ですね」

「……そうだな」

響くんも小さく微笑む。

一樹クンと少し違う、本物の響くんの声。

「いままでどうして学校にも、家にも帰らなかったんですか？一樹クン、心配していましたよ？」

私が尋ねると、響くんはうつむいた。

「悪い、けど…言えない」

少し悲しそうな表情。

だけど、顔をあげたときにはもうその表情は消えていた。

「髪、切ったんだな」

代わりに、私を見て作り物の笑顔を張り付ける。

「…ええ」

気まずい沈黙が流れる。

私は無意識に自分の髪に触れた。

そしてふと思い出す。

この髪は……

ちゃんと一樹クンのことを好きになるために切ったんでした……

それなら、これは響くんにきっちりと私の気持ちを伝えるいい機会じゃないですか。

「滝沢サン」

私は沈黙を破り、響くんの名前を呼んだ。

響くんは驚いたように大きく目を見開く。

「私、今一樹クンとお付き合いしているんです」

響くんは少し黙って、小さな笑顔を作った。

「…知ってる。……彼女から、聞いた」

響くんの口からでた『彼女』という言葉で、少しだけ悲しい気持ちになる。

そうですか…

響くんは、もう新しい好きな人とお付き合いしているんですね……

あふれだしそうになる涙を必死にこらえて、私は笑顔を作った。

「だから……私のことは気を使わず、安心してその人に恋してください……！！」

響くんは少し目を見開いた。

そして小さく微笑む。

「ああ、ありがとう。…望月」

響くんは私と同じように、私の名前を名字で呼んだ。

ああ、これで本当に、私達の関係は終わるんですね……

そう思った瞬間、こらえていた涙があふれだした。

我慢しようとしているのに、次から次へとあふれだして止まらない。

響くんは驚いたように私を見た。

私は慌てて笑顔を張り付ける。

「ちがっ…その……」

涙で言葉が続かない。

どうしましょう……

響くんに気を使わせたくなんかないのに……

こんなんじゃ、気を使わせてしまう……

必死で涙を止めようとしていると、突然強く抱きしめられた。

驚いて、あふれる涙が止まる。

どうして……??

どうして私は今……

響くんに、抱きしめられているんですか…??

響くんには新しく彼女がいるんでしょう…??

響くんは、その人のことが好きなんでしょう…??

それなのに…

どうして私なんかを抱きしめているんですか…??

「オレ…本当はまだ…!!」

響くんは痛いくらいに私を強く抱きしめて、悲痛そうな声で言った。

ドキッ……

心臓が少しだけ強くなり、ほんの小さな期待を抱く。

もしかして……

いえ、だけど響くんは他の人が好きだと……

「にい…ちゃん…??」

不意に、後ろから驚いたような声が聞こえた。

この声は……

「一樹……」

響くんはぽつりとつぶやいた。

「…何してるんだよ!?望月センパイに触れるな!!」

後ろから一樹くんが怒鳴る声が聞こえた。

その声とともに、私は響くんの腕から解放される。

一樹クンは私を後ろに隠すように前にでた。

「今までどこで何してたんだよ!?家にも帰ってこずに……!!オレや母さん達がどれだけ心配してたか分かってんのか!?」

「悪い……」

響くんはうつむいて小さくつぶやいた。

一樹クンはそんな響くんの頬を思い切り殴る。

「か、一樹クン…!!」

私は驚いて間にはいろうとした。

だけど一樹クンに強く睨まれて、何も言えなかった。

「謝ったって許すわけないだろ!?しかも……!!」

一樹クンはぎゅっと拳を握りしめた。

そして震える声で言う。

「おまえは…望月センパイをふったんだろ……!?それなのに、なんで抱きしめたりするんだよ…!?」

響くんは何も言わなかった。

ただ、うつむいて地面を見つめている。

「せっかく望月センパイはおまえのこと忘れかけてたのに……!なんでまた思い出させるようなことするんだよ……!!?」

悔しそうに震える声。

一樹クンの気持ちが痛いほど伝わってくる。

そして、もうその気持ちに答えられそうにない自分がいることに気がついた。

まだ体に残っている、響くんのぬくもり。

ごめんなさい…

やっぱり、私は響くんのことを忘れることなんかできない……

少しの沈黙のあと、響くんが口を開いた。

「オレは……「あら、滝沢クン。こんなところにいたの？？」

響くんの言葉を遮るように、女の子の声が聞こえた。

響くんは驚いたように振り返る。

私もその声の方を見た。

そこにいたのは、髪の長いきれいな女の子。

あれ？？

この子ってどこかで見たことがあります……

「桜井……！！」

響くんは少し怯えたような声でその女の子の名前を呼ぶ。

桜井……？？

それって…

たしか……

そして気がついた。

この女の子は……

響くんのクラスに入ってきた転校生……！！

桜井サンは私と一樹クンに軽く頭を下げた。

そしてにっと響くんに笑いかける。

「探していたのよ。さぁ、早く行きましょう」

「あ、ああ……」

響くんは女の子にうながされて、そのあとについていく。

「待てよ！まだ話は終わってない！！」

一樹クンは慌てたように響くんを呼びとめた。

響くんは少しだけ足を止めて振り返ると、小さな声で言った。

「一樹、……詩織、…ごめん」

そして悲しそうに笑った。

その悲しげな声に、笑顔に、なぜか胸がしめつけられる。

響くんはすぐに私達に背中を向け、校門の前に止まっていた黒い車に乗り込んでしまった。

ゆっくりと、響くんをのせた車が動き出す。

私達はその車が消えていくのをただ見ているだけしかできなかった。

「…くそっ…！！」

車が私達の前から消えたあと、一樹クンがポツリとつぶやいた。

私はただ、ぼんやりともう見えない車を見送っていた。

あの響くんの表情が脳裏にやきついてはなれない。

響くんの新しく好きになった人って……

きっと、桜井サンのことですよね？？

それなのに、どうしてあんなに怯えていたんですか…？？

私は響くんに幸せになってもらいたくて……

ただ響くんに笑っていて欲しくて……

必死で響くんのことを忘れようとしていたのに……

どうして、あんな風に悲しそうに笑うんですか？？

もしかしたら、ただ私達に申し訳ないことをしたと思っていただけなのかもしれない。

そこまで、深い理由はなかったのかもしれない。

そうであって欲しいと思う。

だけど……

どうしても、そうは思えない。

抱きしめられたときに、響くんが言いかけたこと。

最近学校にもこないで、家にも全く帰っていない理由。

そして、あの悲しそうな笑顔。

もしかして……

何か、深い理由があるんですか??

それを、響くんは誰にも言えずに1人でかかえこんでいるんですか??

1人で…

傷ついているんですか…??

「響くん……」

頬に涙が伝った。

分からないです……

私には、もしあなたが苦しんでいるんだとしても何もできない。

あなたのことが何も分からない……

ねぇ、教えてください……

私は、あなたのことを好きでいていいんですか……？？

☆２８話　揺らぐ気持ち☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

すごく重くなってしまった…（汗
ここまで重くするつもりはなかったのに……（－＿－；）

☆29話　戸惑い☆詩織ｓｉｄｅ

その日、私と一樹クンは何も話すことなく家路についた。

駅で別れるときに一樹クンは笑顔で手をふってくれましたけれど…

いつもの笑顔じゃない。

私に気をつかって作ってくれたような笑顔。

一樹クンをのせた電車が動き出した時にはもう、一樹クンの表情は険しくなっていた。

一樹クンも…

きっと響くんのことを考えているんでしょうね……

私はふと、窓ガラスにうつる自分の姿を見た。

響くんを忘れるためにきった髪。

一樹クンに、誰にも触れさせないって約束した。

だけど……

結局響くんに触れられてしまった。

そして…

私は結局、響くんを忘れることなんてできない。

きっと、私が響くんに抱きしめられているのを見たとき一樹クンは傷ついたんでしょうね。

それなのに……

一樹クンが傷ついていたというのに……

私はぎゅっと自分を抱きしめてみた。

響くんに抱きしめられた、あの感覚を思い出すように。

……私は響くんに抱きしめられて、正直うれしかったんですよ?

一樹クンが傷ついているそばで、私は喜んでいたんですよ??

こんな私が…

一樹クンのそばにいてもいいのでしょうか…??

やっぱり、一樹クンにはっきり伝えた方がいいのかもしれない……

私は響くんのことがまだ好きなんです、と。

もし、響くんが本当に私に飽きてしまっていたとしても……

私は響くんの力になりたい、と。

響くんのあの笑顔の理由が知りたいと……

ごめんなさい、一樹クン……

私、もうあなたのことを好きになることなんて無理です。

私はもう響くんのことしか考えられない……

次の日の昼休み。

昨日家で一晩悩み、私は自分の気持ちを一樹クンにはっきりと告げることにした。

「一樹クン、ちょっとお話があるんですけど…」

私が勇気を出して切り出すと、一樹クンはまるで昨日のことなど忘れたような笑顔を私に向ける。

「ん？何ですか？望月センパイ」

その笑顔に、一瞬ためらってしまう。

本当に言っていいのでしょうか……？？

言ってしまえば…

一樹クンを、傷つけてしまうだけ……

だけど心の中で大きく首をふる。

いえ、違います。

私は一樹クンのことを心配しているようで、そんな自分の気持ちに甘えようとしているだけ。

私はきっと響くんに似た一樹クンをまだ利用していたいだけ。

そんな自分、捨ててしまわないといけない。

それに、どうせ私の気持ちは変わらないのだから……

早く言ってしまわないと一樹クンのショックが大きくなってしまうかもしれない……

「一樹クン、私…やっぱり一樹クンとお付き合いできません」

一樹クンは大きく目を見開いた。

「…どうしてですか??」

そして唖然としたふうに言う。

「私は…やっぱり響くんが好きなんです。そんな気持ちのまま、一樹クンとお付き合いすることはできません……」

私は正直な気持ちを一樹クンに伝えた。

一樹クンは驚いたようで、しばらく固まる。

そして突然ふっと笑った。

「なんだ、そんな理由ですか」

「…えっ??」

そんな理由って…

私にとったら大きな理由だと思うんですけど…

「そんなの…望月センパイがずっと兄ちゃんのことを好きだってことくらい分かってますよ」

一樹クンはそう言って、私の頬に触れた。

「そんなの、オレが望月センパイに告白したときから分かってた。望月センパイが兄ちゃんのことを忘れて、オレのことを好きになるわけなんかないって」

「一樹クン…??」

私は驚いて、ぼんやりと一樹クンの表情を見つめていた。

なんだか、一樹クンがとても恐ろしい物に感じる。

だって…

一樹クンの表情はまったくの無表情だったから。

「だけど望月センパイが兄ちゃんのこと忘れるって言うから、どう

せ無理だろうと思いながらもあんたに無理させてた。もしかしたら本当にオレのこと好きになってくれるかもって」

一樹クンは無表情のまま、口角をあげて笑顔を作った。

「付き合えないって、そんなのオレが素直に聞くと思ってるのか？あんたはもう兄ちゃんの物じゃない。オレの物なんだ。あんたの意志なんて関係ない」

物…！？

意志なんて関係ないって…

一樹クンにとっての私って、ただの物だったんですか…！？

かっと頭に血がのぼり、私は思わず一樹クンの頬を思い切り叩いた。

一樹クンは驚いたように頬をおさえて私を見る。

私はそんな一樹クンを怒鳴りつけた。

「響くんは、私のことを【物】だなんて言いません！！！」

響くんは…

私のことを、ただの持ち物みたいに言ったことなんてないです……！！！

響くんは、少なくともほんの少し前までは私のことを本気で思ってくれていた…！

「……すいません」

一樹クンは少し目を伏せてぼそっと言った。

そしてじっと地面を見つめる。

「でも…オレ、どうしても望月センパイと別れたくなくて……」

少し震えた声。

まるで親に怒られた子供みたいに、じっと固まって動かない。

私は小さなため息をついて一樹クンの頭をなでた。

「…大丈夫ですよ。怒ってはいませんから」

慰めるようにつぶやく。

一樹クンはおそるおそるといった風に顔をあげた。

そしてじっと私を見て言う。

「…望月センパイはオレの初恋なんです」

「え…？？」

突然の予想もしていなかった言葉に私は驚いてポカンと一樹クンを見る。

あれ…??

一樹クンって、前にも彼女いたみたいですよね…??

よく女の子と一緒にいましたし…

それなのに…

初、恋…??

一樹クンは自嘲するように笑った。

「おかしいですか?でも、そうなんです」

一樹クンは視線を少し下におとした。

そして小さな声で話しだす。

「オレのまわりに集まってくる女なんて、みんなオレの顔目当ての奴ばっかりなんですよ。だから、オレも適当に顔で選んで遊んでた。オレもそれはそれなりで楽しかった。だからそんな女と付き合おうとしない兄ちゃんがずっとおかしいと思ってたんです」

私は無意識に一樹クンの顔を見た。

響くんと同じで、きれいな顔。

たしかに…

このきれいな顔を目当ての女の子はたくさんいるでしょうね…

そして響くんにも……

「だけど、兄ちゃんは高校に入って彼女ができた」

一樹クンはじっと私を見た。

「…私??」

一樹クンは小さくうなずく。

「あの兄ちゃんが付き合うなんてどんな女だろう、きっと相当良い女なんだろうなって思ってた。…それで、兄ちゃんの彼女は予想通りの良い女だった」

「そ、そんなことないですよ…」

一樹クンの言い方がなんとなく恥ずかしくて私は首を横に振った。

そんな私を見て、一樹クンはクッと笑う。

「良い女ですよ。そしてあなたが本気で兄ちゃんに恋してるのを見て驚いた。…ああ、こんな女もいるんだなって。その時からオレは望月センパイのことが気になり始めていたんです」

一樹クンは私に向かって微笑んだ。

「初め、望月センパイに付き合おうって言った時は別にそれほど好きだったわけじゃなかったんですよ?ただこんな女を自分の物にできたら楽しいだろなって思っただけ。…でも、いつの間にかオレは

あなたのことが好きになっていた」

一樹クンは突然私に抱きついた。

そして震えながら強く私を抱きしめる。

「…オレ、本当に望月センパイのことが好きなんです…！別れたくなんてありません…！！」

「一樹クン…」

ぎゅっと強く私を抱きしめる一樹クン。

それが、なんとなく響くんにふられたときの私に重なった。

こんなに一樹クンにすがられて…

それでも、お付き合いできないなんて…

私には、とても言えない…

私はそっと一樹クンの背中に手をまわした。

そして左手で一樹クンの髪をなでる。

「…ごめんなさい。やっぱり、お付き合いできないなんて言いません…」

「…え？？」

一樹クンは驚いたような声をだした。

「それじゃぁ…！！」

一樹クンの声が明るくなる。

私はにっこりと笑った。

「これからも、よろしくおねがいします」

「…ありがとうございます…！！」

本当にうれしそうな一樹クンの声。

その声を聞いて、少し感じる罪悪感。

…これで、いいんですか??

さっき一樹クンを傷つけないためにも一樹クンと別れないといけないと決めたばかりじゃないんですか??

私は響くんが好きなのに…

そんなままで一樹クンとお付き合いを続けるなんて……

だけど…

一樹クンはしがみつくように強く私を抱きしめる。

一樹クンの気持ちが伝わってくる。

私はやっぱり一樹クンをほおっておけない…

私は一樹クンを強く抱きしめ返しながら空を見上げた。

……響くん。

…こんなはっきりできない私でごめんなさい。

あなたは今頃どうしているんでしょうか??

やっぱり桜井サンと一緒にいるんですか??

そこで、あなたは笑っているんですか??

…理由はわからないけれど…

もし、あなたが辛い思いをしているのだとしたら…

きっと、私が助けてあげます。

もしあなたが戻ってきても私には一樹クンがいるから……

もう、前のような関係には戻れないかもしれません。

そう思うと悲しいですけれど…

でも私は友達という関係でもいい。

それでもあなたといたいです。

だから…

お願いですから、１人で無理はしないでください……

私は目を閉じて、心の中で強く祈った。

☆２９話　戸惑い☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

なぜか途中から一樹が語りだしてます。
どうしてでしょうか…??
なんとなく全体的に謎（＝意味不明）な話になってしまいました（―｜―；）

☆30話　急襲☆詩織side

「え？桜井サンのこと？？」

私は大きくうなずいた。

笹川サンは困ったように首をかしげる。

「んー…私もあんまり知らないんだよね…あんまり好きじゃないタイプだからかかわらないようにしてるんだ。でもどこかの財閥のお嬢様だそうだよ？」

「そのことは知っています…」

私は大きなため息をついた。

桜井サンがどこかの財閥のお嬢様だってことは私のクラスでも話題になりましたから…

それよりも私は桜井サンがどんな人かを知りたいんです。

…私は、あのときどうして響くんが桜井サンに怯えていたのかが知りたいんです。

「あっ！」

笹川サンは不意に手を叩いた。

「そういえば！始業式のとき、あの子が滝沢クンに告白してたよ！」

「えっ…??」

告白…ですか……

なるほど、桜井サンから告白されたんですね。

「それで、響くんはオッケーしたんですか…」

始業式の時…

あの時から響くんは桜井サンとお付き合いしてたんですか…

そんなこと全然知らないで響くんと一緒にいた私がバカみたいです…

そう思い落ち込んでいると、笹川サンは大きく首を振った。

「いや、オッケーはしてないよ??それどころか、はっきり無理って言ってたし」

え?

断ってくださっていたんですか??

ほんの少しだけ安心する。

だけどすぐに響くんが今桜井サンとお付き合いしているということを思い出した。

「だけど…現に響くんは桜井サンとお付き合いしているようですし

…」

「えっ!?そうだったの!?…ああ、だから詩織ちゃんと別れちゃったのか……」

私は小さくうなずく。

「でもたしかに…滝沢クンが学校にこなくなる前に少し桜井サンと話してるとこ見た気がする…」

「私がどうかしたんですか??」

突然隣で声がした。

声のした方を見て、私は息をのんだ。

「さく…ら…いサン…??」

桜井サンはにっこりと私に笑いかけた。

「たしか…あなたは、滝沢クンの前の彼女…でしたよね??」

『前の』という言葉に少しだけ胸が痛くなる。

だけど私はがんばって笑顔を作った。

「はい。望月詩織と言います」

多分桜井サンは私のことを知らないだろうから、私は軽く自己紹介をしてぺこりと頭を下げた。

「私は桜井千里。よろしくね」

優しそうな笑顔。

…あれ？

この人ってもしかしたら普通に優しい人なのかも…

「ねぇ、詩織さん。良かったら今日お昼ご一緒しません？私、あなたとお話してみたいと思っていたんですの」

えっと…

そんな風に思っていただいていたのはとても光栄なんですけれど……

私、お昼はいつも一樹クンと食べていますので……

……だけど、もしかしたら桜井サンに響くんの居場所を聞けるかもしれない。

「はい。いいですよ」

私はにっこりと桜井サンに笑いかけた。

一樹クンとはいつでも一緒に食べられますし…

一樹クンには申し訳ないですけど、私は今は何よりも響くんのことを知りたいんです。

桜井サンが私達から離れたあと、笹川サンが驚いたように言った。

「詩織ちゃん、何言ってるの…！？普通、自分の元彼の彼女となんか一緒にお昼ご飯食べたいとか思わないよ？？」

「で、ですけど…私、桜井サンに響くんのこと聞きたいですし…」

私がそう言うと、笹川サンはほんの少しの間のあとにこっと笑った。

「…まぁ、詩織ちゃんが良いって言ってるならいいんだけどね！」

と、そう言ってくれたことは言ってくれたんですけれど……

チャイムが鳴って私が自分のクラスに帰ろうとしたとき、不意に笹川サンがこっそりと言った。

「だけど、気をつけた方がいいよ。理由っていう理由はないんだけど…私、あの子嫌いだし」

「は、はぁ…」

あの子嫌いって…

あまり、理由になっていませんけど…

だけど、一応笹川サンも私のことを心配してくださっているんですものね。

でも桜井サンは優しそうですし、別に気をつけなければいけないことはないと思いますけれど…

「えっ!?今日昼飯、一緒に食べれないんですか!?」

「はい…その、実は桜井サンと食べることになりまして…」

桜井サンという名前のせいなのか、一樹クンの目つきが少しだけ変わった。

「桜井って…前に、兄ちゃんを連れてった人ですか??」

「はい…」

私は小さくうなずいた。

どうしましょう…

やっぱり、響くんがらみですし…

一樹クンはダメだって言うでしょうか…??

そんな心配をしながら一樹クンの返事を待っていると、予想外の言葉が返ってきた。

「…オレも、一緒に食べていいですか??」

「えっ…!?…どうしてですか??」

私が尋ねてみると、一樹クンは少し目を伏せて言った。

「…オレも、兄ちゃんのこと聞きたいから」

その言葉で、私は気がついた。

…そうですよね。

響くんは一樹クンのお兄さんですもの…

やっぱり、心配になりますよね…

「いいですか??」

もう一度一樹クンに尋ねられて、私はうなずいた。

「ええ、桜井サンにも言っておきます」

「ありがとうございます！」

一樹クンはそう言ってにっと私に笑いかけた。

だけど、ほんの少し影がさした笑顔。

一樹クンの気持ちに気付いてしまって、私は目を伏せた。

一樹クンはきっと、私が響くんのために行動しているのが快く思っていないんでしょうね…

ですけど、自分も響くんのことが心配だからそれを止めることができない…

だから、どうしようもないんですよね…

それを笑ってごまかしているんですよね…

そんな一樹クンが痛々しく思えて、一樹クンをこんな気持ちにさせている自分に罪悪感がわいてきた。

だけど、それを一樹クンと同じように笑顔で隠す。

ごめんなさい、一樹クン…

私は心の中で小さくつぶやいた。

そして昼休み。

いつものように一樹クンと屋上に行く。

少し遅れて、桜井サンがきた。

桜井サンは一樹クンもまじまじと見て、にっと笑った。

「やっぱり少し滝沢クンに似ていますのね」

「…どうも」

一樹クンは小さな微笑をうかべた。

だけどその目はじっと桜井サンを観察している。

「えっと…それじゃ、お昼にしましょうか！」

なんとなく気まずい空気が流れかけたので、私は慌てて座り込んでお弁当を開いた。

桜井サンも私の隣に座り込む。

だけど一樹クンは座ろうとせず、桜井サンを見下ろして冷たく言った。

「…あんた、望月センパイから兄ちゃんとったんだろ？よく望月センパイと昼飯食べようとか言えるな」

「か、一樹クン…」

そ、そんなこと言ったら桜井サンに悪いですよ……！！

私はオロオロしながら桜井サンを見た。

桜井サンは何も言わずじっと一樹クンを見ている。

一樹クンはそんな桜井サンに腹が立ったのか、怒ったように続けた。

「大体おまえ、兄ちゃんに何したんだよ！？なんで兄ちゃんは一度も学校にこず、家にも帰ってこないんだ！？おまえなら知ってるんだろ！？」

ちょうど私が桜井サンに聞こうとしていたこと。

気になって、じっと桜井サンの言葉を待つ。
桜井サンはしばらく黙って、不意ににっと笑った。
「滝沢クンは私の家にいますよ？」
私と一樹クンは同時に目を大きく見開いた。
桜井、サンの家…？？
「どうしてですか…！？」
私が尋ねると、桜井サンは蔑むように私を見た。
「そんなの、あなたには関係ないでしょう？？滝沢クンはもう、あなたの物ではありませんのよ？私の物をどうしようと、私の勝手じゃない」
ズキッ…
胸がしめつけられる。
そして桜井サンの目が怖くって、私は思わずびくっと震えた。
だけど必死になって言いかえす。
「だ、だけど…響くんはあなたの勝手じゃ動きません…」
桜井サンはふんっと笑った。

「どうしてあなたにそんなことが分かるの??それに、あなたはもう滝沢クンの彼女じゃないんだから、響くんなんて呼ばないで欲しいですわ」

「おまえっ!!」

一樹クンは桜井サンの胸倉につかみかかった。

だけど桜井サンは変わらずに微笑をうかべる。

「私にこんなことしていいと思っているの??」

そしてぽつりとつぶやいた。

その時…

「…あっ!」

突然後ろから誰かに手を押さえつけられた。

「望月センパイ!?」

一樹クンは私に気をとられて、桜井サンの胸倉から手を離した。

その一樹クンの背後に、黒い服を着た人が一樹クンに向かってバットを振り上げていた。

「一樹クン!」

私が叫んだ瞬間に、それが一樹クンに振りおろされた。

「っつぅ…！！」

一樹クンは短くうめいて、地面に倒れ込んだ。

なんで…??

これって…どういうことですか…??

パシャッ

不意にケータイのカメラの音がした。

驚いて音のした方を見ると、桜井サンが一樹クンにケータイをむけていた。

そしてそれを私の方に向ける。

写真を…とっているんですか…??

パシャッ

また短いシャッター音がして、桜井サンがにこっと笑う。

「いい??もうこんなこと嫌でしょう??だから、もう私と滝沢クンにはかかわらないで」

私はガクガクと震えながら桜井サンを見ていた。

目に涙がたまって、怖くて声がだせない。

桜井サンは私に手をふって、屋上からでていった。

「待って…！！」

なんとか声を振り絞る。

ドンッ

後ろから何かに叩かれた。

頭ににぶい痛みが走る。

意識がもうろうとして、だんだんと地面が近づく。

ひ、びきくん…

心の中でつぶやき、私の意識はとぎれた。

☆３０話　急襲☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

桜井サン…怖い…（涙
だんだんと話がおかしくなってきました（－＿－；）
しかもサブタイトル、急襲って…（それしか思いつきませんでした
（汗

☆31話　理由☆詩織ｓｉｄｅ

「あいつ！絶対ヤバいやつですよ！！」

保健室で一樹クンは後頭部をおさえながら言った。

私達はあのあと保健室に運ばれていたようで…

目が覚めたら一樹クンと並んでベッドの中にいました。

「いくら財閥のお嬢だからって…オレ達が通報したらどうすると思ってるんですかね！？」

…たしかに。

命令しただけとはいえ、あきらかに傷害罪ですよね……

まぁ軽いケガですからそこまでならないとは思いますが……

「…ですけど、きっとあの人ならなんとかしてもみ消すんだと思います…」

私はケータイを片手に私を見下ろして笑う桜井サンの姿を思い出した。

思い出すだけでもぞっとするような笑顔。

あの人にどんなことをしても、全部無駄になる気がします……

『いい??もうこんなこと嫌でしょう??だから、もう私と滝沢クンにはかかわらないで』

最後に桜井サンに言われた言葉。

きっと、あれは警告。

……これ以上私が響くんのために何かしようとしたら、あの人は私達にもっとひどいことをするつもりなんです。

…もっとひどいことって??

想像するだけでも怖くなる。

しかも…

私のせいで、一樹クンまでまきこんで……

「一樹クン、ごめんなさい…」

手がふるふると震える。

「私のせいで…一樹クンまで……!!」

私が桜井サンにかかわろうとしなければ……

一樹クンまで痛い思いをすることはなかったのに……!!

「…望月センパイ」

一樹クンは黙って私を見て、ふいににっと笑った。

「望月センパイのせいじゃありませんよ。悪いのは全部あいつです」

「ですけど…私が桜井サンのことを調べようとしたから…」

私がつぶやくと、一樹クンは小さなため息をついた。

「…もう、なんでそんなに気にするんですか??そんなに気にしなくても大丈夫ですよ。オレ、こんなの全然平気ですから!!」

だけど……

一樹クンが後ろから殴られた瞬間。

私は息が止まるかと思った。

頭が真っ白になって、恐怖でわけがわからなくなった。

……だから、もう私と滝沢クンにはかかわらないで……

頭の中に桜井サンの言葉がこだまする。

…私は別に響くんのためなら、どんなことをされたって平気です。

だけど…

私のせいで一樹クンが傷つくのは嫌……!!

「一樹クン…私、もう桜井サンと響くんにかかわろうとするの、止

めます」

私がぽつりと言うと、一樹クンは大きく目を見開いた。

「え…??どうしてですか??」

「だってこれ以上かかわろうとしたら…一樹クンがまた、ひどい目にあうかもしれない…!!」

私はあふれだしそうになる涙をおさえながら言った。

そうなったら…

私は…私は…!!

「ふざけるなっ!!」

突然一樹クンが大声で怒鳴った。

思わずびくっと体が震える。

「…そんなんじゃ、兄ちゃんはどうなるんですか…??」

一樹クンはぼそっとつぶやく。

「桜井ってやつはあんなひどい奴なんですよ…??」

…たしかに。

桜井サンが響くんに何をしているかなんてわからない。

でも…

「だけど…響くんは本当に桜井サンのことが好きなのかもしれないじゃないですか…」

もしかしたら響くんは好きで桜井サンの所にいるのかもしれない。

私が勝手に響くんが辛い思いをしていると思っているだけなのかもしれない。

そう思うと…

私のしていることって…

ただ、一樹クンを無駄に傷つけて、響くんの邪魔をしているだけ…

「……そんなわけないでしょう??」

一樹クンはぽつりと言った。

「そんなの分からないじゃないですか」

「いえ、絶対にそんなわけないんです」

一樹クンははっきりと言った。

「…始業式の次の日、オレ、すっごいケガしていたでしょう?」

「…はい」

私はうなずいた。

だけど…

それと響くんにどんな関係が……

「実は始業式の日、帰り道にヘルメットかぶったよくわかんない奴らに襲われたんですよね」

一樹クンは苦笑いした。

そして話を続ける。

「家帰ったら、兄ちゃんがオレ見て蒼白して…なんでか謝られたんです。なんでそんなに謝るんだよって聞いたら…」

一樹クンはためらうように口を閉じた。

「…聞いたら、響くんはなんて言ったんですか??」

私が尋ねてみると、一樹クンは目を伏せた。

「…転校生に告白されて、断ったら変なこと言われたって」

変な、こと…??

「…『あなたの大切な人達の身のまわりに気をつけて』って言われたそうです」

「……！！」

それって…

遠まわしに、付き合えないんだったら大切な人を傷つけるって言ってるみたいなものですよね…？？

私は響くんの不自然な態度を思い出した。

『おまえは…オレが守るから』

そう言って突然抱きしめられた。

…あれは、一樹クンの次は私だと思ったから？？

帰り道、やけに響くんが辺りを見回していたこと。

工事現場の木材が私に倒れ掛かってきた時、響くんが一瞬見せた険しい表情。

そして次の日、突然別れを告げられた。

……もしかして、私を傷つけないようにするため…？？

一樹クンは目をあげて、悲しそうに笑った。

「…だから、兄ちゃんはまだ望月センパイのことが好きなんだと思います。兄ちゃんが望月センパイ以外に好きな女ができるなんてありえません」

「……本当、に？？」

一樹くんは小さくうなずいた。

うれしくて、頬に涙が伝う。

よかった……

響くんは私に飽きたわけじゃなかったんですね…？？

響くんは桜井サンのことを好きになったわけじゃないんですね…！？

私は…

響くんのことを、好きでいていいんですね…！？

「…ごめんなさい。オレ、ずっと言えなくて」

一樹クンは震える声で謝った。

「でも…言ったら、望月センパイが兄ちゃんの所に戻ってしまいそうで……」

「…一樹クン」

一樹クンはうつむいて、顔をあげようとしない。

私はベッドからおりて、そっと一樹クンを抱きしめた。

「…言ってくださって、ありがとうございます」

一樹クンは何も言わず黙り込む。

私はそんな一樹クンの頭をなでる。

「でも私…響くんともう一度お付き合いしようなんて思っていませんから」

私には一樹クンを傷つけてまで戻りたいなんて思いません。

私はただ、友達として響くんのそばにいられるだけでいい…

「…気を使わなくてもいいです」

一樹クンは突然ぽつりとつぶやいた。

そして私の肩を持って、私を押しかえす。

「オレ、望月センパイのことあきらめますから」

一樹クンはそう言ってにこっと笑った。

悲しそうな笑顔。

だけど、必死になって笑おうとしてくれている。

「え…??」

私は驚いて口をポカンとあけた。

「望月センパイを困らせたくないんです。オレ今まで、望月センパイに甘えすぎていました」

「一樹クン…」

一樹クンが甘えていたんじゃない…

甘えていたのは、ずっと私の方……

「ごめんなさい…」

私が謝ると、一樹クンは苦笑いした。

「どうして望月センパイが謝るんですか??」

そして頬にキスされる。

一樹クンは悲しそうに私を見て言った。

「…オレ、望月センパイのことが本当に好きでした」

さっきとは違う涙がこぼれおちる。

私はそれを手でぬぐい、笑顔を作った。

「…ありがとうございます…!!」

☆31話　理由☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

なんか気持ちいい感じで終わってしまいました。
次は一樹ｓｉｄｅの話書きます！！

☆★初恋★☆一樹ｓｉｄｅ

顔、良し。

性格、まあまあ。

成績、上の中。

おまけに女の子大好き。

突っ立ってるだけでも女の子がよってくる。

そんなオレが初めて恋したのは…

兄ちゃんの、彼女。

「なぁ、なんで兄ちゃんは彼女作らないんだよー??」

「めんどくさそうだから」

何度聞いても同じ答え。

そのたびにオレはため息をつく。

もったいないなー…

兄ちゃんは結構顔良いし（オレほどじゃないけど…）、頭もすげぇ

いいから女の子よってくるはずなんだけどな。

…まぁ、ちょっと目つき悪いけどさ。

でも兄ちゃんに女の子が寄ってこないってわけじゃないみたいなんだ。

兄ちゃんが片っ端から無視してるだけなんだよな……

めんどくさいって別にそんなことないと思うけど。

オレのためならなんでもしてくれるし、遊ぶのだって楽しいし。

めんどくさくなったら他の奴にすればいいだけなのに。

本当にもったいないなぁ…

と、そんな風に心配してたわけなんだけど……

兄ちゃんは高校生になって、やっと彼女を作った。

今まで全然彼女作ろうとしなかった兄ちゃんが作った初めての彼女なんだ。

きっとそこらにはいない上玉なんだろな。

少し興味があった。

初めてその姿を見たのは、オレが受験勉強まっしぐらの2月の初め。

珍しく兄ちゃんが風邪引いた日。

兄ちゃんの彼女がうちにお見舞いにきた。

父さんも母さんも家にいなかったので、当然オレがでる。

家の前にいたのは…まぁ、まずそこらにはいない可愛いらしい女の子。

耳の上で二つにくくっている長い髪。

大きな目。

すべすべしてそうな肌。

スタイルも見た感じまぁまぁ良い感じ。

ホント上玉捕まえたなぁ…

あの彼女作るのめんどくさいって言ってた兄ちゃんがね。

感心しながら、その望月サン（インターホンでそう言ってた）を兄ちゃんの部屋に連れていく。

兄ちゃんは望月サンを見た瞬間、慌てて上半身をおこした。

ちょっと顔をしかめてるけど、なんとなくうれしそう。

オレ、邪魔かな??

そう思い部屋をでる。

驚いたことに、望月サンはうちに泊るといいだした。

…まぁ、別にこんな可愛い人なら大歓迎だけど。

なんかオレに夕食まで作ってくれたし。

父さんと母さんがいないときは夕飯は兄ちゃんまかせだからな。

オレ料理とか無理だから。

暇だし、ちょっと望月サンをからかってみた。

「だって…望月サンって可愛いし、性格もいいし…完璧じゃないですか」

そう言ってみると、望月サンは耳まで顔を赤く染める。

そして兄ちゃんにおかゆ持っていくとか言って二階にあがってしまった。

ふーん。

純情そうで可愛らしいじゃん。

さらに望月サンに興味がわいた。

で、兄ちゃんの部屋から望月サンが戻ってくるのを待ってたわけだけど…

これがなかなか帰ってこない。

何してんのかな??

もしかしたらやってんの??

そう思いながら二階にあがってみる。

そして扉の前で耳をすませてみた。

……何も聞こえねぇ。

そっとドアをあけてみる。

目にうつったのは、ベッドで眠ってる兄ちゃんとそのそばでひざをついて兄ちゃんの手を握って眠っている望月サン。

なんだ、2人とも寝てただけか。

そっと2人の顔をのぞいてみる。

しっかりと兄ちゃんの手を握って眠っている望月サン。

そして…

珍しく眉を緩ませて、安心したように眠っている兄ちゃん。

いっつも寝てる時もつりあがってんのに…

…それだけ、望月サンといたら安心できるのか。

そのとき、なんとなく兄ちゃんは本当に望月サンが好きで付き合ってんだなと思った。

そのうちオレは兄ちゃんの高校に合格し、始業式の日、ひさしぶりに望月サンに会った。

いや、今日から望月センパイか。

まぁその望月センパイと兄ちゃんは始業式の朝からクラス分けの張り紙見ながらいちゃついてた。

ほっんと仲いいよなぁ…

だってあの兄ちゃんがこんなに笑うとこなんて初めて見た……

そんな風に驚きながら、オレはオレで高校での新しい彼女作りにいそしんでいた。

…その日の帰り道。

女の子達とも別れて1人でぼんやりと家に帰っていた時、突然ヘルメットをかぶった数人の男達に襲われた。

一応応戦しようとしたけどオレ、ケンカとかあんま強くねぇし相手はバットもってたから当然オレはボロボロにされてよろめきながらうちに帰った。

うちに帰ったら母さんが軽い悲鳴をあげて…

だけど、兄ちゃんはオレを見て蒼白して固まっていた。

とりあえず母さんに手当てしてもらって部屋で一息つく。

すると突然兄ちゃんが部屋に入ってきた。

「一樹…ごめん…」

なんでか突然謝られる。

わけがわからなくてなぜかと聞いてみると、兄ちゃんはオレのせいなんだ、と言って今日いきなり転校生に告白されたと話し出した。

それで転校生に『あなたの大切な人達の身のまわりに気をつけて』とかなんとか言われたらしい。

何度も謝られた後、このことは絶対に望月センパイには言うなと言われた。

まぁ、兄ちゃんの大切な人と言えばやっぱ望月センパイだし、次は望月センパイだもんな。

そう思いながらうなずく。

次の日。

望月センパイはオレを見てびっくりしてたけど、オレは何も言わなかった。

どうやらその日の帰り道、望月センパイが危ない目にあったみたいで……

兄ちゃんは家に帰ってすぐに自分の部屋に閉じこもってしまった。

そして、その次の日…

兄ちゃんは家に帰ってこなかった。

初めは望月センパイを心配しすぎて、望月センパイの家にでも泊ってんのかなって思ってた。

だからたいして心配なんかしていなかった。

だけど…

次の日、兄ちゃんは学校にもきていなかった。

さすがに心配になる。

だって風邪ひいてでも勉強しようとするんだぞ?

あんな真面目でなんだかんだ言って勉強好きな兄ちゃんが学校休むわけない。

望月センパイなら何かしってるかもしれない。

オレはそう思い、放課後に望月センパイに尋ねてみた。

だけど、かえってきた答えはあまりにも予想外な答え。

「すいません。…私、昨日響くんにふられちゃったんですよね！」

思わず目を大きく見開く。

ふられた…？？

望月センパイが、兄ちゃんに？？

…そんなはずがない。

だって兄ちゃんはあんなに望月センパイが好きだったんだ。

もしかしたら、望月センパイは冗談でも言ってるのかなと思った。

だけど、無理に作られた望月センパイの笑顔が、それが事実であることを物語っていた。

本当に、必死になって笑おうとする望月センパイ。

それが妙に痛々しく見えて、気がついたらオレは望月センパイを抱きしめていた。

望月センパイはオレの腕の中で涙を流して…

そんな望月センパイがひどく小さく見えて……

オレは、望月センパイを守ってあげたいと思った。

兄ちゃんと別れた悲しみをいやしてあげたいと思った。

だから…

オレは望月センパイに付き合おうと言った。

はじめは単なる同情心から。

兄ちゃんと似ているオレなら、望月センパイの悲しみをいやしてあげられると思ったから。

それに、兄ちゃんが好きになった女を自分の物にしてみたかったから。

はじめは、そんな理由で付き合ったはずだったんだ。

だけど…

望月センパイと一緒にいるうちに、いつの間にかオレはずっと望月センパイのことばかり考えるようになって…

他の女の子達といても全然楽しくなくて…

いつもなら二股とか余裕なのに、望月センパイ一筋になっていて…

廊下とかで望月センパイを見かけただけでドキドキして…

笑っているはずなのにどこか悲しそうな望月センパイの笑顔に胸がしめつけられて…

とにかく、すべてが今までに全く感じたことのない感情だった。

そしてオレは気がついた。

ああ、これが『恋』っていうのか…

それと同時に悲しくなる。

オレのせっかくの初恋の相手は、兄ちゃんのことが好きなんだ。

どんなにオレと一緒にいても…

どんなに望月センパイに触れても…

どんなに望月センパイにキスしても…

どんなにオレが望月センパイを思っていても…

望月センパイの気持ちは絶対に変わらない。

そんなの、オレが望月センパイに『恋』をしていると気がついたときから分かり切っていたこと。

だけど、オレはどうしても望月センパイの気持ちを手に入れたかった。

だからオレなりに一生懸命努力したんだ。

オレが今まで女の子達と付き合うなかで学んできた知識のすべてを使って。

そして、2か月ごろが立ったある日。

あいかわらず、兄ちゃんは学校にもこないし家にも帰ってこない。

心配で仕方がなかったけど、どこかで安心している自分がいた。

だから、そろそろ望月センパイの中の兄ちゃんの影も消えてきたころかと思ってた。

その日、オレが望月センパイにキスしていると、望月センパイがいつになく積極的にキスしてきた。

だから、やっと望月センパイの気持ちがオレの方に傾いてきてくれていると思っていた。

だけど…違った。

唇を離したとき、望月センパイがつぶやいた名前。

「響…くん……」

兄ちゃんの、名前。

心が痛いほどしめつけられた。

結局、オレは兄ちゃんの代わりだったんだ…

そんなの分かってたはずなのに…

いや、オレはもともと兄ちゃんの代わりでよかったはずなのに……

胸がはりさけそうだった。

…望月センパイにはオレだけを想っていて欲しい…

そんな風に言ってしまうなんて、オレはいつの間にこんなに我がままになっていたんだろう??

女の子なんて、適当に楽しむための道具だったのに…

オレはいつの間にこんなにもその道具に固執するようになったんだろう…??

次の日。

望月センパイは長い髪を切っていた。

「ちゃんと響くんのことを忘れようと思って…。その決意みたいなものです」

どうして髪を切ったのか、自分に言い聞かせるように言ってくれた望月センパイ。

それは…

望月センパイがオレを好きになるということを決意したということ。

望月センパイがそこまでしたことがうれしくて、オレは望月センパイを強く抱きしめた。

やった！

望月センパイがオレのことを想ってくれるんだ！

最高にうれしい気持ちの裏で、異様に冷めた声が聞こえた。

…無理だよ。どうせ望月センパイはオレのこと好きになったりしない…

そう。

そうだったんだ。

オレは最初から、その冷めた声を信じていればよかった。

なのに…

妙な期待なんてしてしまったから……

その日の放課後。

その日にかぎって、担任がオレにプリント運ぶの手伝えとか命令してきて、オレは望月センパイを待たせてしまうと思いながらも、しぶしぶとそれに従った。

そして用が済むと急いで望月センパイが待っている校門へと走った。

だけど、望月センパイが視界に入った瞬間、体が硬直する。

信じられない光景。

望月センパイが他の男に抱きしめられている。

ぎゅっと、強く、強く。

そしてその男は…

「にい…ちゃん…??」

望月センパイがどうしても忘れられない相手。

憎くて、憎くてたまらないのに…

なんだかんだいって小さい頃から大好きだった、大切な兄弟。

なんで…

なんでいるんだよ…!?

しかも…

なんで望月センパイを抱きしめてるんだよ…??

望月センパイのことをふったんじゃなかったのかよ!?

オレは怒りにまかせて兄ちゃんを怒鳴りつけた。

兄ちゃんは一言謝り、あとはただじっと黙っているだけ。

「オレは……「あら、滝沢クン。こんなところにいたの??」

やっと兄ちゃんが何か話そうとしかけたとき、不意に女の声がした。

声の主は、相当美人な女。

その女を怯えたようにみる兄ちゃん。

女はオレ達に一度軽く頭を下げると兄ちゃんをうながして、いつの間にか校門の前に止まっていた車に乗り込んだ。

そして兄ちゃんもそのあとに続こうとする。

…今日を逃したら、もう兄ちゃんはかえってこないかもしれない。

そう思い、オレは慌てて兄ちゃんを引きとめた。

兄ちゃんは少し足を止めて振り返る。

「一樹、……詩織、…ごめん」

オレ達に謝り、悲しそうに笑う。

兄ちゃんはオレ達に背を向けて車に乗り込んだ。

オレはそれをただ見ているだけしかできなかった。

…兄ちゃんのあんな顔、見たことない。

兄ちゃんが好きであいつの所にいってるわけじゃないってことくらいすぐに分かった。

兄ちゃんはオレ達を傷つけないために、1人で無理していることくらい。

そんなのすぐわかる。

だってオレは生まれた時からずっと兄ちゃんを見てきたんだ。

なんでもすぐに1人でかかえこもうとすることくらい知ってるんだ。

だからオレは…

兄ちゃんがまだ、望月センパイのことを好きだってことくらい分かってたんだ…

だけどそれを望月センパイに言いたくなかった。

言ってしまうと望月センパイはオレから離れて言ってしまいそうで。

次の日。

望月センパイにもうオレとは付き合えないと言われた。

自分はどうしても兄ちゃんのことが好きだから…と。

頭が真っ白になった。

そんなの絶対嫌だ…!!

オレは必死になって別れまいとした。

望月センパイは優しいから…

オレは望月センパイの優しさにつけこんで、結局オレ達は別れないことになった。

正直、もう望月センパイの気持ちなんてどうだって良かった。

ただ、望月センパイがオレのそばにいてくれるだけでよかったんだ。

その次の日。

望月センパイが桜井ってやつと昼飯を食べるといいだした。

桜井って…

あの、兄ちゃんといた……

ふと思い浮かぶ兄ちゃんの怯えた表情。

初めてみた悲しそうな笑顔。

きっと…

全部、あの女のせいだ。

オレもあの女に兄ちゃんの居場所を聞きたい。

兄ちゃんに何しているのか聞きたい。

だけど…

これ以上兄ちゃんの話はしたくない。

望月センパイを兄ちゃんにかかわらせたくない。

心の中で二つの気持ちが葛藤する。

そして、オレは結局兄ちゃんのことを知りたいという気持ちをとった。

望月センパイに頼み込んで、オレも一緒に昼飯を食べることにさせてもらう。

そして昼休みに屋上で桜井ってやつを見た時、怒りがこみあげて、止まらなくなった。

だけどその感情を必死でおさえる。

怒っていたら、もらえる情報ももらえないかもしれない…

でも、そう思う必要なんてなかった。

「大体おまえ、兄ちゃんに何したんだよ!?なんで兄ちゃんは一度も学校にこず、家にも帰ってこないんだ!?おまえなら知ってるんだろ!?」

オレが我慢できずに怒鳴るように言った問いに、簡単に返事が返ってきた。

「滝沢クンは私の家にいますよ?」

オレと望月センパイは同時に大きく目を見開いた。

なんで…こいつの家なんかに…

オレが尋ねる前に、望月が先に尋ねた。

桜井があびせる言葉に、必死になって対抗する望月センパイ。

「あなたはもう滝沢クンの彼女じゃないんだから、響くんなんて呼ばないで欲しいですわ」

だけどそう言われた時、望月センパイの瞳に涙がたまった。

こみあげてくる感情をおさえられず、オレは桜井の胸倉をつかむ。

けど桜井はおびえもせずにただ微笑して言った。

「私にこんなことしていいと思っているの??」

「…あっ!」

突然望月センパイの小さな悲鳴が聞こえる。

驚いて望月センパイの方を見ると、望月センパイが黒い男に手をおさえつけられていた。

助けようとして、桜井から手をはなす。

それとほぼ同時に、頭に強い衝撃と痛みが走った。

そのまま地面がちかづいてきて、意識を手放す。

気がついたら、オレは保健室にいた。

隣には望月センパイ。

望月センパイと桜井の話をしていると、望月センパイが突然オレに謝りだした。

「一樹クン…私、もう桜井サンと響くんにかかわろうとするの、止めます」

そしてつぶやいた言葉。

それになぜかかっとして、望月センパイを怒鳴りつける。

さっきのことで桜井ってやつがひどいやつってことは十分に分かった。

あんな奴の所に兄ちゃんはいるんだ。

絶対にひどい目にあわされているに決まっている。

それなのに…

望月センパイが兄ちゃんのことあきらめたら、兄ちゃんはどうなるんだよ……！！

「だけど…響くんは本当に桜井サンのことが好きなのかもしれないじゃないですか…」

望月センパイはぽつりと言った。

その言葉にぎくりとする。

そうだ…

オレは、望月センパイに兄ちゃんがまだ望月センパイが好きだってこと言ってないんだ…

……このことを言ってしまったら、オレは望月センパイをあきらめなくちゃいけない。

そんなの…嫌だ…

だけど…

兄ちゃんが苦しむのは、もっと嫌だ。

オレは望月センパイに、兄ちゃんがまだ望月センパイのことが好きだということを話した。

そして、オレが望月センパイのことをあきらめるということも。

悲しそうにオレを見て、小さな声で謝る望月センパイ。

そんな望月センパイの頬にそっとキスする。

オレが、初めて恋した人。

可愛くて、優しくて、兄ちゃんの一番大切な人。

…これだけは、たしかに伝えたい。

「…オレ、望月センパイのことが本当に好きでした」

あなたは、オレに初めて恋を教えてくれた。

ほとんど悲しいことしかなかった短い恋だったけど…

オレは、たしかにあなたのことが好きでした。

オレは…

あなたと過ごした、ほんの少しの短い時間を一生忘れません……

☆★初恋★☆一樹ｓｉｄｅ（後書き）

…あれ？？

詩織を中心にするはずだったのに、響が中心になっている気がする…

いつの間にやら一樹がお兄ちゃん大好きのすっごいブラコンに……

（汗

☆32話　救出☆詩織ｓｉｄｅ

一樹クンと別れてから、私は何もできないまま1週間がすぎた。

私は響くんのことをあきらめないって決めましたけど…

だけど、一体どうすればいいのかわからない。

私が今、響くんのためにできることってなんでしょうか…??

響くんが桜井サンの所にいるってことは知っているんですけど…

と、窓の外の景色を見ながらぼんやりと悩んでいる時…

「詩織、隣のクラスの子が呼んでるわよ??」

優香ちゃんがぽんっと私の肩を叩いた。

へ??

隣のクラス…ですか??

もしかして笹川サンでしょうか…??

そう思いながら振り返る。

だけど、教室のドアの前にいたのは予想外の人物だった。

「桜井…サン…??」

どうして…

あなたが私を呼び出したりなんか…

桜井サンはにっこりと私に笑いかけた。

思わずびくっと体が震える。

怖い……

今度、何をされるかわからない……

だけど……

私はぎゅっと拳を握りしめた。

もしかしたら、響くんのことかもしれない。

少しでも響くんのことを知るためなら…

「桜井サン、どうしたんですか??」

私は桜井サンのそばに歩み寄った。

「ちょっとね。…今日、私の家にきません?」

驚いて思わず目を見開く。

え…??

どうしていきなりそんなこと…

まさか、今度は私にもっとひどいことをするつもりだとか…

「どうしてですか…??」

桜井サンはにっと笑って私の耳元で囁いた。

「滝沢クンに会わせてあげる」

「……!!」

響、くんに…??

桜井サンは私に手をふると私に背を向けて自分のクラスに帰っていた。

私はぼんやりとその場に立ち尽くす。

響くんに…会わせてくれる…??

なんで……??

桜井サンの意図がわからない。

もしかしたら、からかわれているだけで、会わせてなんかもらえないかもしれない…

だけど…

もしかしたら…

もしかしたら、会わせてもらえるかもしれない…

それって、十分に行ってみる価値はありますよね…??

「ダメですよ!望月センパイ!そんなの、罠かなんかにきまってます!」

一樹クンにそのこと報告すると、大声で猛反対された。

「で、ですけど…もしかしたら、本当かもしれませんし…」

「いえ、絶対に嘘にきまってます!」

一樹クンはきっぱりと言った。

「だってあんなやつですよ!?信頼なんかできません!」

「でも!このままじゃ私達、なんにもできないままです!」

一樹クンはピタリと口をつぐんだ。

そしてしばらくの沈黙のあと、きっと私を見る。

「それじゃ、オレに行かせてください。オレが会って無理やりにでも連れ戻してきます」

その真剣な目が少し怖いと思った。

だけど首を横に振る。

そしてじっと一樹クンの目を見て言った。

「…嫌です。私、ちゃんと響くんに会って話したいんです」

「でも、オレは望月センパイが心配で…！！」

一樹クンはぎゅっと拳を握りしめて目を伏せた。

そんな一樹クンににっこりとほほ笑みかける。

「私は大丈夫ですよ。いざとなったら逃げますから。私、意外と走るの早いんですよ？」

「え…？？いや、そういう問題じゃ…」

一樹クンは困ったように言って、そして大きなため息をついた。

そしてにっと私に笑いかける。

「…まぁ、それじゃ気をつけてくださいね」

「はい」

私も笑顔でうなずく。

…待っていてください、一樹クン。

私、きっと響くんを説得して、できることなら一緒に帰ってきます。

桜井サンの家に行くのは少し怖いですけれど…

私、がんばりますから。

放課後。

私は桜井サンの車に乗って、桜井サンの家に行った。

そして広いリビングに案内される。

…本当に、広いです。

さすがお金持ちの家ですよねー…

さっきみた庭もテニスコートが作れるくらい広かったですし…

世の中にこんなお金持ちがいたなんて少しびっくりです…

って、いやいや！！

感心している場合じゃないです！！

早く響くんに会わせていただかないと！！

「望月サン、お茶でもどう?? クッキーもありますのよ?」

桜井サンはにっこりと笑って言った。

私は首を横にふる。

「…いえ、結構です。それより、早く響くんに会わせてください」

少しクッキーは魅力的ですが…

今はそんなことよりも、響くんに会わせていただくことが先決です…!

「んー…まぁ、いいですけど。じゃぁついてきてください」

桜井サンにうながされて、私は桜井サンの後についていった。

階段を下りて、地下らしきところに行く。

普通の家に地下があるなんて…

さすがお金持ち…じゃなくて!

だから今は感心している場合じゃないんです!

ですけれど…

地下といったら暗いイメージがありますが…

別に、さっきの1階の様子と変わりませんね。

やっぱり感心しながらまわりを見回しているうちに、桜井サンはある部屋の前で止まった。

「…ここに、いるんですか??」

桜井サンは首を縦に振った。

私はこくっと唾を飲み込んで、ドアノブに手をかける。

少し、会うのが怖かった。

だけど、一樹クンに言ってもらった言葉を思い出す。

『兄ちゃんはまだ望月センパイのことが好きなんだと思います』

一樹クンはそう言っていた。

それなら…

私が行っても、迷惑なんかじゃありませんよね…??

私は目を閉じて、扉を開いた。

そこは窓もない、真っ暗で小さな部屋。

そして、その奥に響くんの姿が見えた。

「響くん…!!」

本当に…

会わせてくれた…！！

私はたまらなくなって響くんにかけよった。

そして、はっと息をのむ。

様子が…おかしいです…

部屋が暗かったのでさっきはわからなかったけど、響くんは両手足を縛られていた。

そして両腕や足にはっきりとは分からないけど切り傷が見える。

「響…くん…？？」

私が名前を呼ぶと、空を見つめていた響くんの目が私をとらえた。

そして怯えたようにカタカタと震える。

「くる…な…」

響くんはかすれる声で言った。

え…？？

くるなって…

どうして…

私は響くんの頬に触れた。

響くんはびくっと体を震わせる。

「…やめろ！触るな！！」

そして大声で怒鳴られた。

驚いて慌てて手を引っ込める。

響くん…？？

どうしたん…ですか…？？

どうしてそんなに震えているんですか…？？

どうしてそんな怯えた目で私を見るんですか……？？

「滝沢クン、壊れちゃった。だから、もういりませんの。あなたに返してあげます」

後ろで桜井サンが言った。

壊れ…た…？？

返して…あげる…？？

何それ…

「なんですか…それ…。響くんをまるで物みたいに…」

桜井サンはふんっと鼻で笑った。

「だってそうでしょう??滝沢クンはただの私の玩具よ??」

……！！

怒りで頭が真っ白になる。

瞳にたまった涙がこぼれおちた。

響くんは玩具なんかじゃないのに…

響くんは何もしていないのに…

どうしてこんな目に遭わなくちゃいけないんですか…??

どうして…??

どうして…！？

私はきっと桜井サンを睨んだ。

「桜井サン…私はあなたを絶対に許しません…！！」

桜井サンはにっと笑った。

「うん。それもおもしろそう。あなたが私に何をしてくれるのか期待してる。じゃぁね」

桜井サンは一言言って部屋をでていった。

「…響くん」

私は響くんに向き直った。

本当に怯えきった顔。

響くんは…

こんなに弱くない…

桜井サン、あなたはいったい何をしたんですか…??

いったい何をすれば響くんがこんな風になるんですか…??

私は響くんの両手足を縛っていたひもを解いた。

そしてぎゅっと響くんを抱きしめる。

「やめろ…」

響くんが怯えた声でつぶやいた。

私はそんな響くんを強く抱きしめた。

「…大丈夫です。響くん。私です。詩織です」

「しお…り…??」

響くんは私の名前を繰り返した。

私はうなずく。

「そうです。だから…安心してください…私がいますから…」

響くんの震えが止まった。

響くんの体の力がぬけて、響くんの体重が私にかかってくる。

「し…おり…。ごめん…」

響くんはそうつぶやくとぐったりと私の肩にもたれかかった。

そして小さな寝息を立て始める。

…どうして、響くんが謝るんですか??

悪いのは全部桜井サンでしょう??

大丈夫。

あなたは何にも悪くないです。

私はそっと響くんの髪をなでた。

ごめんなさい…

私、もっとはやくくればよかったですよね…??

そうすればここまであなたは傷つかずにすんだかもしれないのに…

だけど、もう大丈夫ですから…

安心して、ゆっくりと眠ってください。

あなたをここまで傷つけた桜井サンは…

私が絶対に許しませんから。

私はどんなことがあっても、絶対に桜井サンを許さない。

☆３２話　救出☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

結構ひっぱったわりにはわりとあっけなかったですね。
このあとどうやって詩織と響が自分の家に帰ったかはご想像におまかせします。
次は響ｓｉｄｅで今までの全部説明します（＾＾♪

★暗闇★響ｓｉｄｅ

『あなたの大切な人達の身のまわりに気をつけて』

転校生に突然耳打ちされた言葉。

初めはただの脅しだと思った。

だけどその日、ボロボロになって家に帰ってきた一樹を見て蒼白した。

「一樹!?どうしたの!?」

母さんが小さな悲鳴をあげて一樹にかけよる。

だけどオレはその場を動けなかった。

転校生に言われた言葉が何度も頭の中を駆け巡る。

オレの…せいだ…

オレのせいで……!!

オレは一樹が部屋に戻ったのを確認してから一樹の部屋に言った。

何度も一樹に謝ると、一樹は怪訝そうにオレを見た。

「はぁ?なんで兄ちゃんが謝るんだよ?もしかして兄ちゃんがけしかけたの?」

オレはとりあえず、今日あったことを一樹に話した。

転校生に突然告白されて、断ったら脅された、と……

そしてそのことを詩織に言わないようにと念を押して頼んだ。

告白されたなんて、詩織にあんまり知られたくない。

オレは部屋に戻り、ベッドに倒れ込んだ。

そしてふと気がつく。

大切な…人…??

オレにとっての大切な人って…

そりゃ、一樹もそれなりに大切だけど…

一番大切な奴って…

……しお…り…??

それじゃ、次は……

「次は…詩織だ…」

頭が真っ白になった。

どうしよう…

もし詩織が一樹みたいなことになったら…

いや、もしそれ以上の目に遭ってしまったら…

ぎゅっと強く拳を握りしめる。

いや…

そんなことはオレが絶対にさせない。

詩織は、オレが必ず守る。

次の日の朝。

偶然校門の前で詩織に会った。

詩織は一樹を見て絶句した。

一樹は昨日の夜約束したとおりごまかしてくれた。

「一樹クン…昨日何があったんですか??」

一樹が先に学校に入ってから詩織に尋ねられる。

すごく心配そうな顔。

オレはなんとか笑顔を作って答えた。

「ん…ちょっとな…」

詩織はさらに追及してきたが、オレは曖昧に答える。

すると、詩織は少しうつむいた。

「響くん…どうして私には教えてくれないんですか…??そんなに、私って信用ないですか?」

悲しそうな声。

その声に少し胸がしめつけられた。

ごめん、詩織……

だけど……

「違う…けど、言えないんだ」

おまえに余計な心配はかけたくない。

悲しそうにうつむく詩織を見て、オレは思わず詩織を抱きしめた。

「ひ、響くん…??」

驚いたような声。

そんな詩織を強く抱きしめる。

絶対に…

おまえだけは傷つけさせない。

「…大丈夫だ。おまえは…オレが守るから」

オレは詩織の耳元で自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

絶対に…

絶対に守ってみせる。

そう心に強く誓った。

誓った…はずなのに……

オレには詩織を守ることなんてできなかった。

オレは結局詩織を傷つけただけ。

その日の帰り道。

工事現場の木材が詩織に倒れ掛かってきた時。

その時はなんとか間一髪で詩織はケガをせずに済んだ。

だけどそれがあの転校生のせいだと分かった時…

怖くなった。

今度はもう助けられないかもしれない。

詩織が大ケガをするかもしれない。

もしオレのせいでそんなことになったら…

もしオレのせいで詩織に一生消えないような傷ができたとしたら……

そうなったとしたら、オレは耐えられるのか??

…いや。

たえられないに決まっている。

結局オレは自分が傷つくのが怖かった。

だから転校生に詩織と別れれば何もしないでやると言われた時、ためらわずにそうしたんだ。

心の中で、必死にこれは詩織のためなんだと自分に言い聞かせながら。

オレは詩織をふったあと、授業にはでずに屋上に向かった。

そこでぼんやりと空を見上げる。

屋上…か。

詩織とよく同じ時間を過ごした場所……

もう、ここで詩織と同じ時間を過ごすことなんてできない。

目から涙が次々にあふれて頬を伝った。

それを隠すようにうつむく。

「ごめん…ごめん…詩織…」

何度謝っても、その言葉は詩織に届くことなく消えていく。

オレ、最悪だ。

別に詩織と別れなくても、オレがずっと詩織を守っていればいいだけなのに…

オレに自信がなかったから…

目の前で詩織が傷つくところを見るのが怖かったから……

結局自分で詩織を傷つけたんだ…

「滝沢クン」

突然背後で名前を呼ばれた。

驚いて振り返る。

「…おまえか」

そこには転校生が微笑を浮かべて立っていた。

「彼女とちゃんと別れてきたの？」

「…ああ。これで、いいんだろ…」

おまえの告白をオレが断ったことの復讐がしたかったんなら、十分にできたはずだ。

だから…

もう、いいだろ？？

「大丈夫。私がちゃぁんと愛してあげますわ」

転校生はそっとオレの頬に触れて言った。

「…やめろ」

オレはその手を払いのける。

詩織以外の女に…

触れられたくなんかない。

転校生はオレを見てくっと笑った。

「そんな態度もおもしろいけど…あの子が心配ならおとなしくしていてね」

「……！！」

それを聞いて体がピタリと固まる。

まだ…

まだ詩織を傷つけようとする気なのか…!?

「おまえ…最低だな」

オレが転校生を睨んで言うと、転校生は微笑んだ。

「ありがとう」

そして何かを唇にぬると突然オレにキスした。

驚いて、目を大きく見開く。

突き飛ばそうと思ったが、詩織のことを思い出してぐっとこらえた。

「いい?私の言うことを聞かなくちゃあの子の安全は保障できませんわよ?」

転校生は唇を離してじっとオレを見て言った。

「おまえ、なんでそこまで……!?」

突然強い眠気に襲われた。

…なんだよ、これ。

瞼が重い…

オレは強い眠気に勝てずに目を閉じた。

目が覚めると、オレは真っ暗な部屋にいた。

ここは…??

てか、オレさっきまで屋上にいなかったか…??

「目が覚めた??」

目の前で声が聞こえた。

「おまえ…」

「私ですわよ。桜井千里ですわ」

だんだんと目がなれてきて、桜井の顔がぼんやりとうかんでくる。

こいつがオレをここに連れてきたのか…

「…ここ、どこだ?」

「私の家です」

…??

桜井の家…??

なんでオレをそんな所に…??

「あなたは今日からずっとここにいるんです。学校にも家にも帰らせませんわ。ここでずっと私の相手をするんですわよ」

「はぁ…??」

オレはあきれて桜井を見た。

なんだそれ?

ふざけるにも程があるだろ…

大体そんなことできるわけがない。

監禁なんて犯罪になるんじゃねぇの??

「今、そんなことできるわけないって思ったでしょう?」

桜井はにっと笑った。

「それが私にはできるんですわよ。知ってます?私のお父様の力はすごいんですの」

「……!!」

…そういえば、たしかこいつは財閥のお嬢様かなんかだったよな。

なんでそんなお嬢様がこんな奴なんだよ…！！

オレは本当にこんなとこにずっと閉じ込められるのかと思うと、ぞっとした。

嫌だ…

こんな小さくて明かりも窓から入ってくる明かりしかない部屋にずっといるなんて無理だ…！！

オレは今すぐ桜井を思い切り殴って逃げ出したかった。

だけど…

もしオレが今そんなことしたら…

詩織に何かあるかもしれない…

オレはなすすべなく、桜井を強く睨んだ。

桜井はおびえるどころか、にっこりとほほ笑む。

「大丈夫。ご飯とかはちゃんと持ってきますから。それではね」

桜井は一言そう言って部屋をでた。

カチャッと鍵が閉まる音がする。

鍵…閉められた…？？

オレは立ち上がり、ドアにかけよった。

そしてドアノブを何度もまわす。

だけど扉は開かない。

「くそ…っ！！」

オレは強く扉を叩きつけた。

そしてその場に座り込む。

なんで…

なんでこんなことになるんだよ…！？

オレ、何かしたか？？

普通に彼女いたから付き合えないって言っただけじゃねぇか！！

わけわかんねぇし！！

「…詩織」

オレはぽつりとつぶやいた。

おまえは…

オレが学校にも、家にも帰らなかったら、心配するんだろな…

きっとおまえのことだから、オレと別れていてもオレのためになんとかしようとしてくれるんだと思う。

だけど…

もう、オレなんて忘れて欲しい。

どうやらオレがはむかおうとしたらおまえに危害が加わるらしいんだ。

そうなるくらいなら、オレなんてもうどうなったっていい。

オレは自分が傷つくのが怖くておまえを傷つけたんだ…

オレはそんな嫌な奴なんだ…

だからこんな嫌な奴のことなんて早く忘れた方がいい。

そんなオレの願いはどうやら届いたようだ。

その2日後、

桜井に詩織が一樹と付き合っているということを知らされた。

よりによって一樹か…

まぁオレが一樹じゃダメだとか言う資格なんかないけど…

あいつは他の女とも仲良くするとはずだ。

そんなんで詩織が嫌な気持ちにならないだろうか…??

オレなら絶対に詩織以外とは絶対に話しもしないだろうけど…

そんな風に比較して、すぐに首をふる。

いや、なんで自分と比較しようとするんだよ。

詩織はオレなんかよりも一樹といた方がずっといいに決まっている。

そうだ。

詩織はオレを忘れて一樹を好きになったんだ。

それでいいじゃないか。

頭ではそう納得するのに、心では納得なんてできなかった。

胸がきりきりと強くしめつけられる。

桜井はそんなオレの反応を見て満足したのか、にっと笑ってオレにキスしてきた。

オレはただぼんやりとされるがままになる。

もうどうだっていいんだ。

オレに意志なんて必要ないんだ。

ただぼんやりと桜井にされるがままになっていればいいだけ。

そうしておけば…

少なくとも、詩織が傷つくことはないんだ……

そんな風にぼんやりとしているうちに、1日、また1日と日が過ぎていく。

朝、晩にはちゃんと桜井が飯を持ってくるし、窓からの光が変わるから時間の流れは大体分かる。

そんな生活が何日続いたのだろう??

ある日、いつものようにぼんやりと窓の外の景色を見ている時にふいに思いついた。

そうだ。

あの窓から外に出られるんじゃないか…??

思いついてすぐにオレは行動にでた。

飯を食べる時ようにあった机を壁際によせてその上にのる。

そして窓に手をかけた。

幸いに鍵はかかっておらず、外の空気が入ってくる。

「やった…！」

オレは窓から飛び降りた。

この部屋は一階だったらしく、なんなく着地できる。

オレはすぅっと大きく空気を吸い込んだ。

そして空を見上げる。

もう夕方だったので、太陽が西に沈みかけていた。

夕日の光が目に眩しい。

なんとなく…

ひさしぶりに見た気がする…

それが外にでられたという実感をわかせた。

感動している時間も短く、オレは見つからないうちにすばやく桜井の敷地の外にでた。

どこに行こうか??

夕方ってことは学校も終わってるころだよな??

ということは……

桜井ももうすぐ帰ってくる…!!

オレは慌ててどこへともなく走った。

もともと桜井の家がどこにあったのかなんてわからなかったので、自分がどこに向かっているのかもわからない。

だけどとにかく戻りたくなかった。

自分なんてどうでもいいと自分に言い聞かせていたけど、やっぱりただぼんやりとしているだけの生活なんてまっぴらだ。

しばらく走っているうちに見なれた校舎が見えた。

ここって…

オレ達の…高校…??

ということは…

桜井がでてくるかもしれない…!!

オレは慌てて学校から離れようとした。

だけど校門の前にある姿をみとめてピタリと足を止める。

「詩織…??」

思わずぽつりと名前を呼ぶ。

詩織は振り返ってオレの姿をみとめると、大きく目を見開いた。

「ひ…びき…くん…??」

ひさしぶりに聞いた詩織の声。

気持ちがあふれだして、詩織を抱きしめたくなった。

だけどそんな衝動を必死になってこらえる。

詩織を傷つけたオレに…

詩織を抱きしめる資格なんてない…

「ひさしぶり…ですね」

詩織は笑顔を作っていった。

「……そうだな」

「いままでどうして学校にも、家にも帰らなかったんですか？一樹クン、心配していましたよ？」

「悪い、けど…言えない」

オレはうつむいてそう答えた。

…そうか。

一樹にも心配かけてるんだな…

本当にオレは迷惑をかけてばっかりだ…

オレはふと顔をあげた。

そういえば…

「髪、切ったんだな」

腰までとどきそうなくらい長かった詩織の髪。

それが肩につかない程度に短くなっている。

自分が知らない間の詩織の変化がなんとなく悲しく思えた。

「…ええ」

詩織は少し頬を染めてうなずく。

気まずい沈黙が流れた。

…本当はオレ、こんな所にいてたらいけないんだ。

もしこうして詩織といる所を桜井に見られたら…

詩織がどうなるか分からない…

だけど…

少しでも、一秒でも長く詩織といたかった。

だからオレは黙って詩織を見つめていた。

「滝沢サン」

不意に詩織が口を開いた。

その呼び方に驚いて思わず目を大きく見開く。

…そう、だよな。

オレはもう詩織と別れたんだ。

名前で呼んでもらえないなんて…

当然だよな……

そう分かっているのに、胸は痛いくらいにしめつけられた。

「私、今一樹クンとお付き合いしているんです」

そのことは、桜井からすでに聞いていた。

だけどあらためて詩織の口から聞かされると辛くなる。

オレはそんな気持ちを隠すように笑顔を作った。

「…知ってる。……彼女から、聞いた」

桜井のことを『彼女』と呼ぶのはたまらなく嫌だった。

だけどオレは詩織をふったとき、新しく好きな奴ができたと言ったんだ。

だからオレはもうその新しくできた好きな奴と付き合っているということにしておいた方が、詩織もさっぱりとオレのことを忘れられる気がした。

詩織はオレの言葉に少し目を見開いた。

詩織の目に涙がたまる。

けど詩織はそれを隠すようにオレに笑顔を向けた。

そして声を振り絞るようにして言う。

「だから……私のことは気を使わず、安心してその人に恋してください……！！」

……！！

詩織の気持ちが痛いほどにオレに伝わってくる。

オレは小さく微笑んだ。

「ああ、ありがとう。…望月」

その言葉…

そっくりそのままおまえに返したい。

そしてできることならおまえに言いたい。

オレが好きな奴はずっとおまえだけなんだ。

オレが詩織以外の奴を好きになるなんて、絶対にありえない…

突然詩織の瞳から涙がこぼれおちた。

詩織の目から次から次へと涙があふれだして止まらない。

「ちがっ…その……」

詩織は笑顔を作って言いわけするようにオレを見た。

その笑顔が痛々しくて、自分の気持ちがおさえきれなくなって……

気がついたら、オレは詩織を抱きしめていた。

ひさしぶりに感じた詩織のぬくもり。

小さな細い体。

それが愛しくて仕方がなくて、オレは強く強く詩織を抱きしめた。

違うんだ…！！

オレは新しく好きな奴なんてできてない！

オレは…

オレは…！！

「オレ…本当はまだ…！！」

全部を詩織に打ち明けてしまいそうになったとき……

「にい…ちゃん…？？」

不意に自分とよく似た声が聞こえた。

詩織の肩ごしにその姿をみとめる。

「一樹……」

一樹は顔を蒼白させていて、そして突然怒鳴った。

「…何してるんだよ！？望月センパイに触れるな！！」

オレは言われるままに詩織の体を解放した。

一樹はそんな詩織を自分の後ろに隠すように前にでる。

「今までどこで何してたんだよ！？家にも帰ってこずに……！！オレや母さん達がどれだけ心配してたか分かってんのか！？」

「悪い……」

一樹に怒鳴られて、オレはただ謝ることしかできなかった。

一樹に思い切り頬を殴られる。

鈍い痛みが頬を襲う。

だけどオレは何も言わず、ただうつむいて地面を見つめていた。

「謝ったって許すわけないだろ!?しかも……!!」

一樹は強く拳を握りしめた。

そして声を震わせる。

「おまえは…望月センパイをふったんだろ……!?それなのに、なんで抱きしめたりするんだよ…!?」

一樹の言葉が胸に突き刺さる。

そうだ。

オレは詩織をふったんだ。

だから抱きしめる資格なんてないんだ…

なのに…

つい、気持ちをおさえられなくなったんだ……

「せっかく望月センパイはおまえのこと忘れかけてたのに……!なんでまた思い出させるようなことするんだよ……!!?」

……

……オレ、最低だ。

オレは詩織を傷つけて、今こうして一樹まで傷つけた。

だけど仕方ないんだ。

もうオレにも、どうすればいいかなんてわからないんだ……

「オレは……「あら、滝沢クン。こんなところにいたの??」

オレが口を開きかけた時、オレの言葉を遮るように後ろから声がした。

驚いて振り返る。

「桜井……!!」

そこには桜井が立っていて、じっとオレを見つめていた。

頭から血の気が引いていく。

どうしよう…

見つかった……!!

桜井はにっとオレに向けて笑った。

「探していたのよ。さぁ、早く行きましょう」

その目はたしかに、おとなしくこないと詩織を傷つけると語っていた。

「あ、ああ……」

オレはうなずいて、桜井の後ろについていく。

「待てよ！まだ話は終わってない！！」

一樹が慌ててオレを呼びとめようとする声が聞こえた。

自然と足が止まる。

振り返ると、視界に入る自分の大切な人間。

オレのせいで…

オレのせいで2人は無駄に傷ついている。

全部…

全部オレが悪いんだ……

「一樹、……詩織、…ごめん」

オレは笑顔を作って、小さな声で謝った。

せめてこれ以上おまえらが傷つかないようにする。

だから…

もう、オレのことなんか心配しなくていい…

桜井にうながされて、オレは桜井の車に乗り込んだ。

「まさか、逃げ出すなんて思いませんでしたわ。今度は絶対にそんなことできないようにしてさしあげます」

桜井は声のトーンを下げて言った。

「……心配しなくても、もう逃げ出そうとなんかしない」

オレがそうつぶやくと、突然ハンカチを口におさえつけられた。

同時に強い眠気に襲われる。

「そんなの、信用できるわけないでしょう?? あなたには罰を受けてもらいますから」

桜井の声がぼんやりと聞こえて、オレはそのまま眠りにおちた。

目が覚めると、今度は窓もない真っ暗な部屋にいた。

手足の自由がきかない。

もしかして…

なんかで縛られてる…!?

どれだけもがいても手足は自由に動かない。

「無駄ですわよ。しっかりと縛ってありますからね」

いつの間にか桜井が目の前にいた。

桜井はにっと口の端をつりあげる。

「言ったでしょう?あなたには罰を受けてもらうって」

「ば…つ…??」

罰って…

何するつもりだよ…??

オレが怪訝な顔をしていると、桜井は微笑みながらオレにカッターを突きつけた。

カッター…??

…もしかして…!!

「や…めろ…」

オレはなんとなく桜井がしようとしていることがわかって、後ずさりしようとした。

だが、手足の自由がきかず、その場を動けない。

「大丈夫。そのきれいな顔だけは傷つけないであげますから」

桜井はそう言って、オレの腕をつかんだ。
そしてカッターの刃を肌にあてる。
「悪いことをしたなら、当然罰を受けませんとね」
桜井はにっこりと笑って、ぐっとカッターの刃をオレの肌におしつけた。
「っつぅ…！！」
小さな痛みを感じ、カッターがおしつけられたところから血がでてきた。
桜井はかまわずにカッターでオレの肌を切りつけていく。
桜井がカッターを離したころには、オレの腕に血で大きく?印が書かれていた。
桜井はそれを見てにっと笑う。
「痛い?でも、これで終わりじゃありませんからね?これからもっともっと新しい傷ができていくと思いますわ」
桜井はそう言って、その血を舐めあげた。
傷口が染みて、また痛みに襲われる。
オレの苦痛にゆがむ顔を見て、桜井はうれしそうに笑った。

それを見て、怖くなる。

こいつ…

狂ってる……！！

それから毎日桜井はカッターでオレの腕や足を傷つけた。

そしてたまにそこに水をかけられる。

何度もそうされているうちに、オレはだんだんと桜井を見るのが怖くなってきた。

カッターで切られる傷なんて我慢できない程痛いわけではない。

けど同時に何度も傷をつけられることで痛みが大きくなる。

そんなある日。

桜井がケータイの写真をオレに見せつけた。

「見て。あなたがこのまえ逃げ出したから、大切な方々にも痛い目にあっていただきましたわよ」

そこに映っていたのは地面に倒れ込んだ一樹と、恐怖で顔をひきつらせた詩織。

「…おまえ、何したんだよ！？」

オレが怒鳴ると、桜井はぐっとオレの髪をつかんだ。

「なんですか?その口の聞き方。言っておくけど、この2人はあなたのせいでこんな風に鳴ったんですよ?」

「……!!」

オレの…せいで…??

オレが逃げ出したりなんかしたから…??

桜井はまたオレの肌にカッターの刃を沈めはじめる。

二つの苦痛が同時に襲ってきて、頬に涙が伝った。

もう…嫌だ…

怖い…

怖い……

怖い……!!

この女が、怖い……!!

桜井の顔を見るだけで体が勝手に震える。

大きすぎる恐怖に襲われる。

それほど痛くはなかったはずの痛みが激痛に変わる。

そんな恐怖ばかりが続く悪夢みたいな日々。

そう、悪夢。

これはきっと覚めることがない夢なんだ。

きっとオレは一生、夢の中にいるんだ……

そんな風にあきらめかけていたとき…

暗闇の中で、声が聞こえた。

……響くん……

それは、まぎれもなく詩織の声だった。

だけどオレはその声の正体に気が付けない。

オレは怖くって、差しのべられた手を拒絶した。

今度は抱きしめられる。

温かい……

だけど、怖い……

オレはそれさえも拒絶しようとした。

優しい声が耳に届く。

「…大丈夫です。響くん。私です。詩織です」

「しお…り…??」

オレは愛しい名前を繰り返した。

本当に…

詩織、なのか…??

「そうです。だから…安心してください…私がいますから…」

その声で、言葉で、一気に体の力がぬけた気がした。

詩織…

なんできたんだよ…

オレのせいでおまえはいっぱい傷ついたんだ…

…そうだ。

オレ、詩織に謝らないと……

「し…おり…。ごめん…」

オレは小さな声でつぶやいた。

もう、それ以上何も言えない。

一気にたまっていた疲れが襲ってきて……

オレは詩織の肩にもたれかかって、深い眠りについた。

★暗闇★響ｓｉｄｅ（後書き）

長い！
そして怖い！
…かなり疲れました。
なので最後は全体的に適当に…
桜井サン怖すぎです…（一＿一；）

☆33話　もう一度☆詩織side

響くんは丸一日眠っていたらしい。

一樹クンに響くんが目を覚ましたと連絡をもらって、私はすぐに響くんの所にかけつけた。

「あ、望月センパイ！どうぞ入ってください！」

一樹クンに迎えてもらって、響くんの部屋につれていってもらう。

響くんはぼんやりと私を見てすぐにそっぽを向いてしまった。

「響くん…」

私が響くんのそばに行くと、響くんはぽつりと言った。

「…何できたんだよ」

「何でって…響くんが目を覚ましたと聞きましたから…」

私がそう答えると、響くんはきっと私を睨んで怒鳴った。

「違う！何でわざわざ桜井の家まできたのかって聞いてるんだ！」

ビクッ！

思わず体が震える。

「おい、兄ちゃん！せっかく望月センパイがきてくれたのに何だよ、その態度！！」

一樹クンは私をかばうように言った。

「おまえは黙ってろ！」

だけど響くんの一言でピタリと黙り込む。

響くんは私に向き直った。

怒鳴られる……！！

そう思って思わず目を固くつぶる。

「…オレは、もうおまえとは何の関係もないんだぞ？」

だけど、響くんはため息まじりにそう言っただけだった。

え…？？

何の関係もないって…

「…どういう…ことですか…？？」

響くんは少し目を伏せて言った。

「だから…オレとおまえはもう別れたんだ。別に特別な関係でも何でもない」

「……！！」

そ、それはそうです……

だけど…

「何の関係もないなんて…そんなことありません…」

だって…

たしかに私は響くんにふられちゃいましたけれど……

私はまだ……

「私はまだ、響くんのことが好きなんですもの…！！」

まだ好きだから…

好きだから、怖くっても響くんのためにがんばったんです…！！

響くんは驚いたように大きく目を見開いた。

そしてうつむきながらつぶやいた。

「……おまえ、オレのせいで嫌な思いさせられてたんだぞ??」

「違いますよ！響くんのせいなんかじゃありません！」

私は慌てて反論した。

だって響くんは何も悪いことしていないじゃないですか！

悪いのは全部桜井サンです！

だけど響くんは顔をあげようとはしない。

それどころか、響くんはカタカタと震え始めた。

「違う、違う…オレのせいだ…オレのせいなんだ……」

何かに取りつかれたようにそうつぶやく。

「響…くん？？」

どう…したんですか…？？

なんでそんな…

響くんは何も悪くないのに…

「違います…響くんは悪くありません」

私が手を握りながらそう言うと、響くんははっとしたように顔をあげた。

「…ごめん」

響くんは小さな息をついた。

そしてじっと私を見る。

優しい目。

だけど少し悲しそう。

「…オレに、おまえに好きっていってもらう資格なんてない」

……！！

なんでそんなこと……！！

私は思わず響くんの頬を思いきり叩いた。

響くんは驚いたように目を見開く。

「そんなこと、勝手に決めないでください！」

資格があるとかないとかそういうことじゃないでしょう??

そんな響くんの勝手な思いこみでどうして私の気持ちが否定されなくちゃいけないんですか!?

「資格とか…そんなの関係ないです！私は響くんが好き！それのどこがいけないんですか!?」

「……」

響くんは何も答えない。

それが余計に腹が立ち、同時に悲しくなった。

響くんは……

……それでいいんですか??

そんな勝手な思い込みで自分の気持ちを押さえつけてもいいんですか…??

私はきっと、響くんも私と同じ気持ちだと思っていたのに……

「…私、もう一度響くんとお付き合いしたいです」

私はぽつりと言った。

「でもオレは……」

響くんは少し目を伏せる。

それを見て少し不安になる。

もしかしたら響くんは本当に今は私のことが好きじゃないかもしれない…

もしそうだとしたら私のしていることってただの迷惑……

私はぎゅっと拳を握りしめた。

「…無理にお付き合いしたいとは言いません。響くんが本当に私に飽きてしまったんなら、それはそれであきらめます。だから……」

怖い…

本当は、響くんの本当の気持ちを聞くのが怖い…

だけど……

「だから、響くんの気持ちを教えていただけませんか??」

響くんの気持ちが知りたい。

もしそれが悲しい結果になったとしても…

私は響くんの口からちゃんと聞きたいです……

「…オレは」

響くんは少しためらうように口を閉じた。

けど、目をあげて私を見る。

響くんの頬が赤く染まる。

それにかすかな期待を抱く。

ほんの少しの、だけど私にとっては永遠にも感じるほど長い間をあけて響くんは口を開いた。

「オレも、詩織が好き」

……！！

うれしくて、目に涙があふれた。

瞬きするとそれが頬にこぼれおちる。

「それじゃ、私とお付き合いしていただけますか…?」

「…ああ」

響くんは小さくうなずいた。

…すごい。

夢みたいです…

もう一度響くんとお付き合いできるなんて…!!

「良かったじゃん!一件落着って感じだな!」

突然明るい声がした。

驚いて声のした方を見る。

「か、一樹!?」

響くんが驚いたように言った。

そ、そういえば一樹クンずっといましたよね…??

「なんだよ?オレの存在忘れてたってわけじゃないよな?」

少し怪訝そうな顔をする一樹クン。

私は苦笑いする。

…正直忘れていました。

「…まぁ、いいけどさ。どうせ2人の世界だったもんな」

一樹クンはすねたように口をとがらせる。

「そ、そんなことないですよ！私は忘れてなんかいませんでした！！」

慌ててフォローする。

だけど一樹クンはそこまで気にしていたわけではないようで、すぐに話を転換した。

「そういえば、兄ちゃん学校どうすんの？あの桜井ってやつ同じクラスでちゃんといけんのか？？」

「…それは」

響くんは言葉をつまらせる。

そういえばそうですね…

響くんと桜井サンは同じクラスですし……

もしかしたらまた響くんに何かしようとするかもしれない…！！

そう思うと、突然恐怖と怒りがわいてきた。

そうだ…

まだ一件落着なんかじゃありません……！！

響くんをさんざんな目にあわせた桜井サンをどうにかしないと…！！

「いきなりは無理…だと思う。オレ、あいつ見たら普通じゃいられない気がする……」

響くんはぽつりとつぶやいた。

「響くん……」

自分でそう言えるだけ……

響くんは桜井サンにひどいことをされたんですね……？？

不意に響くんの腕の傷が目に映った。

それが痛々しくって、私は目をそむけた。

あんなにたくさんの傷も…

全部桜井サンにつけられたんですね…？？

私はぎゅっと響くんの手を握った。

「…大丈夫です。響くん」

響くんをこんなひどい目に合わせた桜井サンに…

きっと、私がもっと恐ろしい目に合わせてあげます。

私は絶対に許しませんから。

桜井サンには…

響くんが傷ついた以上に傷ついてもらいます。

☆33話　もう一度☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

最後の詩織が少し怖いです（ー＿ー；）
それに前の話が長かったので少し疲れて短い話に。
あと、そろそろ受験勉強を始めますので少し更新は遅めになると思います…（＊＿＊；

★33話　もう一度★響side

目が覚めた時、オレはあの暗闇の中にはいなかった。

初めに視界に映ったのは見なれたはずの天井。

だけどずいぶんひさしぶりに見た気がする。

上半身をおこしてまわりを見回してみると、そこはたしかに自分の部屋だった。

…オレ、家に帰ってきたんだな。

ぼんやりとそう思ってみたが、あまり実感がわかなかった。

とにかく頭がぼーっとしていてうまく機能しない。

しばらくぼんやりとしていると、ドアが開く音がした。

それと同時に一樹の声が飛び込んでくる。

「兄ちゃん！目覚ましたのか！？」

「…一樹？」

一樹も…

なんかひさしぶりに見た気がするな……

一樹は突然慌てたようにポケットからケータイをとりだしながら部屋をでた。

…何しにきたんだ？あいつ…

まぁいいか。

そういえば、学校行ってない間の勉強遅れてるよなー……

けどなんかやる気でねぇや……

いつもなら暇つぶしな感じでやんのになぁー……

いや、別にそんなんしてるからえらいって言いたいわけじゃないけど。

でもこの調子じゃ今度の期末やばいかもなー…

その前に中間受けてない気がするし…

と、そんな風なことをぼんやり考えていると……

「響くん…」

ドアがあいて、詩織の声が耳に入った。

詩織…？？

いや、聞き間違えか…

詩織がオレのとこに来るわけねぇし……

ぼんやりと声のした方を見る。

そこには本当に詩織がいた。

驚いて、慌てて詩織から目をそらす。

なんで…

なんで詩織がオレなんかの所に…

一気に頭がさえたような気がした。

そうだ…

オレが今ここにいるのは…

暗闇（あのへや）に詩織がきてくれたから……

あんな危ない場所に…

今まで頭の隅にあったことが頭の中心に戻ってきた。

「…何できたんだよ」

「何でって…響くんが目を覚ましたと聞きましたから…」

ぼそっとつぶやくと、詩織がきょとんとした調子で返す。

違う。

何で今詩織がオレの所にいるのかもわかんねぇけど…！！

オレは強く詩織を睨んで怒鳴った。

「違う！何でわざわざ桜井の家まできたのかって聞いてるんだ！」

オレのことなんかどうだってよかったのに…！

もしおまえが危険な目にあったらどうしてたんだよ！？

詩織はビクッと体を震わせた。

「おい、兄ちゃん！せっかく望月センパイがきてくれたのに何だよ、その態度！！」

一樹が詩織をかばうように言った。

「おまえは黙ってろ！」

大体なんでおまえは詩織を止めなかったんだ！？

詩織と付き合ってたんじゃないのかよ！？

本当に詩織が好きだったんなら…

普通…止めるだろ…

オレは軽く息をついて詩織に向き直った。

「…オレは、もうおまえとは何の関係もないんだぞ?」

「…どういう…ことですか…??」

詩織は少し驚いたように言った。

少し言葉につまる。

オレは少し目を伏せて言った。

「だから…オレとおまえはもう別れたんだ。別に特別な関係でも何でもない」

それで…

オレはおまえを傷つけた。

おまえを誰かに傷つけられるのを見ていることしかできないでいることが怖くて…

結局オレは……自分でおまえを傷つけたんだ。

「……!!」

詩織はあらかさまにショックをうけたような表情をした。

しばらくの沈黙のあと、小さな声で言う。

「何の関係もないなんて…そんなことありません…」

……??

何が言いたい…??

そう思い、目をあげる。

詩織は少し頬を染めてしぼりだすように言った。

「私はまだ、響くんのことが好きなんですもの…!!」

……!!

す…き…??

詩織が…

オレの…ことを…??

オレはおまえを傷つけたのに??

いいのか??

こんなオレでも…

…いや。

オレはうつむきながらつぶやいた。

「……おまえ、オレのせいで嫌な思いさせられてたんだぞ??」

詩織は…

オレのせいで桜井に嫌な目に合されてたんだ。

間接的にでも、オレが原因だからオレのせいだ。

「違いますよ！響くんのせいなんかじゃありません！」

詩織は慌てたようにそう言ってくれた。

その言葉が余計にオレが悪いということをオレに意識させる。

「違う、違う…オレのせいだ…オレのせいなんだ……」

オレが全部、全部悪いんだ。

全部オレのせい。

オレは詩織のそばにいてはいけない。

オレがそばにいたら…

詩織は……

なぜか無意識に体が震える。

詩織が…傷つく。

オレのせいで…

嫌だ…

怖い……

詩織が傷つくところを見るのは怖い……！！

不意に手が誰かの手で優しく包まれた。

「違います…響くんは悪くありません」

優しい詩織の声。

オレははっとして顔をあげた。

「…ごめん」

何考えてんだろ、オレ。

自分で詩織を傷つけといて…

何が『怖い』だよ……

……好き、か。

オレはじっと詩織を見た。

詩織が…

まだ、オレのことを好きでいてくれている。

それならまた…

オレは詩織と……

……いや。

甘いことを考えちゃダメだ。

「…オレに、おまえに好きっていってもらう資格なんてない」

オレは詩織に好きって言ってもらえる程大した人間じゃないんだ。

オレは絶対に詩織につりあってなんかいない。

詩織はオレなんかよりも……

パシッ！

突然頬に鈍い痛みが走った。

……！？

驚いて詩織を見ると、詩織は瞳を潤ませながら怒鳴った。

「そんなこと、勝手に決めないでください！」

…詩織？？

「資格とか…そんなの関係ないです！私は響くんが好き！それのど

こがいけないんですか！？」

「……」

オレは何も答えられなかった。

詩織がそこまでオレを想ってくれているというのは素直にうれしい。

どこがいけないかと聞かれても……

そんなのは、ありすぎて答えられない。

「…私、もう一度響くんとお付き合いしたいです」

詩織は小さな声でぽつりと言った。

……

オレだって…

また詩織のそばにいたい。

でも…

「でもオレは……」

オレは詩織のそばにいちゃいけないんだ……

オレは弱いから……

また詩織を傷つけるようなことがあるかもしれない……

「…無理にお付き合いしたいとは言いません。響くんが本当に私に飽きてしまったんなら、それはそれであきらめます。だから……」

詩織は少しためらうように言葉をつまらせた。

ほんの少しの間のあと、口を開く。

「だから、響くんの気持ちを教えていただけませんか??」

……

……オレの…気持ち……

オレの気持ちは決まってる。

オレが詩織に飽きるわけない。

オレの気持ちが変わるはずない。

「…オレは」

次の言葉がでてこない。

いや、言うのが怖かった。

だけど…

詩織はこんなオレと付き合いたいって言ってくれてる。

オレのことを好きって言ってくれてるんだ…

「オレも、詩織が好き」

こんなに人を好きだって思ったのはおまえが初めてなんだ。

それまでそんなの全然興味もなかったのにな。

だから…

またおまえを傷つけてしまうことがあるかもしれないと分かってても…

どうしても…

そばにいたい……

「それじゃ、私とお付き合いしていただけますか…??」

詩織の頬には涙が伝っている。

だけどうれしそうな笑顔。

「…ああ」

オレもうれしくなって笑顔になった。

「良かったじゃん！一件落着って感じだな！」

突然明るい声がした。

…なんだよ。

このいい雰囲気のときに空気読めない奴だな…って、

「か、一樹!?」

そ、そういえば一樹って最初からずっといたような……

「なんだよ?オレの存在忘れてたってわけじゃないよな?」

…完全に忘れてた。

もうなんか詩織のことで頭いっぱいになってたし…

正直一樹なんて目に入らなかったな……

「…まぁ、いいけどさ。どうせ2人の世界だったもんな」

一樹はすねたように口をとがらせた。

……おまえは子供か。

「そ、そんなことないですよ!私は忘れてなんかいませんでした!!」

詩織は慌てたようにフォローした。

…いや、絶対詩織も忘れてたと思うけど。

「そういえば、兄ちゃん学校どうすんの？あの桜井ってやつ同じクラスでちゃんといけんのか？？」

一樹は突然話を切り替えてオレに尋ねてきた。

「…それは」

そうだ…

オレってたしか桜井と同じクラスだったんだよな…

それで目つけられたんだった。

考えるだけで寒気がする。

あの暗闇でのことが頭の中にフラッシュバックした。

「いきなりは無理…だと思う。オレ、あいつ見たら普通じゃいられない気がする……」

…もしかしたらおかしくなるかもしれない。

まず確実に勉強どころじゃなくなると思う。

「響くん……」

詩織がオレの名前を呼ぶ。

……

詩織に余計な心配はさせたくないけど……

でも、どうしても無理だ……

正直に言うと、オレはあいつが怖い。

あいつは何をするかわからないから。

もちろんオレ自信に対して……

それに…

詩織に対して……

ふいに詩織がぎゅっとオレの手を握った。

「…大丈夫です。響くん」

独り言のような言葉。

それはなぜか妙に力強かった。

そして詩織の表情がいつになく真剣な表情で……

少し、嫌な予感がした。

だけどオレはあまりそのことは気に留めずに、また詩織のそばにいれる幸せをかみしめていた。

★33話　もう一度★響ｓｉｄｅ（後書き）

暗い…
なんか最近響が暗いです……
こんな子でしたっけ??

☆３４話　復讐☆詩織ｓｉｄｅ

「響くん、大丈夫ですか…？？」

今日ひさしぶりに響くんが学校にきた。

けどクラスに入った途端に倒れたらしくて…

今は保健室のベッドの中。

「ん…今はなんともない」

響くんはそう私に微笑みかけてくれる。

だけどそれがすごく無理しているように思えて……

私はぎゅっと拳を握りしめた。

…どうしてですか？？

響くんはどうして学校に来るだけで、こんなことにならなくちゃならないんですか…？？

どうして響くんの日常がこんなにもうまくいかなくなるんですか…？？

…それはすべて、桜井サンのせい。

「響くん…私がきっと……してみせます」

「は？詩織？？」

桜井サンがすべて悪い。

なのに桜井サンが普通に日常の生活を送れるなんておかしいでしょう？？

響くんはあなたのせいで学校にくるのも大変なのに……

あなただけなんにもないなんて、私が許さない。

2時間目。

今日は家庭科の調理実習。

私はこっそりと果物ナイフを持ち出した。

そして次の休み時間。

桜井サンを屋上に呼び出す。

「何の用ですの？詩織さん」

見下すように私を見る桜井サン。

そうですよね。

私はどうせあなたみたいなお嬢様じゃないです。

ただの普通の高校生です。

あなたは親の力でどんなことでもできるけど、私は何もできない。

だけど、私はあなたと違って自分自身で動くことができるんですよ?

「桜井サン…私、ここであなたにひどいことされました。私だけじゃなくて…一樹クンも…」

桜井サンはふんっと鼻で笑った。

「そうでしたっけ?そんなこと忘れてしまいましたわ」

「…それどころか、あなたは響くんをたくさん傷つけた。そうですよね…?」

あんな真っ暗な部屋に閉じ込めて…

響くんの日常を奪って……

私から響くんを遠ざけた……

「私はあなたを絶対に許さない。そう決めたんです」

桜井サンはくすっと笑った。

「そういえば、そんなこと言ってましたわね」

私は桜井サンをフェンスにむけて思い切り突き飛ばした。

「きゃっ！？」

ガシャンッ！

フェンスが大きな音を立てて、桜井サンが驚いたように私を見る。

私は桜井サンをフェンスに押さえつけて、調理室から持ち出した果物ナイフを手にとった。

途端に桜井サンの表情が恐怖にひきつる。

「え……何するつもり…？？」

「…決まっているでしょう？あなたが響くんにしたことと同じことです」

響くんはたくさんあなたに傷つけられたんですから……

あなたも同じだけ傷つくのは当然でしょう？？

いや、それ以上に傷つけてあげます。

あなたがもう笑うことさえできなくなるくらいに……

「私にそんなことしたらどうなるか分かっているの！？」

桜井サンは必死になって抵抗してきた。

そんな桜井サンのリボンをほどき、手をフェンスに縛り付ける。

私も力はないほうだけど、自分じゃ何もできない桜井サンと比べたら、そんなの簡単。

私は桜井サンの胸ポケットからケータイを取ってフェンスの外に放り捨てた。

「残念ですね。もうお家に連絡することなんてできませんよ？」

そっと桜井サンの頬に果物ナイフを突き付ける。

少し力をいれると、頬からぷっくりと血の玉がでてきた。

「痛いっ！やめて……！」

じわっと涙をうかべる桜井サン。

それを見て少し躊躇する。

だけどすぐに首をふった。

…ダメです。

響くんはきっと同じようなことを桜井サンにたくさんされた。

桜井サンが同じことをされるのは当然です。

それなのにどうしてそんな顔するんですか？？

そんな顔すれば許してもらえるとでも思っているんですか…！？

…甘いです。

私は響くんのためにあなたを傷つけると決めた。

だから…

あなたのこと…許すはずがないでしょう…？？

そう思っているのに…

そう思っているのに……

手がそれ以上動かなかった。

桜井サンの私を見る怯えた目が響くんに重なって……

それ以上手を動かすことができなかった。

「…どうして…ですか…？？」

手がカタカタと震える。

どうして…

どうして私は何もできないんですか…！？

ただこの人がしたことと同じことをしているだけなのに…！！

どうして手が動かないんですか…！？

どうしてこんなに震えてしまうんですか…！？

私はきっと桜井サンを睨んだ。

ぎゅっと果物ナイフを持っている手をもう一方の手で握る。

そしてそれを大きく振り上げた。

その時…

ドアが開く音がした。

「やめろっ！！」

耳にとびこんでくる大好きな声。

「響…くん…？？」

どうして響くんが…！？

私が呆然としている間に響くんは私から果物ナイフをとりあげた。

そして桜井サンを縛りつけていたリボンを外し始めた。

「どうして…？どうして桜井サンを助けようとするんですか…？？」

響くんは何も言わず作業を続ける。

桜井サンはうれしそうに響くんを見た。

「滝沢クン…！やっぱりあなた…」

響くんはそんな桜井サンを強く睨みつける。

「黙れ。ほどいてやったから早くオレの視界から消えろ」

「ひ……」

桜井サンは目を大きく見開いて逃げるように屋上からでていった。

響くんはそれを見届けると、今度は私を睨みつけた。

そしてあきれたように言う。

「…おまえ、何してんの？」

「……私はただ…桜井サンにも響くんと同じ思いをしてもらおうと……」

私はうつむいた。

響くんの顔がまともに見れない。

なんだか自分がとてもいけないことをしていた気がした。

「オレ、そんなことして欲しいって言った？」

私は首を横にふった。

そんなこと…

響くんは一言も口にしていません……

ただ…

私の気がおさまらなくて……

響くんだけが傷ついたっていうのが許せなくて……

だから…

「私は…響くんのために……」

「オレのためを思ってんなら、そんなことするな！」

響くんに思いきり怒鳴られて、涙があふれた。

「おまえが桜井と同じになってどうすんだよ！？あんな奴ほっとけばいいんだ！」

涙が頬を伝う。

「……ごめんなさい」

小さな声で謝ると、響くんは小さなため息をついて私の頭を軽く叩いた。

「…まぁ、おまえの気持ちはうれしいけど…もう自分が汚れるようなことするのはやめろよ」

顔をあげると、響くんが優しい表情で私を見てくれていた。

「ふぇ……」

余計に涙があふれてポロポロとこぼれおちた。

響くんはそれを見て慌てたように言う。

「な、なんで泣くんだよ!?」

「ごめんなさい…ごめんなさい…!!」

私…

私どうかしてました…

響くんが傷ついたんだから、桜井サンも同じだけ傷ついていいなんて…

そんな考え方…おかしいですよね……

もうすぐで私…

桜井サンと同じになるところでした……!!

「響くん…ありがとうございます……!!」

響くんは困ったように笑って私の頭を撫でてくれた。

次の日、響くんのクラスで桜井サンが転校したと話されたらしい。

「良かったですね！これで私達も安心できるというものです！」

「んー…まぁ意外とおまえのおかげかも……」

…そうですね。

私はいけないこととしましたけど……

結局良い結果になったのでよかったのかも…！

あ！

いや、そんなこと思ってしまうなんて！

私って以外と性格が悪かったのでしょうか……

ま、まぁ一件落着ですよね！

とりあえずこれで、響くんと私に普通の毎日が帰ってくる……

「えへへ♪」

「…何笑ってんの？？」

怪訝そうな顔をする響くん。

私は笑顔を返した。

「なんでもありませんよ！」

これからもなにごともなく響くんがそばにいてくれる。

それ以上に幸せなことなんて考えられません。

私、今すごく幸せです。

☆３４話　復讐☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

最近すごく怖い話になってきました；
詩織はこんな怖い子じゃないのに……
ちなみに今回は響ｓｉｄｅはナシにします。
なんとなくすっごく短くなりそうなので…（－＿－；）

☆35話　ケンカ☆詩織ｓｉｄｅ

「響くん！テストの点数どうでしたか！？」

帰り道、私は自信満々で響くんに尋ねた。

ふふふ……

今回のテストは絶対に私が勝ってること間違いなしです！

どうしてですって？？

驚かないでくださいよ…？？

実は私！

今回のテスト、平均７０をとったんです！！

それに加えて響くんは長い間授業にでていなかったわけなので……

さほど点数はとっていないはずだ、ということなんですよね！

あー！

なんだか響くんにテストで勝てるって気持ちいいですねー！！

「んー…いつもどおりだな」

…へ？？

いつも…どおりって…

「…もしかして、全部満点だとか……」

「そうだけど」

響くんはにっと笑って私に尋ねた。

「おまえは??」

「……平均７０です」

どーせ響くんには負けるに決まってますよ……

ああ、一瞬でも響くんに勝っただなんて妄想を抱いた私がバカみたいです……

私は大きなため息をついた。

「もう…どうして響くんは長い間学校にきていなかったのに普通に満点をとれるんですか??」

授業の内容も分からないはずですのに…

満点をとれるなんておかしいですよー……

「だってオレ、頭良いから」

響くんは指で自分の頭を軽く叩いて言った。

カチンッ！

……今のはちょっと頭にきましたね。

たしかに響くんは頭が良いと思いますけど……

ですけどそれ、自分で言いますか？？

それにちゃんと授業をうけていたのに７０点しかとれない私がバカみたいじゃないですか！

「…そうですよね。どうせ響くんは頭がよろしいんですもの。私みたいなバカがかなうわけないですよね！」

「いや…別におまえがバカってことじゃねぇけど……」

「いいえ！間接的にバカって言ってます！！」

だってさっき私に点数聞いたときだって、なんだか見下した感じだったじゃありませんか！！

ええ、どうせ私は満点なんかとれっこないですよ！

一教科でも満点をとれたら奇跡です！

「言ってねぇって！じゃぁなんて答えればいいんだよ！？カンニングしたとかなんとか答えればいいのか！？」

「そういうことじゃないですけど…でも！もっと他に言い方がある

でしょう!?自慢とか聞いてる方は腹が立つだけです!」

もっとほら…

謙遜するとかはないんですか!?

「本当のこと言っただけだろ!?別に自慢じゃねぇし!大体おまえが点数とか聞いてくんのが悪いんだろ!?」

響くんはきっと強く私を睨みつけた。

……なんですか、こういうときだけ自分の顔が怖いの利用して……

でも私別に怖がったりしませんからね!

もう慣れました!

私はふんっと鼻で笑った。

「響くん、そうやって怖い顔してれば私が怖がるとでも思ってるんですか??いっておきますけどもうその顔慣れましたから。もう怖くありませんから」

響くんは眉をピクリとあげた。

「は?別にそんなつもりじゃねぇけど」

そんなつもりじゃない??

どう考えてもそんなつもりでしょう!?

「大体なんで響くんっていつも眉間にしわよせてるんですか?そんなのだから女の子にもてないんですよ?自分と一樹クンとの違い考えたことあります??」

「はぁ!?なんでいきなりそんな話になんだよ!?別にもてなくてもいいし。じゃ言うけど、おまえなんでいつも敬語なんだよ?男受け狙ってんの??」

!!

男受けって…!!

「そんなわけないでしょう!?これは小さいころからの癖です!」

響くんはしばらく黙るとため息をついた。

「あー、もうなんか気分悪い。オレ先帰るから」

「ええどうぞ!さっさと帰ってください!」

響くんは私をおいてスタスタと早歩きした。

私はその場に立ち止まる。

もう!

なんなんですか!?響くん!

まさかあんな人とは思いませんでした!

あー！！

腹が立ちます！！

私は響くんの姿が見えなくなるのを待ってから足を進めた。

次の日。

今日は祝日なので学校が休みです。

……なんにもすることがありませんねー。

ちょっと響くんに買い物にでも付き合っていただきましょうか？

そう思いなんとなくケータイを手にする。

そしてメールを打とうとしてピタリと手が止まった。

あ……

そういえば昨日私達ケンカしたんでした。

昨日の今日で誘うのはちょっとあれですねー……

……他の人を誘いましょう。

そう思ってアドレス帳を開こうとした時。

ピンポーン

突然インターホンが鳴った。

??

宅配便か何かでしょうか??

玄関のドアを開けてみると、家の前に笹川サンが立っていた。

「あ、詩織ちゃん!こんにちわー!」

「笹川サン??どうしたんですか??」

「んー…ちょっと相談があるんだ」

相談??

休みの日に相談なんて…

よっぽど大きな悩みごとがあるんでしょうね…

「…まぁここではあれなので中に入ってください」

「うん、ありがとう。お邪魔します」

私は笹川サンをとりあえずリビングに案内した。

そしてお茶とお茶菓子をだす。

「それで…相談って何ですか??」

私が尋ねると笹川サンは力なく笑った。

「…実は大河とケンカしちゃったんだ……」

「富岡サンと??」

笹川サンと富岡サンがケンカなんて珍しいですね。

お二人はとても仲がよろしいのに……

「うん。私…大河が浮気してるとこ見ちゃって……」

「浮気ですか!?富岡サンが!?」

「うん…昨日大河の家の前に可愛い女の子がいて…大河とすっごく楽しそうにしゃべってたの」

笹川サンは少し目に涙をためた。

「それを大河に言ったら…大河、あの子はいとこだって言い張って…だけど私、それが信じられなくて…」

「それは…信じられませんよね……」

いとこって…

富岡サンももうちょっとうまい言いわけを考えるべきです！

笹川サン…

かわいそうです……

「でも、私家に帰って…そういえば大河に同年代の女の子のいとこがいたことを思い出して…」

「えっ!?本当にいたんですか!?」

笹川サンは小さくうなずいた。

「だから…私、大河に謝りたいんだけど…昨日ひどいことたくさん言っちゃって…謝るに謝れないの…」

「…そうですか」

……そういえば、

私も昨日、響くんにひどいこと言ってしまいましたね……

で、でも!

あれは元はと言えば響くんが自慢してくるから悪いんですから!!

……だけど、

あれくらいで怒る私も悪いですよね……

私も…

響くんに謝りたいです……

「ねぇ、詩織ちゃん。大河に謝るの協力してくれない??」

笹川サンは涙をぐっとぬぐって言った。

「…はい、いいですよ!」

笹川サンが富岡サンに謝るのを見届けたら……

私も響くんに謝りに行きましょう。

私はそう誓い、ケータイで富岡サンに電話をかけた。

「とりあえず話があるので駅まできていただけるようにお願いしましたよ」

「本当!?ありがとう、詩織ちゃん…!」

しばらくしてから駅に向かうと、すでに富岡サンらしき人影がいた。

「どうしよ…もし許してくれなかったら…」

「大丈夫ですよ!富岡サンならきっと許してくれます」

だって富岡サンは本当は優しい人ですものね!

そして……

響くんも優しい人だから…

きっと謝れば許していただけますよね…??

「大河!!」

笹川サンは富岡サンの方に走っていった。

富岡サンは笹川サンをみとめて、驚いたような表情をする。

「美空!?なんでおまえ…」

私も少し小走りでかけよる。

そして富岡サンのそばにいた人を見て思わず大きく目を見開いた。

「響くん!?」

どうして響くんが富岡サンと一緒に…??

響くんは一度じっと私を見ると、ふんっとそっぽを向いた。

や、やっぱりすごく怒ってますよね……??

私、本当に謝って許していただけるんでしょうか…??

不安に思っていると、隣で笹川サンの大きな声がした。

「あの…昨日は疑ったりしてごめんなさい！私ったら大河に女の子のいとこがいたこと忘れてたの！」

隣を見ると、笹川サンが富岡サンに大きく頭を下げている。

「……」

富岡は何も言わずじっと笹川サンを見ていた。

そして小さな声で口を開く。

「オレも…ごめん」

「えっ？？」

笹川サンは驚いたように頭をあげる。

富岡サンは苦笑いして頭をかいた。

「そりゃいとこでもオレが他の女の子といるの見たら嫌だよな！しかもオレ、昨日結構嫌なこと言ったし」

「大河……！！」

うれしそうに富岡サンを見る笹川サン。

どうやら一件落着みたいですね！

なんとなくすごく簡単に片付いた気がしますけど…

でも、どちらも謝りたかったってことですよね？

本当に良かったです！

…それで、

私達も一件落着できるんでしょうか…？？

「詩織」

突然響くんに声をかけられた。

ビクッと思わず体が震える。

ど、どうしましょう！？

まだ落ち着いて話せるかどうか…！！

「な、何か用ですか！？」

ああ！

少しとげのある言い方で言ってしまいました！！

反応は……

「……」

えっと…

すごく複雑そうな顔というか…

なんだか怒りを必死にこらえてるみたいというか……

「えっと…昨日、なんか悪かったな」

…え？？

まさか、響くんから謝ってくれるなんて……

響くんはそっぽを向きながら言った。

「オレ、本当に自慢とかそういうつもりじゃねぇし…冗談のつもりで言ったんだけど……」

冗談……

そういえば…

お友達とお話するとき、そんな冗談言ったりしますよね。

なんだ、そうだったんですか。

響くんって本当に頭良いから…

冗談って思えなくて……

「あの…私の方こそ…ちょっとしたことで怒ってすいません……」

響くんが冗談で言ったことで怒っちゃって……

あ、そういえば！

怒って響くんにひどいことを！！

「えっと！その…大丈夫です！響くんはちゃんと女の子にもてますから！」

響くんは驚いたように顔を赤くさせた。

「い、いや、別にそれはどうでもいいけど…」

「え？でも少しは気にしていたでしょう？？」

私がからかうような気持ちで聞いてみると響くんはさらに顔を赤くさせて答えた。

「別にオレはおまえが…！！」

最後の言葉はあまりにも小さくて聞こえませんでしたけど……

なんとなく、私は響くんが何を言いたかったのか分かった気がした。

うれしくて思わず顔がほころびる。

「私、敬語を使うことで男の人の気をひこうだなんて思ってません。私も響くんにだけ思っていただけたらいいですから！」

私は別に他の男の人に好かれたいなんて思ってません。

私には響くんがいればそれでいいですから！

響くんは頬を染めたままにっと笑った。

私も笑顔を返す。

…たまにはケンカすることも必要なのかもしれませんが……

私はやっぱり響くんの怒った顔よりも笑った顔を見る方が好きです。

響くんもきっと…

そう思ってくれていますよね？？

☆35話　ケンカ☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

ひさしぶりに普通の甘めの話をかきたかったんですけど…
なぜかケンカに…（￣▽￣；）
でも言いあいしているところをかくのが結構楽しかったです♪

★35話　ケンカ★響side

「響くん！テストの点数どうでしたか！？」

帰り道、詩織がえらく自信ありげにそう聞いてきた。

「んー…いつもどおりだな」

まぁ今回はちょっと苦労したけど。

ひさしぶりに必死でテスト勉強ってのをした気がする……

「…もしかして、全部満点だとか……」

「そうだけど」

まさか詩織、オレにテストで勝てると思ってたのか？？

…まぁ、一応点数は聞いといてやるか。

「おまえは？？」

「……平均７０です」

平均７０か。

まぁ、詩織にしてはまぁまぁ良い方だと思うけど…

けどそれでオレに勝てるかもって…

まだ相当甘いな。

詩織は大きなため息をついた。

「もう…どうして響くんは長い間学校にきていなかったのに普通に満点をとれるんですか??」

いや…

そりゃ相当勉強したからだよ……

でも詩織に勉強したなんてあんまり言いたくねぇな…

「だってオレ、頭良いから」

オレは冗談のつもりでトンと軽く頭を叩いて言った。

本当に冗談で言ったつもりだったんだが……

「…そうですよね。どうせ響くんは頭がよろしいんですもの。私みたいなバカがかなうわけないですよね！」

なぜか、詩織は怒った風にそう言ってきた。

「いや…別におまえがバカってことじゃねぇけど……」

別にバカとか一言も言ってねぇし……

「いいえ！間接的にバカって言ってます！！」

間接的にって…

どうとらえたらそうなるんだよ??

ってか、なんでこいつこんなに怒ってんだ??

「言ってねぇって!じゃぁなんて答えればいいんだよ!?カンニングしたとかなんとか答えればいいのか!?」

オレはなんとなくむきになって言った。

「そういうことじゃないですけど…でも!もっと他に言い方があるでしょう!?自慢とか聞いてる方は腹が立つだけです!」

詩織も負けじという風に言いかえしてくる。

自慢って…!

こいつ、冗談ってことも分からないのか!?

「本当のこと言っただけだろ!?別に自慢じゃねぇし!大体おまえが点数とか聞いてくんのが悪いんだろ!?」

オレは無意識に強く詩織を睨みつけた。

詩織はそんなオレを見て、ふんっと鼻で笑う。

「響くん、そうやって怖い顔してれば私が怖がるとでも思ってるんですか??いっておきますけどもうその顔慣れましたから。もう怖

くありませんから」

「は？別にそんなつもりじゃねぇけど」

怖い顔って……

オレってそんな顔してるか？？

それに普通それを本人の前で言うか？？

あー…

なんか腹立つな……！！

「大体なんで響くんっていつも眉間にしわよせてるんですか？そんなのだから女の子にもてないんですよ？自分と一樹クンとの違い考えたことあります？？」

眉間にしわ？？

オレ別に意識して作ってるわけじゃねぇし！

大体オレは別に女にもてなくたっていいし、それに今一樹は全然関係ねぇし！！

「はぁ！？なんでいきなりそんな話になんだよ！？別にもてなくてもいいし。じゃ言うけど、おまえなんでいつも敬語なんだよ？男受け狙ってんの？？」

そりゃ敬語で話す感じの控えめな女子が好きな男っているもんな！！

まぁそんな男は大概キモイ奴ばっかだけどな！

「そんなわけないでしょう！？これは小さいころからの癖です！」

むっとしたように言いかえしてくる詩織。

…なんか言いあいしてる時間がもったいないな。

オレはため息をついた。

「あー、もうなんか気分悪い。オレ先帰るから」

「ええどうぞ！さっさと帰ってください！」

オレは詩織をおいて早歩きで駅に向かった。

ったく…

あいつ、わけわかんねぇ…

大体あいつはどうでもいいことですぐ怒るとこあるからな。

あんな奴と話してても時間の無駄だ。

さっさとうちへ帰ろう。

そう思い、オレは少し足どりを速めた。

「へー。なんか見ない間に大変だったのな」

富岡がお茶をすすりながら言った。

「まぁ…って、なんでおまえがうちにいんだよ??」

「なんでって…普通に遊びにきただけだけど」

遊びにきたって…

別に友達でもなんでもねぇのに……

まぁオレも暇だったから別にいいけど…

けどなんでこいつ、オレの家知ってたんだろ??

「それでさ、とりあえずオレの話聞いてくんない??」

富岡は大きなため息をついた。

「なんで「実は美空と変な感じになったんだよな…」

……オレ、まだ聞くとか言ってないんだけど。

けど、富岡はおかまいなしで話し始める。

「昨日うちにいとこがきてたんだよ。で、そのいとこって結構可愛い女の子なんだけどさ、その子を見送ってるのをちょうど美空に見られたんだ。…それで美空、オレが浮気したって勘違いして大喧嘩

になったんだけど…」

「…へぇー。それは災難だったな」

ケンカ、か。

そういえばオレも昨日、詩織とそんな感じになってたよな。

…こいつもなんかオレと同じ感じになってんだな……

まぁ理由は全然違うけど……

ちょっとだけ同情の余地がある。

「で、おまえはどうしたいんだよ?」

「そりゃ美空が謝るまで絶対に許すつもりはないけど…まぁ、謝られたらこっちも謝ってもいいかなー?なんて…」

…それって結局謝りたいんじゃないのか??

てか、わざわざオレにそんなこと言いにきたってことは仲直りしたいってことだろ??

「そんなんじゃなくておまえから…」

オレが言いかけた時、富岡のケータイが鳴った。

「あ、悪い。電話だ」

富岡はオレに一言いって電話にでる。

電話ってもしかして笹川じゃないのか？

なんかこいつら、簡単に仲直りしそうだな…

「あ、詩織ちゃん？どうしたの？」

……？？

詩織！？

オレは驚いて富岡の方を見た。

詩織が…富岡に電話？？

なんで？？

…ああ、そう。

オレとケンカした途端に他の男に連絡と。

やっぱあいつだけはわけわかんねぇ……

通話が終わったのか、富岡はパタンとケータイを閉じた。

「なんかさ、詩織ちゃんが駅まできてくれないかだって。だからこれからオレ行ってくるわ」

は？？

これから詩織と会うのか！？

「おまえ、笹川のことはいいのかよ！？」

「せっかく詩織ちゃんが誘ってくれてるのになんで断るんだよ？」

…ダメだ、こいつ。

オレは家を出て行こうとする富岡の後を慌ててておった。

「待てよ！オレも行く！」

直接詩織に会って問いただしてやる！

駅につき、しばらく待っていると向こうの方に詩織らしき人影が見えた。

ふん…

オレもきているってのに呑気な奴だな。

さ、どんな言いわけをするのか楽しみだ。

…ん？

「おい、詩織の隣にもう一人いないか？？」

たしかに詩織の隣にもう一人人影が見えた。

そしてもう一人の方がこっちに向かって走ってくる。

「大河！！」

「美空！？なんでおまえ…」

笹川？？

なんで笹川が…

少し考えて、ふと気がついた。

…あ、そういうことか。

詩織は笹川に頼まれて富岡を呼び出したと……

…なんだ、別に浮気とかそんな感じのじゃなかったのか。

そう思い少し安心する。

詩織は笹川の後に小走りでこっちに向かってきた。

そしてオレを見て驚いたように目を見開く。

「響くん！？」

オレは詩織を見てそっぽを向いた。

なんとなく顔合わせ辛い……

一応こっちもケンカしたばっかだしな。

「あの…昨日は疑ったりしてごめんなさい！私ったら大河に女の子のいとこがいたこと忘れてたの！」

隣で笹川の大きな声がした。

「……」

富岡は何も言わずに笹川を見ている。

何してんだよ？

せっかく笹川から謝ったんだからおまえも謝らねぇと……

てか、さっき謝られたら謝るって言ってただろ？？

そう少しイライラしながら見ていると、富岡は小さな声で口を開いた。

「オレも…ごめん」

「えっ？？」

「そりゃいとこでもオレが他の女の子といるの見たら嫌だよな！しかもオレ、昨日結構嫌なこと言ったし」

富岡は苦笑いで言った。

……ちょっと自意識過剰発言。

「大河……！！」

けどうれしそうに富岡を見る笹川。

んー…

それでいいのか……

大喧嘩って言ってたわりにはかなり簡単に終わった感じだな……

……

…どうせだったら、オレもこの機会に謝っとくか？？

けどなんでオレが先に謝るんだ？

どう考えても勝手に怒りだした詩織が悪いし……

…いや、でも絶対に詩織は謝らないと思う。

ずっと詩織とこんなままでいるのも嫌だし……

ここはオレが大人になるべきだ。

「詩織」

オレが声をかけると、詩織はびくっと体を震わせた。

「な、何か用ですか!?」

「……」

なんかその言い方むかつく……

せっかくこっちが謝ってやろってのに……

…いや、さっき大人になるって決めたばっかだろ??

こんなことくらいで怒ってどうすんだよ??

オレはなんとか怒りをこらえて口を開いた。

「えっと…昨日、なんか悪かったな」

詩織は驚いたように目を大きく開く。

オレはそっぽを向いて言った。

「オレ、本当に自慢とかそういうつもりじゃねぇし…冗談のつもりで言ったんだけど……」

まぁちょっとは自分は頭いいかもって思ってるけど…

今回のは結構勉強した結果だからな。

詩織は少し迷った風にして、そしてぺこりと頭を下げた。

「あの…私の方こそ…ちょっとしたことで怒ってすいません……」

そして頭をあげて慌てたように言った。

「えっと！その…大丈夫です！響くんはちゃんと女の子にもてますから！」

！！

いや…

別にオレはもてるとかそんなのはどうでもよかったんだけど……

けど……

なんか詩織に言われると照れるな……

「い、いや、別にそれはどうでもいいけど…」

「え？でも少しは気にしていたでしょう？？」

詩織はからかうような笑顔でそう聞いてきた。

まぁ、一樹と比べられたのはなんとなくむかついたのはむかついた。

けど…

「別にオレはおまえが…！！」

オレはおまえがオレのことを好きって思ってくれるんだったら……

あとは別にどうだっていいんだけど……

詩織ははにかんだような笑顔を浮かべた。

「私、敬語を使うことで男の人の気をひこうだなんて思ってません。私も響くんにだけ思っていただけたらいいですから！」

……！！

顔が熱くなる。

だけどオレはうれしくて、詩織に笑顔を向けた。

詩織もオレに笑顔を返す。

…やっぱ、ケンカしてるのは時間の無駄遣いだな。

こうやって笑いあってる方がずっといい。

オレはあらためてそう思った。

★35話　ケンカ★響side（後書き）

更新のペースがかなり遅くなってきました…
多分これからももっと遅くなると思います（一_一；）

☆36話　事故☆詩織ｓｉｄｅ

「よし！できました！」

私はバースデーカードを書き終え、小さな息をついた。

今日は7月2日。

響くんの誕生日。

…ってことを私は昨日知ったばかりなんですけどね；

昨日の昼休みに響くんがいきなり、

『そういえば明日オレの誕生日だったっけ』

とか言いだしますから……

私、放課後に慌てて誕生日プレゼントを買いに行ったんですよ…？？

まぁ丁度金欠だったのでシャーペン一つしか買えませんでしたが…

で、でも！

気持ちが伝えられれば十分ですし！

元はといえば響くんが私に誕生日のこと教えてくれないのがいけないわけですから！！

…よし！

さっそく響くんの家に行きましょう！

私は誕生日のプレゼントを鞄に入れて家をでた。

響くんに何の連絡もしてないですけど…

大丈夫ですよね？？

響くんは結構休日に家にいる割合が高いですし！！

いきなり行ったら、響くんどんな顔するでしょうか？？

考えるだけで笑顔がこぼれる。

早く響くんに会いたくて、自然と早足になった。

赤色の信号を見て、横断歩道の前で立ち止まる。

もう！

私もそれなりに急いでるのに！！

どうして信号ってこういうときにかぎって赤なんでしょうか…？？

考えているうちに信号が青に変わって…

私は同時に足を進めた。

プー！！

突然、クラクションの音が聞こえた。

え…？？

ふと右を見るとすごいスピードで車が私に向かってきていて…

…このとき、向かい側の歩道に走っていればあんなことにはならなかったのかもしれない。

だけど私は一歩も動けなかった。

ドンッ！

大きな音がして、体に強い衝撃が走って…

気がついたら私は地面に倒れ伏していた。

信じられない程の痛みが私を襲って…

それなのに声もでなくて…

視界がぼんやりと霞んで…

意識がどこかにいってしまいそうになる中、

頭の中に響くんが浮かんだ。

響くん…

ごめんなさい…

せっかくの誕生日なのに…

せっかくプレゼントも買ったのに…

私、あなたの所にいけないみたいです…

目を閉じたらもう目を開けることができなくなりそうで、

必死に目を閉じることを拒んだ。

だけど重くなる瞼にはあらがえなくて、

視界が真っ暗になった。

☆３６話　事故☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

大好きです☆２の詩織バージョンです。
多分この話は更新がかなり遅くなりそうで完結するかわかりませんが…
できればお付き合いしていただければうれしいです☆

☆37話　記憶喪失☆詩織ｓｉｄｅ

……り……おり……

誰かの声が聞こえて、私はゆっくりと瞼をあけた。

眩しい光が目に飛び込んでくる。

そして私の顔を覗き込むきれいな男の子が見えた。

「詩織！！」

男の子は小さな息をつくと、そっと私の髪をなでた。

「良かった…もう目ぇ覚まさないかと思った」

すごく優しい目。

私の髪に触れる手もすごく優しくて…

でも…

わからない。

この人は……？？

「あなたは…誰ですか？？」

「えっ…？？」

男の子は目を大きく見開いた。

だけどすぐにくっと笑う。

「こんなときに冗談言うなよ。オレのこと忘れたのか??」

忘れた…??

忘れたというか…

もともと知らない人のような……

いえ、でもこの人は私のことを知っている。

ということは…

「あなたは私の知り合いですか??」

男の子の顔から笑顔が消えた。

「…おい、本当に冗談はやめろよ」

「…ごめんなさい。本当に知らないんです」

どんなに考えても…

私の記憶の中にはこの男の子がいなくて…

本当にもともと知らないとしか考えられない……

「…そうか」

男の子はぽつりとつぶやくと、私に微笑みかけた。

「分かった。…また来るよ」

それはさびしそうな笑顔で、私はそれをどこかで見たような気がした。

「まっ…！」

病室を出て行こうとする男の子を呼びとめようとして、ふと思いとどまる。

…もしかしたら、あの人は病室を間違えただけなのかもしれない。

見覚えがあると思ったのはきっとただの勘違いです。

パタンと小さな音を立てて扉が閉まる。

私はそれをぼんやりと見つめた。

…だけど、

どうしてあの人は私の名前を知っていたんでしょうか??

やっぱり、私の知り合い??

だけど見覚えがありませんし……

もしかして伊吹の友達でしょうか??

伊吹が私のことを紹介して私を知っているとか。

けど、たとえそうだったとしても、いきなり会ったこともない人を呼び捨てにするでしょうか??

……それに、

これは自意識過剰なのかもしれませんが……

あの人の私を見る目は……

とても優しくて…

あんな目、普通簡単にはできない。

あの人はきっと私のことを特別な何かって思ってくれてる……??

…なんて、

やっぱり私は自意識過剰すぎます。

…本当に、あの人は誰だったんでしょうか…??

「詩織！」

聞きなれた声がして、扉が勢いよく開いた。

「お母さん、お父さん…」

「やっと目が覚めたんですね！良かった！」

お母さんはうれしそうに笑ってぎゅっと私を抱きしめた。

「まったく…いつも車には気をつけろっていってただろう??」

ぶつぶつ言いながらも、お父さんはうれしそうな表情をしていた。

「ごめんなさい…だけど、大丈夫ですよ」

私はにっこりと2人に笑いかけた。

そしてふと思った疑問を口にする。

「…あれ?でもどうして私、病院なんかにいるんですか??」

「覚えてないのか?おまえ、車にひかれたんだぞ??」

少し怪訝そうな顔をするお父さん。

そんなお父さんを見てお母さんはくすくすと笑った。

「事故のことを覚えてないことはよくあるんですよ。だから気にしなくても大丈夫です」

「…まぁ、そうだな」

お父さんも少しほっとしたように笑う。

なんだ。

私は事故にあったんですか。

だから病院にいるんですね。

それじゃしばらく入院ですかね??

「あ、でもあれですね…今は丁度高校受験がせまっているというのに、入院しなくちゃいけないなんて…」

私が何気なく言うと、2人は顔を見合わせた。

「…え??何言ってるんですか?詩織。高校受験はもうとっくに終わったじゃないですか。あなたはもう高校二年生でしょう?」

「…終わった??二年生…??」

私は首をかしげた。

お母さん、何を言っているんでしょうか…??

私はまだ中学三年で、今は受験勉強の真っ最中だというのに……

お父さんははっとしたような顔をして、お母さんに何かを耳打ちした。

お母さんの表情が驚きに変わる。

「え…？？それじゃ詩織……」

「…なんですか？？」

２人の反応に、少し怖くなってくる。

私…

何かおかしいこと言いましたか…？？

「詩織、今おまえは何歳だ？？」

「…？？１５ですけど…」

え？

そうですよね？？

それで今、私はすごく賢い高校に行こうと勉強中で……

「…分かった」

お父さんはうなずくと、お母さんを連れて病室を出ていった。

その後、私はお医者さんにいろいろなことを聞かれて、レントゲンをとられたりした。

「どうやら高校に入ってからの記憶がないようですね」

どうやら、私は軽い記憶喪失になっているらしい。

お母さんとお父さんによると、私は目指していた高校に無事入学し、もう二年生になっているそうだ。

…本当に、全く覚えがないんですけど。

「それでですね。初めに病室に男の子がいたでしょう??」

「はい…」

あのきれいな人…ですね。

「あの子は詩織の彼氏なんですよ??」

「えっ!?そうだったんですか!?」

全く覚えていません……

それに…

あんなきれいな人が私の彼氏だったなんて…

信じられないです……

「あ、そうだ!もう一度あの子呼びましょうか??高校のこととかいろいろ聞けると思いますし!」

「え…で、でも…」

少なくとも今の私はあの人のことを全く知らないのに……

ちゃんとお話できるでしょうか??

少し不安に思ってしまう。

だけど…

もう一度、あの人に会ってみたい。

そう思った。

「はい…。お願いします」

次の日、あの男の子がきた。

「詩織……」

男の子は不安気な表情で私のベッドの隣の椅子に腰かけた。

この人が…

私の彼氏だったんですか…??

こんなに目が覚めるほどきれいな男の子が……??

「…ええと、お名前を教えていただいてもよろしいでしょうか??」

「…滝沢響だ」

「滝沢……響……サン？？」

どこかで聞いたことのあるような名前のような気がした。

滝沢サンはうなずくと、じっと私を見た。

とくん……

心臓が少しだけ強くなる。

「…おまえ、本当にオレのこと忘れたのか？」

少しさびしそうな声。

「はい…」

「そうか……」

滝沢サンは悲しそうにうつむいた。

気まずい沈黙が流れる。

私は慌てて滝沢サンに質問してみた。

「ええと…私、高校でどんな感じだったんですか？？そういうのも全然わからなくて……」

「…そうだな」

滝沢サンは顔をあげるとゆっくりと私のことを話してくれた。

口元にはほんの少しの笑み。

そしてその口からでてきた私は、私の全く知らない私。

全く知らない自分がそこにいた。

「でな?おまえ、前にオレが1人だからわざわざかまってやってるみたいなこと言いながら、誰とも話すなとか言ってくるんだよ。わけわかんねぇだろ??」

「そうですね…すっごく矛盾してます…」

「だよな!まぁ…でもそれがなんかうれしくて……」

少し照れたように笑う滝沢サン。

滝沢サンは本当に楽しそうに前の私のことを話してくれる。

きっと…

それだけ私は滝沢サンに大切にされてたんですね……

なぜか少しだけ胸が締め付けられるような感覚がした。

「…ありがとうございます。今日はもういいです。また聞かせてもらいますか??」

これ以上聞くとこの変な気持ちが更に大きくなってしまいそうで、私はそう言って滝沢サンに笑いかけた。

「…ん、分かった」

滝沢サンも私に微笑みかけてくれて…

ドキッ…

心臓が強く鳴るのを感じた。

滝沢サンが帰った後、私はベッドの上で1人、さっきのよくわからない気持ちについて考えてみた。

ほんの少し前までは前の自分ことで頭がいっぱいだったのに…

なぜか今は滝沢サンのことで頭がいっぱい。

どうしてでしょう??

ほんの数分あの人とお話しただけなのに……

滝沢サンが前の私が好きだった人だから??

だから変に意識してしまっているのでしょうか??

……いえ、なんとなく、そんな理由ではない気がします。

私はきっと、前にもこんな気持ちを感じたことがある。

私はきっと……

また、あの人のことが好きになってしまったんですね……

☆37話　記憶喪失☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

すっごく展開早い…（汗
いきなりまた好きになっちゃいました（；一＿一）
うーん…
これからどうしましょう……

★37話　記憶喪失★響ｓｉｄｅ

その日、別に催促するつもりで言ったわけじゃない。

ただ、なんとなく言っただけ。

『そういえば明日オレの誕生日だったっけ』

何気なく言ったその一言のせいで……

詩織は事故にあった。

突然、詩織の母親から電話がきた。

詩織の母親から告げられたのは、

……詩織が事故にあったということ。

わざわざ連絡をくれた詩織の母親にお礼を言い、オレは急いで病院に走った。

病室にかけこむと、そこにはすでに詩織の母親と父親がいて…

そして白いベッドの上に詩織が横たわっていた。

頭には包帯が巻かれ、頬に大きなガーゼが貼られている。

「わざわざきてくれたんですね。ありがとうございます」

詩織の母親はオレに向かってにっこりとほほ笑んだ。

目は赤く腫れていて、今までずっと泣いていたんだな、とぼんやりと思った。

「…詩織は、大丈夫なんですか??」

オレは状況が飲み込めなくて、ぼんやりと言った。

「一応一命はとりとめたらしいが…頭を強く打ったらしく目を覚ますかわからないらしい」

……!!

「……そうですか」

オレはぽつりとつぶやくと、病室をでた。

あの場にいたくなかった。

目を覚まさないかもしれない??

嘘だ。

そんなわけない。

きっとこれは夢だ。

絶対に…

そうに決まっている……

そう自分に言い聞かせながら帰ろうとしたとき、後ろから詩織の母親に呼びとめられた。

「滝沢くん」

振り返ると詩織の母親が手に何かを持ってこちらに歩み寄ってくる。

「今日、誕生日なんですよね？おめでとうございます」

……なんだ、そんなことか。

「…ありがとうございます」

そんなのどうだっていい。

「これ…詩織の鞄の中に入ってたんですけど…ちょっとつぶれちゃってますが、一応あの子からの誕生日プレゼントみたいなんで…受け取ってあげてください」

「……！！」

オレは詩織の母親に差し出された物をゆっくりと手にとった。

少しつぶれた小さな袋、詩織の丁寧な字で書かれたバースデーカード。

そして袋の中に入っていた黒いシャーペン。

オレはそれをぎゅっと握りしめた。

…そうか。

詩織はこれをオレに届けるために……

オレが余計なことを言ったせいで……

詩織は事故にあった……??

「…ありがとうございます」

オレは詩織の母親にお礼を言って病院をでた。

……なんであんなこと言ったんだろう??

別にオレの誕生日なんてどうでもいいのに……

本当に何気なく言っただけなのに……

そのせいで、詩織がこのまま目を覚まさなかったら……

オレのせいで、詩織が目を覚まさなかったら……

考えがどんどん悪い方向に進んでいく。

オレは慌てて首をふった。

いや…

まだ詩織が目を覚まさないと決まったわけじゃないんだ。

きっと明日には目を覚ますに決まっている。

そんなオレの予感は的中した。

次の日、オレは朝から病院に行った。

眠っている詩織の隣に座って、何度も詩織の名前を呼ぶ。

何時間そうしていたんだろう??

詩織の瞼が少し動いた。

そしてゆっくりと瞼をあける。

「詩織!!」

詩織が…目を覚ました……!!

オレは安堵の息をついて、そっと詩織の髪をなでた。

「良かった…もう目ぇ覚まさないかと思った」

本当に…

もし目を覚まさなかったらと何度思ったか……

でも、目を覚ましたってことはもう大丈夫だよな??

足とか手も骨折してるわけではないようだし……

良かった……

安心するのも束の間。

詩織はオレをじっと見ると、おずおずと言った。

「あなたは…誰ですか??」

「えっ…??」

思わず目を大きく見開く。

オレのことが…

分かってない……??

…いや、

オレはくっと笑った。

「こんなときに冗談言うなよ。オレのこと忘れたのか??」

そう、冗談に決まってる。

詩織もよく目覚ましてすぐに冗談なんて言えるもんだよな。

「あなたは私の知り合いですか??」

だけど詩織は困ったような表情で言った。

「…おい、本当に冗談はやめろよ」

まさか…

本当に忘れてるなんてこと……

「…ごめんなさい。本当に知らないんです」

真剣な声。

冗談を言ってる声じゃない。

ということは…

本当にオレのことを忘れてる…??

状況をうまく飲み込めない。

「…そうか」

何がなんだかわからなくて、オレはただぼんやりとそうつぶやいた。

そして詩織に微笑みかける。

「分かった。…また来るよ」

全く理解できない。

どういうことだよ?

詩織がオレのこと忘れてるなんて……

病室をでると、ちょうど詩織の母親と父親にでくわした。

「…詩織、目ぇ覚ましたみたいですよ」

そう言うと、詩織の母親と父親は目を輝かせた。

「そうですか!!良かった……」

詩織の母親はうれしそうにほっと息をつく。

「それで、様子はどうだった??」

詩織の父親に尋ねられて、オレはにっと笑った。

「普通でしたよ。ただ……」

『あなたは…誰ですか??』

知らない人間を見るような目。

「オレのことを忘れてるみたいですけど……」

オレはぼそっとつぶやいて2人のそばを歩きすぎた。

その日の夜、詩織の母親から電話がかかってきた。

あの後、詩織はもう一度検査してもらったらしい。

そして結果は…

――――記憶喪失。

しかも高校に入ってからの記憶をなくしているらしい。

ということは…

オレとの記憶を丸々全部ってことだ。

それで、詩織がオレに会いたいと言っているらしい。

オレは不安を覚えながらも、次の日詩織に会いに行った。

オレは詩織の寝ているベッドの隣の椅子に腰かけた。

「詩織……」

詩織のオレを見る目は本当に、他人を見るような目。

その目を見るのが嫌で、オレは詩織と視線を合わせないようにした。

「…ええと、お名前を教えていただいてもよろしいでしょうか??」

「…滝沢響だ」

「滝沢……響……サン??」

まるで初めて知った言葉のように、オレの名前を繰り返す。

詩織は本当にオレのことを忘れているんだなと思った。

けど…

じっと詩織を見る。

だけど、目は合わせないように。

見た目は詩織と何も変わらない。

こうやって見てると、やっぱりみんなでオレに嘘をついているとしか思えない。

もしかしたら詩織がオレのことを忘れてるなんて、嘘なんじゃないか……??

そんな淡い期待を抱いてしまう。

「…おまえ、本当にオレのこと忘れたのか?」

詩織の返事に、ほんの少しの期待をする。

「はい…」

そんな期待は詩織の一言ですぐにつぶされた。

「そうか……」

本当に……

忘れたんだな。

そう思うと同時に、詩織はもうオレの知ってる詩織じゃないと思った。

今ここにいるのはオレの知らない全くの他人。

……そう本当に思えたのなら、

どんなに楽なんだろうか……??

「ええと…私、高校でどんな感じだったんですか??そういうのも全然わからなくて……」

突然尋ねられて、オレはうつむいていた顔をあげた。

「…そうだな」

どんな感じだったと言われても…

あんまりうまく言えない。

詩織はどんなだったのだろう…??

オレは最初から一つ一つ思いだして、口にしていった。

第一印象は変な奴。

オレを見て急に泣き出したりする。

多分詩織はオレが苦手だったんだろう。

オレも詩織が苦手だった。

まあ怖がられるのはまぁまぁ慣れてたし…（理由はわかんねぇけど…）

人づき合いとかも苦手だったから、高校でもずっと1人でいようと思っていた。

けど、そんなオレの考えはすぐに詩織に壊された。

オレのことを怖がってるくせに、なにかとオレにかまってくる。

わけわかんねぇから聞いてみたら、理由はオレが1人でいるからかわいそうだとか。

見下されてる感じが無性に腹が立って……

けど結局オレは詩織にかまってもらってることがうれしかったことに気付いて……

詩織はオレの話に適当に相槌を打ちながら聞き入っていた。

「でな？おまえ、前にオレが1人だからわざわざかまってやってるみたいなこと言いながら、誰とも話すなとか言ってくるんだよ。わけわかんねぇだろ？？」

「そうですね…すっごく矛盾してます…」

「だよな！まぁ…でもそれがなんかうれしくて……」

そのとき、オレは詩織が好きだって気付いたんだ。

まぁ、本当に今思いだしたらかなり矛盾してることだよな……

「…ありがとうございます。今日はもういいです。また聞かせてもらいますか？？」

詩織が突然話を切り上げた。

「…ん、分かった」

そうか、

ずっと話聞いてるってのも疲れるよな。

オレは病室をでて、そばにあった長椅子に腰かけた。

はぁっと大きなため息をつく。

こらえてきた気持ちがあふれだしてきた。

「全部…全部忘れたのかよ……」

さっき詩織に話したことも…

それから、オレと付き合った後のことも…

全部、全部忘れたってのか…??

瞬きをすると、温かいものが頬を伝った。

オレはそれをこらえようとせずにただぼんやりと空を見つめていた。

★37話　記憶喪失★響ｓｉｄｅ（後書き）

なんか結構暗い話になってしまいました…
まぁこの人は結構ネガティブなんで……

☆38話　転校生☆詩織ｓｉｄｅ

「どうしましょう…すごく不安です…」

私は自分のクラスだったらしい教室の前でつぶやいた。

「大丈夫だって。おまえの友達もいるんだから」

隣で滝沢サンが私を励ましてくれる。

友達と言っても……

みんな忘れちゃってますよー……

私は昨日退院して、今学校に来ている。

お医者さんのお話では普段通りの生活をしているうちに記憶が戻る可能性があるからだそうですが…

やっぱり私にとっては全然知らない学校。

クラスの人も、友達も、みんな知らない人。

この学校に知り合いは滝沢サンしかいない。

その滝沢サンともクラスは違うようだし……

私は助けを求めるように滝沢サンをみた。

「大丈夫。休み時間になったらオレのとこにきたらいい」

滝沢サンはそういって私に微笑んだ。

とくん…

少し心臓が鳴る。

「はい…」

私は頬が染まるのを隠すように下を向き、教室のドアに手をかけた。

「それでは…またあとで」

「ん、じゃぁな」

滝沢サンは私に背を向けて自分のクラスの方に歩きだした。

私も勇気をだして教室のドアをあける。

「詩織！」

「詩織ちゃん！」

教室に入るのと同時に2人の女の子が私の方にかけよってきた。

「大丈夫？？心配したんだよ！？」

ふんわりとした髪の女の子が心配そうな表情で言った。

「はい…大丈夫ですけど…」

「もう！心配させないでよね！でも大丈夫そうみたい。良かった」

大人っぽい顔の女の子はほっと溜息をついて笑った。

…ええと。

この人達は私の友達なんでしょうか…？？

「あの…その、本当に申し訳ないんですけど……」

私は戸惑いながら言った。

2人はきょとんとして私を見る。

「その、私記憶喪失…らしいんです。だからその…お2人のことを覚えていないというか…」

「「え…！？」」

2人は同時に息をのんだ。

「そ、そうなんだ…記憶…喪失ね…」

「それは大変だね…あっ！分からないことあったら何でも私達に聞いてね！私達は詩織ちゃんの友達だから！！」

ふんわりとした髪の女の子がにっこりと笑ってそう言ってくれた。

「は、はい…！！」

良かった…

少し安心しました。

この人達は私の友達だったらしいですし…

少しだけ心強くなった気がします。

どうやらふんわりとした髪の女の子は中川楓ちゃん。

そして大人っぽい顔の女の子は鳥山優香ちゃんだそうです。

2人と話しているうちにチャイムが鳴って、私はとりあえず自分の席らしい席についた。

しばらくして見覚えのない先生が入ってくる。

先生は私を見るなり顔を輝かせた。

「おっ！望月！もう大丈夫なのか？？」

「は、はい…」

私はとりあえずおずおずとうなずく。

先生は教室のみんなに私が記憶喪失だということを伝えて、コホンと咳をした。

「それじゃ別の話だ。このクラスに転入生が入ることになった」

クラスが少しざわめく。

先生は手を叩いてそれを制した。

「静かに。それじゃ、入れ」

教室のドアがあいて、女の子が入ってくる。

教室がまた少しざわめいた。

入ってきたのはショートカットの男の子みたいな女の子。

顔立ちもきりっとしてて、可愛いというよりかっこいい感じの女の子だった。

「えっと、それじゃ自己紹介してもらおうかな」

先生がそう言うと、女の子はうなずいてすぅっと大きく息を吸い込んだ。

そしてすごく大きな声を張り上げる。

「大阪からきた天音鈴や！！みんな、よろしくな！！」

こ、声でかすぎです…！！

女の子は呆然としている教室を見回すと頭をかきながら苦笑いした。

「ええと…なんかはずしてもうたみたいで…悪いな。まぁウチも緊張してるってことで許してな！」

鈴さんはケラケラと笑うと、先生の方に向き直った。

「んで！ウチの席はどこや？？」

「あ、ああ。そうだな…じゃ、望月の後ろな」

えっ！？私の後ろですか！？

ま、まぁ…

別にいいんですけど…

鈴さんは私の方に近寄ってきてにっと私に笑いかけた。

「よろしくな！」

「は、はい…」

えっと…

すごく明るい人ですね…

まぁこういう人は嫌いではありませんけど。

そう思い、私はくすっと笑った。

「なぁ、あんた名前なんて言うん??」

休み時間、いきなり鈴さんが私に話しかけてきた。

「望月詩織です!よろしくお願いします!」

そう言って鈴さんに頭をさげる。

「よろしく!んで、聞いたで。詩織って今記憶喪失なってんやろ??」

鈴さんはそういうとまじまじと私を見た。

「ウチ…記憶喪失の人見たのって初めてや。どんな感じなん?」

「どんな感じ…ですか??」

そう聞かれてもですね……

私だって自分が記憶喪失だなんてまだ理解しきれていないんですから…

「そうですね…あえて言ったら、私の中ではまだ私は中学3年生なんですよ」

「中三??」

私はこくりとうなずいた。

「へー…そういうもんなんや。なんかすごいな…」

鈴さんは感心したように言うと突然にこっと笑った。

「んじゃ詩織もこの高校初めてって感じってことやんな！じゃウチと同じやん！」

「そう言えば…そうですね」

たしかに私も今転校生みたいなものですし…

「なんかうれしいわ！ウチ、詩織とは良い友達になれそうや！」

「ですね！よろしくです」

私達は顔を見合わせてにっこりと笑いあった。

そして昼休み。

私は鈴さんに誘われて一緒にお昼を食べていた。

本当は滝沢サンに一緒に食べていただくつもりだったんですけど…

だけど滝沢サンに頼ってばかりじゃ申し訳ありませんし、

私も早く新しいお友達を作らないといけないですからね！！

「ウチ、ここきてホンマびっくりしてん……だってしゃべり方とか全然ちゃうねんもん！標準語ってなんかウチうけつけへんわ…」

「そうですか??私的にはこれが普通ですよ??」

「なんでや!ウチ、こんなに標準語ばっかの学校初めてやわ。ここは珍しい学校やなぁ」

鈴さんはしみじみとした風に言った。

いや、まず私は関西弁の方が何か珍しいような気がしますが……

まぁ、やっぱりそれは地方によって違うものなんですね。

と、そんな風に鈴さんとのおしゃべりに盛り上がっていたとき、

「おい、詩織!」

突然声をかけられた。

「滝沢サン??」

気がつくと滝沢サンがすぐそばに立っていた。

ふいに目に入った姿に、少しだけ心臓が強く鳴る。

滝沢サンはじっと私を見て、小さな息をついた。

「なんだ。別に普通だな」

??

なんで突然そんなことを言うんでしょうか…??

私が首をかしげていると、鈴さんが目を輝かせた。

「うわっ！この人めっちゃかっこええやん！誰！？もしかして詩織の彼氏！？」

「いや、その…」

彼氏というか……

いや、そうなんですけど…

私は返答に困って滝沢サンの方を見た。

滝沢サンはあらかさまに嫌そうな顔。

そ、そうですね…

滝沢サン、鈴さんみたいなタイプ、苦手な感じですもんね……

「おっ！鈴！おまえ、このクラスやったんか！！」

なんだか変な空気になっているなか、突然明るい声がした。

鈴さんが顔を輝かせる。

「碧！」

鈴さんの視線の先には迷彩模様のバンダナを頭にまいた金髪の男の子がいた。

その男の子はつり目で整った顔立ちの、明るそうな風貌をしていた。

…えっと、

鈴さんの知り合いでしょうか…??

というか…

この人も、関西弁……??

「和泉……」

滝沢サンは男の子の方を見て、鈴さんの時よりももっと嫌そうな顔をした。

「なんや!鈴のとこいくんやったら声かけてや!オレら友達やろ??」

その人…ええと、和泉…碧さん?…は、滝沢サンの肩をぽんぽんと叩いた。

滝沢サンは更に顔をゆがませる。

「えっ!?碧、詩織の彼氏と友達なったん!?」

鈴さんが驚いたように言った。

なんだか勝手に彼氏ってことになってます…

…まぁ、私はそれの方がうれしいんですけど。

というか、もともとは彼氏だったんですから、記憶がなくなったからって関係が変わるってことはないですよね…??

私は少し心配して滝沢サンの方を見た。

だけど滝沢サンは特に否定するつもりはないようだ。

私はほっとして、小さく微笑んだ。

…良かった。

記憶がなくても、私は滝沢サンの彼女で良いってことですよね……??

「え?この子、響の彼女!?めっちゃ可愛いやん!ってか、なんかすごい偶然やな!お互い同じカップルの友達なるとかな!!」

「やんなぁ!それめっちゃ思ったわぁ!!」

鈴さんと碧さんは2人で盛り上がり始めた。

う、うーん…

ちょっと、私このノリにはついていけないというか……

「詩織、あいつと友達なのか…??」

響くんは鈴さんを見て、私にこそっと言った。

「え、ええ。まぁ……」

私は苦笑いで答える。

ちょっと明るすぎるところもありますが……

鈴さんは良い人そうですし……

「あっ！そういやオレ、響の彼女に自己紹介してへんかったよな？？」

碧さんは私の方に向き直ってにっと笑った。

「鈴と一緒に転校してきた和泉碧や！！よろしくな！！」

「は、はい。よろしくおねがいします」

私は一応軽く頭を下げた。

そして小さな疑問をぶつける。

「…というか、鈴さんと碧さんはどちらも大阪からきたんですよね？？もしかして双子ですか？？」

だって偶然友達どうしが同じ所に転校してくるのって考えにくいですし…

でも、あんまり似てはいないようですが……

「双子…双子、とちゃうよ」

一瞬、碧さんの顔がくもった気がした。

だけどすぐに明るい表情に変わる。

「ただの幼馴染や！両親が仲良くてなぁ！オレのオトンが転勤なって、んで鈴んとこのオトンがさびしいゆうてな、ついてきよったんや！」

「はぁ！？違うで！！おまえのオトンがさびしいからついてこいゆうたんや！！」

すかさず鈴さんが訂正する。

碧さんはケラケラと笑いながら言った。

「まぁどっちでもええやん！とりあえず鈴の友達はオレの友達や！ええと……」

碧さんはうかがうように私を見た。

「望月詩織です」

「そうか！じゃ、詩織！仲良くしてな！」

碧さんはそう言ってにっと私に笑いかけた。

「はい！」

私もにっこりと笑顔を返す。

記憶をなくしてからの、初めての学校。

だけどすぐに私と同じような友達ができた。

とりあえず、この先の学校生活…

不安も多いですが、がんばっていけそうです。

私はそう感じて、小さく微笑んだ。

☆38話　転校生☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

また新しいキャラ登場させました！
関西弁キャラですね！特徴は無駄に明るいことです！
実はこの2人にはいろいろ深い設定があるんですが……
それはじみちに書いていこうと思うので……
ちなみに「碧」は「みどり」じゃなくて「あお」と読みます。

★38話　転校生★響side

「どうしましょう…すごく不安です…」

隣で詩織が不安そうにオレを見上げた。

「大丈夫だって。おまえの友達もいるんだから」

そう励ましても、やはり詩織は不安そうな顔のままだ。

…まぁ、友達っつっても、全部忘れてんだからわからねぇか。

詩織は軽く教室の方を見たあと、やっぱり不安そうな表情でオレを見た。

そんな詩織に軽く微笑みかける。

「大丈夫。休み時間になったらオレのとこにきたらいい」

「はい…」

詩織はなんとか覚悟を決めたのか、下を向いて教室のドアに手をかけた。

「それでは…またあとで」

「ん、じゃぁな」

オレは詩織に背を向けて自分のクラスの方に向かった。

途中で気付かれないようにそっと振り返る。
詩織はためらいながらも、なんとか教室に入ったようだ。
オレはほっと軽い息をついた。
ま、たしか中川と鳥山も同じクラスだったと思うし、大丈夫だろ。
オレが教室に入ると、真っ先に笹川がかけよってきた。
「滝沢クン！詩織ちゃんの様子どうだった！？」
笹川は、詩織が事故にあって記憶喪失になったと話してから、毎朝同じ質問をしてくる。
オレは自分の席に着きながら答えた。
「今日学校きてるぞ」
「ホント！？じゃ会いにいかないと！！」
笹川は顔を輝かせると、教室を出ようとした。
「おい！」
オレが笹川を止めようとしたとき、タイミングよくチャイムが鳴る。
「あ…チャイムなっちゃった…」

笹川は残念そうに時計を見る。

オレは内心ほっとしながら言った。

「今日はわざわざ詩織に会いに行くなよ。詩織もいきなりいろんな奴に声かけられたら混乱するだろ??」

ただでさえ、詩織が記憶をなくしてから初めての学校だってのに……

「そっか…そうだよね…」

笹川は少しうつむくと自分の席についた。

しばらくして教室に担任が入ってくる。

担任は淡々と今日の連絡を伝えた後、突然転校生がうちにクラスにきたと言い出した。

教室が少しざわめく。

転校生…??

うちの学校に??

ってことは、相当頭いいんだろな。

うちの編入試験って多分難しいだろうし。

一体どんな真面目くんが来るんだ??

ぼんやりとそう思い、かすかに期待しながらドアの方を見る。

「和泉！入ってこい！」

担任の声とともに教室のドアが開く。

教室が一気にざわめいた。

オレも思わず目を見開く。

入ってきたのは迷彩のバンダナを頭にまいた金髪の男。

服装もだらしなく、ズボンにチェーンをつけていて、とてもかしこそうには見えない。

こいつ……

本当にちゃんと試験受けて入ってきたのか…！？

転校生は担任が紹介しようとする声をさえぎってバカでかい声で言った。

「よぉ、諸君！今日、諸君らの運命は非常にいいぞ！なんせこのオレと同じクラスになれたという栄えある日やからな！」

教室が静まりかえる。

…何言ってんだ？こいつ。

転校生はオレらの反応を見るとやれやれといった調子でため息をつ

いた。

「はぁ…やっぱトカイのもんはあかんなぁ…そんな気ぃつかわんでももっとオレに出会えたことを喜べばええのに…」

いや、みんな引いてるだけなんだけど……

てか、関西弁??

ってことは関西の方から……

「まぁしゃーない！とりあえず自己紹介やな！」

転校生は1人で言いながら、コホンと軽い咳をした。

そして親指を自分の方に向ける。

「オレは和泉碧や！みんなよろしくな！！」

短い沈黙のあと、担任の「は、拍手」という一言でパラパラと小さな手を叩く音が鳴る。

オレは片手をあげて笑ってるそいつを見て大きなため息をついた。

こいつ…

絶対バカだ。

しかもオレのかなり苦手なタイプ。

絶対かかわらないようにしよう……

そう誓ったのも束の間、すぐにそれはかなわなくなる。

「じゃぁとりあえずそこの席についてくれ」

担任にはオレの隣の席を指差して言った。

げ……

席、オレの隣かよ…

い、いや、

別に隣だからってどうってことないよな。

かかわらなきゃいいだけなんだし。

転校生は席に着くと、なぜかオレの方に笑いかけてきた。

「よろしくな！」

オレは横目で転校生を見て、軽く頭を下げた。

そして休み時間。

「なぁ！」

突然和泉に声をかけられた。

とりあえず無視する。

けど和泉はしつこくオレに声をかけてきた。

「おい！聞こえてんか！！おまえや！おまえ！！」

いや…

分かってるけど…

オレはこれ以上はうるさそうなのでしぶしぶ応答した。

「…なんだよ？？」

和泉は突然顔をオレの方にぐっと近づけた。

そしてじーっとオレを見る。

な、なんだ？こいつ……

「おまえってさ、無愛想な顔してるよな！」

和泉は突然そう言ってにかっと笑った。

はぁ！？

いきなりなんでそんなこと言われなきゃなんねぇんだよ！！

オレは抗議しようと口を開きかけたが、これ以上かかわるのもいやだったので、ふいっと顔をそむけた。

「…まぁな」

そのとおり、オレは無愛想だよ。

てかわざわざそんなこと言うためにオレに声かけたのか??

用が済んだならどっかいってくんねぇかな……

けど和泉はなおもオレに話しかけてきた。

「なんでそんな顔してんの!?そんなんで友達できんのか!?」

でかい声でそう言いながら顔を覗き込んでくる。

「関係ねぇだろ」

「いや!オレはそーいうのほっとかれへん!…そうや!」

和泉は突然ぽんっと手を叩いた。

「オレが友達なったるわ!多分おまえ、友達いなさそうやし!」

どんな原理だよ…

なんでそんな風になったんだ??

「別にいい」

オレはいいかげんうっとうしくて席をたった。

けど和泉はオレの後をついてくる。

んだよ…

うっとうしいな……

「じゃぁさ！オレから頼むわ！友達なってくれ！オレまだこの学校で友達おらんのや！！」

「無理」

とりあえず即答。

こんなやつと友達なんて絶対にありえない。

絶対に毎日が地獄化するにきまってる。

「ええやんか～！別に減るもんとちゃうやん！むしろ増えるもんやで！！」

和泉はしつこくオレについてくる。

とりあえずチャイムが鳴ってなんとか逃れることはできたが…

なぜか和泉の中ではもう、オレは『友達』になってしまったらしい。

次の休み時間になると、オレの横で1人で話しだす。

まぁオレはほとんど話を聞かずにぼんやりと外の景色を見てたんだ

が……

そして昼休み。

そういえば詩織、昼一緒に食べようとか言ってたよな。

そう思い少し待っていたが詩織がくる気配はない。

中川達とたべてるのかと思い、オレはとりあえず弁当を広げた。

食べようとすると、和泉がオレの方に机をくっつけてきた。

「響！一緒に食べよか！！」

なんでいきなり呼び捨てになってんだよ……？？

オレは深いため息をつきながらも、無視して箸を手にとった。

机は（無理やり）くっつけているが、別段話すこともなく（和泉は1人で話していたが）昼食を終えたオレは、やっぱり詩織が心配になり和泉が食べているすきに慌てて詩織のクラスに行った。

「おい、詩織！」

詩織を見つけて声をかけると、詩織はきょとんとした様子でオレを見た。

「滝沢サン？？」

オレは詩織に何も変化がないことを確認して軽く息をつく。

「なんだ。別に普通だな」

詩織は不思議そうに首をかしげる。

そして突然詩織の隣にいた奴が目を輝かせた。

「うわっ！この人めっちゃかっこええやん！誰！？もしかして詩織の彼氏！？」

そいつも見たことがない奴で、関西弁だった。

「いや、その…」

詩織はとまどいながらオレを見た。

オレは思わず顔をしかめる。

もしかしてこいつも転校生か？？

しかも多分苦手なタイプだ……

オレ、関西の奴には相当縁がねぇな…

「おっ！鈴！おまえ、このクラスやったんか！！」

背後から一番聞きたくない声が聞こえた。

…出た。

「碧！」

詩織の隣にいた女が目を輝かせる。

「和泉……」

「なんや！鈴のとこいくんやったら声かけてや！オレら友達やろ？？」

和泉はそう言いながらぽんぽんと肩を叩いてきた。

いや…

鈴とかしらねぇし…

まず友達じゃねぇし……

「えっ！？碧、詩織の彼氏と友達なったん！？」

鈴とかいう奴は驚いたように目を見開く。

いや、勝手に理解されても困る。

「え？この子、響の彼女！？めっちゃ可愛いやん！ってか、なんかすごい偶然やな！お互い同じカップルの友達なるとかな！！」

「やんなぁ！それめっちゃ思ったわぁ！！」

勝手に2人で盛り上がりはじめる。

無理だ…

オレ、こういうのホント無理だ……

「詩織、あいつと友達なのか…??」

「え、ええ。まぁ……」

詩織は苦笑いで答えた。

…よくあんなやつと仲良くできるよな。

……やっぱ記憶をなくした詩織だからか…??

前の詩織なら絶対に嫌がりそうなのに……

……やっぱり違うんだな。

「あっ!そういやオレ、響の彼女に自己紹介してへんかったよな??」

和泉は詩織の方に向き直ると、にっと詩織に笑いかけた。

「鈴と一緒に転校してきた川崎碧や!!よろしくな!!」

「は、はい。よろしくおねがいします」

詩織は困ったように笑いながら軽く頭を下げる。

そしてオレも少し気になっていた疑問をぶつけた。

「…というか、鈴さんと碧さんはどちらも大阪からきたんですよね??もしかして双子ですか??」

双子…とは少し違う気がするが……

それでも友達同士が偶然同じ高校に転校してくるなんて考えにくい。

ここから大阪ってすげぇ遠いし……

「双子…双子、とちゃうよ」

一瞬、和泉の表情が変わった気がした。

あまりにも和泉に似合わない表情に驚く。

…なんだ??

双子に何かあんのか「ただの幼馴染や！両親が仲良くてなぁ！オレのオトンが転勤なって、んで鈴んとこのオトンがさびしいゆうてな、ついてきよったんや！」

和泉はすぐにいつもの表情に戻って言った。

「はぁ！？違うで！！おまえのオトンがさびしいからついてこいゆうたんや！！」

すかさずに鈴という女が訂正する。

和泉はケラケラと笑いながら言った。

「まぁどっちでもええやん！とりあえず鈴の友達はオレの友達や！ええと……」

「望月詩織です」

「そうか！じゃ、詩織！仲良くしてな！」

和泉はにっと詩織に笑いかけた。

「はい！」

詩織もにっと和泉に笑いかえす。

オレは詩織のその笑顔を見ながら小さく微笑んだ。

…まぁ、こいつらがオレに合うか合わないかは別として……

詩織にもとりあえず友達ができたんだ。

これで学校で不安な思いをすることはないだろう。

そう思いながらも、小さな不安が頭をよぎる。

だけど……

もし、詩織が何かの間違いで、和泉のことを好きになってしまったら…

いや、和泉じゃなくても、他の奴を好きになってしまったら……

今の詩織は、記憶をなくす前の詩織とは少し違う気がする。

他の奴を好きになる可能性は、十分にある。

こんな風にどんどんと詩織のまわりの環境が変わっていって……

いつか、詩織に新しい好きな奴ができたとき、オレはどうするんだろうか??

オレはふと詩織を見た。

困り顔ながらも、笑顔な詩織。

…まぁ、それでもいいか。

オレは詩織が笑顔でいてくれたらいいんだ……

★３８話　転校生★響ｓｉｄｅ（後書き）

碧の性格がかなりの痛い性格になりました。こんな人は実際にはいないと思いますが…（＾―＾；）

☆39話　複雑な気持ち☆詩織ｓｉｄｅ

「滝沢サンのことが、好きです」

ラベンダーがいっぱい咲いている公園。

私は自分の思いを口にした。

大きく目を見開く滝沢サン。

私は思いを伝えたかっただけ。

お付き合いしたいとか…そんなものじゃなくて…

滝沢サンに好きって伝えること。

それで十分だった。

だけど……

「オレもおまえが好きなんだから」

滝沢サンが顔を真っ赤に染めて言った。

うれしくて、

すごくうれしくて、

幸せな気持ちで胸がいっぱいになった。

「…ん」

私はゆっくりと上半身をおこした。

…夢??

ぼーっと空を見つめる。

すごく…

幸せな夢……

私、こんな夢を見るほどまでに滝沢サンのことを……

少し頬が熱くなる。

ぼんやりとしながら時計を見た。

時刻はもう9時。

私は慌てて飛び起きた。

もうこんな時間!!

急いで支度しないと!!

私は昨日のうちに準備しておいた服に着替えて、軽い朝食をとり、

急いで家をでた。

私が記憶をなくしてから、数日がたち、今は夏休み。

鈴さんや碧さんともすっかり仲良くなって、今日は鈴さんと碧さんと滝沢サンと私の４人で海に行く。

現地で１０時半に待ち合わせ。

それで滝沢サンと私は９時半に駅で待ち合わせているんですが…

私はチラッと時計を見た。

時刻はすでに９時２５分。

やばいです…

これ、絶対遅れますよー…

私は走る速度を少し早めた。

駅につくと、すでに滝沢サンが待っていた。

「すいません！遅れてしまいました！！」

私はついてすぐにぺこりと頭をさげた。

「オレも今きたばっかだから大丈夫だよ」

ほんの少し微笑む滝沢サンに胸が強く鳴る。

結局私のせいで、乗る予定だった電車を乗り過ごしてしまった。

そのせいで、海に着いたのはちょうど１１時。

鈴さんと碧さんは時間より早くついたみたいで、かなり待たせてしまったらしい。

「遅い！どんだけ待たせるんや！！」

「ったく…オレらはちゃんと5分前行動したっちゅーのに……」

はぁっと大きなため息をつく碧さん。

「ごめんなさい…私のせいなんです……」

ぺこりと頭をさげる。

「いや、違うで、詩織。おまえも悪いがそこまで悪くない」

碧さんはぽんっと私の肩を叩いた。

えっ？？

私はきょとんと碧さんを見る。

「ほんまに悪いんはあいつや！！」

碧さんはびしっと滝沢サンを指さした。

「は？オレ？？」

滝沢サンは驚いたようにきょとんと自分を指差す。

「そや！普通、時間どおりに彼女の家まで迎えに行くのが男とちゃうんか？ん？？」

碧さんがからかうように言う。

そんな碧さんを鈴さんが思いきり叩いた。

「何言うとんねん！おまえ、寝坊せんようにってウチに家まで迎えにこさせてたやん！！」

「いや…それは…」

思わずぷっと吹き出す。

滝沢サンもあきれ顔で笑っていた。

そんな風に話しながら浜辺におりる。

浜辺にはもう人がいっぱいいた。

まあ、夏休みですからねー……

でもこんな中、場所とりが大変そうです……

「おい！なにしとんねん！こっちやこっち！！」

ぼんやりとしていると、碧さんが怒鳴るように言った。

見ると、すでに碧さんと鈴さんがほんの少しのスペースにシートを敷いて陣取りをしている。

は…早いです…！！

私と同じくぼんやりとしていた響くんもそれを見て唖然としている。

私達は顔を見合わせて笑いあった。

「よっしゃー！海や海！！泳ぐでー！！」

「何が『泳ぐでー！』や！おまえ泳がれへんやろ！？」

「細かいことは気にせーへんねん！」

鈴さんと碧さんは言い合いをしながら海の方に走っていった。

その様子を見ながら、滝沢サンはシートに腰を下ろす。

「滝沢サンは泳がないんですか？？」

私が尋ねると滝沢サンは少し目を見開いた。

だけどすぐに目を細める。
その目が少し悲しそうに見えた。
「ん、まぁ…な。泳ぐのは苦手なんだ」
「そうですか…」
滝沢サンを1人でおいておくのも悪い気がしたので、私は滝沢サンの隣に座りこんだ。
「泳いできていいんだぞ?」
「え…でも……」
私がとまどっていると、滝沢サンは小さく微笑んだ。
「オレに気を使わなくてもいいから。行ってこいよ」
「そうですか…??じゃぁ…」
無理に気を使うと余計に滝沢サンに気を使わせてしまいそうで、私は鈴さん達の方へ向かった。
「あれ?響は泳がへんの??」
鈴さんが滝沢サンの方を見て不思議そうに言う。
「ええ、泳ぐの苦手らしいんです」

「アホやなー。泳がれへんくてもきたらいいのに。めっちゃ気持ちええのになぁ！」

碧さんはうきわでプカプカと浮きながら笑った。

そうですよね……

滝沢サンもうきわとかを使って入ればいいのに……

でも無理に進めるのもあれですし……

「あっ！それやったら、泳ぐのやめてビーチボールする？？せっかくみんなできたんやしみんなで楽しみたいやん！！」

鈴さんがぽんっと手を叩いて言った。

「それもそうやな…よっしゃ！そうしよか！」

ということで、私達はビーチボールをすることにした。

滝沢サンはあんまり乗り気じゃなかったけど、しぶしぶとうなずいてくれた。

2対2で、グーパーでチームを決めた。

結果、

私と碧さん、鈴さんと滝沢サンチームになった。

なんだか以外なチームですが……

でもおもしろそうです！

私達がきていた海には、たまたま１００円くらいで借りれるビーチボール用のネットがはってある場所があって、私達はそこを借りることにした。

「よっしゃ！じゃオレからいくで！」

碧さんがパシンッとボールを打つ。

ボールには結構勢いがついて、ネットをすれすれで飛び越えた。

碧さんうまいです！

これはいきなり1点とれるんじゃ…

けどそううまくは行かなくて、鈴さんがレシーブで簡単にそれを受け止めてしまった。

ボールがこっちに戻ってくる。

って…

私の方に向かってきてるじゃないですかー！！！

私は慌ててかまえた。

と、とりあえずレシーブですよね！！

ボールが私の手に当たる。

私はその手を思い切り振り上げた。

ボールは当然のように後ろに飛んでいく。

「…へ？？」

みんなが唖然として私を見ていた。

「詩織…めっちゃヘタやん……」

碧さんがあきれたようにつぶやいた。

ううう……

そんなにはっきりと言われると少し悲しくなります……

私が落ち込んでいると、碧さんはにかっと笑った。

「まぁええわ！オレにまかせとけ！」

「ごめんなさい…ありがとうございます……」

本当に申し訳ないです……

けど！

もし次私にボールがきたら今度こそ迷惑をかけません！

そう誓うも、やっぱりその後も私はミスばかり。

だけど碧さんはものすごくうまくて、ほとんど1人で2人の相手をしていた。

私はぼんやりとその様子を眺める。

私の目は自然と滝沢サンの方に向かっていた。

滝沢サン…

すごくうまいですね……

鈴さんもすごくうまいですが、ほとんど滝沢サンがとってるみたいな感じです……

「響！」

鈴さんが滝沢サンにトスをあげる。

「ん」

滝沢サンはポンっとそれを軽く打った。

…軽く打ったように見えた。

だけどボールはすごい早さで私達のコートに突っ込んできて、碧さんが反応する間もなく地面についた。

「響！ナイスや！」

鈴さんが笑顔でぽんっと滝沢サンの肩を叩く。

滝沢サンは鈴さんに向けてにっと笑った。

ムッ……

小さな怒りを覚える。

そして同時にほんの少しのことでも嫉妬してしまう自分が嫌になった。

ビーチボールを終えると、あたりはすっかり暗くなっていた。

「どうしましょう？もう帰りますか？？」

「いや、まだや。まだオレ達にはやらなあかんことがある」

碧さんが腕組みをして言った。

私達は首をかしげる。

「まだ花火してへん」

だけど碧さんの一言で唖然とする。

「おまえバカだろ？もう帰らねぇと……」

滝沢サンはため息をつきながら言った。

「いや、でもしようや！夏休みくらい帰んの遅くなってもええやろ！？ウチら高校生やし！」

鈴さんが目をキラキラとさせる。

「いや、でもな…」

滝沢サンは同意を求めるように私を見た。

うーん……

たしかにそろそろ帰らなければいけませんが…

「大丈夫ですよ！やりましょう！」

怒られることなんかよりももっと遊びたい気持ちの方が強かった。

「おまえもかよ……」

滝沢サンはあきれ顔になる。

「まぁええやん！ここは空気読もな！んじゃオレ近くのコンビニで花火買ってくるわ！」

「あっ！ウチも行くー！！」

そう言って鈴さんと碧さんはさっさと花火を買いに行ってしまった。

私と滝沢さんだけが2人浜辺に取り残される。

「あー…もういいや。あとで一樹に何言われるか……」

滝沢サンはぶつぶつ言いながらその場に座り込んだ。

私もその隣に座りこむ。

「まぁいいじゃないですか！1日くらい大丈夫ですよ！」

「そうか？？」

滝沢さんは苦笑いする。

私達はしばらくぼんやりと海を見つめていた。

すごく幸せな時間。

だけどその時間を私は自ら壊してしまう。

「あ、そういえば！私、今日変な夢みたんですよー」

「変な夢？」

私は今日見た夢を滝沢サンに話した。

滝沢サンは驚いたように私を見る。

や、やっぱり、勝手にそんな妄想みたいな夢を見られて嫌だったでしょうか！？

私は慌てて弁解しようとした。

「いや！その！けどこれは夢であって…私はべ…！！」

突然滝沢サンが私を抱きしめた。

驚いて、思わず言葉を飲み込む。

心臓がドキドキと早鐘のように鳴り響いた。

「それ…夢じゃねぇよ……」

「へ…？？」

夢じゃないって……？？

滝沢サンの私を抱きしめる手が強くなった。

「記憶…戻ってきてんだな……！！」

うれしそうな声。

私を抱きしめる強さ。

それで私は悟った。

そうなんですね…

きっと…

今日私が見た夢は……

私の…なくした記憶……

良かった。

私は記憶をとりもどしてきているってことですよね。

いいこと…そのはずなのに……

どうしてこんなに悲しいんでしょうか……??

それはきっと、記憶が戻るのが怖いから。

記憶が戻ってしまうと、私の知らない私が、今の私をかき消してしまいそうで……

私はその気持ちをまぎらわせたくて、滝沢サンの目を見た。

「キス…してください……」

滝沢さんの目が一瞬見開かれた。

私は驚く滝沢サンを無視して目を閉じる。

唇に温かい物が触れた。

私はそれに自分の唇をおしつける。

自然と滝沢サンの背中に手をまわしていた。

「詩織……」

息継ぎの合間に滝沢サンが私の名前を呼ぶ。

だけど滝沢サンが呼んでいるのは私じゃない。

滝沢サンが呼んでいるのは私の知らない私。

私じゃ……ない。

記憶が戻れば私はちゃんと滝沢サンに愛してもらえるんでしょうか??

……きっと前の私も滝沢サンのことが大好きだったんでしょうね。

だけど…

絶対に今の私の方が滝沢サンを想う気持ちは大きいに決まってる。

記憶が戻ったら…

この気持ちまで、かき消されてしまうんでしょうか……??

どうしてもそんな考えが頭を支配する。

私はそんな考えを必死に振り払おうと、滝沢サンの唇に自分のそれを強く強くおしつけた。

切なくて…悲しいキス。

だけど今の私はそれに夢中になるしかなかった。

「詩織ー！響ー！花火買ってきたでー！！」

突然碧さんの元気な声が聞こえて、私達は思わずビクッと体を震わせた。

滝沢サンがすばやく私から離れる。

「あれ？もしかして今キスしてた？？」

私達の方にかけよってきた鈴さんがにやにやとしながら聞いていた。

「してねぇよ！」

滝沢サンが頬を染めながら否定する。

「嘘や！絶対してたわ！」

碧さんもにやにやと言った。

「だからしてないって！なぁっ！？」

滝沢サンは同意を求めて私を見た。

私も首を縦にふる。

「もう～！照れんでもええのに～！」

「ホンマらぶらぶやんなぁ～！」

2人にからかわれて、私はなんとか苦笑いした。

その後の花火。

打ち上げ花火やネズミ花火などで盛り上がったあと、4人で線香花火をした。

「誰が一番長くもつか勝負や！」

碧さんの提案で、真剣に線香花火の火を見つめる。

シーンと静まりかえる中、私は線香花火の火を見つめながら思った。

線香花火って…

すごくはかないですよね……

すぐに消え落ちてしまう……

私もこの線香花火と同じ。

記憶が戻れば、私は消えてしまう。

滝沢サンへの想いもぬりかえられてしまう……

それだけは嫌なのに…

私にはどうすることもできない……

☆３９話　複雑な気持ち☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

サブタイトルなんだかな～。
まぁ響ｓｉｄｅでも同じサブタイトルになるのでいいものを思いつきませんでした…
前半と後半の温度差が激しい…
鈴と碧はあいかわらず明るいですけど（＾―＾；）

★３９話　複雑な気持ち★響ｓｉｄｅ

詩織が記憶をなくしてから数日がすぎて、いつの間にか夏休みになっていた。

詩織はあいかわらず記憶を取り戻す気配はない。

どうしてもこのまま詩織は記憶が戻らないんじゃないかと不安になる。

今までのオレとの思い出がなくなってたとしても、

詩織は変わらず詩織だって分かってるのに……

なぜか、オレは詩織を詩織だと思えない……

「すいません！遅れてしまいました！！」

詩織はオレの方にかけよってくるとぺこりと頭をさげた。

「オレも今きたばっかだから大丈夫だよ」

一応そう言っておいたが実は１０分程度は待っていたりする。

まぁ変に気をつかわせるのも悪い気がしたので、オレは一応そう答えておいた。

今日はどういう経緯か、なぜか和泉と天音と海に行くことになっている。

オレ的には2人とも苦手な部類なんだが……

どうも詩織が仲良くなってしまったらしく、初めは行く気がなかったが詩織に半泣きできてくれと頼まれ、和泉に半場強引に約束をこぎつけられ、結局オレも行かなくてはならないことになった。

海、か……

そういえば、去年も詩織と2人できたよな……

……詩織は当然それも忘れてしまったんだろうけど。

オレ達は待ち合わせの時間に大幅に遅れて海についた。

「遅い！どんだけ待たせるんや！！」

天音が腰に手を当てて怒鳴る。

「ったく…オレらはちゃんと5分前行動したっちゅーのに……」

はぁ…と大きなため息をつく和泉。

「ごめんなさい…私のせいなんです……」

詩織はしょんぼりと落ち込んだ様子で頭を下げた。

そんな詩織の肩を和泉がポンっと叩く。

「いや、違うで、詩織。おまえも悪いがそこまで悪くない」

詩織はきょとんとして和泉を見た。

何を言い出すんだろうとみていると、突然びしっと人差し指を刺される。

「ほんまに悪いんはあいつや！！」

「は？オレ？？」

突然のことに思わずきょとんとする。

なんでオレになるんだよ？

詩織には悪いけどオレは一応時間通りに着いたはずだが……

「そや！普通、時間どおりに彼女の家まで迎えに行くのが男とちゃうんか？ん？？」

和泉はからかうように言った。

そんな和泉を天音が思い切りたたく。

「何言うとんねん！おまえ、寝坊せんようにってウチに家まで迎えにこさせてたやん！！」

「いや…それは…」

和泉は焦ったように視線をさまよわせた。

詩織がぷっとふきだす。

やっぱこいつらバカだな。

オレはあきれながらも笑顔をうかべた。

くだらない話をしながら浜辺におりると、そこはすでに人でいっぱいだった。

うわー……

オレ人ごみ苦手なんだけどな……

正直泳ぐのも苦手だし、もう海はいいんじゃねぇか??

「おい！なにしとんねん！こっちやこっち！！」

ぼーっとつったっていると、和泉が怒鳴るように言った。

和泉達の方を見ると、狭いスペースにかなり無理やりシートを敷いている。

い、いつの間に場所とってたんだ……??

オレは思わず唖然とそれを見ていた。

詩織も同じようにそれを見て唖然としている。

オレ達は自然と顔を見合わせくっと笑った。

「よっしゃー！海や海！！泳ぐでー！！」

「何が『泳ぐでー！』や！おまえ泳がれへんやろ！？」

「細かいことは気にせーへんねん！」

和泉と天音はごちゃごちゃと言い合いをしながら海の方に走っていく。

あいかわらず元気だな……

そう思いながらオレはシートに腰をおろした。

そんなオレを詩織が不思議そうに見る。

「滝沢サンは泳がないんですか？？」

その質問に思わず少し目を見開いた。

いや…

オレ、去年泳げねぇって言ったはずだけど……

そう思ったところでふと思い出した。

そうか……

詩織は覚えてないんだったな……

「ん、まぁ…な。泳ぐのは苦手なんだ」

「そうですか…」

詩織は少し残念そうな顔をして、オレの隣に腰をおろした。

そしてうらやましそうに和泉と天音が遊んでいる様子を眺める。

「泳いできていいんだぞ？」

「え…でも……」

詩織ははっとしてとまどうようにオレを見た。

オレに気を使ってくれているのはうれしい。

やっぱり詩織は詩織なんだな、と思った。

けど、わざわざオレのために詩織に何かを我慢させるなんてなんとなく嫌だった。

「オレに気を使わなくてもいいから。行ってこいよ」

「そうですか…？？じゃぁ…」

詩織は気遣わしげにオレを見ながらも、和泉達の所に走っていった。

その様子をぼんやりと見る。

詩織達は何かをしゃべってるようで、そしてなぜかオレの所に戻ってきた。

そして突然ビーチボールをしないかと言われる。

どうやらみんなでオレに気を使っているようだ。

別にほっといても大丈夫なんだけど……

そう思いながらも、せっかく気を使ってもらっているのに断るのも悪い気がしたので、オレは渋々とうなずいた。

海水浴場にたまたまあったビーチボール用のコートをかり、結構本格的な感じになる。

2対2の勝負ということになって、グーパーでチームを決めた。

結果、詩織と和泉のペア、オレと天音のペアになる。

「よっしゃ！じゃオレからいくで！」

和泉は無駄にでかい声で言い、ボールをパシンッと打った。

結構早い球だったが、天音がそれを楽々ととる。

天音がうちかえしたボールは詩織の方に飛んでいった。

詩織は慌ててレシーブの形をとる。

ボールはそのままっすぐと詩織の手に当たった。

詩織はその手を思い切りふりあげる。

ボールはゆるやかな軌道を描いて後ろに飛んでいった。

「…へ??」

詩織がきょとんとする。

そ、そういえば……

詩織って結構運動オンチだったって気もする……

「詩織…めっちゃヘタやん……」

和泉があきれたようにつぶやいた。

こいつは本当、思いっきりストレートに言うな……

詩織は恥ずかしそうにうつむいた。

そんな詩織に和泉がにっと笑いかける。

「まぁええわ！オレにまかせとけ！」

「ごめんなさい…ありがとうございます……」

詩織は深く頭を下げた。

その様子が、なぜか妙に腹が立った。

その後、詩織はほとんど何もすることなく、和泉が1人で1チームという風になっていた。

天音は結構うまく、オレもそれほど下手でもないはずだったが、和泉は1人で十分にそれに対応する。

オレはいつの間にかむきになっていて、ビーチボールを終えた後にはすっかりダラダラと汗をかき、息を切らしていた。

気がつくと、あたりはすっかり暗くなっている。

「どうしましょう？もう帰りますか？？」

「いや、まだや。まだオレ達にはやらなあかんことがある」

和泉は妙に深刻そうな顔で腕組みをして言った。

なんとなく真剣に和泉の言葉に耳を傾ける。

「まだ花火してへん」

けど和泉のその一言で、真剣に聞いていたオレがバカだったんだと気がついた。

「おまえバカだろ？もう帰らねぇと……」

オレがため息をつきながら言うと、天音が目をキラキラとさせて言

った。

「いや、でもしようや！夏休みくらい帰んの遅くなってもええやろ！？ウチら高校生やし！」

「いや、でもな…」

高校生っつっても帰るの遅くなって良い理由にはならねぇと思うぞ…？？

詩織だってそう思うよな？？

オレはそう問いかけるように詩織を見た。

けど詩織も目を輝かせている。

まさか……

「大丈夫ですよ！やりましょう！」

「おまえもかよ……」

オレはもはや、あきれることしかできなかった。

「まぁええやん！ここは空気読もな！んじゃオレ近くのコンビニで花火買ってくるわ！」

「あっ！ウチも行くー！！」

和泉と天音はさっさと近くのコンビニに花火を買いに行く。

「あー…もういいや。あとで一樹に何言われるか……」

オレは1人ごとをつぶやきながら浜辺に座りこんだ。

絶対一樹に「望月センパイと何してたんだよ!?」とかマジな顔で言われるに決まってる……

あいつなんだかんだ言ってまだ詩織のこと好きみたいだからな……

記憶なくなったって言ったらちょっとチャンス!みたいな顔してたし……

あーあ……

あいつが納得するまで説明すんのめんどくせぇな……

「まぁいいじゃないですか!1日くらい大丈夫ですよ!」

詩織はそう言いながらオレの隣に座りこんだ。

「そうか??」

1日くらいって問題じゃねぇんだけどな。

オレはそう思いながら苦笑いした。

オレ達はぼんやりと海を見つめていた。

あれだけいた人はほとんどいなくなり、波の音だけが聞こえる。

それがやけにさびしい感じがした。

「あ、そういえば！私、今日変な夢みたんですよー」

詩織が不意に口を開いた。

「変な夢？」

詩織は今日見たらしい夢のことを話し出した。

……それは、オレの記憶の中にはっきりと残っているものだった。

――詩織がオレに告ってくれた時のこと――

オレは目を見開いて詩織を見た。

それって……

記憶が……

「いや！その！けどこれは夢であって…私はべ…！！」

オレは思わず詩織を強く抱きしめた。

「それ…夢じゃねぇよ……」

「へ…？？」

詩織は間の抜けた声をだす。

それは……

本当にあったこと……

オレとお前の大事な思い出だ……！！

「記憶…戻ってきてんだな……！！」

オレはうれしくて、強く強く詩織を抱きしめた。

詩織の記憶が戻ってきているのかもしれない。

もう戻らないのかもしれないとあきらめかけていた中に、光がさしたような気がした。

しばらくぎゅっと詩織をだきしめていると、不意に詩織がオレの肩を抱いて、じっとオレの目を見てきた。

「キス…してください……」

予想外の言葉に思わず目を見開く。

そして気がついた。

ああ……

やっぱり、この詩織はオレの知っている詩織じゃない。

詩織はこんなに淡々とこんなことを言わない……

オレの目の前にいる詩織は頬も染めていなかった。

どうして……

詩織は高校での記憶をなくしただけのはずなのに……

こんなにもオレの知っている詩織と違うのだろう……??

オレはそう考えながら、そっと詩織に口付けた。

詩織はオレの唇に強く自分の唇を押し付ける。

いつの間にか詩織の手がオレの背中に回っていた。

詩織にされるがままになりながら思う。

詩織とこんなキスしたの初めてだ……

そういえば、オレはまだ、詩織とキスしたの3回目くらいだっけか……

クリスマスの時と、バレンタイデーの時……

詩織はそのことも覚えていない……

「詩織……」

息継ぎの合間に詩織の名前を呼んだ。

オレにとって……

大事で、特別な名前。

オレが呼んでいるのはきっと、目の前の詩織じゃない。

オレは目の前の詩織の中で眠っている『詩織』の名前を呼んでいた。

オレの声は『詩織』に届いているんだろうか??

もし届いてるんなら……

はやく、目を覚まして欲しい……

もう一度……

オレの名前を呼んで欲しい……

★３９話　複雑な気持ち★響ｓｉｄｅ（後書き）

響の心情書くの難しいです……
詩織は案外かきやすかったりするんですがね……

☆４０話　好きな人☆詩織ｓｉｄｅ

そこは放課後の教室。

私は少し眠ろうと机に顔をふせていた。

ガラ……

教室のドアがあいて、誰かが入ってきた。

「望月…！？」

驚いたようなその声は、まぎれもなくあなたの声。

あなたとケンカ中だった私は顔を合わせ辛くて寝たふりをしていた。

あなたは忘れ物を取りに来たみたい。

隣で机の中をあさる音がした。

音がやみ、ドアが開く音がする。

だけど、あなたはそのまま出て行かずに、なぜか私の方に向かってきた。

あなたの手が、そっと私の髪に触れる。

そして、小さな声で、初めて私の名前を呼んでくれた。

「詩織」

驚いて、心臓が強く鳴る。

あなたは私がおきていることに全く気がつかず、私への気持ちを話してくれた。

「おまえのこと、すっげぇ好きだから」

恥ずかしそうなあなたの声が耳にとびこんできたとき、

私はすごくうれしくて、もう寝たふりなんかできなかった。

突然目を開けた私に驚くあなたを、強く強く抱きしめる。

「私も…私も、響くんのことが大好きです……！！」

9月になり、新学期が始まって数日が立ったある日。

また、すごくリアルな夢を見た。

きっとこれも……

私自身の記憶……

私は少しづつ、本当に少しづつ、なくした記憶を取り戻し始めている。

「うれしいことのはずなんですけど…少し、怖いんですよね……」

私は大きなため息をついた。

鈴さんはきょとんとして私を見る。

「なんで??ええことやん。何を怖がることがあるん??」

「だって…なんだか今の私がだんだんとなくなっていってしまいそうで……なんとなく私が消えてしまいそうな気がして……」

「ふーん……そうなんやー……。記憶喪失ってのもなかなか複雑な感じやねんなぁ」

鈴さんは腕組みしながら私の隣の机の上に腰かけた。

「でも、ホンマに詩織と響はらぶらぶやってんなぁー。まぁ今もそうやけど！」

突然からかわれて、頬が染まる。

「そ、そんなことありませんよ……」

確かに夢の内容はそんな感じでしたけど……

だけど……

「大体…今はらぶらぶなんかじゃありませんよ」

「…また響がおまえのこと好きとちゃうとかいいだすんか??」

鈴さんはうんざりとしたように言った。

私はコクリと小さくうなずく。

だって……

滝沢サンは私じゃなくて、記憶がなくなる前の私が好きなんですもの……

鈴さんは大きなため息をついた。

そしてびしっと人差し指を立てる。

「ええか??もし仮に響がおまえのこと好きとちゃうかったらやで??それやったら普通、おまえのためにいろいろしてくれへんやろ。おまえ、週1で病院ついていってもらったりしてるんやろ??」

「ええ……まあ……」

「おまえのことが好きとちゃうかったら絶対そこまでしてくれへんって!だから安心し!」

鈴さんはにぃっと明るく笑った。

「…そうですよね!!」

鈴さんのその笑顔を見ると、本当に安心できます。

私が滝沢サンのことで鈴さんに相談すると、鈴さんはいつもこうし

て私を励ましてくれる。

だけど、いつも私ばっかり鈴さんに相談を聞いていただいて、なんとなく悪い気がします……

何か私も鈴さんの相談にのることができたらいいんですけど……

そう思ったところでふと思いついた。

「あ、そういえば鈴さんは好きな人とかいないんですか？」

もし鈴さんに好きな人がいるんなら、相談も聞くことができますし、応援することもできます！

「好きな人？？」

鈴さんはきょとんと私の言葉を繰り返した。

「そうですよ！もしかして碧さんですか！？」

私は冗談交じりに聞いてみた。

まぁ、違うと思いますけどね。

碧さんと鈴さんの関係って好きとかそういうものじゃなくて、親友って感じですし！

けど鈴さんの反応は予想外のものだった。

「碧…？？」

鈴さんは顔を耳まで赤く染めた。

へ…？？

もしかして…的中ですか？？

鈴さんははっとして首をぶんぶんとふった。

「いや！違う！碧なんてそんなわけ…！！」

「顔、耳まで真っ赤ですよ？？」

私が指摘すると、鈴さんは両手で頬を触った。

そして視線をおとしながらぼそっとつぶやいた。

「…うん。ウチは碧が……好きやねん」

恥ずかしそうにうつむく鈴さん。

そんな鈴さんがとても可愛く見えた。

やっぱり鈴さんにもこういう女の子な所あるんですねー♪

「告白しないんですか！？あっ！もしかしてもう2人は付き合っているとか！」

私はおもしろくなって聞いてみた。

なぜか、鈴さんの表情が悲しそうな表情に変わる。

「告白…な。まあ、そんなんしても無駄やって分かってるから」

悲しそうな声。

「…どうしてですか??」

私が尋ねると、鈴さんはにっと笑った。

「だって碧には好きな奴おるもん!」

「え……!そう…なんですか……??」

鈴さんは笑顔のままうなずく。

「だからウチはただの幼馴染のままでええねん!そうしたら碧のそばにおれるし!」

その笑顔がすごく痛々しくて、私は鈴さんから視線をそらした。

…私、余計なことを聞いてしまいました……

「…鈴さんは、碧さんの好きな方が誰なのか分かっているのですか??」

鈴さんは一瞬とまどうような表情を見せた。

だけどすぐに笑顔に戻る。

「…さあ。誰やろ??そこまでは知らん。ただなんとなくおるかな?って思って」

…ということは、

それは鈴さんが勝手に思ってるだけってことですか??

それなら全然大丈夫じゃないですか!!

「それじゃ私、碧さんに本当に好きな人がいるのか突き止めて見せます!もしいなかったら鈴さん、碧さんに告白してくださいね!?」

私は席を立ちあがっていった。

鈴さんは驚いたように私を見上げる。

「わ、分かった……」

よし!

私、鈴さんの役に立ってみせます!

必ず碧さんの好きな人がいるかどうかを突き止めて見せますよ!!

「和泉の好きな奴??」

滝沢サンは怪訝な顔で私を見た。

私はにっこりとうなずく。

「はい！どうやら鈴さんが碧さんのことを好きみたいなんですよー。だけど鈴さんったら碧さんに好きな人がいるって勝手に思っちゃって…だから滝沢サンがつきとめてくださいー！」

「なんでオレが……」

「だって滝沢サン、碧さんと仲いいじゃないですかー！」

滝沢サンは即座に大きく首を振った。

「いや、別に仲良くしてるつもりなんて全然ないんだけど……」

「でも同じクラスですし！お願いしまーす！」

私が必死で頼み込むと、滝沢サンは渋々とうなずいてくれた。

やっぱり滝沢サンは優しいです！

…あ、そういえば…

「あの…それで、私、また夢を見たんですけど……」

一応報告した方がいいかと思い、私は小さな声で言った。

「夢？また何か思い出したのか！？」

滝沢サンはさっきまでと一変して、すごくうれしそうな表情になる。

それにチクリと胸が痛んだ。

滝沢サンに夢のことを話すと、滝沢サンは少し頬を染めた。

「ああ…あのときの…な。あんなの思い出さなくてもいいのに」

そう言いながらも滝沢サンの表情はうれしそう。

やっぱり……

あの夢の中の私がとても幸せであったように……

あの夢での出来事は滝沢サンにとっても大切な思い出なんでしょうね……

そう思うと胸が締め付けられる。

「じゃあなんとか聞いてみるから。またなんか思い出したら言えよ？？」

「はい…」

私はなんとか笑顔を作って滝沢サンと別れた。

教室に帰ると、鈴さんが1人でぼんやりと外の景色を見ていた。

そんな鈴さんに声をかける。

「鈴さん！滝沢サンに碧さんの好きな人を調査してもらうように頼んできましたよ！！」

鈴さんは私の方を見て、悲しそうに笑った。

「そうか…ありがとうな」

やっぱり、鈴さんらしくない笑顔。

いつもの鈴さんなら、碧さんに好きな人がいるって分かってても告白しちゃったりできると思うのに……

「鈴さん……何か…あるんですか??私、なんでも聞きますよ??」

鈴さんは少し目を見開いて、そしてしばらく考えるように黙り、やがて口を開いた。

「多分…全部話したらめっちゃ長くなると思う。それでもいい??」

「はい！全然大丈夫です！」

「それじゃ…放課後、ちょっと話聞いてもらおっかな！」

鈴さんはまた、無理やりに笑顔を作った。

放課後、私と鈴さんはみんなが帰るのを確認してから教室に2人で残った。

滝沢サンには用事があると言って先に帰ってもらっている。

これでどんなに長い話でもオッケーです！

「それで…どんな話なんですか？？」

私が尋ねると、鈴さんはためらうように視線をそらした。

「何かあるんだったら言ってください！何かあるんだったら私、鈴さんの力になりたいです！」

鈴さんは私を見てふっと笑った。

「…ありがとう。ホンマに詩織はええ友達やわ」

鈴さんはまた少し黙ると、口を開いた。

「…ほんまはウチな？碧の好きな人知ってるねん」

鈴さんは唇をかみしめた。

そして声を震わせながら言う。

「碧の好きな人は……奏……ウチの、双子の姉ちゃんや」

☆４０話　好きな人☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

いきなり話とびましたけど……
もうパソコンする時間とかなくなりそうだし、
どうしても鈴と碧の話がしたくてだいぶはしょりました。
今回碧、名前だけしかでてきてませんね（－＿－；）

★４０話　好きな人★響ｓｉｄｅ

「響ぃー！おはよーさん！」

背後からバカでかい声がしたかと思うと、突然抱きつかれる。

「…おはよ」

オレはその手を振り払いながらつぶやいた。

「ったく、今日もあいかわらずつれへん奴やなぁ…」

はぁっと大きなため息をつく和泉。

なぜかこれが最近の朝の行事になってしまっている。

オレも妙な奴になつかれたもんだな……

そう思い、ため息をついた。

「あ、そういや響！美術の提出物ちゃんとやってきたか！？」

ん……

そういやそんなのあったっけか？

「多分やったと思うけど……」

「オレは結構自信作やで！ちょっと見てくれ！」

和泉は自信満々に鞄の中をあさりはじめた。

「どや！めっちゃうまいやろ！？」

そう言って見せられたのは……

……お世辞にもうまいと言えない風景画。

「…すげぇな。ピカソよりもすげぇかも」

「ホンマ！？いやー！照れるわぁ！！」

和泉は満面の笑みで頭をかいた。

いや……ほめてないけどな……

「んじゃオレ、他の奴にも見せてくるわ！」

そう言って和泉はクラス中の奴に声をかけ始めた。

そんな様子を見てまた小さなため息をつく。

ちょっと調子のらせちまったな……

まぁいいか。

オレは和泉から目をはなし、窓の外の景色を見た。

季節はもう秋の初め。

詩織が記憶をなくしてから、2か月近く。

2か月というと短い気がするが、オレにとってはすごい長いような気がする。

詩織は徐々に記憶を取り戻し始めているようだが、それでもまだ不安だ。

もしかしたら記憶の断片しか思い出せないままでいるかもしれない。

最近は全然前の記憶の夢を見た、という話もないし……

これ以上はもう、思い出さないのかも……

オレは不安になる気持ちから目をそらすように、窓から目をそらした。

「和泉の好きな奴??」

詩織はにっこりとうなずく。

「はい！どうやら鈴さんが碧さんのことを好きみたいなんですよー。だけど鈴さんったら碧さんに好きな人がいるって勝手に思っちゃって…だから滝沢サンがつきとめてくださいー！」

へー……

まぁなんとなくそうっぽいとは思ってたけれども……

いや、でも……

「なんでオレが……」

「だって滝沢サン、碧さんと仲いいじゃないですか！」

オレは即座に首を大きく振った。

いや！

そんなこと全然ない！

はっきり言ってうっとうしい！

ってかそんな風に見られてたのか！？

「いや、別に仲良くしてるつもりなんて全然ないんだけど……」

「でも同じクラスですし！お願いします！」

同じクラスだからって……

無理やりだな……

そう思いながらもオレは渋々とうなずいた。

詩織はうれしそうににっこりと笑う。

「あの…それで、私、また夢を見たんですけど……」

そして突然小さな声で言った。

「夢？また何か思い出したのか！？」

詩織はなぜかうつむきながら、夢のことをはなしてくれた。

詩織とケンカして…

それで、1人で帰ろうとして、忘れ物を思い出して取りに行ったら詩織が教室で寝てて……

普段言えないことを1人言のつもりでつぶやいてたら実は詩織が起きてて……

思わず顔が熱くなる。

「ああ…あのときの…な。あんなの思い出さなくてもいいのに」

よりによってそのことを思い出さなくても……

あんときはかなり恥ずかしかったな……

オレは頬の熱を隠そうと話題を変えた。

「じゃあなんとか聞いてみるから。またなんか思い出したら言えよ？？」

「はい…」

詩織はにっこりと笑った。

教室に戻ると、とりあえず和泉に声をかけた。

「和泉、いきなり変なこと聞いてもいいか??」

「ん?別にええけど……」

「おまえって、好きな奴いる??」

和泉の表情が一瞬固まった気がした。

けどすぐに能天気な笑顔になる。

「別におれへんよー。なんで??」

「いや…なんか詩織に聞けって言われて…」

天音がおまえのこと好きらしいから……

というのはなんとなく言い辛かったので、とりあえずそう言っておいた。

「詩織??なんで……あっ!」

突然和泉ははっとしたような顔をした。

そしてぽんっとオレの肩に手をおく。

「そうか…なんか悪いな…うん。ごめん」

妙に深刻な声で謝られる。

「まさか詩織、オレのこと好きやなんて……」

「いや、違うだろ」

オレは思わずつっこんだ。

勘違いにも程があるだろ……

大体……

よっぽど天音のことを言いそうになったが、なんとか思いとどまる。

「いや、本気でそうかもやで？だって詩織はお前とのことほとんど忘れてんやろ？？だからその可能性もあるやん！」

「…まぁ、そうだけど」

和泉のいうとおりだ。

詩織がもし和泉のことを好きになってたって……

別に、おかしいことはない……

「いや、そこまで本気に取られても……」

和泉は苦笑いしてぽんとオレの肩を叩いた。

「冗談やて！詩織はちゃんとおまえのことが好きや！オレには分かる！これでも勘は鋭い方なんやで？」

「…そうだといいけどな」

本当に……

詩織がちゃんとオレのことを好きでいてくれたらいいと思う……

だけどその前に……

オレは…

オレ自信は詩織のことがちゃんと好きなんだろうか……？？

「…なぁ、和泉。ちょっと変なこと言ってもいいか？？」

「何や？」

オレは初めて、ずっと心の中で思っていたことを口にだした。

「……オレ、詩織が詩織と思えないんだ」

「何で？？詩織は詩織やろ？？」

和泉は不思議そうに言った。

「けど…どこか…詩織じゃない気がする……」

なんでオレは和泉にこんなこと言ってるんだろう??
こんな奴にこんな話しても適当に返されるだけだ。
けど……
それならそれでもいいと思った。
適当に流してくれたらいい、そう思っていたのに……
「オレにはよぉわからんけど……でも、それってお前が勝手に思ってるだけやろ??」
和泉は以外と真剣に答えてくれた。
その表情からはいつもの能天気な笑顔が消えている。
以外な反応に驚きながらもオレは和泉の言葉に耳を傾けた。
「詩織は別に動かれへんわけでもない。しゃべれんわけでもない。ちゃんとお前としゃべって、笑って……それでええやん」
和泉は目を伏せると、小さな声で言った。
「…そんな事さえ叶わん奴がおるんやから」
「…和泉??」
和泉は目をあげてにっと笑った。

「まぁ、仮にそんな状況になってもうたとしても、生きてるだけでええやん！生きてさえいれば、おまえの言葉はちゃんと詩織に伝わるんやから！」

なんとなく、それは和泉が自分自身に言っているように聞こえた。

けど、妙に和泉の言葉に納得する。

…そうだな。

詩織はあの時死ななかった。

身体的にも、ほとんど影響はなかった。

それだけで十分なのかもしれない。

…たとえ、オレとの思い出を忘れてしまったとしても。

★４０話　好きな人★響ｓｉｄｅ（後書き）

なんかずっと響と碧が話してるだけの話ですね（ー＿ー；）
もうちょっと碧の性格をだしたかったんですが……
なんだか妙に暗い話になってしまいました…（^＿^；）

☆41話　双子☆詩織ｓｉｄｅ

「ウチには奏っていう双子の姉ちゃんがおるねん。
ウチらと碧は同じ日に同じ病院で生まれた。
家も隣どおしやったから、ウチらはほんまの兄弟みたいにずっと一緒やったんや……」
鈴さんは目線を落としながら、ぽつりぽつりと話し始めた。

ウチと奏は小さいころからめっちゃ男っぽい性格で、ケンカも得意やった。
だから幼稚園とか小学校の頃は碧と3人で悪ガキ共をこらしめたりしながら楽しんでた。
そのおかげで、ウチと奏はしょっちゅう女の子に告白されたりしてんけど…（笑
もちろん、碧もしょっちゅう女の子に告白されてた。
その頃はそれも全然気にならんくて、逆にはやしたてたりしてた。
ほんまに、その頃のウチらは親友っていう言葉がぴったりで……
どんな時でも3人一緒で、それがめっちゃ楽しかった。

「オレらは何があっても3人一緒や！大人になってもずっーーーっとやで！」

無邪気に笑ってそう言った碧の言葉を、ウチはずっと信じていた。

ウチらはずっとずっと親友やって。

この気持ちはずっとずっと変わらへんって。

ずっとずっと信じてたのに……

中学に入って、ウチらは成長して……

親友じゃいられなくなった。

それだけじゃ、どうしても足りない。

どうしようもない気持ちが生まれてしまった。

……碧が好き。

そんな気持ちがいつ生まれたのかはわからへん。

だけど、たしかに言えることは、中3の頃にはもうその気持ちは生まれていたこと。

ウチはなんとなく碧のことを意識していた。

けど、その気持ちがはっきりとしたのは、中3の秋の終わりのある

事件。

奏はもともとかしこかったけど、夏休みが終わってからますますかしこくなった。

同じ双子のはずなのに奏とウチの成績は比べ物にならないくらいに違っていた。

碧も奏と同じようにかしこくなっていって、ウチだけ2人に追いつかれへんかった。

春に受験をひかえていたウチはそれにだんだんとストレスがたまっていて…

そして、中間テストの結果が返ってきたとき、それが爆発した。

「なんで!?なんで奏ばっかりそんな点数とれんの!?」

奏ばっかりいっつもいい点数とって!

お母さんとお父さんに褒められて!

やのにウチは全然あかん!

このままやったら奏と碧と同じ高校行かれへん!

奏と一緒のはずやのに……

なんでウチだけあかんの!?

「だって…ウチはいっぱい努力したんや……」

「ウチだってした！」

ずっと奏と一緒に勉強してた！

奏だってしってるやんか！

「きっと生まれる時に、奏がウチの才能を吸い取ってもうたんや！おまえのせいでウチは全然あかんのや！」

1人で生まれてきたら……

ウチはもっとかしこくなって、碧と同じ高校に行けたかもしれんのに……！

「奏なんか生まれてこやんかったら良かったのに！」

ウチはそう叫んで家を飛び出した。

外は暗くて、冬が近いせいか、風が少し冷たかった。

ウチは感情に身をまかせて、行く場所も決めずただ走っていた。

気がついたらウチは公園におって……

なんとなく、ブランコに座ってゆらゆら揺れてみた。

ほんまに…

ほんまにこのままやったらウチだけおいていかれる……

ずっと3人で一緒におられへんようになる……

嫌や…

そんなん嫌やぁ……！！

「なぁ、こんな夜に何してるん？」

うつむいていると、突然声をかけられた。

顔をあげるといつの間にか数人の男にかこまれている。

…何や？こいつら。

「…別に。おまえらに関係ないやろ」

ウチは今いらついとるんや。

余計な声かけんなや。

「そんなん言わんと、暇なんやったら遊びに行こうや」

ぐっと強く腕をひっぱられた。

ウチはその手をふりはらおうとする。

だけどうまくいかなかった。

…あれ？？

こいつめっちゃ力強い…！？

ウチはブランコから立ちあがって掴まれてない方の手で男に殴りかかった。

だけどそれも簡単に止められる。

そして両手を掴まれた。

「や、やめろ！！」

もがいてももがいても手は力強い力で掴まれている。

なんで…！？

小さい頃はケンカなんか得意やったのに…！！

手を振り払うことさえできひん……！

力が全く違う……！

ウチがもがくのをあきらめた時、

ふいにウチを掴んでいた男の手がはなれた。

え…！？

「鈴！大丈夫か！？」

耳に入ったのは碧の声。

そして目に映ったのは碧の姿。

「おまえいきなり何すんねん！」

どうやら碧は私を掴んでいた男の背中を思い切りけったらしい。

男は背中をおさえながら碧を睨んだ。

碧はにっと笑った。

「あ？いや、悪いなー！そいつに用あってな。邪魔やったからついやってもうた！」

男達が碧に殴りかかった。

けど碧は軽々とそれをよけて、代わりにカウンターをくらわせる。

「鈴！いくで！」

男達が倒れているうちに碧はウチの手をつかんだ。

2人で逃げるように公園をでて、だいぶ逃げたところでへたりこむ。

「あー、疲れた！ひさしぶりにこんな運動したわー！」

隣で額の汗を拭きながら笑う碧。

ウチはそんな碧の隣で小さく三角座りをした。

「……余計なことせんでええのに。あんなんウチだけでもどうにでもなったわ」

碧はきょとんとウチを見て、にっと笑う。

「よぉ言うわ！オレがこんかったらやばかったくせに！」

……たしかにそうや。

ウチは、知らんうちによわなってたんか……

碧は小さいころから変わらず強いのに……

ウチは全然……

ウチは膝に顔をうずめた。

やっぱり…

ウチはやっぱり…

何も…何もでけへん……

ぽんっ。

突然肩を軽く叩かれた。

「何気にしてんのか知らんけど……はよ家帰ったれや。奏、泣いて

たで？」

奏…泣いてたんや……

そういえばウチ、奏にひどいこと言ってもうたもんな……

けどしゃーないやん。

奏はウチの才能とかを全部すいとったからあんなにかしこいんやから……

そんなん言われて、当然やん……

「鈴、知ってるか？？奏、いつもおまえが寝てる間もずっと努力してんねんで？？」

「え…？？」

「ほら、オレとおまえらの部屋隣やろ？オレが夜更かしした日も、おまえらの部屋はずっと電気ついてるもん。んで、このまえ声かけたらおまえ寝てたし……いっつもそうなんとちゃうか？？」

…そういえば、

奏はいつもウチが寝よっていっても、まだあとちょっととか言って勉強してたな。

なんや、そうか。

ちゃんと思い出せば簡単なんや。

奏はウチよりもいっぱいいっぱい努力してるからかしこいんや。

それやのにウチは……

なんの努力もせんと奏にひどいこと言って……

ほんまに…

最低や……

奏に合わせる顔があらへん……

涙が目にいっぱいにあふれだした。

止めようにも止まらなく、とめどなくあふれてくる。

そんなウチの肩を、碧はそっと抱いてくれた。

「好きなだけ泣いてええ。そんかわり、めいいっぱい泣いたら奏に謝りにいこな??」

ウチは何度も何度もうなずいた。

碧はウチが泣きやむまでずっとそばにいてくれた。

悲しいはずなのに、心のどこかでそれが幸せだと感じた。

そのときウチははっきりと気がついたんや。

ウチは碧のことが好き。

はっきりと、そう気がついてしまったんや……

結局ウチは奏と碧とは違う高校に行った。

必死で勉強したけど2人にはとても追いつけなかった。

それでもウチらの関係はほとんど変わらなかった。

近い高校を選んだから帰りはいつも一緒やったから、ウチらはまた3人一緒でおれた。

ただ……

変わったのはウチらの気持ち。

ウチは碧が好き。

そして…

きっと奏も。

ウチが碧が好きって気がついた時、奏の気持ちにもなんとなく気がついた。

だって、奏が碧を見る時の目が、表情が、違っていたから。

「……なぁ、奏ってもしかして碧のこと、好きやったりする??」

ある日の夜。

ウチは奏に尋ねてみた。

「へ……??」

奏は顔を耳まで真っ赤に染めた。

「な、なんや!?いきなり!!そ、そんなわけないやろ!?」

「奏、顔、耳まで赤いで??」

奏は目を見開いた。

そして恥ずかしそうにうつむきながら小さくうなずく。

「やっぱり!奏、わかりやすいわー!!」

ウチは奏を指差して大笑いした。

奏はむっとしたようにウチを睨む。

「…鈴はどうやねん??」

そしてためらいがちにそう聞いてきた。

顔が熱くなる。

「んー…まぁ、ウチもかな」

ウチは照れ笑いしながら答えた。

「そうか…」

少し、気まずい沈黙が流れた。

…どうしよ。

ウチ、変なこと聞いてもうたかも……

……でも、

でも、

どうしても奏の気持ちを確かめたかったんや……

「…鈴は」

奏が不意に口を開いた。

「鈴は、碧と付き合ったりしたいん??」

……!!

付き合う…??

そりゃ…

そりゃ、叶うんやったら、付き合いたいに決まってる。

「…うん。…奏は？？」

「…ウチは…わからん……」

奏はウチの方を見ず、どこか遠くを眺めるようにして言った。

「ウチ、正直わからんねん。まず、ほんまに碧のことが好きかどうかもわからん。『好き』っていう気持ちが、親友としてなんか、鈴の気持ちと同じなんかわからんねん。……けど、もしこの気持ちが鈴の気持ちと同じやったとしても……」

奏はウチの方を向くと、少しさびしそうに笑った。

「ウチは付き合いたいとか思わへん。ウチはそんなんじゃなくて…ただ、鈴と碧と、ずっと3人一緒でおりたい。ウチは、鈴も碧も同じくらい好きやから」

奏の言葉に、胸が締め付けられるような感じがした。

不思議と涙がこぼれた。

やっぱり……

ウチと奏は全然違う……

碧と付き合うなんて……

そんなんしたらきっと今みたいに3人一緒でおられへんようになる

のに……

ウチは奏のことなんか全然考えんと、

簡単に碧と付き合いたいなんて思ってしまった。

奏はちゃんとウチのことも思ってくれてたのに……

「鈴!?何泣いてんの!?」

奏はウチを見て驚いたように目を軽く見開いた。

「ごめん…奏、ごめんな…?ウチも……ウチも、奏と碧とずっと一緒におりたい……」

「鈴……」

奏はうれしそうに笑ってウチをぎゅっと抱きしめた。

「うん…ずっと一緒におろな?ウチらはずっと一緒や」

奏は優しくウチの頭をなでながら言った。

その時、ウチらは決めた。

絶対に、碧にこの気持ちは伝えない。

そうすれば、ウチらはずっと3人一緒でいられる。

実際、そうすることでウチらの関係は保たれていた。

だけど、ずっと3人でいるうちに、ウチはあることに気がつき始めていた。

……もしかしたら、

碧は、奏のことが好きなのかもしれない……

そう思い始めたきっかけは、ほんの些細なこと。

ウチらは夏休みに暇つぶしで、ぶらぶらと商店街を歩いていた。

「あづい～！！この暑さ異常ちゃうん！？どないなっとんねん！」

奏は手でぱたぱたと自分を仰ぎながら言った。

「だから言ったやろ！？冷房聞いてるコンビニで雑誌立ち読みしよって！ったく、何が悲しくてこんな暑い中外あるかなあかんねん……」

「アホか！そんな恥ずかしいことできるわけないやん！そんな行きたいんやったら1人で行ってこいや！！」

ウチは思いっきり碧の背中を叩いた。

「痛っ！おまえはなんですぐそうやって叩くん！？ってか、奏！いつの間にアイス食っとんねん！？」

「フッフッフ…ウチは常にすばやい行動を心がけてるのだよ。あ

ー！やっぱ夏はアイスやわ！」

奏はいつの間にかそばの駄菓子屋で買ったらしいスイカバーをなめながら見せびらかすように言った。

「ええなぁ！ウチも買うー！」

ウチは奏と同じスイカバーを買った。

そして封を開けながら碧の方を見た。

「碧、アイス買えへんの……」

碧を見て、ウチは思わず言葉をつまらせた。

碧は奏を見ていた。

幸せそうにスイカバーをなめている奏を、

今までみたことのないくらい……

とても、

とても優しい顔で。

ズキ……

胸が強く締め付けられる。

だけどウチはそれに気がつかないふりをした。

「碧！アイス買わんの！？」

少し大きめの声で言うと、碧ははっとしてウチを見た。

「あ、ああ！そうやな！オレも買うー！」

そう言ってアイスのケースをあさりはじめる碧。

ウチはそんな碧をじっと見た。

…碧は、奏のことが好きなんかな……？？

そんな考えが頭をよぎる。

だけど、ウチの心はそれを否定した。

…ううん。違う。

きっと今のはたまたまや。

そんなん…

絶対に違う。

ウチは碧の気持ちを見ないようにした。

碧の気持ちを知るのが怖くて。

ウチが1人になるのが怖くて。

…大丈夫。

ウチには奏との約束がある。

奏もきっとあの約束を守ってくれる。

だから…

だからウチらはずっと3人一緒でおれるんや……

これから先変わることなく、ずっと一緒に……

だけど、そんなウチの願いは一瞬で崩れ去った。

それは、高2の春のこと……

ウチらはいつものように待ち合わせして3人で家路についていた。

「あいかわらず碧は髪ボッサボサやなぁー。なんでなん??」

「うるさいわ!おまえもいっつもょぅその趣味の悪いバンダナつけるよなー?」

碧は奏の迷彩色のバンダナを指差してケラケラと笑った。

それは、ウチらが小学生の頃に、父さんがウチと奏があまりにも似てて、まわりの人がよく間違えるからと言って誕生日に奏に渡されたものだった。

奏はそれを気にいって、小学生の頃から今までずっとつけている。

「はー!?これのどこが趣味悪いねん!?そうや!おまえもこれしたらちょっとは髪の毛マシになるんちゃうかー!?」

奏はバンダナをはずすと、無理やり碧の頭にまこうとした。

「ちょっ!やめろや!」

碧は必死にそれに抵抗する。

ウチはその様子を見て笑っていた。

…その時、車がきていることになんか気がつかなかった。

ブーッ!!

突然大きなクラクションの音が鳴る。

ウチは驚いて音の方を見た。

車がウチのすぐ目の前にせまっている。

やばい…!!

早く逃げな…!!

だけど足が動かなかった。

どうしようもなく、ぎゅっと目を固くつぶる。

その時だった。

「鈴!!」

奏の声が聞こえたかと思うと、誰かがウチを思い切り押した。

同時にドンッ!という大きな音がして、体に強い衝撃が走り、体が地面に打ち付けられる。

体がズキズキとして、どこも動かせなかった。

「奏!!鈴!!」

碧が叫ぶ声が聞こえる。

なんとか目をあけると、ぼんやりとした視界の中に奏の姿が映った。

奏は血だまりの中で横たわっている。

か…なで……??

なんで……

なんで奏からあんなにいっぱい血がでてんの……??

救急車のサイレンの音がした。

救急車の中から人がいっぱいでてきてウチと奏を担架にのせる。

「奏！奏！！」

かすれていく意識の中、奏のそばで何度も奏の名前を呼ぶ碧の姿が目に映った。

…ああ、

やっぱり、碧は……

ウチはそのまま意識を失った。

「奏はウチをかばってくれた。だからウチは助かったけど…奏は……」

鈴さんは言葉を切った。

少しの沈黙のあと、言葉を続ける。

「奏は…目を覚まさんかった。奏は目を覚まさんまま…ずっと病院のベッドの上におる」

私は黙って鈴さんの話を聞いていた。

あふれだしそうになる涙をなんとかこらえながら。

「ウチがここに引っ越してきたのはな?ここに設備のいい病院があるって聞いたからなんや。もしかしたら奏の様態がよくなるかもっ

て。……碧は、奏のそばにおりたいって言ってきかんくて…でも引っ越しなんてできんから、親に無理言ってウチの家におるんや」

「そう…なんですか……」

まさか……

鈴さんと碧さんにそんなことがあったなんて……

2人ともとても明るいから……

そんなことがあったなんて思いもしませんでした……

「碧のバンダナはな?元は奏のやねん。碧は奏の物を身につけることで少しでも奏と一緒にいようとしてるんや。しかも、碧は毎日奏のいる病院にかよってる。ウチも毎日かよってるけど…碧はウチよりもずっと長い時間、面会時間ギリギリまで奏の所におる」

鈴さんはポロポロと涙をこぼし始めた。

「だから…だからウチは…できん…碧に気持ちを伝えるなんて…碧と奏の気持ちが分かってるのにそんなこと……絶対にできん…」

「鈴さん…」

鈴さんは涙をふくと、にっと笑った。

「…ごめん。話聞いてくれてありがとう!ってことやから、ウチは碧に告白なんてせーへんで!!納得してくれた??」

「はい…変なこと聞いてしまってごめんなさい……」

「なんであやまるねん！ほんま詩織は謝ってばっかやな！よし！んじゃかえろか！」

鈴さんは鞄を手にとると、教室のドアの方に向かって歩き始めた。

これから…

鈴さんはまた、病院に……

奏さんの所に行くんでしょうか……？？

そう思うと、その後ろ姿がひどく痛々しく見えた。

☆４１話　双子☆詩織ｓｉｄｅ（後書き）

今回はほとんど鈴が話しているという設定です。
話の筋道があんまりたっていませんでしたが……
どうしてもこれが書きたかったので（＾―＾；）
あと、時間があれば奏ｓｉｄｅと碧ｓｉｄｅも書きたいとおもってます。
多分ふたつとも全然違う話になると思います（＾－＾）
ちなみに『奏』は『かなで』と読みます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3479j/

純情恋模様

2010年10月9日14時05分発行